

せつじん
雪刃

琴乃つむぎ / WordsWeaver

第一章 旗

にちりん
日輪の輝きに十字を配った旗が、風の中にへんぼん
翻っている。アラトナ教徒の紋章であるせいこうじゅうじしょう
聖光十字章だ。

赤い旗が幾本も並び立ち、その下にレメンテム帝国の軍勢が大きくひろ
拡がっていた。

距離は、まだある。

敵兵の顔を判別するには到らないが、整然とした
じんよう
陣容はここからでも充分にみ
見て取ることができた。

中央には歩兵部隊。体の前に大盾を置き、槍を立てた兵士達が並ぶ。

長大な陣の左右には騎兵部隊。主にレメンテム帝国の貴族からなる部隊であるという。

歩兵が平民、騎兵が貴族という図式は、どうやらどこの国でも同じようだ。

陣の間を時折、連絡と思しき騎馬が駆けてゆくのが見える。

間違いなくそこに『敵』がいた。

「奴ら考えていたよりも足が速いですな」

脇に立った従士のタデアスが半ば感心したように、しかし**ぶべつ**を**こ**籠めた口調で**つばや**
そう呟いた。

グレシオスは顔を向けてタデアスを見た。

若い。髪ひげの毛も鬚も銀色だ。

お互い今では髪にも鬚にも、もうすっかり白い物が混じってしまっているのに。

こうして夢の中で見る姿は、やはり当時のままに若い。

この戦いの時、グレシオスもタデアスもまだ二十才だった。

「……信仰心のなせる業わざかも知れんな」

答える己の声も若く聞こえ、咽のどにも力を感じた。

グレシオスの言葉にタデアスは確しっかりとした頷うなずきを返し、それからまた挑戦的な眼差まなざしをレメンテムの軍勢に据え直した。

両軍が対峙たいじしているのは平原だった。

この戦いくさの後に、その名も広く知られることになるベルガイアの平原である。

朝靄あさもやがゆっくりと動いている。

微かすかながら風があるのだ。

朝の穏やかな風は草の上を渡り、そのままグレシオスたちの髪の毛までを軽く揺らしてくる。

耳に聞こえるのは甲冑かっちゅうの鳴る音と、馬の吐く息、そして味方の旗が風ひるがえに翻る音。

余計な口を利く者はない。それは敵側も同じだったろうと思う。

しかし自分たちは会話をした。その事を憶えている。

今にして思えば興奮していたのだろう。

初めての戦ではない。

にもかかわらず血が逸^{はや}ったのは、この戦の時、グレシオスは初めて、先槍をつける役目を王から与えられたからだ。

静粛の中、敢^あえてタデアスと言葉を交わしたのは、自らを落ち着かせるため。

大いなる名誉のために、どうにも身が落ち着かなかったからではなかったろうか。

ベルガイアの戦い――。

今より四十年以上も昔のことだ。

西方レメンテム帝国の軍勢が、エリュオーン海に深く入り込み、ガレノス陸橋^{りくきょう}を目指して我がローゼンディア王国に攻めてきた事があった。

ガレノス陸橋とは王都を含む地域一帯を呼び慣わしたものである。

王都ガレノスは北にフェルシナ大内海を、南にゼレーア海を控える大陸橋上に存在しているからだ。

陸橋の地下深くには海流が流れ、フェルシナ海とゼレーア海とは実は地下深くで繋^{つな}がっているのだという伝説もあるが、真偽の程^{ほど}は判らない。

ゼレーア海はドライデース半島を越えたところか

らエリュオーン海に入る。

半島突端の岬^{みさき}には、神話の時代に天の雄羊が幼い兄妹を背に乗せて駆け渡ったという物語が伝わっており、ローゼンディア人にとっては馴染みの深い場所である。ここより先がエリュオーン海になる。

そしてエリュオーン海こそはローゼンディアの海である。

古来より数多^{あまた}の伝説、そして物語の舞台となってきた海である。

エリュオーン海はまた、より宏大^{こうだい}なミスタリア海の一部を成している。

ローゼンディアもレメンテムも、ミスタリア海に面し、それを中心とする世界の中に存在している。海に面する全ての国がミスタリア海に連なっていると言っていい。

今より四十年以上も昔のことだ。

西方レメンテム帝国が、大軍を動員してローゼンディアに攻めてきた。

それも今までのように西方の大河アルギオンを渡^{とし}渉^{よう}せずに、多数の船団を組織してエリュオーン海を東に進み、ローゼンディア王国の西部アズベルタ地方に上陸、そこから直接に王都のあるガレノス陸橋を目指すという大胆な作戦であった。

レメンテムとローゼンディアでは奉ずる宗教が違

う。レメンテムはアラトナ教を、ローゼンディアではヴァリア教を信教している。

アラトナ教は異教の存在を認めない。

そのためレメンテムは事ある毎にローゼンディアに対して『聖戦』を名告る侵略を繰り返していたが、この時の軍勢はそれまでの規模を大きく超えるものであり、しかも王都を直接目懸けて侵攻してきたので、ローゼンディアではかなりの危機意識を持って邀え撃ったのだった。

結果として戦いはローゼンディアの大勝で幕を閉じ、レメンテムは死者六万五千人、捕虜一万人以上の犠牲を出すこととなった。

ローゼンディア軍を指揮したのはゼメレス公クレオラ。

輪廻の輪を支配する偉大なる狩猟神の末裔、角持つ一族の、東の宗主。

ゼメレス族を束ねるゼメレス宗家は、王国貴族の頂点に立つ七宗家の一つである。

数ある王国貴族の中にあっても、七宗家は別格の存在として絶大な尊敬を受けている。

王家やグreshiosのセウェルス家を含めて、ゼメレス家もその七宗家の一つなのだ。

狩猟神の末裔には、東のゼメレス家と西のヘカリオス家が並び立っているが、ゼメレス家では家長に

女性が立つことが普通である。時には男性が家督を相続することもあるが、かなり稀まれなことであると言われている。

事実、先代はクレオラの母であり、そのまた先代はその母であり、クレオラもまた女性である。

ゼメレス宗家は女子直系の名門であった。

目の前に兵を拡げるレメンテム帝国にあっては、考えられないことであろう。

聞くところによるとアラトナ教の教えでは、女性は知能的にも能力的にも問題のある、男性以下の存在であり、男性による保護と管理が必要なのだという。

これを聞くとローゼンディアの男たちは口を開け、女たちは目を丸くすると言われているが、グレシオスもそうであった。驚くべき教義と言わねばならない。

であるから女性が家督に立つなど、ましてや一国の軍勢ひきを率いることなど、レメンテム帝国にあっては到底信じられない事であろう。

だがローゼンディアにあってはそれが起こるのだ。

事実、王の左に馬を並べるクレオラは、ゼメレス家長であり、大軍を指揮する将軍であった。

無論、軍の最高位にあるのは王である。

だがこの戦では、王はむしろ象徴的な存在であり、実際に全軍を動かしていたのはクレオラだった。

今、クレオラは王の左に轡^{くつわ}を並べているが、これは無礼にはあたらない。

七宗家は王家に匹敵する名族であり、古くは七王宗家とも呼ばれていた時代すらあるのだ。

だから臣従していると言うよりも、諸侯の盟主としての王家に協力していると言った方が正しい。

これはヴァリア教の教えによる。聖典によれば主神であるヴァリアを除き、神々の間に序列の差はないと記述されているからである。

ゆえ アクスヘーレイ
故に太陽神の末裔たる王家と、他の六宗家との間には序列の差はない。

とはいえ王は王である。

グレシオスを含め、全ての兵士が太陽を仰ぎ見るが如く感じ、眩^{まぶ}しい眼差しを向けている。

クレオラが王に何か囁^{ささや}いた。聞こえはせぬが、何を言ったかの見当はつく。

その優美な肩に掛かった緑のフェトウーラが朝の風を受けて揺れている。施^{ほどこ}された銀の縫い取りが光を反射して、ちらちらと踊るように見えた。

フェトウーラは外套^{がいとう}の一種である。袖なしのゆったりした外衣で、衣服や鎧の上からでも羽織って着

る事ができる。

彼女のフェトゥーラの中央には大きく、骨を組み合わせて作られた車輪の図案が、銀糸で刺繡ししゅうしてあった。

ゼメレス族の聖章たる『銀の車輪』である。

振り返って自分達の陣に立つ旗を見上げた。セウェルス族の聖章たる『ワタリガラス』である。

味方の戦列を見渡すと、他にも『金鎚かなづち』や『三叉さんさ鉞もり』といった七宗家の聖章が立てられている。

急な戦でもあるし、動員できる兵には限りがある。

しかも全兵力をガレノス陸橋に集めるわけにもいかぬ。敵はレメンテムだけではないのだ。豊かなるローゼンディアを狙う国は多い。

故に軍勢の数としては王国の全兵力を動員できたわけではない。

だがこのように諸侯は殆ど全てが参集ほんしていた。

歴史的な一戦であったと置いていいだろう。

ゼメレス公クレオラはこの時二十四才。

この時点では、王国内でもクレオラを知る者はほとんど居なかったであろうが、ベルガイアの戦い以後、彼女の名はミスタリア海を中心とする周辺世界とどろに轟き渡るようになった。

圧倒的に数に優まさるレメンテム軍を完全に包圍殲滅ほういせんめつ

したからである。

レメンテム帝国はベルガイアの戦いで建国以来の大軍を送り込みながら、約半数のローゼンディア軍に徹底的に殲滅され、その死者六万五千人以上を数える事となった。

しかしながらローゼンディア軍の損失は、わずか五千七百人に過ぎなかったと言う。

ベルガイアの戦いは周辺諸国を震撼しんかんさせた。近隣の国々は、若き天才の出現に大きな衝撃を受けたのだった。

そしてこの戦の後、レメンテムが大兵を動かすことはなく、平和は今に至るまで続いている――。

兵の一人が、首に朱を巻いた投槍を捧げ持ってきて、静かにグレシオスに差し出した。

古来よりの慣ならわしにより、戦闘の開始を告げる最初の一槍を投じなくてはならないからだ。

この役目を王より命じられた時は、さすがに身体がふる震えた。

既すでに幾度か戦場いくさばに立ったとはいえ、これほどの大戦で、しかもそれほどの大役を命じられるとは思っていなかったからだ。

年齢的には問題ない。立派に戦士として認められるとし年齢に達してはいるし、これまでの幾つかの戦い

で、己^{おのれ}の勇敢さを示してきたと自負してもいる。

しかしグレシオスはやはり、まだ若かった。

槍を受け取った^{てのひら}掌や指に、細かい^{しび}痺れのようなものを感じた。きっと汗も掻いていたことだろう。

軽く周囲を見回して始めて、周囲の者がみな、自分を見つめているのに気付いた。

すぐ近くには従士のタデアス、斜め後ろには叔父エウスタスが立っている。その他、近くにいる兵達の全てが、グレシオスを無言で見つめていた。

王の招集に^は馳せ参じ、故郷デルギリアからずっと長い騎乗を共にしてきた家臣達だ。

彼等は一人残らず、強い、しかしグレシオスを支えるような眼差しを向けてきている。

そこには信頼と励ましとが籠められていると思った。

不意に叔父が、グレシオスの肩に手を置いた。

早くに亡くした父に代わってグレシオスを教え導き、平時戦時のいかなる場合においても^{はん}範を示し続けた偉大なる叔父だった。

生涯をかけてグレシオスを支え^{まも}護った人だった。

深く敬愛した叔父は、今はもうこの世にはいない。

叔父にとって最後の戦いとなったこの戦の時に、やはりいつもの^{きんじし かざりかぶと かぶ}金猪の飾兜を被っていた。

そして叔父はこの時も、やはりいつものように誇らしげな、暖かい眼差しをグレシオスに向けてくれていた。

それで気持ちが落ちついた。胸の奥に力の塊かたまりのような物が生じるのを感じ、無言で数歩前へ出た。

その途端、グレシオスはローゼンディアの全軍勢の中で、もっとも敵に近い場所に立っていた。

そのまま投擲とうてき姿勢を取った。全身の偉大な筋肉が隆々りゅうりゅうと盛り上がるのを自覚した。

味方は、声一つ立てずに静まりかえっている。

敵は、揺れる旗の下で僅わずかな動きを見せている。

緊張があった。

それは人の世の緊張だった。朝の平原はどこまでも静謐せいひつで、涼やかな大気がただ静かに拡がり流れているだけだ。

頬なを撫でる風が心地よい。

遠くで鳥の鳴く声が聞こえた。

「おおおおおっっ！！！」

グレシオスは肚はらの底からの叫びを上げた。

地を蹴った。走った。そして全身の力を込めた一投を放った。

己が碎け散るような高揚の中、槍が手を離れ、朝の空に吸い込まれていく――。

その光景を憶えている。

今でもはっきりと……。

＊

「……………^{おおとの}大殿」

ためらいがちに呼びかけられる声でグレシオスは目覚めた。タデアスが近くに立っていた。

どうやら椅子に^{すわ}坐っている内に、うたた寝をしていたらしい。

「お休みのところ申しわけございません」

タデアスは頭を下げた。夢の中とは違い、すっかり白髪になってしまっている。

それは己も同じだが。

グレシオスは頭を振って目頭を^も揉んだ。そうして夢の残りを追い払うと、タデアスに用向きを言うよう^{うなが}促した。

「何があった？」

「はい。また例のお客人が訪ねておいでです」

またか、と思った。ここ数日グレシオスの屋敷を訪ねてくる男がいる。

夜になるとやって来て、遅くまで話し込んで朝方に帰っていく。

泊まるように勧めても男は^{しゅこう}首肯しない。必ず、朝が来る頃になると腰を上げて元来た道を帰ってしま

う。

一体何処どこに帰っているのか。

この屋敷を除けば近辺には泊まれるような民家などそうはない。ここはテラモン大森林を北に控えた、寂しい寒村なのだ。

隣村から来ているということも考えたが、それでは朝が来てから辞去する理由が分からないし、こんな目立つ男とうりゅうが逗留していれば噂話の一つも聞こえてくる筈はずだった。

いったいどこから来ている者なのか皆目見当がつかぬ。

その意味では、薄気味の悪さも無いとは言えなかった。

「いつも通り暖炉の前に坐って待っておいでです」

「分かった。すぐ行く」

グレシオスは腰を上げた。

＊

男はいつも同じかっこう恰好をして訪れる。

深い青のフェトウーラを身につけ、つばひろ鰐広のウェムノン帽をかぶっている。

ウェムノンは羊毛で作ったふしよくふ不織布であり、もうせん毛氈ともいう。

簡単に言えば毛織物の仲間であるが、織らないで作る点が違う。薄く板状に加工でき、保温性に優れているが、織っていないので引っ張りなどの力に弱く簡単に裂けてしまうのが難点である。

男は背が高く、肩幅が広い。灰色の髪と長い灰色の鬚ひげを生やし、青い瞳をしている。

齡はグレスオスとそう変わるまい。しかし、男にはグレスオスが失ってしまった活力のようなものが、まだ漲みなぎっていた。

「眠っていたのか？」

グレスオスが向かいに坐ると、男はそう尋ねてきた。

「少しな」

「まだ眠るには少し早い。子供ではないのだからな」

男の、どこか擲からかうような口調がグレスオスには不愉快だった。

「子供でなくとも眠りたくなる時はある」

「そうか」

男は軽く答えたが、しかしにやりと笑った。

なんだか侮あなどられているような気持ちになり、グレスオスはますます不愉快になった。

「そんな話はいい。それよりも今日こそ、お主の名前を聞かせてくれ」

不愉快さを誤^ご魔^ま化^かするようにグレシオスは手を振った。

「儂^{わし}はガルハースと呼ばれている」

ガルハースは『灰色の鬚をした者』という意味である。

確かに男は長い灰色の鬚をしているが、それがとても本名であるとは思えない。

「またか！」

グレシオスは渋い顔をした。男は再び、にやりと笑った。

男はまだ、グレシオスに本名を明かしていなかった。

客人からその名を聞き出せないと言うのは面白くない。始めは何か、やむにやまれぬ理由があるのかと思ったが、そうではないらしい。

どうやら男は、グレシオスが色々と想像するのを楽しんでいるフシがある。

「儂^{わし}はロヴォスと言われている」

始めはそう名^な告^のった。しかしロヴォスとは『物知り』という意味の古い言葉で、本名とは考えられない。そう問^{ただ}い質^たすと男はあっさりと認めた。

しかし実際、男は物知りだった。

グレシオスが聞いたこともないような話を数多く知っており、それを次々に語ってくれた。

いずれも興味深く、時の経つのを忘れてしまいそうになる話ばかりであった。

「儂はコッフェスとも言われている」

ある時はそう語った。コッフェスとは『吊られた者』という意味で、とうてい人に付けるような名前ではない。グレシオスが即座にそう言って否定しても、男は薄笑いを浮かべるだけで取り合おうとはしなかった。

奇妙な客であった。

不愉快な客でもある。もしグレシオスが二十年若ければ、戦いになっていたかも知れぬ。

しかしグレシオスは老いていた。もはや四肢ししにはかつてのような力は残っていないと感じていた。

さきほどの夢の中のような、燃え盛る若さはない。

暑い季節はとうに過ぎ去り、彼の人生は老境に、冬の時期に入ってきている。

暖炉の火が爆はぜた。

「今日はどのような話を聞かせてくれるのだ？」

「お主が望むのなら、なんでも」

男は不敵に答えた。この謎の男はいつも不敵さをただよ漂ただよわせている。

自分と同じように老境に入っているというのに、まったく活力を失っていない。

肩は広く胸は厚く、軽く動かしただけで腕の筋肉がうねる様が見て取れる。

背丈も長身のグレシオスよりなお高い。

闘ったとしても、今のグレシオスでは勝つことはできぬかもしれぬ。

だがそれが、この男と闘うことを避けさせている理由ではない。

この謎の男は不愉快な相手ではある。不遜^{ふそん}と言ってもいい。

現在は隠退して家督を息子に譲っているとはいえ、グレシオスはローゼンディアの貴族なのだ。それも東方の要衝^{ようしょう}デルギリアを支配する名門、セウエルス氏族の長である。

ローゼンディア王国の貴族たちはみな、例外なく神々や英雄の末裔^{つら}に連なっている。

その中でもセウエルス氏族は、その遠祖を戦神イスターリスに求める戦神^{イスタリハーレイ}の末裔である。

当然セウエルス氏族の身内たちは、俗称が家名へと転じた者達を除けば、全ての者がセウエルス姓を名告っているが、中でもグレシオスはイスターリスの子、英雄ヴェルデスから直系に血筋^{たど}を辿れる家の人間であった。

つまりはセウエルス姓の本宗家である。

王国でも最高位を形成する七宗家の一つであり、

数あるローゼンディア貴族の中でも、屈指の名族と
いっていい。

だから男の態度は本来は許されるべきものではない。しかしグレシオスは何故か、そのことで男に怒りを感じたことはない。

どこか挑戦的なものを感じさせる男の態度には、
どういうわけかグレシオスを安心させ、何か大切な
ことを思い出させるような雰囲気があったからだ。

とはいえ^{からか}擲うような言葉や、態度を示されるのは
面白くない。

そのたびにグレシオスは奇妙な反発感を持ってし
まう。

自分がこの男に齡若い相手として扱われているよ
うな気分になるのだ。

齡を尋ねたことはないが、おそらく年齢は自分と
そうは変わらないはずなのだ。

男の態度には、どこか明らかに齡若い者を相手に
するような雰囲気がある。それがグレシオスを刺激
するのである。

腹立たしさに似てはいるが懐かしいような、どこ
か不思議な感情を、男はグレシオスに抱かせた。

「齡を取った狼の話をしよう」

おもむろに、男はそう言った。

タデアスが盆に^{しゅこう}酒肴を載せて入ってきた。干し肉

とチーズ、果物、それと林檎の焼き菓子が盆の上に載っている。

それらをテーブル上に手際良く並べると、火の具合を見、それから一礼してタデアスは部屋を出て行った。

息子のヘクトリアスに家督を譲^{ゆず}ったのを機に、グレシオスがこの寒村ナウロスに移ったのは二年前になる。

以来、身の回りの世話は通いの老女と、このタデアスに任せきりであった。

妻のディフォネは息子夫婦と、そして孫と一緒に^{やかた}館で暮している。時々様子を見に来るし、^{たよ}便りも^{はん}繁茂^もに^よこ^こ越してくるが、グレシオスは館に帰ろうとは思わなかった。

別段不満はない。家族に対して^{わだかま}蟠りがあるわけではない。

ただ、家督を息子に譲り、父祖の霊にその報告をすませると、身体から何かが抜け落ちたように感じてしまったのだった。

それまで自分を支えてきた^{はり}梁のようなものが、消えて無くなってしまったのである。

別段何もすることが無くなってしまったわけではない。館に居ればいくらでもするべきことは見つけられたらう。

だがどこか己の役目が終わってしまったような、
漠^{ばく}とした寂しさがあるばかりであり、日常過ごして
いても、ただ漫然と時の移ろいの中に身を置してい
るだけのように思えてしまう。

まるで本来あつという間に過ぎ去るものがずっと
続いているような、^{たと}喩えるならば暖かな冬の午後の中
に、いつまでも留まっているような気分であつ
た。

それは戦士として、領主として気を張って生きて
きたグレシオスには耐えられぬことだった。

穏やかな日々が苦痛にも近くなった頃、グレシオ
スはここナウロス村に移った。二年前の話である。

村を見下ろす丘の上に小さな館を建て、そこに住
むようになった。

ギルテの領主館からは馬で三日ほどの距離であ
る。それほど遠いというわけではないし、さりとて
近いというわけでもない。そこが気に入ったのであ
る。

妻や息子達は、そんな自分を扱いかねているよう
だった。

「父上は急に偏屈になられた」

^{たま}偶に挨拶に来ると決まって、息子は困ったように
そう言うのだが、グレシオスにはそんな自覚はな
い。

己が偏屈者かどうかと言われれば、いささか返答には窮^{きゅう}するものの、家督を譲ってから急激に偏屈者となったわけではない。

人は齢を取れば、自然と偏屈者の仲間入りをするものだと言う者もある。

だがグレシオスはそうは思わない。

人が偏屈になるとすれば、やはりそれには何らかの理由があり、必然であると考えている。

野山を駆け回る獣ではあるまいし、神々が特別に創りたもうた我々人間が、時の流れに応じてその有り様を変える事など、あるとは思えない。

神官達も言っているではないか。

人間には特有の属性として、精神が与えられている、と。

人の性向こそは、その精神の働きを示すものに他なるまい。となれば偏屈さというものは、やはり人間精神特有の事柄ではないのか。

人は、春になったら番^{つがい}の相手を探し、冬になったら眠りに就^つく山谷の獣とは違うのである。

そう考えているのだが、この事を他人に説明した事はない。

いざ言葉にしようとするとうまく纏^{まと}まらぬし、神官であるわけでもない己が、わざわざそんな講釈をするのも、おかしいのではないかと考えたからであ

る。

とまれグレシオスは、生まれ育ち、それまで暮したギルテの領主館を離れ、この村に移って来た。

今でも村の連中は「御領主様」と呼んで有り難がってくれるが、自分ではもう隠居のつもりである。

相談事や祝事のたびに、誰もが丘の上に住むグレシオスの元までやって来る。

最近では隠居話を聞きつけたのか、近在の村からまで人がやって来る。

まったく困ったものではあるが、だからといって、自分を慕^{した}ってくる者たちが憎かろうはずもなく、館を訪れる者があるたびに、グレシオスはできるだけ丁寧に対応をするようにしていた。

そんな自分が偏屈者だというのは、どうも納得がいかないのである。

ただ、自分は何か大事なものが欠落してしまったのではないかとは思っている。

それが何なのかは分からない。ひよっとすると単に老いただけであるのかも知れぬ。

からだ
身体は、動く。

もはや武器を手に持つことは少なくなったが、馬の遠乗りなど、領主館に暮した頃から変わらぬ日課に加え、この村に来てからは薪割^{まき}りなどもやるよう

になった。

「そのようなことは私がいたします」

グレシオスが薪割りをしていると、始めの頃はタデアスがそう言って、^{あわ}慌てて走り寄ってきたものだった。

しかしここではあまりやる事がない。薪割りくらいはかえって気晴らしになるのだと答えると、やがて^{あきら}諦めた。

今は冬だが、春になれば釣にも行くし、狩もする。

いささか^{おとな}訪う人の数は多いものの、そういうわけで、^{はため}傍目から見ればグレシオスは隠居暮らしを満喫していると思えるかもしれなかった。

が、それはあくまで外から見た話であって、内心はそうではない。

寂しいような、^{あせ}焦るような気持ちが日増しに強くなってくる。

さすがにタデアスは敏感にそれを感じているようであるが、どうにかできる^{たぐい}類のものでもなく、主従は一見平穏な、しかし内心納得できないものを抱えた毎日を送っているのであった。

「……昔あるところに三匹の狼がいた。三匹とも同じ齡だった。みな齡老いていた――」

男は話し出した。

いつものようにグレシオスは聴き役に回った。余計な口は挟まずに、ひたすら男の語るままと聴き続けるのである。

酒はお互い手酌^{てじゃく}だった。肴^{さかな}も好きに手を伸ばして食う。

それにしても片方だけがひたすら喋^{しゃべ}り、もう片方は黙ったままというのは、ちょっと変わった光景である。

老境に差しかかった男二人が向きあって、酒を飲みつつ歓談するというのなら分かる。またはお互いに無言で酒を飲むというのならば、これも分かる。

この二人はそうではない。ひたすら、片方の男だけが喋るのである。

ちょっと珍しい光景だと言えるだろう。

多くの知識を持ち、話題がつきないというだけでなく、男の語り口は絶妙だった。

それだけではなく、詩を朗読したり、即興^{そっきょう}で作ったりすることにも長^たけていた。

全くもって謎の男である。

「——こうして三番目の狼は星になった。イスターリスの連れてきている二匹の狼は、この狼の子供たちである」

これも、初めて聞く話であった。

しかもイスターリスに関係している話である。

にもかかわらず、グレシオスはこの話を知らなかった。そしてその事を恥ずかしいと感じた。

己の立場からして、当然知っているべき話であると考えたからである。

無論広大なローゼンディア国土において、イスターリスに関係する話がどれほどあるのかなど、そういう話を調べて回る神官でもない限りは知り得ないだろう。

だがグレシオスは、この地上でイスターリスに最も近い人間の一人として、何となく後ろめたいものを感じてしまうのだった。

「……お主の博識振りには頭が下がる。王都の神官たちでさえ、お主ほどに、ものをよく知る者は多くないであろう」

グレシオスの賛辞を、男は^{ほほえ}微笑みで受けた。

素直に喜んでいるようであるが、どこか冷めたような、落ち着いた^{ただよ}雰囲気も漂わせているように感じる。

これまでの付き合いからか、どうもそんな風を感じてしまう。グレシオスが勝手にそう思うだけなのかもしれないが。

いずれにせよ、あまりこの男のことを深く考えてしまおうとするのは良くない。

明日には来なくなる相手かもしれないのだし、何

よりも、そんな風に相手を見るのは自分の流儀に反している。

グレシオスは左手で果実酒の壺^{つぼ}を取り、空になった酒杯に注いだ。

口に運び、ゆっくりと飲む。タデアスなどは一気に^{あお}に呷ることが多いが、グレシオスはそうはしない。酒に限らず、飲み物はいつもゆっくりと飲み干すようにしているのだ。特に理由があるわけではなく、好みの問題である。

男もまた、話し終えた後はゆっくりと果実酒を楽しんでいた。

肴は十分に用意してあるが、この分だと酒の方が先になくなるかもしれない。だがタデアスは、よく心づく男であるから、何も言わなくてもその辺を見越して、酒を持って来るであろう。

「大殿」

ほれ、思ったとおりだ。グレシオスは感心しながら振り向いた。

ところがタデアスは酒壺を^さ提げてはいず、手ぶらであった。

様子がおかしい。

客をもてなす時の顔ではない。緊張した表情を浮かべている。

「どうした？」

おもんばか
客人を慮っているのか、^{わず}僅かの時間、タデアスは
^{しゅんじゅん}逡巡を見せた。

だが重要なことなのであろう、すぐに強い眼差し
をグレシオスに向けた。

「構わぬ。話せ」

「……ゾエ村がジャグルに襲われたそうです」

ぽつんと呟くような、しかしはっきりとした声音
でタデアスは言った。

それで、場の空気が変わった。

第二章 急報

ジャグルというのは人によく似た、しかし人ではない獣である。

人よりも小柄であるが怪力を持ち、邪悪なる存在として人々に広く知られている。

遥かな昔から人間たちに敵対するものとして恐れられ、忌み嫌われてきた種族である。

神話によれば、ジャグル達は太古の昔に邪神ゲオルギウによって創り出されたという。

かつて創世の時代、地上に現れた人間たちを見て、ゲオルギウは激しい嫉妬を抱いたのだという。

そして己が力を示すべく、人間たち以上の存在を作り出すべく、ゲオルギウはただ一神でもって創造の行為に挑んだのだという。

だが、生まれてきたのはジャグル達であった。

醜^{みにく}い外見、邪悪な嗜好^{しこう}……呪われた存在としか言いようのないジャグル達を見て、ゲオルギウは叫んだという。

「地の底へ消えてしまえ！」

以来、ジャグル達は地の底に棲^すむようになった。

丘や山の内部、または地面の下に、蟻^{あり}のように縦

横に部屋と通路を^{めぐ}周らせた^{すみか}棲処を持っている。

ジャグルに限らず、イゴールやゴロドといった他の種族もそうであるが、悪神たちによって生み出された種族は、いずれも人間たちに敵対している。

そこには和解の生じる余地は全く無い。どこまでも敵対するほか無いのである。

何となれば、人間たちは神々の協力によって、その祝福によって生み出された存在であるが、彼らは違う。

善なる神々への嫉妬や対抗心、人間たちへの呪いから生み出された存在である。

祝福はなく、喜びもなく、嫉妬と呪いのみによって作り出されたものたちは、醜く、邪悪な存在であるのが道理だろう。

少なくともヴァリア教の教典はそう教える。

グレシオスは他の宗教に触れたことはないが、かつて足を伸ばした南方アウラシールでも、西方のヴァルゲン人の王達にあっても、ジャグルを含め、悪の種族たちに対して友好的な者は居なかった。

もちろん悪の種族をどう思うかなど、聞いて回ったわけではない。聞くまでもないことだからである。

そんなことをせずとも分かるのだ。

どこに行っても、人間たちは悪の種族に備え、現

れたと聞けば真剣に対策を練り、戦うとなれば、一匹残らず皆殺しにして焼き捨てることを心がけていたのだから。

それは人間として当たり前の判断なのだ。

悪の種族に好意を持つ者はない。ただの一人も。

全ての者が嫌悪と恐怖、憎しみを示すはずなのだ。

もっとも、かつての大戦においては、悪の種族側に回った人間たちもいたと、歴史書には記されている。

遠く、ミスタリア海を越えてなお遠く南方へ向かうと、ジャグルと同じように呪われた人間たちが棲むという。彼らは伝説の大戦において、悪神たちの^{げぼく}下僕となった者たちの末裔であると言われている。

ここ数百年間は、悪の種族との大きな戦はローゼンディアでは生じていないものの、現在でも散發的ではあるが、連中との戦闘が発生することはある。

連中が^{ねじろ}根城とする北のヌーガ、そして^{くもい}雲居山脈、これらの地域から^は這い出してくるためだ。

大体においてジャグル達による少数の部隊であるが、被害は馬鹿にはならない。

ジャグル達が襲うのは辺境の小村である場合が多く、たいていは近くに領主館などなく、^{とりで}砦もないことが多い。

報告を受けて兵を出しても救援が間に合わないことが殆どで、やっと救援の兵が駆けつけた頃には住民は皆殺しにされているのが常だった。

そしてこのナウロス村も含め、セウェルス家所領であるデルギリアは、東部イオルテス地方の最涯、北に雲居山脈が覆さるように伸びてきている位置にある。

必然的に、悪の種族との戦闘の回数は多く、それに対する憎しみや備えも、人々の間に敷衍していると言えるが、だからと言って安心していいわけではない。

今、タデアスはゾエ村がジャグルに襲われたと言った。それは同じ人間たち、例えば野盗などに襲われるというのとは、わけが違う。

人間たちがジャグルの存在を認めないように、ジャグル達もまた、人間たちの存在を認めてはいない。だから捕虜を作るという発想がない。ここは同じである。

つまりジャグルに破れると言うことは全滅を意味するのだ。

敗北は酸鼻を極める状況を意味する。

……正確には、ジャグル達が捕虜を作ることはある。だがそれは奴隷として働かせるためではない。

我がローゼンディアでは決して認められているこ

とではないが、西方レメンテム帝国ならば、戦争の敗者を奴隷にすることは普通である。アウラシールでもよく見られることである。

ジャグル達は違う。

ジャグルは人間を食糧にするのだ。好んで食すと言っている。

やつらは潰す^{つぶ}予定の蓄^{ちくじゅう}獣を扱うように人間を扱う。

どれほどの数に襲われたのかは分からぬが、ゾエ村もこのナウロス村と同じ、小さな村である。

仮に百匹もジャグルが集まっていたとしたら、あっという間に滅ぼされてしまう。

その半分の五十匹だったとしても、半日も保たないだろう。

グレシオスの今までの経験では、ジャグル達の戦闘集団は小さければ五匹ほど、大きければ三十匹から五十匹ほどの規模だった。

大概が、近くの村を襲撃した帰りであるとか、偵察か何かで地上に這い出てきた斥^{せっこう}候のような連中だった。

味方に犠牲を出したことはあるが、それでも今までの戦いでは破れたことはない。もっとも破れていれば、今頃^{のんき}暢気に隠居生活を送っているはずもなく、どこぞのジャグルの胃袋に収まっていたことだ

ろう。

油断するつもりはないが、不意を討たれぬ限りは負けぬ自信はある。

イゴールの毒やゴロドの法外な^{りよりよく}膂力には、最大の注意を払う必要があるが、薄汚い^{ジャグル}地虫共など、憎みこそすれ、恐れるには値しない。

しかし意外に思う点も無いでは無い。

まだ本格的ではないとはいえ、今は冬である。

こんなことにも時季があると言っては何だが、ジャグルが這い出てくるのは珍しい。

ナウロス村はデルギリアの東北部にある。冬場ともなればかなりの雪が積もることが多く、言わば豪雪地帯なのである。

冬場に出てくれば移動にも戦闘にも邪魔になる雪を相手にせねばならず、そんな時季に何故、地虫共は這い出てきたのか？ まだ冬の初めで雪が少ないからか？

そう言えば、ギルテの神官が「今年は雪が少ないだろう」と予想していたことをグレシオスは思い出した。

去年の今頃は膝丈半ばほどの雪があったものだが、今年はまだ地面のところどころに土や草が見えている。

地下で暮らしているくせに、地虫共はそんなこと

までわかるのだろうか？

いくつかの疑問がグレシオスの頭に浮かんだが、
いずれにしても生かして帰すつもりはない。

一匹残らず殺して、焼き捨てる。

「どれほどの数なのか？　そして編制は？　ゴロド
やイゴールは混じっておるのか？」

「ゾエ村の者を待たせております。話はその者から
直にお聞き下さい」

言ってタデアスは腰を折った。ここに急を知らせ
に来た本人が、待っているというなら話は早い。会
うことにしよう。

グレシオスは腰を上げた。突然の事態とはいえ失
礼かと思い、男の方に目をやったが、気にするな、
という風に目顔で答えてきた。

「その者をここに通せ」

グレシオスが言うが早いか、タデアスはすぐに玄
関の方へと呼びに向かった。

ゾエ村の使者というのは若者だった。齡は十六か
そこらといったところだろう。

充血した目、細かくふる顫える膝、肩、グレシオスを
前にしても、膝を着いて礼をすることさえ忘れてい
る。

どれほど恐ろしい思いをしてきたのか、一見して
推察できる様子だった。

グレシオスにはおおよその見当がつくのだ。

四十年以上もの長きにわたって戦場を駆け回ってきた経験が、グレシオスに若者が見てきた地獄を想像させた。

「恐れることはない。ここはもう人の領域ぞ」

若者の目を見据え、グレシオスはゆっくりと言った。

「^{おおとの}大殿の御前だ。きちんと礼をせぬか」

優しい口調でタデアスが言い、若者の肩に手をやった。無論、その緊張を解^{ほぐ}す気遣いを兼ねている。

その狙いどおりに、若者はいくらか自分を取り戻したのだろう。

急いで礼の姿勢を取った。

「ごっ、御領主様にもうしあげまっす！」

「うむ」

無用だと思いつつもグレシオスは返事をした。

本当は前置きなどせずに敵の数や編成、動きの雰囲気などの報告に入ってもらいたかったが、相手はただの村人、しかも年齢若い上、混乱しているときている。

できうる限り相手の調子を崩さずに、聞き役に回るのが良いだろうと考えたのだ。

「ゾエ村がジャグルに襲われました。御領主様にお

知らまするべと思い、ここまで駆けてめえりました」

グレシオスは隠居であるから領主ではない。本来ならばギルテの領主館を目指すべきだったのである。

しかし今更そんなことを言っても始まらぬ。近隣の住民が自分を頼ってくるのは今に始まったことではない。

「ジャグルの数はどれぐらいか？」

「はいっ!? そ、それはよくはわからねえけども……多分三十匹くらいではねえかと」

かなりの大人数である。となれば偵察の類たぐいではなく、戦闘が目的であろう。

それで村を襲ったと言うことは……グレシオスは胸がむかつくような気がした。

ジャグル達の目的が分かったからだ。おそらく、食糧確保のために村を襲ったのだろう。

「ゾエ村の方はどうなっておるのか？ 戦いはまだ続いておるのか？」

「そいつはわかりませんです。ジャグルにわーっと攻めてきて、みんな大騒ぎになって、それでおれと、御領主様にお知らせねばなんねえと村長に言われて……」

必死になって話しているためだろう。若者の発言

は名詞の格変化が怪しかった。

とはいえ、その言わんとするところは判った。

「ゾエ村では誰が指揮を執^とっているのか？ 村長の
ボイオンか？」

ゾエ村村長のボイオンは数えで七十になる^{よわい}年齢^{よわい}ながら、
いまだ^{かくしゃく}鬢^{ろうおう}として^{ろうおう}いる老翁^{ろうおう}である。

さすがに杖は手放せないが、頭はもちろん、目も耳もしっかりとしている。

その判断力には信頼が置けるが、しかし問題がないわけではない。ことは^{いくさ}戦^{いくさ}である。

^{あびきょうかん}阿鼻^{ちまた}叫喚^{ちまた}の巷^{ちまた}にあって、迅速かつ的確に判断を下し、
戦闘指揮を執れるかどうかと言うと、まったく判らないと言わざるをえないだろう。

「ジャグル以外に敵の姿はあったか？ イゴールは？」

イゴールは悪の種族に^{つら}連^{つら}なる獣である。ジャグルも獣であるが、こちらが曲がりなりにも人間に近い存在であるのに対して、イゴールは完全に獣の姿をしている。

外見はイタチによく似ており、血のように赤い三つの眼と、茶褐色の体毛を持ち、背筋に沿って二本の黒い^{すじ}条^{すじ}が走っているのが特徴である。

大きさから言えば中型獣と言えるが、立ち上がれば、人間の背丈をいくぶん超える高さがある。

悪の種族の例に漏れず、イゴールも極めて凶悪な性質を持ち、人間に対して攻撃的である。

鋭い爪と牙は、それ自身十分に危険ではあるが、特に危険なのは牙である。毒を持っているのだ。

イゴールの^か咬み付きは、最も注意を要する攻撃なのである。

この魔獣に刀斧で立ち向かうのは愚かというより外ない。ましてや一人で立ち向かえるものでもない。

ゆえにイゴール狩りの際には必ず部隊を編成し、計画的に行なうようにしている。

デルギリアでは矢による攻撃、そして投槍による攻撃を規準として、^{とど}止めを刺すときのみ、槍による直接攻撃を行なうようにしているが、おそらく他の地域でも似たようなものであろう。

毒を持つ分、ジャグルよりも^{よほど}余程危険な相手だと言えた。

「……イゴールはおらなかったです。ただ――」

若者は^{ためら}躊躇うように言葉^にを濁した。

グレシオスは不吉なものを感じた。

「何を見た？」

「あのを、おれの見間違いかもしれねえですが、なんかやたらとでかい、樹みてえな影が……。それがのっそりと歩いていたみてえです……」

思い出すように語る若者の横で、タデアスが表情を硬くした。そしてグレシオスに緊張した目を向けてきた。

グレシオスには、タデアスが何を考えたかが分かっていた。

無言で頷くと、若者に目を戻して質問を続けた。

「そのやたらとでかいものというのは、村を襲ってきたのか？」

「いえ、だからおれの見間違いかも」

若者は首を振った。

「^よ獣^{かがりび}避けの篝火の向こうにやつらが現れたときに、ちらっと見えたような気がしたんです。でもおれは戦いが始まってすぐに、北の木戸から馬で出て、ここまで駆けてきたんで。馬は村長が……」

なるほど。ではこの若者は戦いの模様はまるで知らぬというわけだ。

先程の^{おび}怯えは地獄を見た^{せい}所為ではなく、村を案ずる気持ちから出てきたものか。

でなければ、元々臆病な若者なのだろう。

それにしてもジャグル達が押し寄せて来てから、ほとんど間を置かずに使者を脱出させたのは、さすがはボイオンだと言えた。

だが、篝火の向こうに見えたという大きな影が、自分とタデアスの考えるとおりのものだとしたら…

…。

おそらく、ゾエ村は今頃壊滅しているだろう—
—。

いやもし己が予測が外れていたとしても、ジャグルの数が三十匹ほどだというのは大きい。

ゾエ村の安否が気遣われるが、希望を差し引いて考えれば、全滅の可能性はかなり高いと言わざるを得まい。

だがそんな嫌な予感は口にするわけにいかぬ。無言でタデアスに目を向けた。緊張を宿した瞳には、自分と同じ考えが宿っているのが認められた。

「この村の村長は知っているか？ ヨルスという名の者だが」

「はい。なんどかお話したことがあります」

「では今からそこへ行き、^{わし}儂が呼んでいると伝えてくるのだ。そしてお前は、今夜ヨルスの家に泊めてもらえ。そのことも伝えろ」

「はい！」

若者は深く^{こうべ}首を垂れ、それから立ち上がり、慌てた様子で礼をすると、急いで部屋を出て行った。

玄関の戸が閉まる音を聞いてから、グレシオスはタデアスに話しかけた。

「お前はどう思う？」

「ゴロドであろうな」

答えたのはタデアスではなく、^{あぐら}胡坐をかいていた男であった。謎の男、いまだ本名明かさぬ旅人である。

「お客人、不吉なことは言わないでいただきたい」

タデアスが^{つぶや}呟いた。若干の非難が感じられる口調だった。

「そうかな？ お主等も儂と同じ考えではないのか？」

男は皮肉げに口を歪め、首を少し傾げた。

……もしもゴロドであれば、極めて珍しい事態だと言える。

ゴロドが地上に現れるのは滅^{めった}多にあることではない。グレシオスにしても、ゴロドを見たことは二度しかない。

このたび^{あいまみ}相見えることあらば、それが三度目ということになる。その場合は、四度目があるとは思えない。これには二つの理由がある。

一つ、再びゴロドが地上に姿を現す頃には、己の命数がつきている可能性が高い。

二つ、もし今ゴロドと戦うことになった場合、己が生き残れる自信はない。

「ゴロドが地上に姿を現すなど、滅多にあることはありません。ここデルギリアでも、最後に姿を現したのは二十六年前ですぞ」

そう。タデアスの言うとおりであった。そして、その最後に姿を現した際に、グレシオスは居合わせた。タデアスもである。

領民からの知らせを受けたグレシオスは、館に兵を参集させ、即座に連絡のあった場所に向かった。

ゴロドは二匹。

兵三十五人で襲いかかった。いずれも経験豊富な兵^{つわもの}である。

装備は万全だった。従者も連れ、槍も余分に持ち、^{かぎなわ}鉤縄まで用意した。

それでいて死者二十三人。

重傷が三人。無事なのはグレシオスとタデアスを含め、九人という有り様だった。

初めてゴロドを目にしたのは、父親に連れられて旅行をした際だった。アウラシールの獣騎兵が、一匹のゴロドを相手にしていた。

諸国に名の聞こえたアウラシールの獣騎兵は、さすがに見事な動きでゴロドを^{ほんろう}翻弄し、^{とど}綺麗に止めを刺していた。

今でも憶えている。^{ひそうきゅう}飛槍弓が^た発てる軽い^{つるおと}弦音、砂^{けた}を蹴立てて走る南方種^{ジビルアヌ}の大蜥蜴。ゴロドの皮膚すら貫くドウミウルバの矢。

その時の印象がいけなかった。

いかにも容易に^{たお}斃せそうな印象を持ってしまった

からである。

信じるべきは父祖達から語り伝えられた教訓、そしてデルギリアに伝わる伝承の方であるべきだったのだ。

ゴロドは悪の種族の中でも最も危険な存在であり、神話によれば、暴虐神ゴルドスの屍しかばねから生まれ出たという巨人である。

かつてこの世界には巨人族という者たちが存在した。

正確に言えば今でも存在はしているのだが、彼らが暮らすのは巨人界である。

それは人間界とは異なる世界であり、そのため人は巨人たちと直接交流をすることはできない。

神話には人間に敵対的な巨人、友好的な巨人、そのどちらでもない巨人など、様々な巨人族が登場するが、ゴロドはその中でも最後に誕生した巨人であり、本来は神々と同じ存在に属する巨人たちにおいて唯一、生まれた時から悪の種族に属している。

つまりゴロドは、他の巨人族とは本質的に異なる存在なのである。

神話の語るところによれば、全ての巨人たちは己が取り分である世界、巨人界へとその住居すまいを移したという。

しかしゴロドのみは、今もなおこの世界にとどま

り、恐怖と厄災をばら撒^まいている。

この事が、ゴロドが本来の意味では巨人ではないこと、呪われた悪の種族に連なる眷属^{けんぞく}であることを示している。

それでもゴロドを巨人というのは、その外見が巨人としか言い様がないからである。

背は二階屋に届くほどであり、一言で言えば枯木のような巨体である。

節くれ立った蜘蛛^{くも}のように長い手足を持ち、やや前傾した姿勢をしている。

面長な顔をしており、目鼻の造作は人間に近い。ジャグルが犬や豚に似た面構えをしていることに比べれば、遥かに人間によく似た顔立ちをしているのだが、そういう印象はない。

ただし瞳はジャグルと同じく、黒目と白目の区別が無く、燃える熾火^{おきび}のような赤色をしているので、人間と見間違えることはない。

ゴロドには表情というものがほとんどなく、生氣と言えるものは全く感じられないが、その心中には常に呪われた思いが渦巻いており、極めて危険である。

皮膚の色はジャグルと大差なく、土気色から黒であるが、生物の皮膚と言うよりも、木や石に近い質感を持っている。

遠目に見れば、まるで沼から這い出てきた浮浪者か、あるいは逃亡中の脱獄者のように見えるかもしれない。だがよく見れば、明らかに人間とは違う雰囲気を持っていることに気づくはずだ。

ゴロドに対する最も適切な形容は、動く屍^{しかばね}である。

悪の種族とはいえ生物には違いないのだが、ゴロドにはどうしても屍^{した}体という印象がある。

まるで餓死者が、何かの力を得て再び起き上がり、地上を彷徨^{さまよ}っているような雰囲気を持っている。

通常動きは鈍^{にぶ}いが、いざ戦闘となると不気味な俊敏さを見せる。

その皮膚は分厚く、硬く、矢では通常大した傷を与えられない。

何よりもゴロドは痛覚が鈍いので、どれほど傷を受けようとも、己が死する寸前まで戦闘力が衰えることがほとんどない。

殺戮^{さつりく}に特化した存在だと言えるだろう。

悪の種族の中にあっても、これほど恐ろしく、おぞましい生物は他にはない。

ゴロドは地上の生物を殺傷する悪意と攻撃力だけが、異常に、しかも無限に進化した帰結に他ならない。

今から二十六年前のこと、^{くもい}雲居山脈へと向かうゴロド二匹を、^{ひき}グレシオス率いるデルギリアの兵達が追った。

グレシオスの^{のうり}脳裡には、子供の頃に見たアウラシールの獣騎兵の姿があった。

^{すなじし}砂獅子の皮を^{まと}纏った戦士たちが、車掛かりの戦法でゴロドを追いつめていた。

獣騎兵は^{ひそうきゅう}飛槍弓を持っている。^{ジビルアヌ}大蜥蜴の骨と、ドウミウルバの木から作り出された特殊な合成弓であり、同じドウミウルバの木から作り出された矢を放つための弓である。

強弓ではあるが、異常に強いというわけではない。ただし、矢と弓とが共に揃った時には、恐るべき武器となる。信じられぬほどの強さで的に突き刺さるのだ。

その強さは『^{ふせ}禦げる^{よろい}鎧はなく、石壁に突立つ』と言われるほどであり、事実、そのとおりの威力を示す。

並の矢など払い落として見せるほど、^{きょうじん}強靱な皮膚を持つゴロドが、まるで子羊の肉に串を刺していくように、^{やすやす}易々と矢を付けられていったのである。

その名のとおり飛槍弓の矢は長い。並の矢よりも遥かに長く、そしてその長さの割には軽い。芯がなく、内部が中空になっているためだが、この矢を放

てるのは専用の飛槍弓だけである。

大柄である所^{せい}為^いか、ドウミウルバの矢はあまり遠くには届かない。

その代わり、射程の内ならば素晴らしい威力を発揮するのだ。獣騎兵はその特徴を熟知しており、当然ながらそれを活^いかすような戦法を得意としている。

基本的には一撃離脱戦法である。大^{ジビルアヌ}蜥蜴に乗って走り寄り、射^うてる限りの矢を射^いこむと、そのまま走り去る。

トゥライ騎兵の戦法に似ていると言えるが、こちらはより徹底しており、敵の周辺を駆け回りながら幾度も矢を射こむのだ。

グレシオスの見たゴロド狩りもそうであった。

五騎、いや六騎だったかの獣騎兵が次々と襲いかかりながら、ゴロドの周囲を駆け回っていた。

このゴロドは武器を持たず、グレシオスが目にした時には、既^{すで}に矢を幾^{いくせき}隻も付けられていたが、後に相手にした二匹のゴロドは武器を持ち、しかも無傷であった。

それだけでも大きな違いであるのに、最初の印象というのは恐ろしいものである。

グレシオスは大した考えも無しに攻撃を仕掛け、その結果、どうにか^{たお}斃^{たお}しはしたものの、散々な目に^あ遭^あったのであった。

やかた
館に帰参すると、祖父の激怒が降ってきた。普段は館の奥に暮らしている人であり、滅多に怒りを見せることのない人であったが、この時には広間にまで出てきて、^{すさま}凄じい怒りを見せた。

タデアスや生き残りの兵達の取りなしがなければ、どのような罪に問われていたか分からない。

しかし、罪に問われても仕方のないことをしでかしたのだという、自覚はあった。それは今でも同じ思いである。

「貴様を信じて命を預けた戦士たちを、貴様は使い捨てにしたかっ！」

祖父の言葉は今もなお、胸の奥に刺さっている。

自分は子供の時の印象を改めもせずに、軽い判断を下し、優秀な戦士たちを無駄に死なせてしまったのだ。

「……お前はどうか？」

グレシオスは先ほど中断された質問を、再びタデアスに尋ねた。声の調子が自分でも意外なほど、慎重な色を帯びていると思った。

重大事こそ、感情の色を含まない喋り方になるよう心掛けているはずなのに。

過去への後悔が声音に表れてしまったのだろう。

それは領主であった者としては恥ずべき事であるが、今はそんなことを気にしている場合ではない。

「……ゴロドが地上に出てくることは滅多にありません。ですが見間違いとして片付けるのも、危険な気がいたします」

タデアスもこちらの気持ちを察したのだろう、目を伏せるようにして答えた。

もしも襲撃した部隊にゴロドが混じっているのであれば、ゾエ村は全滅だろう。救援も間に合うまい。

もっとも、知らせに来た若者は「北の木戸」から馬で駆けてきたと言っていたから、おそらくジャグル達は村の南側から、正門から襲ってきたに違いない。

となると奴らは、ブレイオン街道沿いに北上して来ているのかもしれぬ。

大胆と言うしかない。身の程^{ほど}を辨^{わか}ま^まえぬと言ってもいい。

汚らしい地虫^{じむし}どもの分際で、人の世界の、それもれっきとした街道を堂々と歩いているなど赦^{ゆる}せぬ。

ブレイオン街道というのは、デルギリアにある主要な^{おうかん}往還の一つである。南からギルテに入り、ゾエ村、そしてナウロス村にまで続いている街道である。

ただし利用する者のほとんどは、ギルテを折り返し点としている事だろう。

ゾエ村もナウロス村も、特に必要がない限りは、訪れる理由の見当たらない小さな村だからだ。

しかし、だからこそジャグルも襲ってきたのかもしれない。街道の事実上の起点であるギルテはデルギリアの中心である。そこを襲うほど連中は愚かではない。

第一、ギルテを襲うとなれば、数千からの兵が必要になる。悪の種族がそれだけの動員をかけるのは並大抵のことではない。事実ここ数百年は一度も起こっていない。

ともあれジャグル達が、どこから這い出してきたのかは知らぬが、およそ雲居山脈の^{すその}裾野であろう。だがそこからの道筋が分からぬ。

襲う順番を考えるならば、ゾエ村よりも先に、このナウロス村が襲われて然るべきだからだ。

というのは雲居山脈から出てきたジャグル達は、おそらくテラモン大森林の中を進んで来るであろうから。

^{のんき}暢気に道を歩いてくれば、たちまち人間たちに発見されてしまうからだ。

そしてゾエ村よりもこのナウロス村の方が北にあり、テラモン大森林に近い。先に襲われる方が自然である。

今までの例から言えば、連中が街道を使うとは考

えにくいことだった。

だからこそ、村の南から攻め寄せてきたという話には意外性があるわけだが、それはつまり、それだけ大胆な行動を採らせるだけの理由があることを暗示しているとも言える。

そこまで考えてグレシオスは嫌な予想に突き当たった。

もしも部隊にゴロドが含まれているのならば、ジャグル達が意気軒昂いきけんこうに振る舞っていたとしても怪訝おしくはない。

嫌な想像であった。若者の「見間違いかもしれない」という話が、急に重要な意味を持って迫ってくるように感じた。

となれば――。

次に襲われるのはこのナウロス村であろう。

ゾエ村を滅ぼした余勢を駆って襲いかかってくる……ありそうな話である。

襲撃部隊にゴロドが含まれていれば、間違いなくそうなるだろう。

そしてナウロス村を滅ぼした後はそのままテラモン大森林へ入り、森林内を進んで行って、雲居山脈に引き揚げていくのだろう。

そう考えると中々よく出来た襲撃計画だと思える。ゴロドという強力な存在あってこそ、大胆な

計画だ。

「もしゴロドがおるなら、奴らは間違いなくこの村も襲うであろう」

「ですがまだ決まったわけではありませんまい」

タデアスは首を振った。ゴロドの恐ろしさを身をもっ
以て体験しているだけに、否定したいのだろう。その気持ちはグレシオスにも分かった。

「たしかにお前の言うとおりのだ。ゴロドがいると決まったわけではない。だがこのまま手を^{こまね}拱いておるわけにもいかぬぞ」

「誰か調べに行かせてはどうでしょうか？」

「誰が行くというのだ？」

「もしよろしければ私が行ってまいります」

厳しい顔をしてタデアスが言った。

偵察は危険な役目である。もしジャグル達が警戒していた場合、射殺^いされるかもしれない。

そんな役目をタデアスに命じる気には、とてもなれなかった。

「いや、偵察は無用であろう。どのみち地虫どもが巢穴に帰るためには、この村を通過せねばならぬ。明日の夜には嫌でも顔を合わせることになるよ」

連中は夜行性であるから、ナウロス村を襲ってくるとすれば、明日の夜になるだろうからである。

「大殿はゴロドがいるとお考えですか？」

今度はタデアスが尋ねてきた。

「さてな……」

グレシオスは言葉を濁した。男の方に目を向けると、意味ありげにこちらを見ていた。

もしもゴロドが襲ってくれば、とんでもない事になるというのに、まるで恐れている風がない。いや、ジャグル達だけであったにせよ、明日の夜には襲ってくる公算は大きいのだ。

不敵なのか、それとも単に事態を把握する頭がないのか、判断が難しいところだった。

「それにしても何故奴らはゾエ村を襲ったのでしょうか？ 襲われるべきはこのナウロス村であると思うのですが」

タデアスも同じ疑問を持ったようだった。

「始めから二つとも襲うつもりであったのなら、先にゾエ村を潰すであろうよ」

男が再び口を挟んだ。

「何故でしょうか？」

タデアスが不満げに男に問うた。多分、会話に口を挟まれるのが気に入らないと言うよりも、男の態度や、言い方が気に入らないのだろう。

「ナウロス村を先に襲えば、ゾエ村に報せが行く。そこからギルテまでは遮るものがない。連絡がまっすぐに届くではないか。首尾よくナウロス村を滅ぼ

したとしても、その間にゾエ村がギルテからの援兵を得ていたら、攻めるのは難しくなるであろう。逆にゾエ村を先に滅ぼしておけばナウロス村は孤立する。つまりブレイオン街道を押しえられておるからギルテには報せを送れぬ。ナウロス村は自分たちだけで、ジャグルどもの相手をせねばならなくなるというわけよ。ゾエ村を襲った時点で、奴らが街道から攻め上がってきたのはその^{ため}為よ。ギルテに連絡をつけさせない為よ。万一ギルテがことの成りゆきを知って、急ぎ兵を送ってきたとしても、このナウロス村は連中にとっては帰り道にある。滅ぼすには至らなくとも、そのままナウロス村を^{じゅうりん}蹂躪してから、テラモン大森林に逃げ込めばよい。だから始めから二つの村を襲うつもりならば、ゾエ村から攻めるのが当然よ」

正論だった。文句のつけようがないと言えた。

この男は知識があるだけでなく、軍略にも通じているのだった。

そのことが意外だったのだろう、タデアスは驚いたような表情をしていた。

「お主の言うとおりの。して、先ほどの若者の見たものがゴロドであると確証できる理由の方も話してほしい」

グレシオスはそちらの方の根拠も聞いておきた

かった。男は^{うなず}頷くと、話を続けた。

「このような大胆な策を実行に移すからには、それだけの力が^い要る。先ほどの若者はジャグルの数は三十匹ぐらいではないかと言った。少ないとは言わぬが、二つの村を襲うには数が足りぬと思える。無論、あの若者が見ていないだけで、もっと多くいるのかもしれぬ。だが樹みたいだという、その大きな影がゴロドだと考えれば、少ない手勢にも納得がいくのではないかな？」

これまた納得できる予測内容であったが、タデアスが反論した。

「たしかに。だがそれでは、単にジャグルの数が多いというだけでも構わないではありませんか。ゾエ村にしてもナウロス村にしても、ジャグルが数十も集まれば^{ふせ}禦ぎきすることはできぬでしょう。滅多に地上に現れることのないゴロドを、わざわざ考える必要はないのではないのでしょうか。先ほどの若者自身、確証が持てないという言い方だったではありませんか。ここはゴロドというよりも、ジャグルの集団と考えた方が良くと思います」

男はタデアスの反論には答えず、持っていた^{さかづき}杯を口に運び、酒を飲んだだけだった。

タデアスは男の答えを待っている様子だったが、男にそのつもりがないのを見て取ったのだろうか、

グレシオスの方に目を向けてきた。

ゴロドの参加を認めたくないであろう気持ちを差し引いても、タデアスの意見には採るべきところがある。

というのは、敵にゴロドが居るか居ないかで、こちらの防衛方針に変化が生じてくるからだ。

もしゴロドが居るなら戦いは出来るだけ避けるべきだ。

たとえ一匹であっても、今のナウロス村には^{たお}斃せるだけの戦力はないと思える。

ゴロドが居ないのであれば、まだ打つ手はある。

さすがにジャグルが百匹ということはあるまいが、たとえそれなりのジャグルが集まっていたとしても、ゴロドに比べればまだ相手をしやすいと言える。

ナウロスやゾエなど守備兵の居ない小村では、三十匹のジャグルでも十分全滅の脅威ではあるが、それでもまだ手を打てないことはないだろう。

それにジャグルが五十を超えるような数で集まっているとしたら、一度にその数で移動するのは人目に立ちすぎる。

ゾエ村に^{たど}辿り着く前に、既に誰かがギルテへと報を運んでいるはずだ。

しぶとく戦いながら救援を待つという選択もあり

得る。

もちろん村に備えが無く、いきなりジャグルに襲われた、という事態であればジャグルに^{ひとの}一呑みにされてしまうだろう。

タデアスはジャグルが数十匹も集まれば、禦ぎきめることは出来ないと考えているようだが、グreshiosはそうは思わない。

たとえ百のジャグルであっても、優秀な指揮官が^{いくさ}戦を動かし、村人一丸死に物狂いとなって戦えば一日、ひよっとすると二日ならば禦ぎきれれると思う。

その間に、ギルテから救援が来るであろう。

なんとすれば、それだけあればブレイオンの^{おうかん}往還を使う行商人が異常に気づくからだ。

ジャグル達の足跡にも気づくだろうし、またはギルテの側で村からの人間が来ないことを不審がるかもしれない。

どちらにしても急を聞けば息子が、現デルギリア領主のヘクトリアスが兵を率いて駆け付けてくるだろう。

まだまだ未熟なところのある息子ではあるが、領主館は五百からの兵が即座に集められる体勢になっている。百匹程度のジャグルなど物の数ではない。

もちろん、ジャグルの数がもっと多い場合や、自分が思うように戦の指揮ができない、または手を負

うなどして指揮ができなくなった場合は考えていない。

これから生き残るための戦いを始めようと言うのに、死ぬ場合のことを考えるのは無意味だからだ。

想定外のことが起これば死ぬ。

それは戦場における真理である。予想外の事態が起きた時点で、生き残れるかどうかは、人の努力よりも^デ運命^ユの^ー三女神^ノの^イ天秤に支配されることになるからだ。

無論、だからといって、生き残るための努力を放棄してもよいというわけではない。

最大限の努力を重ねてもなお、戦場で己の成すべきこと、働くべき位置を見失うような状態に^{おちい}陥れば、後は全て運である。

努力が不要なのではなく、極限の努力に加算して、さらに運命の女神が味方してくれることが必要なのである。

それを^{いや}厭と言うほどグレシオスは見てきた。体験してきた。

だから集められる限りの情報を集めた後は、迷いを持たずにひたすら戦闘に集中する。

後は我が父祖の守り手、^{ふんぬ}忿怒せるイスターリスの加護を願うのみである。

今問題なのは敵の戦力がどれ位なのか、またその

構成にゴロドという怪物が含まれているかどうかである。

グレシオスとしてはゴロドが居るのではないかという気分は強い。タデアスよりも、男の意見により説得力を感じるからである。

ゴロドが居るのであれば、村を捨てて逃げる他ない。明日の日が昇り始める頃、村人を率いて出発するしかないであろう。

ただしその場合には、逃避行の途中で多くの者が死ぬであろう。

今の季節は冬である。イオルテス地方の例に漏れず、デルギリアの冬は厳しい。

道なき道を、ジャグルの部隊に追いつかれぬよう急がなければならないわけだが、その中には女子供や老人、病人までが含まれる。

誰もが十分な防寒具を持っているとも思えない。

恐ろしい敵に追われ、厳しい寒さの中を、昼夜を徹して行進しなければならなくなる。

寒さにおいて、最も恐ろしいのは「冬の老人」である。

これは死の嵐とも呼ばれる極寒の吹雪であり、たとえ十分な装備をしていても、とてもではないがその中に止まれるものではない。

冬の老人が吹けば終わりである。全滅してしまう

だろう。

本格的に冬の老人^{ザヒーラ}が訪れるのは年を越えてからだ
が、だからと言って吹かないという保証は無い。

一旦^{いったん}大きく西に向かい、そこから南に向かってパ
ラケウス街道を目指すのが最も現実的な逃避の案だ
が、冷静に考えて、パラケウス街道に出るまでにか
なりの者が死ぬであろう。

しかも途中でジャグルに追いつかれたら、これま
た全てが終わりである。

そう考えると村を捨てるというのは上策とは言え
なかった。確実に助かる方策とまでは言わなくて
も、もっと良い手を求めたいものだ。

それでもゴロドと戦うよりは、生き残れる者が出
てくる見込みがある分、まだと思える。

ゴロドが居なければ、これはもう籠城^{ろうじょう}して抗戦し
た方が良くであろう。

ジャグルの数という問題を考えても、五百だ千だ
ということは、さすがにありえない。どんなに最大
でも百というところだろう。

ならば一日、いや二日は支えきれぬ。その間にギ
ルテから援兵が来る。

だが、どちらにしても鍵になるのはゴロドであ
る。果たして今度の来襲に参加しているのか居ない
のか。

これはもう実際に調べに行くしか方法はないし、その必要もある事柄であった。

そうなると前言をひるがえして偵察が必要になってくる。

先にタデアスがその役を買って出たが、行かせるつもりはない。そんな危険な役目を命じる気にはとてもなれぬし、もし籠城戦を行なうことになった場合、タデアスは絶対に必要である。

危険な偵察を命じて万一死なせたり、でなくとも傷を負わせるなどしてはならない。

情の問題だけでなく、戦略上もタデアスを失う愚はおか冒せない。

となれば村の中にいる者の中で、眼が良く、馬術の巧みな若者に命じるしかあるまい。

「この村には今、渡りの獵師はいるか？」

グレシオスはタデアスに尋ねた。渡りの獵師というのは特定の村に定住せず、村から村へと渡り歩く者のことである。

元々獵師は眼がよい。気配にも敏感だ。偵察に行かせても無事に帰ってくる見込みがある。

そして渡りの獵師であれば、馬術に秀でている事が期待できる。

偵察を命じるには一番適した人材だと考えたのだ。

というのは、デルギリアの属するイオルテス地方は元々、良馬の産地としてローゼンディアでも有名で、事実この地方は『馬疾はやきイオルテス』と呼ばれてもいる。

だから王国全体で言えば他の地域に比べ、馬術が巧みな者は多いのであるが、渡りの獵師ならば、他の獵師よりもさらに、騎乗の経験が豊富であろうと思ったのである。

無論、偵察、それも長距離偵察の経験を持つ兵が居ればそれに越したことはないが、そんな者が、このナウロス村に居るとは思えなかった。

「どうでしょうか。もうすぐヨルスが来るでしょうから、直じかにお聞きになるのがよろしいでしょう」

もっともな答えである。グレシオスは男の方に目を遣やった。

男は一人で酒を飲み、肴さかなに手を伸ばしている。

先ほどのタデアスの反論で気分を害したのかとも思ったが、どうも違うらしい。

むしろあれで「言うべき事は言った」とばかりに、気持ちを綺麗に切り替えて、酒と肴を楽しむことにしている様子だった。

グレシオスは呆あきれた。

肝きもが太いという話ではない。むしろ現実感覚がおかしいと言った方がよい。

今、目前に大きな脅威が迫っているというのに、
男のこの態度はどうにも理解しがたかった。

「……村長が来たようだぞ」

ふと男が杯を口から離し、ちらりとグレシオスの
方を見て言った。

タデアスが玄関に向かった。

第三章 過去

ヨルスは瘦^やせた小柄な老人であるが、肝は据^すわっている。元獵師であるから目も良い。

今でも時折^{ときおり}、弓^{たずさ}を携えて狩りに出掛けることもある。

それは獲物を仕留^{しと}めるよりも氣散^{きさん}じが目的であるようだが、腕は確かで、時々グレシオスの館にも射落とした鳥や、罠^{わな}で捕らえた兔^{うさぎ}などを献上^{けんじょう}に来ることがある。

齡はグレシオスよりも幾分上である。白い髪は短く刈り込んであり、鬚^{ひげ}も伸ばしてはいない。そのため村長と言うよりも、現役の老獵師のように見える。

獵師の多くがそうであるように寡黙^{かもく}な男であり、人の言葉よりもむしろ鳥獸の言葉、山や木々や湖水の囁^{ささや}きをよりよく解するような雰囲気がある。

今もグレシオスの前に膝を着き、意志の強そうな青い眼を向けて、その話をじっと聞いているのだった。

グレシオスは要点^まを纏^{まと}め、できるかぎり分かりやすく話をした。

ナウロス村に脅威が迫っていること、戦うか、それとも逃げ出すかの決断をせねばならぬこと、敵の

規模はジャグルが三十匹以上であること、などである。ゴロドが混じっている可能性があることを告げると、ヨルスの面にもさすがに緊張が見えた。まさかゴロドに遭遇したことがあるとは思わぬが、その恐ろしさを伝え聞いてはいるのであろう。

「それと、今この村に渡りの猟師は滞在しておるか？」

「いえ、今はおりませぬ」

「そうか。では村の猟師の中でもっとも目が良く、馬術に巧みな者をここに寄越すのだ。これは今夜中にやってもらいたい。なおその者も含め、他の村人にも、今儂が話したことを教えてはならぬ。そして明日の朝一番で、村人全てを広場に集めておくのだ。儂がそこへ出向いて説明する」

「かしこまりました。大殿の仰るよういたします」

「頼んだぞ」

ヨルスは深く頷き、立ち上がると、一礼して下がっていった。

さて、村人はともかく、これから来る猟師には偵察の注意点を教えるなどの仕事が残っている。

村人とは違い、グレシオスは今夜は眠れそうになかった。

今夜はまだ村人に事件を知らせず、話を伏せるよ

うヨルスに命じたのにはわけがある。

村人は兵士ではない。正規の訓練を受け、心技を練^ねっている戦士たちではないのだ。

一日の仕事を終え、平和に眠っているところを叩き起こし、急を知らせたところで機動的に動けるとは思えない。

もっとも村人を叩き起こすことで、大きく時間が稼げるのならば、グレシオスも今夜の内に行動を起こしたかもしれない。

だが、いかんせん時間がなさすぎる。

連中が到着するのは早くても明日の夕方、おそらくは夜であろう。無理をして僅^{わず}かな時間を稼^{かせ}いだところで、どうなるものでもない。

今すぐ村を捨てて逃げるにしても、この寒さと暗闇の中を進むことになる。

その苦勞と危険を考えると見合わぬし、戦闘の準備をするにしても、今から朝までの時間では何程^{なにほど}のことができるとも思えぬ。

ならばむしろ今夜はゆっくりと休ませて、明日の日が昇ると同時に行動した方が良いだろうと考えたのである。

時間は惜しいが、それが正しいと信じた。これが愚かな判断であったかどうかは、あとではっきりするであろう。

「結局どうするのだ？」

タデアスも下がり、二人きりになると、男はグレシオスにそう尋ねた。

「偵察を出す」

「それでゴロドがいた場合はどうするのか？」

グレシオスは言葉に詰まった。だが、もしゴロドがいるとなれば答えは決まっている。

「すぐに村人を纏めて村を捨てる。パラケウス街道を目指して西に向かうことになるな」

「ほう……」

男の声には失望の色が感じられた。

「セウェルス族の長、グレシオス・イオニス・セウェルスとも思えぬ言葉だな」

男はがっかりしたように言った。ちくりと刺すような怒りをグレシオスは感じたが、今はそんな感情に振り回されている場合ではなかった。

「……失望するのはお主の勝手だ。儂は村人を守らねばならん」

「戦うという選択もあるではないか」

妙に冷えた感じの声であった。

「今は冬ぞ。ここからパラケウス街道まで、道も使わず歩かせる気か？」

老人も、子供も。

男の言葉には、言外にそういう意味が含まれてい

と思った。そして、それで間違いはあるまい。

閉じられた窓の向こうには、今だって雪が降っているかもしれないのである。

雪が降れば少しは暖かくなる。それはいい。

だが問題は風だ。折角の雪も吹雪になれば死神と化してしまう。

つまりは冬の老人であるが、雪にはそうした有り難さと恐ろしさが同居しているところがある。

晴天の寒さも滲みるように堪えるが冬の老人とは比ぶべくもない。そしてこのデルギリアでは吹雪はよくある事なのだ。

日が昇れば足元の見通しは良くなる。太陽神が天を横切っている間は、幾分寒さもましにはなる。だがここからパラケウス街道までは、一日では辿り着けないだろう。

何日かかるだろうか？ それは馬の数や荷物の具合などにも左右されるだろう。

冷静に考えれば村人を連れて、しかも道を使わずに踏破できる距離ではない。

心理的な負担、体力的な負担、それに加えて寒さという難敵を相手にしなければならぬ。

街道に着いた時にどれだけ人数が減っていることか。

「だがゴロドがいたら何とする？ またはジャグル

が予想を超えて集まっていた場合は？」

「どちらにしても殺せばよい。小村とはいえここはイオルテスの、デルギリアの村であろう。それなりの武器も、戦える男も揃^{そろ}っているはずだ」

グレシオスは天を仰^{あお}ぎたい気持ちになった。

「……お主は、ゴロドの恐ろしさを知らぬとみえる」

だがそうせずに、呆^{あき}れたように吐き捨てるに留^{とど}めた。

「知っているとも」

男は口の端^はをわずかに曲げた。

「そうは思えぬがな」

もし本当にこの男がゴロドを理解していたら、あの法外な腕力、戦闘力を知っていたら、戦えなどと言うはずがない。

「思うにお主はゴロドを警戒しすぎてるようだな。いや、恐れていると言った方が良くかもしれん」

男の言葉に、グレシオスはまたも怒りを覚えかけた。

「ゴロドを斃^{たお}すには兵が居る。正規の訓練を受けた兵がな。この村にはそんな者はおらぬし、何よりゴロドが複数いた場合はどうするのだ？」

が、なんとか抑えてそう尋ねた。

「だから偵察を出し、その上で行動を決めるか…

…」

そうなのだ。つまるところは男の言うように偵察を出し、状況をつかまなければならない。

グレシオスの言う事を理解したのか、男は立ち上がった。暖炉の火に照らされた影が、大きく伸びた。

どこをねぐらにしているのかは分からぬが、今日はこれで帰るつもりなのだろう。

「^{わし}儂の判断が気に食わぬようだな」

「そうではない。ただもう少し考えてみるべきではないかと思うだけよ」

「……今日はここに泊まってゆけ。村を出るのは明るくなってからの方が良いであろう」

これはグレシオスからの、せめてもの気遣いであった。

旅人である男には、村人たちと行動を共にする理由はない。

一人の方が身軽であるし、明日の朝一番で出発して西に向かえば、無事にパラケウス街道に辿り着けるだろう。

それだけ告げると、グレシオスは部屋を出た。

自室に戻って休むつもりだったが、どういうわけか、足が武器庫の方に向いた。

「大殿」

途中、^{あか}燈りを^{かか}掲げたタデアスに会った。

「お休みになりますか」

「ああ。だがその前に武具を見ておきたい」

タデアスの表情が引き締まった。

「……^{いくさ}戦をなさるおつもりですか」

「さてな……それはゴロドが居るかどうかにかかっておるな」

タデアスは無言で^{うなず}頷いた。

「もうすぐ村の猟師がここにやって来る。来たら知らせてくれ。それがすんだらお前も休め。明日は忙しくなるぞ」

「はい。かしこまりました」

タデアスの手から燈りを受け取り、グレシオスは武器庫へ向かった。

通常、貴族の館にあっては武器庫は別棟を建てて、その中に武器を収蔵するものだが、この館を建てるにあたり、グレシオスはそうせず、屋内の空いた一室をそのまま武器庫に利用してある。

隠居所であるし、武器庫と言っても事実上の『思出し倉庫』であるから、わざわざ別棟を建てるまでもないと考えたからである。

入り口に立って燈りを^{かざ}翳すと、揺らめく光に照らされて武具類が浮かび上がった。

壁に沿って整然と並べられた槍や刀、横に休ませ

た弓、束たばねられた矢がある。

リオプの下に着ける帷子かたびらなども、綺麗に畳んで棚の上に重ねてあった。

リオプというのは幾重いくえにも革を重ね、鉄鎖てっさを縫い込んだ外套型の鎧よろいであり、言うならば鎖帷子くさりかたびらである。

王国の貴族はリオプを正規の甲冑かっちゅうとしている者がほとんどであるが、沿岸部の貴族などは鱗甲りんこうを身につけている者もある。

なおここ百年くらいだと思うが板金鎧べゼルメダなるものが現れてきた。鉄板を叩き伸ばして作った鎧であり、これは体に掛かる重さが分散されるようになってい

る。大変に良い物だと聞こえてくるが当然安い物ではない。加工の手間もさることながら、甲冑は個人個人の体格しつらに合わせて設える必要があるからだ。

興味はあったが、グレシオスは新たに板金鎧べゼルメダを求めるという事はしなかった。

セウェルス宗家の財力ならば問題なく購入できても、もはや隠居の自分には不要と考えたからだ。

無駄遣いはできるだけ避ける。これはグレシオスにとって家訓と言ってもいい。

しかし今にしてみると買っておけば良かったかと思う。まさかこんなところで再び甲冑を纏う破目に

なるとは想像していなかった。

己の不明を恥じる他無いが、ここに立てられているリオブでも十分、戦の役には立つだろう。何と言っても長い事、グレシオスの命を守ってきてくれた鎧なのだ。

この武器庫には二領^{りょう}のリオブがある。タデアスの分もここに収^{しま}ってあるからだ。

もちろんいつでも使用できるように、きちんと鎧立てに飾りつけられてある。

盾も二帖^{ちょう}ある。両方とも騎乗用であり、一帖は青一面に塗られ、その上に大きくワタリガラスが描かれている。これはグレシオスの盾である。

もう一帖は青と黒とで交差四分割された中に、違^{たが}え三本槍とワタリガラスが描かれている。これは分割図形と呼ばれる図案の一種であり、デ・オレイスと呼ばれるものである。こちらはタデアスの所有であった。

明らかにタデアスの盾の方が複雑な構図となっているが、当然、グレシオスの盾の方が家柄の高さを物語っている。

これはどういう事かと言うと、紋章は、その図案が複雑である方が豪奢^{ごうしゃ}な感じがあるが、一概にそうとも言えないという事を意味している。

正規の大紋章などは、どれもみな豪華であるか

ら、紋章の意味や歴史を知らない平民たちなどは、複雑な具象図形や、分割がなされた物の方が立派だと解釈するかもしれない。

だが事実は逆である。

紋章の本質は盾に描かれる部分である。つまり、余計な装飾を剥ぎ取った本質の部分がそこに表現されているのである。

紋章は戦場にあって貴族が、^{ひが}彼我の識別のため、盾や肩板に描くことより始まったと言われている。

ということは古い家ほど単純で、判別のつきやすい図柄を採用しているということになる。

家門が分割されていく過程が、そのまま紋章の分割複雑化を表していると言っても良い。

故に同じセウエルス氏族でも、グレシオスの紋章こそが最古のものであり、それから派生を繰り返して生まれたのがタデアスの紋章であると言える。

さてリオプが二領あるのだから、当然、^{かぶと}兜も二頭ある。

片方の兜が、ひやりと目に入ってきた。

^{きんじし かざり}金猪の飾を付けた兜である。

——叔父上……。

元は叔父の^{しな}科である。叔父エウスタスは、ベルガイアの戦いで壮烈な戦死を^と遂げたのだった。

今でも目を閉じれば、あの戦の^{いくさ}情景が浮かんでく

る……。

＊

クレオラの策が決まると、レメンテム軍は大混乱
に陥^{おちい}った。

恐慌状態だったと言って良い。

戦場において包囲される恐ろしさは、味わった者
でなければ分からない。

彼女が立てた策自体は単純なものであった。

正面の部隊でレメンテムの重装歩兵を支えきり、
その間にイオルテスとブランディスの騎兵部隊が左
右から回り込んで包囲陣を形成する。

たったこれだけのことであるが、手持ちの兵力は
レメンテムの約半数、しかも急遽^{きゅうきょか}掻き集めた傭兵部
隊を含む編成とあっては、誰もが不安を感じていた
はずだ。

しかも、最も重要な正面の防衛に傭兵部隊を回す
という。

集められたのは西方辺境に住むヴァルゲン人の傭
兵部隊だった。彼らは戦意は高いのであるが守備に
脆^{もろ}く、持久力に欠けている。

その上連中は、軍規を守る能力にも劣っていた。

これはヴァルゲン人が、大概は部族単位で行動

し、好き勝手に暮しているというところにも理由があるのだろう。

適当に集合して、その場の勢いで戦闘するのならば、連中はかなりの戦力を発揮するのだが、集団行動は苦手なのである。

要は攻撃一辺倒の突撃集団であった。それをもって最重要な正面の守備に充てるとクレオラは言ったのだ。

しかも相手にするのは、近隣諸国にその名も高きレメンテムの重装歩兵である。一糸^{いっし}乱れぬ統率で方形陣を組み、正面から激突してくる。

それに対して戦闘意欲はともかく、統率の行き届かない傭兵部隊をあてるというのである。

あの時、軍議の場にあった多くの者が、クレオラの正気を疑ったのではないか。

軍議は落ちついた空気の中で始まった。

諸侯の内、主立った者から順に意見を陳^のべていった。王は静かに諸侯の意見を聞き、質問を発する事はなかった。

時のローゼンディア王はメレニウス四世。後世に名が残るであろう名君の一人である。

「ゼメレス公の意見を採る。諸侯に異存はあるか？」

クレオラがあの細い声で進言を終えると、王は即

座にそう宣言した。

見事という他ない。

当時クレオラは領内の治政三年目、普通ならばそろそろ領主としての仕事にも慣れ、安定してきた頃であろうが、まだまだ新米である。

女性である事は関係ない。ゼメレス族では女性が表向きのこと、つまり対外的なことの一切を取り仕切るのが普通だからである。それは遙かな昔からの決まり事であって、いくら他の氏族からは変わって見えたとしても関係が無い。

どの氏族にも独自の風習や仕来りしきたというものがある。それは他氏族が異を唱えるような事柄ではない。無礼に当たるからだ。

だから何かの事情があるのでもない限りは、ゼメレス族では女性が家長に立つのが当たり前なのである。

しかし、何と言っても実際に刀槍を振り回すのは男である。

ローゼンディアに女戦士が居ないわけではないが、やはり戦場いくさばは男の独壇場と言って良い。

ゆえに女性の意見はどうしても、門外漢の意見として取られてしまいがちになる。

加えてまだ若い新米領主の意見とあれば、誰もがその話を真面目に取り合えるわけではない。

人には先入観という問題がある。

あの時もそうであった。重要な軍議であり、王国の生死を分ける決戦になる可能性もあった。それは諸侯いずれも承知していたはずだ。

だがそんな帷幄いあくの中にあっても、クレオラの話面白くなさそうに聞いている者が多かった。

所詮は若造、聞くほどの意見ではない――。

そのように考えていたのだろう。

それだけに、王の決断は諸侯の度肝とぎもを抜いたと思う。実際、グレシオスも驚愕きょうがくしたのだ。

セウェルス宗家の家長とはいえ、叔父に支えられての立場である。若輩じゃくはいであることは辨わえていたから発言もしなかった。

クレオラも似たような年齢だったから、場の雰囲気は察していたはずだ。

にもかかわらず滔々とうとうと自分の考えを語った。

立派な行為である。

だがやはり、真面目に取り合う者は少なかっただろうと思う。

しかし王は、クレオラの意見の価値を正確に見抜いたのだ。

即座さいかに裁可を下した王に対し、意見を陳べたのは二人だけであった。

一人はヘカリオス公デュレス。

王国の西部、ロスメニアのブランディス地方に所領を有する領主であり、角持つ一族の西の宗主、栄えある^{ダルフォイヘーレイ}狩猟神の末裔である。

つまりゼメレス家とは縁深く、その始祖神は同じになる。

両家の始祖は狩猟神ダルフォースの子供たる、双子の英雄フォルスとダナディイアであった。

ヘカリオス家はフォルスを、ゼメレス家はダナディイアを始祖としているのだ。両宗家は互いに鉄弓と大釜を分け合う名族である。

ヘカリオス公の領地であるブランディスは開けた平原地方であり、今回レメンテム帝国軍が上陸してきたアズベルタ地方とはロスメノン山脈を挟んで北側に位置している。

公自身を含め、西部地域の貴族達が抱く危機感は大きかったに違いない。

この頃ヘカリオス公は四十才前後だったと思う。

西部人らしい金の巻き毛を長く垂らしており、鼻の下には見事に整えられた^{ひげ たくわ}髭を蓄えていた。

身の丈もあり肩幅も広く、聞くところによれば^{きし}騎射の技に秀でていているという事だった。

とはいえヘカリオス家の当主が弓術に劣るなどとは、まず考えられない事ではある。

ヘカリオス公は王国貴族の名に恥じぬ^{いじょうぶ}偉丈夫で

あったが、どことなく優雅さがあり、武将と言うよりもむしろ教養人という雰囲気を持っている人だった。

今にして思えばヘカリオス公は、クレオラの天才を知っていたのではないか。

でなければ彼の賛成が納得しがたい。ヘカリオス公は王に続いてすぐに言ったのだ。

「私もゼメレス公の意見に賛成いたします」

と。これはさすがに同族の^{よし}誼みで片付けられる問題ではない。

続いて意見を陳べたのは、叔父エウスタスである。

叔父の意見は自然なものだった。つまり守備力統率力に欠けるヴァルゲンの傭兵達を、何のゆえを^{もっ}以て、最も重要かつ重荷になる正面守備に回すのか？

しかもその後ろは王の本陣である。

突破された場合、王が危険に^{さら}曝されることになるのである。

ところがクレオラは問題ないと言うのである。

「本陣には私が兵を置きます」

そういう問題ではない。問題はあの規律のないヴァルゲン人を、どう統率して戦わせるかという事にあるのだ。

「彼らには一つのことしか命じません。それを守れ

ないということはないと思います」

守れなければどうするのか？

「^{とくせんたい}督戦隊を置きます」

それで諸侯の顔色が変わった。嫌そうな顔をする者が幾人かあった。

督戦隊とは兵を励まし、戦わせる部隊の事であるが、早い話が逃げてくる味方を殺すのが仕事である。

退却封じの部隊であり、それを好きだという者など、まずいないのであった。

「守備の兵が足りぬとあれば、同盟のヴァルゲン王を加えましょう。ヴィルモーシュ王などがよろしいかと思います」

この発言も場の諸侯を驚かせた。^{あき}呆れたような^{ささや}囁きさえ起こった。

ヴィルモーシュ王はローゼンディアの近くに支配地を持つ、ヴァルゲン人の王である。

なおヴァルゲン人とは、ローゼンディアの西北方に住む人々である。

宏大な範囲に幾つもの部族や氏族が存在しており、それぞれに首長や王を立てている。

ヴィルモーシュはそんな王達の一人であったが、過去にローゼンディアと戦ったことがあった。

しかも裏切りである。

今回の戦^{いくさ}ではローゼンディアに味方すると宣言しているが、いったいその肚^{はら}の内がどういうものなのかなど、まるで見当がつかぬ。

土壇場^{どたんば}でレメンテムに寝返る可能性は十分にあると言えた。

「彼は裏切りません」

クレオラは断言した。

「もしここでローゼンディアが破れれば、彼にとっては非常にまずい事態となるからです。彼は目端^{めはし}の利く男ですから、その辺は良く承知しています。少なくともこの戦の間は真面目に我々の味方をしてくれるでしょう。ですから重要な役目を割り振っても問題はありません」

要するにヴィルモーシュに精々^{せいせい}働いてもらおうということだった。

奴にとっては命懸けだが、この事に関しては当然、王を含めて諸侯誰一人、異議を差し挟む者はなかった。

あのレメンテムの重装歩兵の正面に立つというのは、相当な覚悟と実力、そして何より神々の加護が必要だ。

よりもよってヴィルモーシュに神の加護が与えられるとは思えなかったが、それは諸侯いずれも同じ意見であつたらしい。

「それにしてもヴィルモーシュは我等が大神方の御加護を受けておらぬはず。一体どこの神に祈るのでしょうか？」

ヘカリオス公が不思議そうに言うと、軍議の場に笑いが起こった。

それで緊張が解れたのか、その後、諸侯の配置は速やかに決まっていった。

やはり諸侯の不安は正面の部隊の構成と、その防ぎよ禦能力にあったようだが、クレオラが強調したのは、むしろ左右に展開した騎兵部隊であった。

とにかく騎兵部隊がいかに早くレメンテム軍の背後に回り込むか。

本陣から見て右の部隊は、主にイオルテスの戦士達で編成された。

その中心はセウェルス族の軍であり、つまりグレシオスとエウスタスが右騎兵部隊の総指揮をつかさ司どることになった。

左の騎兵部隊はヴァルゲン人達との混成部隊であり、ヘカリオス公デュレスが司どることになった。

騎兵戦の決着を出来る限り速くつけること、正面に立つ守備隊は敵を倒さず、その場に釘付けにすること。

この二点が作戦の要諦ようていであった。

諸侯が心配していた正面の部隊に関しては、ヴァ

ルゲン人部隊の背後に精強な歩兵部隊を並べた。

まず王を中心にゼメレス公クレオラの部隊。その左右にそれぞれ^{ゼフルヘーレイ}海神の末裔のグライアス公、^{ロンディム}鍛冶神^{ヘーレイ}の末裔のアラルコス公を配した。

いずれも七宗家を占める名族である。

七宗家の最後、^{ドヌスヘーレイ}嵐神の末裔のエンデュオス公は、左の騎兵部隊に加わってヘカリオス公の指揮に従う事になった。

それ以外の諸侯達は、各自が連れてきた兵の編成を規準に、それぞれが七宗家の部隊へと振り分けられた。

「この戦は速さが命。^{せいひ}成否はヘカリオス公とセウェルス公、エンデュオス公が握っておられます。そのことをくれぐれもお忘れなきよう」

軍議を解散して天幕を出るとき、クレオラは特にグレシオス達、騎兵部隊の諸侯を呼び止めてそう言った。

あまり心配をしているという風ではなく、かと言って励ましている風でもなかった。

クレオラは、あのどこか眠そうな印象を与える眼で静かにグレシオス達を見て、淡々と言ったのだった。

「承知しておるさ」

ヘカリオス公は白い歯を見せた。

「^{むこどの}婿殿にも期待させてもらう。では」

草色のフェトゥーラを^{ひるがえ}翻し、ヘカリオス公は自分の陣へと去っていった。

婿殿、というのはグレシオスのことだった。

この戦が終わった後に、グレシオスはヘカリオス公の娘ディフォネと結婚することが決まっていたからである。

どう答えて良いものか迷って叔父に目を向けると、叔父は無言で両眉を上げて見せた。

さて……困ったものだな。

言葉にすれば、そんな気持ちだったのかもしれない。

エウスタスとグレシオスが^{ひき}率いてきたのは、デルギリアの兵達だけではない。

イオルテス地方を抜けてくる間、途中で集められる兵は出来るだけ加えるようにしながら、王都まで駆けてきた。

東部イオルテス地方は高原地域であり、東はそのままトゥライ高原へと^{つな}繋がっている土地である。

デルギリアはその中でも東北部にある。東のトゥライだけでなく、北のヌーガも警戒しなくてはならない。王国の^{まも}護りとして重要な土地なのだ。

その兵は^{きょうかん}強悍であり、王国でも最強の騎兵部隊を有する地域なのである。

馬疾^{はや}きイオルテスと人は言う。

それはまさに、デルギリアにこそ当て嵌^はまる言葉である。

セウェルス氏族の騎兵部隊は、その強力さを周辺諸国に知られているのだ。

戦^{いくさ}はクレオラの想定どおりに進んだようである。

レメンテムの重装歩兵の激突を受けたのはヴァルゲン人傭兵部隊と、ヴィルモーシュなどの同盟の王達だった。

ヴィルモーシュ以外の二人の王も、やはり損得勘定であちらに付いたり、こちらに付いたりという節操のない連中であつたから、最前線に配置するにあつても、誰からも同情の声は出なかった。

ただし彼らの戦闘力に対する疑問の声は出た。

だがそれも問題なからうということで落ちついた。

何しろ後ろに我が軍、前にはレメンテム帝国軍という状況なのだ。

戦闘が始まれば、必死に戦う他はない。

もし彼らが総崩れになっても、レメンテムの軍列が巻き添えを食うことは間違いない。

その時はそこを、後方に控えた我が軍が襲いかかる。

レメンテム軍はその激突力を減殺^{げんさい}されているはず

である。ヴァルゲン人部隊との戦闘で、鉄壁の戦列を乱しているからである。

対して我が軍は無傷である。あとは味方の騎兵部隊が、敵軍後方に回り込むまでの時間を持ち堪えればよい。

または期待通りにヴァルゲン人達が必死に戦って、レメンテム軍を食い止める事に成功すれば、通常どおりに策を運用するだけである。

どこまでもヴァルゲンの兵を使い捨てにすることで成立してるこの作戦は、レメンテム帝国やヴァルゲンの王達から見れば悪辣あくらつと言う他ないものであり、少し考えればその仕組みが誰にでも判るものだった。

未だにグレシオスが不思議なのは、クレオラが一体どうやってヴァルゲンの王達を納得させたのかという事である。

あの内容では、作戦の説明をする過程で文句が出ない筈はずは無いのだが……。

ともあれ作戦は決まった。

そしていずれにしても騎兵戦の決着が、この戦全体の趨勢すうせいを決めるというわけだった。

正面を守備するヴァルゲン人達に対して、クレオラが下した指示は単純であった。

「各自決して前進してはならぬ。持ち場を離れず、

その場で戦うべし」

これだけである。

一方味方のローゼンディア重装歩兵には、それを指揮する諸侯に詳細な注意を与え、王の本陣からクレオラ自身が全軍を掌握^{しょうあく}する体勢になっていた。

何せ戦は生き物であるから、始まってみなければ判らない。

その都度^{つど}その都度、臨機応変に情勢を判断して指示を下す敏捷性^{びんしょうせい}、いわば反射神経と、何より天与^{てんよ}の勘とでも言うべきものが、将にとって必須の条件なのである。

そしてこの点においてもクレオラは傑出していた。

ヴァルゲン人達の戦列が、ぎりぎりで崩れ始めるかどうかというタイミングで、軍を動かしたらしい。

実際に見たわけではないが、そういう話だった。

その頃グレシオス達の騎兵部隊は、レメンテムの騎兵部隊と激突していたのだ。

喊声^{かんせい}こそ耳に聞こえ、遠目にも大軍の激突が見えてはいたが、我が軍は敵の正面突破を許さなかった。柔軟に陣形を変化させ、レメンテム軍を包みこむようにしつつあった。

後に聞いた話では、この時突出してきていたのは

レメンテムの将軍、バロネが率いる歩兵部隊であったという。

当然、バロネはこの戦で戦死した。

グレシオス達イオルテスの騎兵部隊が相手にしたのは、将軍ウーベルト率いる騎兵部隊であった。

敵騎兵部隊を目にしたときの興奮は忘れない。

レメンテム騎兵は真紅の飾兜^{かざりかぶと かぶ}を被っている。おかしな話ではあるが、それが花のようだと思った。

土煙の向こうに赤い花が幾つも咲いていた。鉄の棘^{とげ}で身を鎧^{よろ}った赤い花だった。

対してグレシオスの周囲は青の軍装であった。

デルギリアの戦士達はイスターリスの末裔である。ワタリガラスの徽章^{きしょう}を身に着け、青いフェトウーラを羽織^{は お}っていた。

視線の先には赤花の如き人馬の列、耳を聳^{ろう}する人馬^{とどろ}の轟き。

味方から、古代ヴォルグヘル族の雄叫び^{おたけ}があがった。

グレシオスも叫んだ。天を駆けているような心地がした。

——飛び越える神よ。

——忿怒^{ふんぬ}せるイスターリスよ。

槍の届く距離まで来たとき、一斉に味方が槍を投じた。レメンテム騎兵の上へと、雨のように槍が

降った。

^{とうてき}投擲直後に^{ばっとう}抜刀した。そして、激突した。

土煙の中、盾の裂ける音、鉄と肉が断たれる音、怒号と絶叫とが^{ばてい}馬蹄の轟きに重なりあい、津波のごとく耳を打った。

——何も聞こえぬ。

いや、一つだけ聞こえる音があった。

己の心臓の鼓動だ。

その音だけは、確かに聞こえた。いや感じた。

そして心臓の音に耳を傾けると、グレシオスは不思議な静けさを体験した。

耳が壊れるほどの大音響である。静かさなどあるはずもない。

にもかかわらず、グレシオスは己の周囲に^{せいひつ}静謐さを感じた。

音はなく、血の臭いも感じなかった。ただ人馬の動きだけが、異様なほどにはっきりと目に入ってきた。

いや、音も臭いもあることは判っていた。ただそれが届いてこない。気にならない。

奇妙な感覚であった。

静かであった。

——極まった^{ごうおん}轟音は、^{せいおん}静穏さに等しい。

後になってそう思ったことを、憶えている。

爆発する音の本流の中、生と死とが、周囲至る所で炸裂^{さくれつ}し、人の命が火の粉のように燃えて散った。次々と目の前に現れる騎馬武者を、切っては捨て、切っては捨てた。

湯のように熱い血が左右から体を打ったが、それよりなお己の体は熱く、熱せられた石のように感じた。

こうなると、後はひたすら目の前の敵兵を殺し続けるのみである。指揮など考えている余裕はなかった。

グレシオスが戦場における指揮や、状況の把握などの能力を磨く契機^{けいき}になったのはこの戦であるが、それは叔父エウスタス^{うしな}を喪ったからである。

そのことが将としての成長^{うなが}を促したとはいえ、グレシオスにとっては大きすぎる代償だった。

戦いが始まってどれほど経ったのか。

ようやくレメンテムの騎兵部隊を打ち破り、敵重装歩兵の背後へと、大きく回り込んだ頃の事だったと思う。

ヴァルゲン人の傭兵部隊を指揮するため、正面に立っていたヘカリオス公デュレスの部隊が敵に呑み込まれそうになっていた。

クレオラの包囲陣が完成し、敵は大混乱であったが、味方とて、落ちついていたとは言えなかった。

そもそも戦場では大まかな味方の動きを目で追って、後は現場の勘で動くものである。あらかじめ作戦があろうが無かろうがこれは変わらない。

ヘカリオス公の周辺では、恐慌をきたして総崩れになる敵と、我先に襲いかかろうとするヴァルゲン人達の騎兵部隊とが入り乱れていた。

時折、敵兵の一角が吹き飛ぶように崩れるのが目に入った。

肉と甲冑を碎き散らしながら敵兵が宙を舞う。

——あれが音に聞こえし鉄弓か。

ダルフォイヘーレイ
狩猟神の末裔に伝わる聖遺物。則ち伝説の武具である。

聞きしに勝る威力であったが、如何せん戦場が乱れすぎている。ヘカリオス公の周囲はひどい乱戦状態であった。

無論ヘカリオス公も、領地から連れてきた重代の家臣達に守られてはいた。

だがその騎兵部隊にしても、高速で駆け抜けての戦闘を重ねてきたためだろう、かなり厚みが薄くなっているようだった。

グレシオスの周囲にしても多くの兵が随っていたわけではない。部隊は大きく伸びていた。

そもそも包囲陣を作るように兵を動かしているのだから、厚みが減るのは当然でもあった。

その上でヘカリオス公は、より統制の利かぬ兵達を指揮していたのだから、自身が突出しすぎたのかもしれない。

嵐神の^{せんぶ}戦斧が遠くに見えた。

あれは^{らいてい}雷霆を表す、^{ドヌスヘーレイ}嵐神の末裔の旗印。

騎兵と戦車を率いるエンデュオス公は、ヘカリオス公の救援に向かおうとしているようだった。

だが遠い。グレシオスの位置よりもさらにヘカリオス公の軍勢からは離れていた。

貴族たる者、戦場で先頭に立つのは当然である。

しかも頂点に位置する七宗家の者が、兵の後ろに隠れるなどあってはならぬ事である。

それゆえ叔父もグレシオスも、常に先頭を駆けた。名誉ある貴族ならば当たり前の行為である。

ヘカリオス公もまた名誉ある者だったのだろう。その結果窮地に陥ったのだが、それも運命、あとは力の限り戦うのみである。

公の周囲を固める家臣達も死を覚悟していたのであろう、^{すさま}凄じい戦い振りであった。

遠目にそれが見えた。どれほど見ていたのか。それは分からない。

近くに騎馬が寄せられる気配でそちらを向くと、返り血を全身に浴びた叔父が、肩の周りから湯気を立たせていた。

「ヘカリオス公が……」

「分かっている」

叔父は短く答えると、持っていた槍を捨てた。折れていた。すぐに近くの騎兵が駆け寄ってきて、新しい槍を差し出した。

「花嫁の父親が不在というのは恰好かっこうがつくまい」

兵から新たな槍を受け取りながら、叔父はグレシオスに言った。

「兵の指揮は任せた。この包囲を崩さぬようにせよ。余計な考えは起こさず、ゼメレス公の指示を守る事だけを考えよ」

「無茶です」

「やってみねば判るまいよ」

いつもどおり頼もしげな様子だった。だからグレシオスは強く制止することができなかった。

危険なことは分かっていた。両軍が入り乱れ、激烈な殺し合いが展開されていた。叫おめき声が雷雲のように響く中、土煙うずが渦を成していた。

ヘカリオス公の部隊は渦の中心に位置していた。取り巻くレメンテムの層は厚く、それを突き抜けていくだけでも容易ではないのだった。

「心配するな。必ずヘカリオス公はお救いする」

いつものようにグレシオスの肩に手を置き、叔父は僅わずかに微笑ほほえんだ。

いい笑顔だった。

制止すべき言葉は、それで何も言えなくなってしまった。

「……御武運を」

グレシオスの^{つぶや}呟きに、叔父は無言で^{うなず}頷いた。力強い青い瞳。決死の覚悟を固めていたに相違無い。

そうして叔父は僅かな騎兵だけを連れ、死地^{おもむ}に赴いていったのだ。

返り血に^{いろど}彩られた青いフェトゥーラを^{ひるがえ}翻し――。

誇らしく^{かか}槍を掲げ――。

つき^{したが}随う勇士たちもまた同じように――。

それが叔父エウスタスの生きた、最後の姿だった。

耳の奥に^{よみが}甦える古代ヴォルグヘル^{おたけ}の戦士の雄叫び。

鼻を突き刺す血と土の臭い。

嫌な予感に胸押しつぶされそうになりながら、見送った遠い記憶。

＊

思いもかけず叔父の思い出が蘇^{よみがえ}ってきて、グレシオスは胸が苦しくなった。

大盾に載せられて戻ってきた叔父の姿が思い出された。

辛かった。身を引き裂かれるほどに。

——叔父上、あなたは偉大でした。ヴェルデスの血を引く勇者として、その名に恥じぬお方でした。私など、叔父上の足元にも及びませぬ……。

偉大な叔父はきっと、父祖たちの坐^{いま}す勇者の館で、他の御先祖方と酒でも酌^くみ交わしておられるだろう。

あの偉大なエウスタス・クティス・セウエルスが、勇者の館に席を与えられぬことなど、あるはずがないのである。

それにしても時の流れは……。

不可思議としか言い様がない。

あれからもう四十年以上が経っていると思うと、何だか夢のようでもある。

目の前の飾兜は磨き上げられ、細かな傷が表面にはついているものの、あの時とまるで変わらぬようにも見える。

叔父からグレシオスへ。

主人は変わっても、飾兜は立派にその役目を果たし、グレシオスの生命^{いのち}を守り続けてくれたのであ

る。

そう言えばゴロドと戦った時に、兜の右上を攻撃が掠めたことがある。

触れるか触れぬかの微妙な一撃で、実際には当たっていなかったのだろうが、あの時の凄じい迫力には肝が冷えた。法外な一撃であった。

もし掠りでもしていたら、首が千切れていたであろう。

棚の上に燈りを置き、グレシオスは飾兜を取り上げた。

迷っていた。

これから村の獵師が来る。その者に偵察を命じなければならぬ。

命懸けの役目である。

ジャグルの部隊までの距離を考えると、既に街道沿いには見張りが立っているかもしれない。

無論、ゾエ村が滅んだことを前提としての話である。

嫌な想定ではあるが、この考えが当たっている公算は大きいだろう。

何よりそう考えぬと、今考えている話そのものが成り立たぬのだから仕方ない。

ジャグルの部隊がナウロス村に到達するのは、おそらく明日の夕方以降。となると偵察役は、移動中

のジャグル達に出会^{でくわ}す危険性すらある。

臨機応変に行動できるよう訓練された兵でもない、一介の猟師には、荷が重すぎる仕事である。

ゴロドが居れば村を捨てる。居なければ籠城戦。

この決定は動かない。そして、一刻も早くどちらかに決めなければならない。

——叔父上、私はいったいどうするべきなのでしょうか……。

もはや己の年齢は叔父の享年を越えている。

だが今でもグレシオスは、あの偉大な叔父に並ぶ事ができたとは思えない。

他人が何と言うか、どう思うかは問題ではなかった。

グレシオス自身が、今でも叔父の存在を感じ続けている。そのことが重要だった。

「迷っておるのか」

背後から声をかけられた。振り向くと、武器庫の入口に誰か立っていた。

灯りを棚に置いてある所^{せい}為か光量が足りぬ。入口の人影が誰であるか判じがたい。

今、この館に居る者は分かっている。タデアスがこんな口調で話しかけてくるわけではない。

つまり声をかけたのが何者であるのかは分かっている。

そのはずなのに何故かグレシオスには、少し離れて立っている背の高い影が、先程まで客間で向きあっていたあの男だとは、どうしても思えなかった。

「イスターリスの裔^{すえ}たるレオンティウスの息子、堅^{けん}忍不拔^{にんふばつ}の勇者グレシオスよ——」

影は静かに呼びかけてきた。

力強い低い声だった。優しさと励ましが籠^{こも}っていた。

何より、聞き覚えのある声だった。

——叔父上!?

グレシオスは総毛^{そうもう}だった。馬鹿な。そんなはずはない。

だが今、耳にしたのは叔父の声だった。あの懐かしい声。暖かく、力強く励ます叔父の声だった。

グレシオスが挫^{くじ}けそうになると、叔父は良く言ったものだった。

「イスターリスの裔^{すえ}たるレオンティウスの息子、堅^{けん}忍不拔^{にんふばつ}の勇者グレシオスよ——」

しっかりせよと。己がいかなる血を持っているのか、どれほどの名誉がそこに籠められてあるのか理解せよと。

身に余る言葉だと思った。

だからそのたびに、グレシオスは全身に力を籠め、運命に立ち向かってきた。

戦場での恐怖も疲労も、歯を食いしばって耐えてきた。

己は英雄ヴェルデスの血に連なる者、戦神イスターリスの末裔なのだと。

そのことを決して辱^{はずかし}めてはならぬと。

だからそれを辛いと思っても、投げ出そうと思ったことは一度もない。

厳しい道であったのかも知れぬ。

それでも、そこには確かに栄光があった。光輝く栄光が。

あの偉大な輝きに身を捧^{ささ}げることは、貴族にとって最高の行為であり、名誉であり、つまるところ己の存在する価値そのものなのだ。

だからそれを実行してきた。後悔はない。

「偵察を出してはならぬ。その者は帰って来られぬだろう。人の命を粗末に使うような真似をしてはならぬ」

影は叔父の声で語り続けた。そう、叔父ならそのように言うだろう。

あの人はずっと言っていた。

「我等は民の盾ぞ」

民によって貴族は養われているのだと。人々が額に汗して働いた成果を、我々は受けているのだと。

領内の人々が貴族の食べる物を作り、住むべき館を建て、着るべき衣を織り上げる。

だから貴族は民のために死ぬのだと。戦えぬ者達のために戦うのだと。

叔父は常にそう言ってグレシオスを教育した。

民に命を返す。

それが貴族の唯一の、そして絶対の責務である
と。

叔父上……。

グレシオスは口に出そうとした。その言葉を。

だが影が動き、こちらへと歩み寄ってきた。すぐにぼんやりとした^{あか}灯りの中に、あの男の姿が浮かび上がった。

それを見て急に緊張が抜けた。張り詰めていた何かが^{むしろう}霧消した。

やはり……そんな納得感と共に、子供っぽい幻滅を感じた。

グレシオスは飾兜を戻してから、男に向きあった。

「眠らずに出発するつもりか？」

「いや、ちゃんと眠るさ」

男は広い肩を^{すく}竦めた。

「偵察は出すな。無駄死にをさせるだけぞ」

「ではどうしろと言うのだ？」

「儂がギルテにまで駆けて急を報^{しら}せよう」

グレシオスは耳を疑った。

「……何だと？」

「ここからパラケウス街道を目指すなどという無茶は止めるのだ。多くの村人が途中で死ぬであろう。それよりもこの村で踏み堪^{こた}えよ。儂が必ずギルテの援兵をここに送らせよう」

無茶な話だった。

ブレイオンの往還をギルテまで疾駆^{しっく}するならば、途中でゾエ村を通過せねばならない。

つまりジャグルどもの中を、突っ切って行かなければならないのである。

「無茶だ」

「やってみねば判るまい」

「死ぬぞ」

「やってみねば判るまい」

男は笑って答えた。何故笑えるのか。グレシオスには理解できなかった。

「……ものを多く知ってはいても、考えの方は回らぬようだな」

グレシオスは皮肉を言った。男はさらに笑みを深くした。

「やってみねば判るまい」

三度そう言った。顔全体で作る笑顔は、どこか子供のようにさえある。

としは年端もいかぬ赤子のような笑顔だと思った。どうしてそんな風に笑えるのか。

グレシオスの胸の裡に、畏れにも似た思いが細波のように起こってきた。

「必ずこの村にギルテより援軍を来させよう。それでもお主は戦わぬと言うのか？」

笑顔を吹き消し、男はグレシオスに真剣な眼差しを向けた。

「儂には、村人を守らねばならぬ責任がある」

「お主は本当に村人の事を考えておるのか？」

「何？」

グレシオスは気色ばんだ。これは聞き捨てならない言葉であった。

「ひょっとしてゴロドが、恐ろしいだけなのではないかと思ってな」

「貴様……もう一度言ってみよ」

グレシオスは男を睨みつけた。隠退したとはいえ、グレシオスは歴戦の勇士である。

ひとたび怒れば、その威圧感には凄じいものがある。

屈強な兵士でさえ怯むであろう。

そんなグレシオスの怒りの眼差しを向けられて、しかし、男はまったく気にしていない様子であった。

^{たんりよく}胆力があるのだとしたら、並の胆力ではない。

だが今までの男の様子から考えると、これは胆力があるというよりも、むしろ状況を解する感性に欠けているのかもしれない。

……ならば^{からだ}身体に教え込んでやるまでよ。

王国貴族の^{たしな}嗜みとして、男子は組打術に習熟していることが多い。

戦場での必須技術と言えるその組打術は、ローゼンディアではグラティオンと呼ばれる。

グレシオスも子供の頃からグラティオンを教え込まれてきており、その腕にはいささかの自信があった。

男もまたグラティオンに習熟している可能性は大いにあったが、その時はその時である。

どのみちお互い、多少は痛い目をみることに違いはないのだ。

グレシオスは全身に^{きはく}気魄を^{みなぎ}漲らせた。戦場を踏んだ経験のある者ならば、これで危険を察知するはずだった。

グレシオスがまさに動き出そうとする機を^{とら}捉えて、

「明日、お主の指示に従って村を捨てる者達はどうか考えているかな？」

と、男は^{つぶや}呟いた。

「どう、とは？」

^{きせん}機先を制される恰好になり、グレシオスも呟き返した。

口調に表れないように注意したが、内心は驚いていた。やはりこの男はただ者ではない。

グレシオスの胸の内を読み、それを踏まえて言葉を発しているのだ。

となれば――。

この男は事態を把握している事になる。

その上で、真剣に何かを伝えようとしているのだ。

この男なりにではあるが。しかもその遣り方は礼儀に^{のっと}律ったものとは言いがたい。

だが遣り方は褒められたものではないにせよ、今、グレシオスは男の話を聞かねばならないと感じた。

理屈ではない。直感的にそう思ったのだ。

「助かるために村を捨てよ、と命じられた者達は、逃避行の厳しさを了見はせぬだろう。己が死することになるかもしれぬ、とは考えないであろうよ。だが間違いなく多くの者が死ぬ。お主はそれで良いの

か？」

「それでも全滅するよりはマシではないか」

「……分かってはおらぬようだな」

男は苦笑して首を振った。どこか困ったような笑い方で、グレシオスは、やはりこの男は自分の事を、己より齡若い相手として見ているのだと思った。

「お主に村を捨てて逃げるように命じられれば、村の者はこう思うだろう。『御領主様に従えば、皆助かる』とな。だがそうはならん。体力に劣る者達は、おそらく生きてパラケウス街道には辿り着けまい」

「……それは説明をする。明日、儂自身がな」

嫌な役目ではあるが、事情を正確に説明して納得してもらわなければならない。

その上で村人の希望を聞くしかあるまい。

だがもし村人が、「村を捨てずに戦う」と言った場合には、どうするべきか？

村人を指揮して無謀な戦いを挑むべきか？

ゴロドがいれば全滅は間違いないだろう。

それを話してなお、村を離れるのを拒む^{こぼ}とは思えぬが、もし村人達が一戦構える事を主張するならば、己は如何^{どう}するべきであろうか……。

「違う。お主は分かってはおらぬ」

男は首を振った。

「だからどう違うというのだ？」

焦^じれてきたのでグレシオスは急^せかした。

「村人はお主の事を信じているであろう。お主に従えば、必ず助かると思っているはずだ。その村人に対して、お主は、出^で来^きの悪い木の実を、篩^{ふるい}にかけるような真似をするとやっているのだぞ」

男の言葉に、グレシオスは少なからず衝撃を受けた。

村を捨てるというグレシオスの判断の、本質を突いていたからだ。

「お主は戦場を駆け、長く戦士として生きてきたのであろう。だが村人はそうではない。戦場の理屈で彼らの命を、生活を考えるはならぬ。彼らは戦士ではないのだ。己の生死に、仲間の生死に目算を付けるなどということをして、するわけがないであろう？ 彼らはお主を信じるだろう。それはお主に従えば必ず生き延びられると信じるからよ。その者達の気持ちを、お主は本当に解っているのか？」

男の口調は決して居丈高^{いたけだか}なものではなかった。先程のように挑発する風も無かった。

ただ静かにグレシオスに語りかけていた。

グレシオスが理解できるように、根気よく説明を重ねてもくれた。

その事を理解した途端、^{のうずい}脳髓が^{しび}痺れるほどの^{しゅうち}羞恥を感じた。

何か言葉を発しようとしたが、口から漏れるのは空気だけだった。

己の^{たんりよ}短慮に恐怖すら感じた。

「村人の総意が村を捨てて逃げ出すということならば構うまい。そうすれば良い。まずそのように考えるであろうな。だがそれは短見であると僕は思う。武器を持った者達から逃げねばならぬという事の意味を、村人が理解できておるかどうかは疑問であろうよ」

そうなのだ。

単純にして明快な事実がある。

——村人達は戦場を知らぬ。

だから彼らに判断を求めても、そのことを加えて考えなければならない。

追跡を振り切って逃げるということの難しさなど、彼らは考えた事もないであろう。

そんな彼らが逃避行を選択したとして、その覚悟を信用するわけにはいくまい。

^{たと}喩えるならば、それは子供に対して、難しい事柄の^{りひ}理非判断を求めるようなものだ。

相手の意思を尊重するようであり、その実、現実に対して目を^{つむ}瞑ることが隠れている。

無論、常に己の判断が正しい、己が優先するとい
うつもりは更々さらさら無い。

だが、自分は騎士である。長い年月戦場を駆け続
けてきた戦士である。

こと戦いに関してはいささか誇るものがあるし、
その事を恥とは思わない。

自分は一度たりとも名誉を裏切り、神の道に背を
向けた事はないと言うことができる。

うぬぼ
自惚れではない。

戦場は聖域である。その場においては一切の虚飾
は剥ぎ取られる運命にある。戦場では真実以外は存
在できぬのだ。

生か死か。

極限にまで単純化された真理のみが、存在する世
界なのだ。

決して美しい世界ではない。

逃れようのない真実の光が、全てを照らし出すの
が戦場である。

その中で、自分は幾いくばくかのことを学んできたと
は思う。

ならばそれを活かすべきなのだ。

人には誰もに、納得して生きるべき生がある。

刀槍を持ってぬ者達のそれを守るのが己の務めだ。

領民のそれを守ってやるのが貴族たる己の務め

だ。

そしてそのためには、己の知恵と経験は、村人達の希望する範囲内で活かされなければならないのだ。

「イスターリスの裔たるレオンティウスの息子、堅忍不拔の勇者グレシオスよ――」

言い聞かせるように、男はそう口にした。

先程、叔父の呼びかけと錯覚を起こした言い回しである。

これは古風な呼びかけの言葉であり、名家の者にあっては作法の一つとして、今でも使用されている決り文句なのだ。

だからこの男が使用したところで問題はない。

無礼ではない。むしろ礼にかな適っている。

ただしどちらかと言うと、若年者に対して使用される事が多い言い回しであるから、そこは微妙ではある。

「大切なのは判断を誤らぬことだ。そのためには心を澄ませて状況を見定めねばならぬだろう。不安に眼を曇らせてはならぬぞ。儂は何も必ず戦うべしと言うつもりはない。村人達が戦いたくないというなら仕方あるまい。勧められる事ではないが、村を捨てるのもよかろう。どちらにせよ必要以上に臆病になることはないと言うておるだけよ」

「お主の口振りでは、むしろ一戦構える事を主張しておるようだが」

「確かにな。そう聞こえるかも知れぬ。何故ならゴロドがおるとしても一匹であろうからな」

グレシオスは不思議に思った。何故、この男はそう思うのであろう？

今まで正しい事を言ってきたのだから、ゴロドは一匹だという判断にも、信が置けるとは思う。

だが一体何故？

「不思議か？」

男は片目を^{つむ}瞑って見せた。

「二匹のゴロドとジャグル達が共に行動するとなれば、かなりの大部隊になるからよ」

「何故そう思う？」

「^{いにしえ}古の伝承を思い出せ。奴らは統制に欠ける。^{ほう}抛っておくと共食いを始めるくらいであるからな。強力な指導者が率いているのでない限りは、大規模で動く事などまずあり得ん。そして高々三十や五十やのジャグル達だけでは、二匹のゴロドを統制するのは無理よ」

なるほど。

確かに^{じむし}地虫どもは^{まと}纏まりに欠ける連中ではある。グレシオスは父祖達のように恐るべき大軍を相手にしたことこそないが、それでもジャグルの小集団を

退治たことは、幾度もあった。

連中は本能だけで行動しているようなところがある。獣に邪悪な知恵を加えたような存在なのだ。それでも充分危険ではあるが。

「あの若者が見ていないだけで、後続が控えていたら？」

見えない敵という可能性はある。

それについての男の意見を聞いておきたかった。

「それはおそらくないであろう。もしそんな部隊がいるとすれば、疾^とうに発見されて、ギルテに連絡が行っておることだろうさ」

グレシオスも同じ考えであった。

ならば――。

「ゴロドがいるとしても一匹、ということか……」

「そういうことだな」

廊下を足音が近づいてきた。タデアスであろう。

「大殿、村の獵師が来ております」

グレシオスはタデアスの顔を見た。タデアスは燈りを持っていたので、その緊張した表情をよく見ることができた。

男もまたグレシオスをじっと見ていた。

「……………獵師はそのまま帰してよい。儂の考え違いであった」

タデアスは怪訝^{けげん}な顔をしたが、すぐに頷^{うなず}いた。

「かしこまりました。そのように伝えて帰します」

タデアスが玄関に向かって去ってしまうと、グレシオスは男に目を向けた。

「本当にギルテまで駆けるつもりか？」

「お主もくどいな」

男は呆れたように眉を寄せた。

「儂は三度同じことを答えたぞ。この上さらに同じ言葉を言わせるつもりか？」

「武器、鎧はあるのか？」

「無論」

グレシオスは多少安堵した。馬があるのは当然である。聞くまでもない。

武器はともかく鎧が用意されてあるのは心強い。

「替え馬は足りているのか？」

「それも問題ない」

今の状況でギルテまで行くなら五頭は欲しい。しかしそれは贅沢というものだろう。

それにしても、この男はどことも知れぬ所から来ているようでいて、どうも近在から来ているようにしか思えない。

旅の者と考える方が理に^{かな}適ってはいるのだが、グレシオスには男がこの近くに暮らしているような気がするのである。何故だか解らぬがそうした気がするのである。

おそらくは貴族であろうから何頭かの馬は飼育しているであろう。

だが男の年齢などから考えて、おそらく自分と同じく隠居であろうし、替え馬が足りているかどうかは心許ない。

それにグreshiosの知る限りではこの近辺で馬を放して飼えるような場所や、それを有する貴族はいない筈だ。

セウェルス宗家の家長であった自分の耳に、この男やその屋敷？ などの話が入らないとなれば、これはもう理由は一つしかない。隠れ潜んで暮らしているのであろう。

要するにこの男は世捨人の類いである可能性が高いのである。

「お主は一体どこに馬を置いているのだ？」

男はグreshiosの問いには答えず、にやりと笑っただけであった。

実に不敵な笑い方である。男の笑みには凄みがあるだけでなく、稚気のようなものが感じられた。

危険を喜ぶ者の笑顔である。それも演技ではない。目の前の危難が、戦いが心底楽しみでしようがない。その本心がぞろりと貌を見せる、そういう笑顔なのである。

グreshiosは知っている。一族の戦士団にはこう

いう顔をする者が多い。

古きヴォルグヘルの戦士の貌だ。こういう顔を見せる男は危ない。大概は恐ろしい実力を持っているからだ。

騎士団にはこういう男はいない。もっと毛並みのいい戦士が揃うし、騎士団とはそうあるべきだ。

だが、本当の危機が訪れたとき、果たしてどちらの男が頼りになるだろうか。

無論グレシオスはどちらの肩も持つつもりはない。戦士の本当の実力は、顔一つで決まるようなものではないからだ。

——しかし……。

ジャグルの群を駆け抜けて突破するのは、かなりの難事であろうが、この男ならばやるかも知れぬ。できるかも知れぬ。

心の中で、もうこの男を頼りにしている気持ちがある。

それに気付いた途端、苦笑が浮かんできた。

「何がおかしい？」

「いや、おかしい事になってしまったものだと思うてな……」

「それで結局、どうするつもりなのだ？」

「明日、村人を集めて十分に説明をつくしてみよう。その上で村人の決めた方に、僕は従うつもり

だ」

グレシオスは棚上の燈りを取った。

「儂はこれで休む。お主も休め」

「そうしよう」

「初めてであるな」

ふと思いついて、グレシオスは口にした。

「何がだ？」

「お主がこの館に泊まる事がよ。馬は大丈夫なのか？」

「信用のおけるところに預けてある。明日の朝取りにいくから心配は要らん」

「そうか」

ならば問題はない。

さて、男を客間に案内せねばならぬが、これは本来ならばタデアスの役目である。

しかし今はタデアスを使いに出してしまっている。慣れぬ事ではあるがグレシオス自ら案内する他ない。

「寝室へ案内しよう。ついてくるがいい」

「明日は朝から忙しくなるな」

グレシオスの背後をついて歩きながら、男はそう呟いた。

「そうだな」

グレシオスは答えた。もちろん、明日の朝にゾエ

村からの急使が来るのが一番良い。

無事ジャグル達を撃退し、人手を求めてくる使者が現れてくれるのが一番良い。

——だがそうはならぬだろう。

グレシオスには、確信めいた強さでそう感じられるのだった。

第四章 射

戦いをするにせよしないにせよ、緊急時を控えた夜というのは久しぶりである。

興奮して眠れないのではないかという^{きぐ}危惧があったのだが、それはあたらなかった。

寢床に入ると、すぐに安らかな眠りがグレシオスを包みこんだのだ。

神の^{おんちよう}恩寵か、それとも^{いくさ}戦に対して、^{からだ}身体の方が自然と準備をしたものかは判らぬが、^{ありがた}有難いことではある。

目覚めも自然とやってきた。気持ちよく朝を迎えられた。

——最後の朝かも知れぬがな。

そんな事を考える。だがそこに自嘲の色はない。良い傾向だ。

心の中に『傾き』があるのは良くない。

上手くは言えぬが、戦場働きの中でグレシオスが確信したことである。

ゾエ村からの使者は現れなかった。

その事はたった一つの残酷な事実を、^{いやおう}否応なく突きつけてくる。

ゾエ村は全滅したのだ。昨晚使者に立ったあの若者を除いて。

次はこのナウロス村だ。うかうかしてはおれぬ。

すでに食事も軽く済ませてあった。

これから村の中心にある神殿にまで行き、集まっているであろう村人に、話をしに行くのだ。

男の姿は見えなかった。食事の後すぐに席を立ったから、おそらく馬を取りに行っているのである。

おおとの
「大殿」

タデアスが呼びに来た。

「村人は一人残らず集まっておるか？」

「はい。大殿のおお仰せの通りに」

グレシオスは腰を上げた。タデアスから厚手の上着を受け取って着込むと、二人で館を出た。

外はまだ心持ち薄暗かった。

そろそろ日の出が見られるかという時間である。

頬にあたる空気が冷たい。

昨夜の内に降った雪が積もっていた。

館の前に立って、白い息を吐きながらナウロス村の全景を見渡した。

雪が光を映す所せい為か、それともたか昂ぶった精神が五感を鋭くしているのかは分からないが、グレシオスの目には村の様子がはっきりと入ってきた。

戦場になる場合、地形や建物をどう使うか、どう考えるかということが重要になってくる。

今までは何も考えずに見てきた景色である。

^{のどか}長閑な小村の風景が、まさかこういう意味を持って己に迫ってくるとは、グレシオスは考えた事がなかった。

雪を踏みながら坂路を下りた。

途中、自然とあちこちに目がいつてしまう。

戦場にするとすれば、どこをどう使うか、どこにどれだけ手を加えることができるかなどを考えてしまうのだ。

道の幅が気になる。傾斜の度合いが気になる。家と家の間隔が気になる。

普通の者からすれば、神経質なくらいの意識の向け方であるが、この程度の観察眼は戦士の常識である。

だから気疲れするという事もない。この程度で神経をささくれ立てるような者は、早々と戦闘で命を落とすか、戦場から身を退いてしまう者である。

村の広場に着くまでの間、グレシオスはそうやってあちこちに目を向けていたが、肩に力が入ることなく、ごく自然に状況を心に刻み込んでいった。

だが何よりも重要なのは、戦いになった場合、馬が使えぬということである。

グレシオスもタデアスも騎士であるから、本来、騎馬を得意としている。だがナウロス村で戦闘に使える馬は三頭しかいない。

残りの馬は戦用の訓練を受けたことのない、ただの馬である。

となればこちらが用意できる騎兵は三人ということになる。数が足りなすぎる。

しかも村内で戦わなければならない。動きが制限される。

騎兵は防禦ぼうぎょに劣る。攻撃重視の突撃兵团だからだ。たった三人では、すぐに討ち取られてしまう虞おそれがある。

ゆえに戦う場合には、徒歩かちの戦いになる。その方が村人も動きやすかろうが、問題は敵にイゴールが居た場合である。

昨夜受けた報告ではイゴールは居ないとのことだったが、まだ判らない。

安心は禁物だった。

村人が集まっている神殿は無論、ヴァリア教の神殿である。

小村であるから豪華とは言えないが、確りしっかした造りである。大きさも申し分ない。

イオルテス地方にしては珍しく、全て木材による建築であるが、それは近くにテラモン大森林がある

ためである。

デルギリアの北西部地域は、ほぼ全域が広大なテラモン森林に接しているため、建築材としては石を選択するよりも、木を選ぶ方が自然なのである。

イオルテス地方は大体において、ただ広大な高原が広がっているだけであるから、これは恵まれていると言える。

神殿には王都から派遣されてきたメグレイスという神官が居て、村人に聖言を伝え、正しい道を教えている。

彼を助けるのはアルテアという名の神官と、モイラスという名の神官である。

彼らの正確な年齢は判らぬが、グレシオスが接した感じでは、メグレイスは三十代半ばと思え、アルテアとモイラスは二十を超えたかどうかというところであろう。

メグレイスは長神官である。小さくとも立派に一つの神殿であるから、当然のことではある。

たった三人の小さな所帯ではあるが、彼らはよく勤めていると思う。

神殿内部、祭壇の中心には至高のヴァリアを、そしてイスターリスとメーサーとが併祀^{へいし}されてある。

ここはデルギリアであるから、イスターリス信仰は篤^{あつ}い。メグレイスもイスターリス神殿に属する神

官である。

その^{ため}為か、メグレイスは屈強な肉体を有している。その力を示したことこそないが、グレシオスには判る。体つきや身のこなしなどからも、戦士としての力量が^{うかが}窺えるのだ。

一方メグレイスを^{ほさ}輔佐する二人はと言うと、アルテアはデルギリアの出身ではあるが、女性であり、王都で学問を積んだ人間である。弓馬の術に優れているとは思えない。

モイラスも同じく王都で学問を学んだ者であるが、彼は南部沿岸地方の人間であり、今までに聞いた話や接した印象からすると、およそ戦闘とは縁のない^{たぐい}類の人種である。

神殿の前には広場があり、坂の途中からも集まっている人々を見ることができた。

^{ざわ}騒ついている。

こんなに朝早くから招集をかけられれば当然であろう。

広場の入口にはメグレイスが迎えに出て来ていた。彼はグレシオスには深い尊敬の念を抱いている様子であり、グレシオスに接する態度にはいつも恐縮しているというか、どこか己を恥じるような気配を^{にじ}滲ませているのだった。

なんとなく、グレシオスはこの屈強な神官が苦手

であった。

「大殿にはごきげんおよろ機嫌御宜しゅう」

「うむ。長神官殿もな」

「タデアス殿、おはようございます」

「はい。おはようございます長神官様」

簡単に挨拶を返すと、グレシオスは広場に入った。

だん そば壇の傍にはヨルスが立っており、アルテアとモイラスは村人の間を歩き回っていた。

特にモイラスはすぐに目についた。くせ きんかつし癖の強い金褐色のよく巻き毛が、長身とあいま相俟ってすご凄く目立つのである。

「皆静かにせよ。これからギルテの大殿が大切なお話をなさる！」

ヨルスが大きな声でそう呼びかけると、ささや囁き交わっていた村人達も口を閉じ、壇上のグレシオスを注視した。

「皆、良く聞いてもらいたい——」

昨夜ヨルスに説明をしたとき以上に丁寧に、言葉を選んで説明をした。

ジャグルの群が迫っていること。その中にはゴロドが含まれているかも知れぬこと。

選択肢は二つあること。村を捨てて逃げるか、それとも踏み止まって戦うか。

村を捨てる場合、パラケウス街道に出るまでに、かなりの犠牲者が出るだろうということ。まず老人病人、幼児は命の危険が極めて大きいだろうこと。さらに街道に出ても、まだ助かるとは言い切れぬことまで詳しく説明をした。

戦う場合には犠牲者が出るのみならず、敗れば間違いなく全滅するということ。敵にゴロドがいる場合、勝利を得るのが極めて難しいであろうということも正直に説明した。

話し終えて広場を見渡すと、誰もが暗い顔をしていた。当然だと思った。

「……すまぬが時間がない。長く話し合うことはできぬのだ。できるだけ早く決めて欲しい。どちらの道を選ぶにせよ、^{わし}儂はお前達を助けたいと思っておる」

広場はしんと静まり返っていた。

質問をする者は無かった。

事態の重さを理解しきれていないのか、それとも深く理解しているかのどちらかであろうが、後者であるとグレシオスは思うことにした。

「村長、話が^{まと}纏まったら呼びに来てくれ」

壇を下りると、グレシオスは神殿の中に入った。列柱室の中を歩いていると、後ろからタデアスとメグレイスがついて来た。

「大殿」

「前室で待つ。結論が出たら呼びに来てくれ」

「しかし、話が割れたら如何致いしますか？」

メグレイスが慌あわて気味に言った。

「ふむ」

グレシオスは足を止めた。少し考える。

普通ならあり得ぬ事である。戦場ではと言った方が良いいか。

纏すなわまりとは則ち激突力であり、意思の統一がその根源である。そこでは納得できるかどうかというよりも、納得するかどうかの方が重要になる。

だが、村人達がそこまで理解しているかどうかは怪しい。

「では村にとどまる者達の指揮は儂が務めよう。村を離れる者達には、自分たちでパラケウス街道を目指してもらうことにするしかあるまい」

「村が割れることをお認めになるのですか!？」

タデアスが驚いたような声を上げた。無理もない。

だがグレシオスとしては、たとえ一人であっても、己が望まない選択に従う者を出したくはなかった。

逃げたい者は逃げればよい。戦う者は残ればよいのだ。

それに戦う者達は、逃げる者達の時を稼ぐことにもなる。逃げる方はひたすらパラケウス街道を目指せばよいわけだから、軍略をめぐらす必要もない。

故にグレシオスは戦う側に残る。逃げる者達には自力で頑張ってもらおう。

酷^{こく}なようだが、両者の実情を考えた結果である。

「逃げたいという者を引き留めて戦わせるわけにはいくまい。我等の理屈で村人を縛るわけにもいかんだろう？」

「それは……そうではありますが」

タデアスは困ったような顔をした。気持ちは分かる。戦力の分散を危惧しているのだろう。

「とにかく全ての者になるべく早く、いずれか一つの道を必ず選ぶようにさせよ。無論、一つに纏まってくれた方が有難いかな」

「かしこまりました。そのように致します」

メグレイスは頷くと、小走りに広場へ戻っていった。

「ところであのお客人はどうしたのでしょうか？ 広場にも姿が見えませんでした……」

「ひょっとすると、もうギルテへ向かったのかも知れぬな」

タデアスはぎょっとした。無理もない。

「ジャグルどもがこちらに向かっているではありません

せぬか！ 鉢合わせになりますぞ！」

「そうだな」

だがあの男は言ったのだ。やってみねば判らない、と。

「なに、おそらくそろそろ姿を見せるであろうよ。儂等に一言もなく出発するとは思えぬ」

そこで人の気配を感じた。グレシオスは気配の方、神殿の奥を見つめた。

あの男が歩いてくる。ちょうど前室から出てきたところだった。

^{なぜ}何故神殿に居たのか。何となく不思議ではあった。

見ると見事な^{よろい}鎧を身に着けている。銀色に輝くりオプであった。

一見してグレシオスには、男のリオプが、並の職人に作れるような^{しな}科ではない事が判った。

簡単に手に入るような代物ではない。

実はこの男、かなり身分のある出なのではないだろうか？

その名を聞けば、すぐにそれと判るような名門の人間なのではないか？

知識の深さもさることながら、ぞんざいな口調や態度とは裏腹に、身ごなしには堂々とした威と、優雅さとがある。

男はグレシオスの前で足を止めた。

「よく眠れたか？」

「ぐっすりとな」

自分でも不思議ではあるが。

「馬は連れて来てあるのか？」

「もう広場に来ている頃だろうさ」

先程は馬の姿はなかった。

馬を引いてくるのを宿泊先の者に頼んだとしても、その者として広場に来ているはずである。

ところが馬の姿が見えなかった以上、グレシオスが会っていないだけで、この男は、従者を連れて旅をしているのかもしれない。

「して、神殿で何をしておったのだ？」

「何、神に祈りを捧^{ささ}げておったのよ」

男の返答はグレシオスの予期しないものであった。

「なんと……お主がそのようなことをするとはなあ」

「儂が神に祈るのはおかしいかね？」

「いや、そこまでは言わぬが……」

男が歩き出したので、グレシオスもついて歩いた。タデアスもついてくる。

「猶予はあるまい。急がねばならぬぞ」

その割にはあまり急いでいる風には見えない。

相変わらず、つかみどころがない男である。

広場に出ると、村人達の視線が一斉に向けられるのを感じた。

話はまだ纏まっておるまい。急かしに出てきたわけではないので、グレシオスは手を挙げて、村人達の緊張を軽く制した。

広場の入り口には三頭の馬が来ていた。いずれも大きく、毛色は青毛、黒鹿毛くろかげ、蘆毛あしげであったが、不思議なことに世話をする馬丁や従者の姿が見えない。

男が招くと青毛が神殿の入り口まで歩いてきた。よく馴れているようだった。

近くでよく見ると素晴しく立派である。イオルテスの青毛であり、並の馬よりも大きさがあった。

主人も大男であるから、釣り合いが取れているとも言えた。

馬は静かな、しかし力強い光を湛たたえた瞳で、グレシオスをじっと見ていた。

漆黒の馬体が光を吸い込むようであり、大きな力を内に秘めていることを窺うかがわせた。

「良い馬ですなあ」

タデアスが感嘆の呟つぶやきを漏らした。村人も何人が集まってきた。

何と言ってもデルギリアである。イオルテス地方

である。馬に興味がない人間の方が珍しい。

「替え馬は二頭か」

「なに、これで足りるさ」

グレシオスとしてはせめてあと一頭欲しかったが口には出さなかった。

「村に三頭の馬がある。それを連れて行ってくれ」

「ふむ……」

男は少し考えるような目をした。

「では一頭だけ借り受けよう」

「それでは足りぬだろう」

「いや、何とかなるさ。それに何が起こるか判らぬ。村にも軍馬が二頭は残っていた方が良い」

そう言われるとグレシオスとしては返す言葉がない。訓練済みの馬は三頭、それで全てなのである。

その他にも村に馬はいるが訓練を受けていないので役に立たない。つまり男は四頭でギルテまで駆けるしかないのだ。

集まる村人を一向気にする風もなく、男は鞍くらにかけていた弓を取り出した。

大きい。相当な強弓であろう。そう思ってグレシオスが見ていると、なんと自分の弓ではないか。

怒るよりもあき呆れた。

「それは儂の弓ではないか」

グレシオスが驚いて言うと、

「おう。昨日見かけたのでな。今少し借りるぞ」

「まさか持っていくつもりではあるまいな？」

「弓は不要よ」

「ならば何故？」

「出発の前にせねばならぬ事があってな」

言いながら、男は弓に弦^{つる}を張った。グレシオスは驚いた。

この弓はヘカリオス公から贈られた物である。ブランディス式の強弓であり、滅多な者では扱うことはできない。

グレシオスが最後にこの弓を使ったのは十年以上前である。

今では自在に扱うのは無理かもしれない。

それをこの男は易々^{やすやす}と弦を張ったのである。さながら、熟練の楽師が豎琴^{たてごと}に弦を張るがごとくに。

グレシオスは驚くと同時に羨望を感じた。

何故、この男には老いがいいのか？

違う。この男は確かに老いている。

この男は力を失っていないのだ。

そのことが、グレシオスには理不盡^{りふじん}に感じられた。

己の腕が、己の腿^{もも}が、段々と力を失っていくのを日々感じている。目も随分^{ずいぶん}と暗くなった。息が切れるのも、早くなった。

人の体は老いる物である。

そのことはよく分かっている。いや、「よく分かっているつもりである」と言った方がよいか。

ただ「分かる」という事と「納得する」という事とは違う。

同じだという者もある。昔アウラシールの賢者にそう教えられたことがある。

真に知る者は、それが行為となって現れる。知る事は体現する事。そこに在って定まる事であると。

理解は則ち十全なり――。

何となく分かるような気もするが、分からない気もする。

深遠な言葉というものには、元々迂遠なところがあるし、自分は刀槍を振るう術には熟達していても、言葉や思索によって真理を捉えようなどと思つた事はないのである。

イスターリス 大神をその始めに戴くとはいへ、己が我が身は定命のものである。

老いに晒され、病に怯え、人の手による武器に傷つく物である。

あの偉大なるヴェルデスでさえ死んだのだ。

戦神イスターリスの子にして、比類無き英雄であったヴェルデスでさえ、人の世の悪意と刃によって命を落としたのである。

死は必然である。

いかなる出自を持とうと人の身は滅びる物、死する物である。

だが、老いる事だけは我慢ならぬ。

己れの体が、生きながら腐敗していく事には耐えられぬ。

ぶざまな泣き言である。それは分かっている。だから口に出した事は一度もない。

しかし、老いの足音を聞くようになってから、グレシオスは常に恐怖に晒されてきたのである。

——これであったか……。

息子に家督を譲り、父祖の霊にその報告を済ませたあの日から、ずっと心に引っ懸かっていたものの姿が見えた。正体が分かった。

己は、老いを憎んでいたのだ。

執務を執らなくなったあの日から、ずっと。

広間の椅子を失ったからではない。ヘクトリアスが領主の席に着いた時は、誇らしくすらあったのだ。

にもかかわらず何かが欠落した。いや欠落したと感じた。

誰も、己からは何も、居場所を奪ったりなどしていないのにだ。

己が老いるのが恐ろしかった。この四肢から力が

失われるのが、^{はき}覇気が衰えることが恐ろしかったのだ。

——^{せん}詮無いことを。

願ったところで若さは返らない。季節がめぐると同じく、人の一生にも夏があり冬がある。

己は、冬だ。

既に人として新たに成す事など何もあるまい。あとはメーサーの^{みて}御手に抱かれて眠りに^っ就くだけの老人である。

だがそれは仕方のない事なのだ。

^{あらが}抗ってどうにかなるようなものではない。

「何を考えている？」

男の声に呼び戻された。

男は張った弦の具合を確かめるように、軽く指先で弾いている。硬い音が鳴っていた。

「いや……詮無い欲を持っていたと思うてな」

苦笑が漏れた。己の弱さに、臆病さと幼さに^{わら}晒うしかない。

望むことに意味のない欲ではないか。

だからこそ、今まではっきりと気付くこともなかったのだろう。

情けない。晒うしかない。

「ほう……」

男はそう云っただけで、質問を重ねては来なかつ

た。

矢を^{いって}一手取ると、弓を持ってずんずんと歩き出した。

一手というのは二^{せき}隻の矢である。ローゼンディア語ではクレスという。

一手、ないし二手が、射の基本単位であり、古くはクアースと言って数えたというが、これは元々ナーラキア語であり、両数である。

ローゼンディア語はナーラキア語からの影響を強く受けているから、そう呼んだのだろう。

両数というのは、二つ^{そろ}揃った物を数える時の表現であり、ナーラキア系諸語、アウラシル系諸語に存在する表現である。

これらの言語では名詞は性別に加えて、単数、複数、両数、を区別するのである。

ともあれ男は何かを射るつもりらしかった。

「どこに行くのだ？」

^{ものみやぐら}
「物見櫓さ」

男を追いかける形でグレシオスも物見櫓の下までやって来た。

男はグレシオスに矢を渡すと、自分は弓を抱え、櫓を登って行く。仕方がないのでグレシオスも続いて登った。

櫓の上からは村全体が一望できた。床は決して広

くはないが、人が三人横になって眠れるくらいの空間はある。

南西側の柱には急を報^{しら}せる鉦^{かね}が掛かっている。その他には何も無い場所だった。

ジャグルどもが現れるまでは見張りを立てる必要がある^{ので}、その者^{のため}に、寒さを凌^{しの}ぐための掻^{かい}巻^{まき}でも用意しなくてはならないと思った。

男は村の入口の方を向いて目を凝らしている。

「何を見ているのだ？」

「大したことはない。ただ、昨夜から気にはなっていたし、これを片付けてからでない^と出立できぬからな」

言いながら矢をつがえて弓を引きしぼった。ゆっくりと引いていく。

これだけの強弓である。当然、全身から力を絞り出す^{様子}が現れるとグレシオスは思っていたのだが、それが全く無い。

男は実に自然な動作で、しかも軽々と弓を引いていく。

グレシオスには信じられなかった。

とてつもない臂^{りよりよく}力であると言わねばならない。

よく見ると確かに腕の筋肉には張^{はり}がある。肩も盛り上がっている。それでいて力^みが無い。

弓を十分に引くと、男はぴたりと動きを止めた。

見事な姿勢であった。

腕を素直に伸ばし、胸を開いている。

全身を隈^{くま}無く使っているながらも、無理を感じさせない姿勢だった。

その姿を見ただけで、この男が尋常ではない射術を身につけていることを窺^{うかが}わせるに十分だった。

放った。

旋風^{せんふう}が生じたようであった。

男の指が、矢筈^{やはず}から離れると同時に生じた旋風である。

矢が見えぬ。

飛んだとおぼしき方向を目で追うと、村の外、入口の柵から少し離れた樹から、子供のような影がぼたりと落ちるところだった。

「うむ」

低く^{つぶや}呟くと、男は弓を下した。

「今のは……」

「村を見張っておったジャグルよ。昨夜遅く現れた。ずっとあの樹の上におったのだが、鬱陶^{うつとう}しくてかなわぬ。いずれ帰すわけにもいかぬし、出立の前に始末しておこうと思うてな」

グレシオスは^{ほう}呆けた。己が呆けた表情をしていることはうっすらと気付いてはいたが、それに気を回せなかった。

——なんという業前^{わざまえ}か！

尋常な射術ではない。これだけ距離の離れた的に中^あてるなど、しかもその敵の気配を頼りに放つなど、目にした今でも信じられぬ。

「おお……もう一匹が逃げていくわ」

笑いを含んだ声で男が言った。

目を遣^やると、樹からするすると下りてくるものがある。

グレシオスの目の前に、ぬっとばかりに弓が突き出された。

「お主に譲^{ゆず}ろう」

冗談ではない。どうかしている。

「この距離では中^{あた}らぬ」

「中ったが」

首を振るグレシオスに対し、男は笑いながら樹下に転がっているジャグルとおぼしき影を指差した。

「儂にできてお主にできぬこともあるまい」

無茶である。

「お主の技には遠く及ばぬ」

悔^{くや}しさすら感じなかった。ただ驚きがあるばかりである。

全盛時の己でさえ、この距離で敵を射殺すことは難しいだろう。

それをこの男は、しかも樹の間隠れの相手を、そ

の気配だけを頼りに射落として見せたのだ。

「やってみねば判るまい」

男は首を振ってグレシオスの言葉を否定した。

目の前に弓がある。

ベルガイアの戦いの後、ヘカリオス公デュレスから送られた強弓である。

初めて引いた時には余りの強さに驚いたものだった。

^{かっちゅう}甲冑を三つ重ねて立てて射たところ、矢は突き抜けた。無論甲冑は吹き飛んでばらばらになった。尋常な弓ではない。

だが何事も鍛錬と慣れである。やがてグレシオスはこの強弓を自在に扱えるようになった。

しかし十年前ならまだしも、今の自分では、この強弓を扱うことは難しだろう。

ひよっとすると引く事すらできぬかも知れぬ。

己の衰えを見られたくない。いや、何より己自身にそのことを知らせたくない……。

ちらりと、そんな考えが頭を^{かす}掠めた。

「儂にはもうこの弓を扱うことはできぬよ」

はっきりと言った。区切りをつけねばならなかった。

燃え盛る時は終わったのだ。現実を認め、その丈^{たけ}に合わせて生きなければならない。

未練はある。

だがそれが如何に無様かを、自分はたった今悟ったばかりではないか。

だからもう終わりにしよう。

ところが――。

グレシオスの手は自然と伸びて、弓束をつかんでいた。

なぜだかは解らない。

「イスターリスの裔たる、レオンティウスの子グレシオスよ。お主はもう少し自分のことを、よく知る必要があるようだな」

「どういう、意味か」

「お主は、自分は老いていると言った。だが髭の長さならば儂の方が勝っておるぞ」

「確かにそうだが」

この男を並の規格で考えることは、妥当であるとは思われない。

「お主は特別であろう。無双の剛力を持っておるではないか」

「かも知れぬ。だがその弓を引くのに、それほどの剛力を必要とはせぬよ」

グレシオスは黙って弓を見つめた。

「逃げるぞ」

男が言った。樹から下りてきたジャグルであろう

影が、仲間の屍体したいに向かってかが屈み込んだ。何かを
あさ
漁っているようだったが、すぐに身を起こして逃走
に移った。

——射らねばならぬ。

思うと同時に身体からだが動いた。背骨を中心に大きな
力が生まれ、それが速すみやかに両腕に流れるのを感じ
た。

気がつくとき弓を構えていた。いつの間にやら矢も
つが
番えている。右手の指先にやはず矢筈の感触があるのが不
思議であった。

無様な、しかし力強さを感じさせる動きで影が遠
ざかってゆく。

人間にしては粗雑に過ぎ、足の悪い者のようであ
るが、猿にしては不自然な余裕のある動きだ。ジャ
グルの走りであった。

己が眉間から目に見えぬ力が発しているように感
じた。

それはまっすぐにジャグルの背中へと伸びてい
た。

「おお。いい姿勢だ」

男が感心したように言った。その言葉が合図に
なった。

放った。

旋風が生じたようであった。

己の指が、矢筈から離れると同時に生じた旋風である。

矢が見えぬ。

ただ、胸の中から旋風を生み出したような感触だけがある。

視線の先でジャグルが突^つんのめり、倒れた。

動く気配はない。

「うむ」

低く呟くと、グレシオスは弓を^{おろ}下した。

「まだ自分が衰えていると思うかね？」

男が意地悪く聞いてきた。

グレシオスは返答ができなかった。

気分は良かった。己の業前が信じられぬ。^{かいさい}快哉を叫びたいくらいである。

だが^{こら}堪えた。

今の今まで分別臭いことを考え、かつ話し、自分とは違う者だと決めてかかって男を見ていたのだ。

今更、喜ぶわけにはいかぬ。

子供ならともかく、いい歳をこいた大人である。孫まで居る老人である。

なので、にやつきそうになる頬に力を入れ、グレシオスはわざと不満そうな顔を作った。むっとして見せた。

「あまり、嬉しそうではないな」

がっかりしたように男が眉を下げた。それが何とも滑稽で、グレシオスは耐えきれずに失笑した。

一度笑い出すと止められぬ。声を上げて笑った。

^{すが}
清しい。

久しく忘れていた、気持ちのいい笑いであった。

「グレシオスよ」

グレシオスが笑い終わるのを待って、男が穏やかに口を開いた。

「老いは必定である。そのことについてはお主の考えは正しい。だが老い方は人それぞれであるし、必ずしも老いに屈服する必要はない」

グレシオスは^{うなず}頷いた。

「力はいつか失われる。そのことについてもお主の考えは正しい。だがそれが必ずしも老いと結びついているわけではない。失われぬ力というものもあるし、失っても取り戻せる力というものも、ある」

再び、グレシオスは頷いた。

「現にお主は今示したではないか。自らの剛勇を。

その射術の^{すぐ}傑れたる事を今まさに。それでもなお、

「自分は老人である」などと、離れの^{いんきよじじい}隠居爺のような言葉を口にするかね？」

グレシオスは苦笑した。照れの混じった笑いである。

「確かに老いは、運命の女神が下す贈物の中でも、

もっとも望まれざるものの一つだろう。あのメーサートゥエーンでさえ、老齡との試合においては膝を屈したのだから」

メーサートゥエーンはローゼンディア世界最大の英雄である。

あらゆる偉業を成し遂げて、最後は天界に昇って神々の席に連なった。

大英雄は、かつて人間の身であった頃、巨人族の城でグラティオンを行なったという。

その時の相手が『老齡』であった。

小柄な老人の姿をした『老齡』に対し、メーサートゥエーンは死力を^つ盡くして立ち向かうが、^{つい}遂には敗れてしまう。

「だがな。メーサートゥエーンは片膝をついたのみで^{しの}凌いだ。決して、投げ飛ばされはしておらぬぞ」なるほど。

そういう見方も、あるか。

なんと愚かで、しかし気持ちの良い見方であろう。

だが――。

力を示せば、それは真実になる……。

思った途端、身体の奥から何か、^な舐めるような火が燃え広がってくるのを感じた。

「おう。顔つきが変わったのう」

男がにやりと、どこか危険さを感じさせる笑みを浮かべた。

グレシオスは自分が射殺したジャグルに目を向けた。

先程倒れたまま、^{うつぶ}俯伏せになって動いていない。

この場合、死んだふりという事もなきにしもあらずだが、何故だかそれはないと思った。

自分は間違いなく、あのジャグルの背中を射抜いたと感じていた。

グレシオスは弓を脇身に抱え、男の方を向いた。

「……広場に戻ろう。^{よりあい}寄合の決が出ているかも知れぬ」

射の^{よいん}余韻が、まだ残っていた。

第五章 道化

広場は騒然としていた。村人達は判っているのだ。

村を捨てようが、戦いを選ぼうが、どちらにせよ恐ろしい結果が待ち受けているのだということ。

誰もが深刻そうに話し合っている。

子供たちは大人から離れて広場の端の方に集められており、モイラスが世話をみていた。

メグレイスはヨルスとタデアスを相手に、何やら話をしていたが、グレシオス達が戻ってくると顔をこちらに向けた。

「話は纏^{まと}まりそうか？」

グレシオスはヨルスに尋ねた。

「紛^{ふんきゆう}糾しております」

無理もない。生死を懸^かけた極限的な選択なのだ。

「やはり二つに割れる事になるのではないかと…
…」

タデアスは心配そうに眉を寄せていた。

おそらく戦力の分散を恐れているのだ。

「仕方有るまい」

「どちらにせよ時間はないのです。いっそ決を採ってはどうでしょうか？」

メグレイスが言った。

「ふむ」

グレシオスは溜息^{ためいき}を吐^ついた。できれば強引な多数決は採りたくない。

だがこのままでは結論が出るのに一日かかってしまいそんな雰囲気である。そして、そんなことを許していたらジャグル達が到着してしまう。

全体の意見配分が、どういう形になっているかを知るためだけでも、決を採るべきだろうか？

考えていると、突然子供の泣き声が聞こえてきた。

広場の端に集められている子供達だ。目を向けると三歳ばかりの幼児が一人、泣いていた。男の子である。

その子供のすぐ近くにいる、似たような歳の女の子が、もらい泣きをしそうになっていた。

まずいと思った。下手をすると、子供達が一斉に泣き始める事になるかもしれぬ。

大人達は相談に夢中で気付いていない。モイラスが子供の傍^{そば}に膝を着いて話しかけているが、ぎこちない感じだった。

この若者は何をやらせても頼りないような感じがあるが、能力が劣っているわけではない。むしろ優秀な部類に入る。印象で損をしているのである。

今もこのまま任せておけば、上手に子供を宥^{なだ}めて

しまうだろう。

そう思ったが、何を考えたのか、不意に男が子供達の方に歩き出した。何か意見を聞かせてもらおうと思っていた矢先なので、グレシオスは少し慌てた。

今度は何をするつもりであろうか。

興味を掻き立てられて、グレシオスもついて行った。

おおとの
「大殿」

「すぐに戻る」

タデアスに振り向いて言った。

今は子供の相手をしてやる余裕はないというのに、つい男の後を追ってしまう自分が情けない。

男は口を開けて泣いている子供の前に立つと、急にしゃがみ込んだ。

尻が地に着くほど身を低めた。大きな体をちょうか長靴の間に挟むようにして背中を丸め、ひげづら髭面を子供の前に突き出した。

驚いたのだろう、子供は泣きやんだ。

泣きやみはしたのだが、それは意表をつ衝かれたからであって、この驚きが消えれば、また泣き出すことは明白だった。

突然、男は顔を動かして奇妙な表情を作った。目玉を大きく動かし、口を曲げて舌を突き出した。

そんなおかしいな表情を、何通りかやって見せた。

「……わあ」

子供は興味を持ったようだった。この年頃の幼児は興味の対象が移ると、それ以前の状況を忘却するという、面白い特質を有している生き物である。

たちまち笑い出した。

男は一言も発せず、幼児の前に顔を突き出したまま、次々と奇怪な面相を作って見せた。

意表を衝かれたのは幼児だけではない、近くにいた子供達も、子供をあやそうとしていたモイラスも、そしてグレシオスもである。

子供達は大喜びで笑い出したが、グレシオスとモイラスは笑わず、呆けたようにそれを眺めていた。

男の作り出す面相は、恐ろしく奇怪なものであった。

奇怪としか言いようがない。

道化の物真似にしては毒がありすぎるし、何より迫力が半端ではない。

男の場合、元から顔に備えている目だの鼻だのといった自前の道具が、普通人に比べて、存在感がありすぎるからであろうか。

笑いを取るというよりも、ほとんど魔除けに近い雰囲気がある。

無論、幼児を泣きやませるための努力であろうか

ら、いずれ冷静な品評など男の耳に入れてやるつもりはない。その程度の慈悲心はグレシオスも持ち合わせている。

ともかく男の面相芸には、何やら真に迫る狂気があった。

今は目玉を上下反対に動かし、舌を頤あごの辺りまで垂れ下がらせている。

かなりの荒技である。少なくともグレシオスには不可能な技であった。

——やはりこの男はどこかおかしい。

しら白けたような冷静さでグレシオスは思った。

思った途端、笑いがこみ上げてきた。

モイラスが笑い出した。グレシオスも笑った。

周りに居る者達が一頻りひとしき笑うのを見届けると、男は面相芸を止めて立ち上がった。

つるりと頬など撫でてすましている。それがまたおかしく、グレシオスは吹き出した。

「お主には本当に驚かされる」

「なあに、ただの嗜みたしなの一つよ」

「だんきんしょうか弾琴唱歌ならばともかく、面相芸が嗜みというのも変わっておるな」

「そんなことはない。だいたい子供を笑わせることもできぬでは、情けないではないか」

「うむ……たしかにな」

グレシオスは^{うなず}頷いた。感じ入るところがあった。

戦士はただ刀槍を振り回しておれば良い、というのは浅薄な考え方である。

そのことを判ってはいてもなかなか、行為として現れるまでに到らぬ事が多いのだ。

「さて、邪魔者も始末したことであるし、儂はゆくとしよう」

「これを持ってゆけ」

グレシオスは^{ふところ}懐から巻物を取り出して男に渡した。

「これは？」

「今朝纏めたものだ。それを見せればすんなりと領主に面会できるはずだ」

「お主の息子だな」

「そうだ。一読すれば判るように書いてはあるが、質問が出るかも知れぬ。その時は簡単な説明を加えてやってくれ。儂にしてくれたようにな」

仕方のない事だな、とでも言わんばかりに男は、ふん、と鼻から息を吐いた。

「儂を含めて呑み込みの悪い者が多いのよ。武事に片寄った者達ばかりゆえ、細かく気を回せないことがある。大目に見てやってくれ」

その中に自分も入っているのだと思いつつ、グレシオスは言った。

「随分、儂を高く買ってくれるのだな」

「お主はそれだけの力を示したではないか」

「さて」

男は苦笑いを浮かべ、首を傾げた。

「それは援兵が来てから言うべき言葉であろう」

「お主は辿り着くさ」

今はグレシオスも確信していた。

この男ならばやれるだろう。

ジャグル達は街道を進んでくるであろうから、それを上手く避けるか、または見事に虚を突いて駆け抜けるなどして突破するだろう。

そして間違いなくギルテの領主館へ辿り着くに違いない。

子供達が男とグレシオスとを取り巻いている。面相芸をもっと見せてもらいたいのであろう。

子供達の中には男のフェトゥーラを引っ張って遊ぼうとする者がいるのだが、モイラスが注意して止めさせていた。

「お主はどうするのだ？」

「村人達の判断に従うつもりだ。とどまるというのなら彼らを指揮して戦う。逃げるというのなら彼らを導いて村を捨てるつもりだ。だが、おそらく村人は二つに分かれることになるだろうな」

「あまり感心はせぬな」

「儂もそう思う。しかし、逃げたいという者を無理矢理戦わせるわけにもいくまい。逆もそうだ。とどまりたいものを無理に連れ出す事もできぬよ」

「その場合、お主はどうするのか？」

「村に残る者達を指揮する。この程度の規模とはいえ、戦には将が必要だからな」

「ということは村を捨てる者達は、自力でパラケウス街道を目指さねばならぬことになる。それは難しいのではないか？」

「だがどうにもならぬさ。儂が村を捨てれば、ジャグルの前に村人だけを残していくことになる。それはできぬよ」

「ならばそれを話してやることだ。そうすれば誰一人村を捨てるとは言わぬだろうさ」

「何故そう思う？」

「ここからパラケウス街道を目指す事の意味は、村の連中の方がよく分かっておるだろうということよ。お主が村に残るといふのなら、誰もがそちらを選ぶだろうよ」

「随分、儂を高く買ってくれるのだな」

今度はグレシオスがそう口にした。

「それはお互い様よ。ともかく、その話を村人にするのだな。さすればすぐに話は終わる。時は待つことなく過ぎる。のんびりしてはおられぬはずよ」

「そうだな」

グレシオスは頷き、男を伴^{ともな}ってヨルスやメグレイスのいる所へ歩き始めた。

ついて来ようとする子供達がいたが、それもモイラスが押しとどめた。

「あの数の子供を纏めておくのは大変であろう」

「まったくだ」

男に相鎚^{あいづち}を返ししながら大人達の方に目を遣^やると、アルテアの方は鍛冶屋^{かじや}のダイオンとあと数人と話をしている。獵師のイドナの姿もある。どの顔も真剣な様子だ。

おそらく、あの者達は村に残る方の話をしているのだろうと思った。

「すまぬがもう一つ話がある」

ヨルス達に声をかけた。

「先程のお話ですな」

メグレイスはすぐに察しがついたようだった。

ヨルスとタデアスが大声を上げて、村人達の意識をこちらに向けさせた。

グレシオスは再び壇上に上がった。

広場を見渡して、声を大きくして言った。

「難しい話であるから、皆もどちらにすべきか迷っている事と思う。そこで言うておく。誰もが自分の好きな方を選ぶが良い。村を去るにせよ、とどまっ

て戦うにせよ、どちらでも良い。責めはせぬ。ただし、儂は村に残る者達と行動を共にする。逃げる者達よりも戦う者達の方が、より大きく儂の力を必要とするであろうからだ。そこのところは判ってもらいたい」

言葉を切った。何か質問があがらないかと思ったからである。

「御領主様は村を捨てないと仰おっしゃるんで？」

一人の男が手を挙げて言った。

「そうだ」

正確には村を捨てないのではなく、村人を捨てないのだが、この際、細かい違いを問題にしても仕方がない。

「悪いがパラケウス街道を目指す者達にはついて行けぬ」

村人達は騒然となった。どうやら意外であったようだ。

グレシオスの身体からだは一つしかないのだから、村が二つに割れた場合は、どちらに属するかを選ばねばならぬ。

そんな当然の事が、村人達の頭には今まで上のぼらなかつたらしい。

グレシオスからすれば呆あきれるような話であるが、一般の村人に、系統立てた考えを期待するのは酷な

事なのかもしれなかった。

「逃げる者達はパラケウス街道を目指すだけであるゆえ、何とか自力で頑張ってもらいたい。馬も全て連れて行って構わぬ。道が分からぬと言うのならば、今簡単な地図を描いて渡そう。厳しいようだが儂もタデアスも、村に残る者達を守って戦わねばならぬのだ」

グレシオスは壇を下りた。

「これで村を出て行こうという者はいなくなるであろうよ。それが良いかどうかは、分からぬがな」

とグレシオスに向けて言う男に、

「少なくとも老人や子供にとっては良い事でありましょう」

答えたのはメグレイスだった。

「長神官殿はそう考えるか？」

グレシオスが問うと、

「はい。どれだけの数が村を離れるかはともかく、道なき道程。常に馬に乗って進めるわけもありません。ここからパラケウス街道まで出るのに、少なくとも三日は掛かるでしょう。途中で宿る場所も自分たちで作らなくてはなりません。まず、男衆以外は全滅でしょうな」

「……それほどに厳しいか」

グレシオスの予想を超えている。村から与えられ

るだけの物を持たせ、馬を全て与えて出発させても
そうなるか。

やはり己も所詮は武人、戦の専門職としての経験
から物事を考える癖が付いているとみえる。

一般の人々というのは、考えるよりも遥かに機動
性に乏しく、運用の纏まりに欠ける存在なのだろ
う。

しかし、そうであってもやはり村を離れるわけに
はいかないだろう。

ジャグル達は来る。間違いなくナウロス村を襲っ
てくる。

全員が村を離れるのでない限り、自分は残って戦
わねばならない。

「とにかく、今暫く待つ。結論が出たら教えてく
れ。儂はこの御仁を村の入口まで見送ってくる」

「はあ」

メグレイスは曖昧な返事をした。

「こちらの御仁はギルテまで行かれるそうだ。援兵
の要請を届けるためにな」

グレシオスが補足すると、メグレイスが息を呑む
気配が伝わった。

「この状況でギルテへ向かわれるのですか？」

男に問う。

「いかにも」

何でもないように男は答えた。昨夜グレシオスに笑って答えた時と同じである。

「こちらの御仁はただ者ではない。必ずやギルテに我等の危機を伝えてくれるだろう。だからそれまで持ち堪^{こた}えれば良いのだ」

もちろん、持ち堪えられるかどうかは分からぬが。

グレシオスはその言葉を口にはしなかった。

メグレイスは疑いを持っているというよりむしろ、状況についていけないという感じで、

「ならば、そのことも村人達に伝えた方が良いのではないのでしょうか？」

と言った。

「それはそうだな。だがその事は長神官殿に任せよう。儂はこの御仁を見送る事にする」

「かしこまりました」

メグレイスは頭を下げた。

グレシオスは男と一緒に青毛の馬を連れ、広場を後にした。

誰もついては来なかった。

タデアスを含め何人か気配は見せたが、グレシオスが目を向けると、そこで足を止めた。

ついて来るなど制したつもりはない。ただ目を向けただけだった。

しかし男の見送りを静かなものにしたいという気持ちはあったから、それが目に現れたのかも知れぬ。

いずれにしても、男を見送るのはグレシオスただ一人であった。

村の入口に着いた。

「本当に弓は要^いらぬのか？ 館に着いた時に誰かに返してくれればいい。あれば役立つ事もあるだろう。持って行ってはどうか？」

グレシオスが弓を差し出すと、男はやや考えた様子だったが、

「ふむ。ならばそうしよう」

と言って弓を受け取った。この男の事だから、騎射の術にも長じていると思われる。

どういう仕方でジャグル達を突破したり、またはやり過ごしたりするのは分からないが、弓を持っていれば、それで助かる事もあるかもしれない。

グレシオスは空を見上げた。霽^はれている内には入るであろうが、どこか心許^{こころもと}ない天気である。昼を過ぎれば、崩れてくるかも知れぬ気配だった。

「急いだ方がいいかも知れぬな」

「うむ」

男が無事ギルテの領主館に着くまでには、どれほど急いでも一日はかかるだろう。

通常ならば三日の距離なのだ。何らかの形で道を迂回^{うかい}するなどすれば、もっとかかるに違いない。

ジャグルの群が村に着くのは、おそらく今夕から夜半にかけての頃であろう。

戦闘がどれだけ続くかは判らぬが、ギルテの援兵が来るのは、早くともおそらく明日の夕方頃になるだろうから、それまで持ち堪えなければならぬ。

厳しい戦いになるだろう。

雪は降るだろうか。もし雪が降れば足場の問題、そして何より吹雪の問題がある。

もっとも吹雪となればジャグル共とて自由に動き回る事など出来まいが。

いずれにせよ厳しい戦いになる事は間違いない。

「ではな」

「おう」

すがるい動作で、男は馬に跨^{またが}がった。

「お主の名前は後日館で聞くことにしよう」

グレシオスの言葉に、男はにやりと笑うだけだった。

ウェムノンの帽子を被^{かぶ}り直すと、

「恐れるな。お主には力がある。不安に眼を曇らせてはならぬぞ。たとえゴロドがいてもそれに気を取られてはならぬぞ。ゴロドとて、決して斃^{たお}せぬ相手ではない。昨日も言うたが、大切なのは判断を誤ら

ぬことだ。心を澄ませ、冷静に状況を見定めることよ」

諭^{さと}すようにグレシオスに向けて言った。

「まるで若武者に言うような口振りであるな」

グレシオスが不満げに言うと、

「はは、怒るな。先程も言うたが、お主よりも儂の方が髭の長さで勝っておる」

そう言って笑った。

それが男なりの婉曲^{えんきよく}な激励である事は、グレシオスにもすぐに判った。

こそばゆいような感じがして、グレシオスは面^{おもて}を伏せた。にやけた顔を男に見られるのは恥ずかしかった。

「イスターリスの裔^{すえ}たるレオンティウスの息子、堅^{けん}忍不拔^{にんふばつ}の勇者グレシオスよ——」

あの懐かしい、古風な呼びかけが頭上から降りてきた。

グレシオスは馬上の男に目を向けた。鍔^{つばひろ}広の帽子が影を作っている所^{せい}為か、顔がほとんど見えない。

「このような場所でお前は死ぬことはない。お前の死は、戦場を遠く離れた場所で訪れるであろう。お前はそのとき真の安らぎを知ることになるであろうよ」

厳^{おごそ}かさを感じさせる声で、男はそう告げた。予言

であった。

「……お主は予言の真似事もするのか？」

特に周囲が明るいわけではない。

にもかかわらず、グレシオスには男の姿が良く見えぬような気がした。

フェトゥーラと帽子が作り出す影の中で、男の姿はゆらめき、まるで切り取られたようにその形が目に入ってこない。

「さらばだ」

一言別れを言うと、男は馬を歩ませた。替え馬がそれに続く。

馬の集団はすぐにだく足になった。

声をかける間もなく離れてゆく。

男の背中が見える。深い青のフェトゥーラに、鍔の広いウェムノン帽。

^{たくま}遅しい背中である。見事な肩をしているのが判る。

朝の^し滲みるような光の中、男の姿はすぐに遠ざかり、やがて見えなくなった。

第六章 戦支度・一

広場に戻ると予想外の結論が待っていた。いや、むしろ男の予想通りになったのだから、逆に予想の内だと云えるのかもしれない。

村人は全員が村に残って、ジャグル達と戦う事を選んだのだった。

「お前達、本当にそれで良いのか？」

壇上からグレシオスは皆に問い質した。

手が拳がった。獵師のイドナだった。

美しくはないが、なんとなく人を安心させる雰囲気を持っている娘である。

少し目の間隔が離れており、鼻を中心にそばかすがある。

柔らかい銀髪は東方人にしては珍しく癖があり、首の後ろで一纏ひとまとめにしてあった。

イドナにはどこかふわふわしている感じがあるが、その印象には髪の毛も一役買っていると思われた。

特に見栄みばえのしない、平凡な村娘といった風であるが、彼女はナウロス村一番の弓の名手であり、誰からも一目置かれる優秀な獵師である。

背が高いわけでも、体格に恵まれているわけでもないが、その腕には素晴らしいものがあるのだ。

一度だけグレシオスは、イドナ達と共に山に入った事がある。

今までに接してきた猟師達と比べても、イドナの能力は抜きん出ていると感じた。

目が良く、勘に優れている事はもちろん、身のこなしも敏捷びんしょうであり、何より、山やそこに生きるもの達に対する独特な感性に恵まれている。

まだ若い。この先、多くの優れた結果を出せるであろうが、それも全てはこの難局を切り抜けて、生き延びられればの話である。

「御領主様はあたしらと一緒に戦って下さるんですよ？」

「そうだ」

「ならあたしは村に残ります」

イドナの言葉はっきりとしていた。

その傍そばにいる村人達の顔を見ても、表情に迷いは感じられなかった。

「負ければ一人残らず皆殺しにされるのだぞ。我等に残された道は勝利しかない。本当に良いのかな？」

グレシオスはもう一度念を押した。

話をするのを止め、村人から何か声が上がらないかと待った。

誰からも手は拳がらなかった。

「……みな異存は無いようでござります」

ヨルスがグレシオスを見上げて云った。

確かに、村を捨てて逃げる場合の犠牲は大きい。

体力に劣る者は全滅するだろう。

そのことは村人達も判っているに違いない。

だからといって村人誰もが、これから起こる戦闘の現実を、きちんと理解していると考えerわけにもいかないのだ。

「戦闘は厳しいぞ。死人も出る。血肉ばらまかれる阿鼻叫喚の場よ。隣にいる者を見よ」

グレシオスが言うと、村人皆己の隣にある者の顔を見た。

「その者の手足や首が目の前に飛んでくるかも知れぬ。それでも戦うと申すのだな？」

村人の間にざわめきが拡がった。「やはり戦闘は避けよう」という意見が出てくるかと思い、グレシオスは待った。

一人が手を挙げた。鍛冶屋のダイオンであった。

「御領主様。俺たちに気を遣って下さるのは、まことにありがたえ事だと思っけども、俺たちはもう戦う事に決めたんです。今さら気が萎^なえるような事は言わねえでくだせえ」

ダイオンの周囲から、同意を告げる声が幾つか上がった。

グレシオスは注意深く広場を見渡した。端の方に居る者達などに特に目を向けた。

やはりよく見ると、自信なさそうに顔を寄せ合っている者や、老人の耳元で説明をしている者などがある。

そういう村人を見ると気が重くなる。だが反対の声をあげる機会を与えたのだ。

村を出ることも可能だったはずである。

よもや戦わずにジャグル達と和解、などという馬鹿げた考えを持っている者はおるまいが、以前そういう話を聞いたことがあった。

この考えを提案し実行したのは、アウラシールのさる貴族だそうだが、結果は自身のみならずばいじゅう陪従のしん臣達までが、仲良く串焼きにされたと聞く。

ぐまい愚昧さもここに極まれりと言うほか無いが、貴族の中には己が館の外部については何も知らぬし、想像したことすら無いという者もいるから、この貴族もそのような、現実からかいり乖離してしまった者の一人であったのであろう。

希望にすが縋る気持ちは判るが、自分の期待に常に現実が応えてくれるわけなどない。

戦場に立てばよい。そうすれば、それがいや厭というほど判る。

判るしかない。分からぬ者は死んでいく。

今、村人達は二つしか選ぶべき道はない。残って戦うか逃亡するかである。

何もせずに家の中に閉じ籠もっているという選択もないではないが、それは許さぬ。

もしそんな者が居るならば、まずはその者達を何とかしなくてはならない。これから自分達が突入するのは戦場なのだ。

犠牲の聖獣ではあるまいし、己は何もせずに危機の解決を、神に祈るなど許せることではない。

そのような愚者は、混乱すると何をしでかすか解らぬ。

用心のために、戦いが終わるまでは縄で括くくって納屋にでも閉じこめて置くしかないであろう。

幸い、泣き言を云うのみで何もしないという愚者は、ナウロス村には居ないようであった。

辺境の村であるゆえ、ジャグルに対する理解があるということだろう。

だがそれだけではないとも思われた。

村人誰もが、自分達が置かれた状況をきちんと把握し、それに対して立ち向かうしかないという事を知っているのだ。

それは決して安楽とは云えぬ日々の生活の中から、つかみ取られたものではないだろうか。

「……良し。儂がお前達の命を預かる。これから戦

いが終わるまでは、儂の言うことに全て従うのだ」

何人かの男達が拳こぶしを突き上げて叫んだ。闘志があるのは有難いが、戦場では闘志よりも冷静さと体力の方が重要である。

「では今から話すことをやってもらいたい。話しておかねばならぬことがあるゆえ、昼食を食べたら全員が再び広場に集合するように」

そしてグレシオスは館にいる間に考えておいた対策を、順次村人に伝えていった。やるべき事が決まった者から、順次広場を離れていくようにした。

先ず老人病人、子供達は全て丘の上にあるグレシオスの館に避難することを決めた。

メグレイスとヨルスにはさしあたっての指揮を任せた。細々した仕事の監督である。

アルテアとモイラスには、グレシオスの館に避難する老人病人、子供達の世話を任せることにした。

戦闘による負傷者が出た時には、その治療にもあたってもらわねばならない。

彼らは神職であるし、戦闘の経験はないであろう代わり、治療術などの方面には優れていると期待してのことである。

十二歳以上の者は全て兵として徴集した。女子は原則として、連絡や輸送など後方の作業に回すが、

徴集自体には男女の別は設け^{もう}なかった。

これはローゼンディアにおいては一般的な判断であったが、年齢の方となると、こちらは少し厳しいと言えた。

非常時とは言え、先例^{かんが}を鑑みるならば十四歳以上の者を徴集するものである。

しかしナウロス村の人口構成を考えるに、それでは人手が足りないのだ。

二つ年齢を下げたのは、已む^やない措置^{そち}であった。

この子供達の内に、矢槍で貫かれたり、刀で打ち殺されたりする者が出るであろう。

心苦しいが、それが戦いというものであり、しかも今は戦いを避けられないのだ。

グレシオスは各自の能力に応じて、仕事を割り振っていった。

鍛冶屋のダイオンとその息子達には道具作りを任せた。

「祭りの時に使う飾槍に穂先をつけよ」

イオルテス地方では、祭りの時に投槍競技を行なうことが多い。

使用する槍は穂先を外してあり、槍の形を模した飾槍であるが、穂先をつければ立派に武器になるのである。

「農具は全て武器に加工せよ。ただし余り時間はか

けられぬ。簡単にできそうな物だけを選んで、それを優先的にやっていくのだ。判らぬ時は使いの者を儂か、タデアスへと送ってくるがいい」

「全部武器にしてしまったら、あとで困るのではねえですか？」

グレシオスは苦笑した。ダイオンの心配はもっともだが、それは生き残れたらの話に過ぎない。

「そういう心配は生き残ってからすれば良い。今は戦う準備に全力を傾けよ」

「はい。御領主様の^{おっしゃ}仰るとおりにいたします」

いまいち納得しかねるような様子ではあったが、ダイオンは頭を下げ、息子達と共に鍛冶場のある自宅へと帰っていった。

「皆、家に有る物で、武器になりそうな物は全てダイオンの元へ持って行け。家に元々武具があった者も、具合が怪しかったり、体格に合わぬなどの場合にはダイオンに手直してもらおうがいい。ヨルスは村の倉庫を開け、食糧を各々に分配せよ」

備蓄食糧もまた同じ理由により、取って置く必要はない。

最後になるかもしれないのだ。好きなものを十分に食べればよい。

まだ冬の初めということもあり、作って余り日を置いてない豚腿肉フ オ ソ ンの燻製や豚ばら肉ビ エ ー ロの燻製、腸詰めムントブロ

肉^{ース}といった保存用の肉が十分にある。保存食は秋の終わりに纏^{まと}めて作られるからだ。

「ジャグル共も、もう少し早く来てくれれば良かったですな」

家畜を潰す前に来てくれていたら新鮮な肉をたたくく食べたのにと、そう言ってタデアスは笑ったが、一緒に笑ったのはグレシオスだけであった。どうやら村人にはそんな余裕は無いらしい。

と言っても子供達だけは別であった。砂糖や蜂蜜を目一杯使ったマニールやアグリオパを作って配ったら大騒ぎである。

ここは辺境の小村なので甘味は貴重品なのだ。しかも普段ならば使えない位の分量を使ってしっかり甘さが付いている分、美味しさもまた格別なのであろうと思われた。

更にグレシオスの館で料理を担当している老女が大きなペティオンを焼いたが、これも子供達には大評判であった。

口の周りに蜂蜜や芥子^{けし}の粒を付けたまま、ひたすら菓子食っている姿は微笑ましかったが、この後の事を考えると少し気が沈んだ。この子らを守らねばならない。

大人達も菓子を口に運んだが、とても子らのように歓声を上げながら食う気にはなれないようで、豪

華な内容にしてはしめやかな食事となった。

弓兵の指揮にはイドナを任命することにした。

「めっそもねえです」

イドナは驚いて首を振った。

「村長に任せたほうがいいです」

「ヨルスには他に任せたい仕事があるのだ」

嘘ではない。ヨルスには他に頼みたい仕事がいくつもあった。

今も食糧倉庫の開放を任せた。

弓兵の準備と指揮とはイドナにやってもらうほか無い。

「お前が最も適任なのだ。他の者も異存はあるまい？」

グレシオスが問うと、周囲に居た者達の誰もが、そうだそうだと口々に言った。

イドナが一番の射手であることは、村の誰もが判っているのだ。

そして戦いにおいては、規準となる射手の選定が重要になる。イドナに任せておけば安心だろう。

「ジャグルを仕留めたことはあるか？」

「いえ。一度もないです」

「では犬や猿は？」

「あります」

子供のような受け答えである。この娘にはそう

いった、澄んだ素直さがあった。

「やつらは二本足で歩く猿だと思えばよい。犬のように吠^ほえるが、基本的には猿のようなものだ。そう思って射よ」

「はい」

「お前は誰よりも腕がよい。目も良い。射手としての勘にも恵まれている。村の者達は誰もがそのことを判っている。だから自信を持て」

そう励ますと、イドナは恥ずかしそうに笑ったが、周囲の者達はグレシオスの言葉に納得するよう^{うなず}に頷いていた。

「弓隊の指揮はイドナに任せる。弓を扱う者達にはそう伝えよ。昼飯の後に、どう戦うべきかを詳しく教えるゆえ、今は各自己の仕事をせよ」

自宅でやるべきことや、弓の準備など色々あるだろう。

イドナ達が去っていくと、広場は閑散となった。見えているのは、既に動き回っている者達である。

「門柵の補修を行ないますか？」

タデアスが聞いてきた。村の正門と、その周囲に^{もう}設けてある柵のことである。

ところどころ傷^{いた}んではいるが、本格的に修繕するとなると、現状の人手から言って、結構な労力が必要になるだろう。

「無用だ。人手も時間も無い」

「では誘い込みますか」

さすがにタデアスは、グレシオスの胸中を察しているようだった。

ジャグルの群を村に入れて、そこで叩くということである。

無論、初撃でそれを行なう。

初戦で出来る限り敵戦力を削るためだが、戦闘の開始時でなければ、愚かなジャグルどもと言えど成功は難しいだろう。

「うむ。防備を調^{ととの}える時間がほとんどないゆえな」

「どこに伏せます？」

「村の東側だ」

村の入口は南に面している。ジャグルどもが進入してくる場合、北に向かって正面を向いているであろうから、連中にとって右側に弓兵を伏せるのが正しい。つまり、村の東側である。

左側では、ジャグルの持ってる盾が邪魔になる可能性があるからだ。

「ではせめて門周辺の柵だけでも足すなり、補修するなりした方が良くはありませぬか？」

「そんな時間が取れるか？」

「門の近くにある家をたたき壊してしまいいましよう。その板を使えば良いのではないのでしょうか」

「なるほどな」

それは妙案である。

「判った。お前に任せる。人手も好きに使うがいい」

「かしこまりました」

タデアスが一礼し、去っていかうとした時、アルテアがやって来た。

「大殿様にお伺^{うかが}いたきことがございます」

意を決したように口を開いた。何か要求があつてのことだろうと思われた。

「聞こう」

「私は槍を学んでおります。兵の一人に加えてはいただけぬでしょうか？」

学ぶ、か。グレシオスは僅^{わず}かに口辺を上げた。

槍は学ぶものではない。身につけるものだ。

「学院では武器の扱いも指導するというが」

学院とは、王都にあるエムスエルス神学院のことである。

ヴァリア教大神殿に併設する全寮制の学園であり、入学の条件さえ満たせば、誰もがそこで学ぶことができる。

とはいえ、やはり学生のほとんどは貴族の子女であり、平民の子供は少ないという。

その数は留学生と同じ程度であると言うから、学

生の内、九割以上が貴族の子供達で占められていることになる。

教師には優秀な神官達が任命されており、高度な教育が施されるとい^{ほどこ}うが、グレシオスは叔父による訓育を受けたので、詳しくは知らぬ。

貴族の中にもグレシオスのように、家庭教師による学問や、身内による^{くんとう}薫陶を受けるのみで、学院で学ばない者は多い。

元々貴族の間には、教育とはじっくりと手をかけて、手元で注意深く行なうべきものだという認識があり、子供の両親がよく^{しんしゃ}親炙する神官や、^{すぐ}傑れた騎士が一門の内にいる場合には、その者達に訓育を依頼をすることが多いのである。

「戦場の経験は？」

「ございませぬ」

アルテアはきっぱりと答えた。^{ものお}物怖じしない性格なのか、それとも返答の意味を理解していないのかは判らなかつた。

「タデアス」

「はっ」

「^{ふたすじ}槍を二筋持ってまいれ」

「かしこまりました」

タデアスは駆けて行き、すぐに槍を持って戻ってきた。

祭り用の投槍である。無論穂先はついていない。

一筋をアルテアに渡すと、無い穂先を天に向け、^{こじり} 鎧をつけてグレシオスの脇に立った。

これはタデアスが「自分に任せてくれ」という意思表示であろう、と思った。

先程の話しぶりから、相手を務めるのが己であっても、アルテアは萎縮しはせぬであろうかと思っただが、タデアスならばさらに遠慮はすまい。

そしてこの場合、遠慮無しの腕を見せてもらった方が良い。

「タデアス、腕を見てやれ」

「はっ」

タデアスが一步前に出た。

「よろしいのですか？」

意外にもアルテアは、多少の^{ためら}躊躇いを見せた。

こういう稽古になれていないというよりも、タデアスに怪我をさせることを^{けねん}懸念している様子だった。よほど腕に自信があるのだろう。

だがそれは甘い認識である。

殺し合いを経験している者と、そうでない者との間には^{げきじん}激甚な差があるのだ。

「ご存分に」

肩の力を抜いて、タデアスはアルテアの前に立った。

一見何気なく立っているようであるが、敵の突きに対する防護の型になっている。

^{ゆきふくろう}雪橇の形と呼ばれる構えであるが、心得のない者が見ても判らぬかも知れぬ。

タデアスの形は長年の使用によって、すっかり使い^よ好いように^{そしゃく}咀嚼されつくしており、その^{りあい}理合はともかく、表面的な形においては、単に槍を胸の前に持っているだけに見えるかもしれなかった。

槍は本来、騎乗において使う武器である。

馬で駆けて行って投げたり、敵の盾に突き当てたりするのが、本来の使い方であると言える。

歩行で使う場合にはそれに加えて、相手を^{から}搦めたり、打ち払ったりする技術がより大きく浮上してくる。

単に突けば良いというほど、安易な武器ではないのである。

アルテアは神官衣の^{そで}袖を^ま捲くって^{ひも}紐で縛った。
^{あら}露わになった白い腕は、しなやかではあったがよく筋肉がついており、日頃の鍛錬を感じさせるものであった。

「いえええいっ！！！」

鋭い気合いとともに、アルテアが中段から槍を突き出した。

タデアスは慌てる風もなく同時に動いて、穂先を

払った。何気ない動作である。

瞬間、アルテアが腰を落とした。体重を後ろにかけ、姿勢の崩れを防ぐ^{かっこう}恰好だ。

——ほう。

槍が接触したのは^{ひるまき}蛭巻の辺りである。蛭巻とは、槍の刃より少し下のところにあたる部位の名前で、蛭が巻きついたように見えるところから、その名がある。

無論、飾槍であるから蛭巻はついていないが、ちょうどその辺りの位置である。互いの槍が当たって硬い音がした、直後アルテアは体を後ろに傾けるようにして身勢を変化させたのだ。

アルテアの判断は正しい。タデアスの払いは、いくら何でも無いように見えても、実戦を幾度も潜り抜けた戦士の技である。

その払いには、必要にして充分なだけの効力が存在しているのだ。

タデアスが前に出た。アルテアは^さ退がらない。これも正解である。

退がれば^{くうげき}空隙ができるからだ。その空隙はタデアスのものである。

だから^ひ退いてはならない。

ただし退かなかったからといって、この試合の結果が変わるとも思えなかった。

ここまでの展開から既に、グレシオスには先の予想がついていた。

グレシオスの目から見て、二人の^{ぎりょう}技倆にはかなりの差があると判ったからである。

払った流れから止まることなく、二人は槍を構えてぶつかった。再び、槍が当たる硬い音がした。

踏ん張ることなく、タデアスはアルテアの側面に回り込んだ。

そのままアルテアの首に腕を回すと、背中を使って投げ飛ばした。

足から落ちるように大きく、ゆっくりと落としたが、軽く背中を打ってアルテアは苦痛のうめきを上げた。

おそらくアルテアには、今、何が起こったのか理解できていないであろう。

技倆の差とはそうしたものである。

「なかなかですな」

背を伸ばして言うタデアスに、グレシオスも頷いた。

^{はため}傍目から見ればタデアスの一方的な勝利に見えるかも知れぬが、内実の駆け引きや技法などを見て取れる眼が有れば、アルテアの技倆が決して低くないことが^{うかが}窺えるはずである。

つまり意想外にアルテアの腕は高いと云えた。

この先実戦を重ねれば、かなりの使い手になるだろう。

タデアスが手を貸してアルテアを立たせてやった。手加減をしたとは言え、下は地面である。なかなか痛かったに違いない。

実戦ならばもっと低く投げる。

本来ならば、あの投げで重傷を負わせるのだ。背骨が折れても、おかしくはないのである。

「……タデアス殿こそお見事でした」

アルテアが腰の後ろを^{さす}摩りながら言った。どうやら口が減らぬ性分のものである。

一言言われると、必ず一言返事をする性格と言っても良いかも知れぬ。

「神官はいい腕をしている」

グレシオスは褒めた。事実である。

「だが戦場において、実力を発揮できるかどうかは判らぬ。昔から「一度の実戦は、百度の稽古に優る」と言ってな。神官が常のとおり腕を示せるかどうかと言うと、かなり難しいであろうな」

「ですが――」

「口返したい気持ちは判らぬでもないが、^{ういじん}初陣で実力を発揮できる者などおらぬよ」

グレシオスが笑って言うと、アルテアは^{がんしゅう}含羞を感じさせる様子で視線を下げた。

「ともあれ神官の腕は惜^おしい」

怪我人を治療する方の腕も惜しい。

どうしたものか。

「取り敢えず戦闘に出てもらっては如何^{いかが}でしょう
か？」

タデアスが提案した。

「怪我人が多くなったり、戦況が変化した場合に
は、館や神殿の方に戻ってもらうということでは？」

神殿は一次治療院として使用する予定である。
ジャグルの進入^{いちじる}著しくなれば、使えなくなることも
想定してある。

その際には場をグレシオスの館に移動させ、そこ
で治療を行なうことに決めてある。

つまりはグレシオスの館が本部治療院になるわけ
で、重傷者は最初からこちらに運ぶ^{てはず}手筈になっている
のだ。

神殿と館とを結ぶ坂が、あらゆる意味での連絡路
になるわけである。

「そうだな。お前の言うとおりでろう」

グレシオスは頷いた。

「神官には戦闘に参加してもらうことにする。長神
官殿の下につくのが良からう」

共に戦うならば、日常も共に過ごしている相手の

方が、良いだろうと考えたからである。

「ありがとうございます！」

アルテアは嬉しげに眼を輝かせた。闘志は十分のようだったが、それも初陣という立場ゆえのことだろう。

出来れば死なせたくない。

「無理はするなよ」

その気持ちが陳腐^{ちんぷ}な言葉となって、グレシオスの唇から滑り出た。

初陣の者にかけるべき言葉をかけてやったのだ、とも思えるが、どこか陳腐な気がした。

こう言ったところで血氣^{はや}に逸る者の行動を押し止められるとは限らないし、何より、今回の戦いは厳しいものになるだろうから、気休めの言葉など、悠長さでしかないような気がしたのだ。

とはいえまずは慣例のようなものである。

「はい」

アルテアは頷くと、一礼して去っていった。

広場にはグレシオスとタデアスだけが残された。

「さて、儂は武具の様子を見ることとしよう」

「では私は柵の修繕が終わりましたら、すぐに館に帰参^{きさん}致します」

グレシオスは物見櫓^{ものみやぐら}の方を指差した。

「その前にヨルスに言って、誰か見張りを物見櫓に

上らせておけ。ジャグルの姿が見えたらすぐに鉦^{かね}を叩かせるのだ。見張りのために矢禦^{やふせ}ぎの板^{めく}を周らして、脱出用の綱を張る必要もあるし、武器と防寒具も忘れずに櫓の上に運んでおけ」

「かしこまりました。ヨルスにそう伝えておきます」

「それと村の入口の先に二匹のジャグルが死んでおるはずだから、装備^はを剥いでこい。使える物があるかも知れぬ」

「はい。私が行って見てまいります」

「頼むぞ」

タデアスに指示を告げると、グレシオスもまた広場を後にした。

館に戻ると、早くも避難者達が集まり始めていた。なかなかの数であるが、老人病人、子供達だけなので、なんとかなるだろう。

「使ってはいけない部屋などございますでしょうか？」

モイラスが尋ねてきた。

「全ての部屋を使って構わぬ」

「よろしいのですか？」

「この戦いを乗り越えられねば、みな死ぬと言ったはずだ。細かいことなど気にする余裕はない」

「はあ……」

「今、武器を運び出す。それが済んだら武器庫も使って良い」

全ての部屋を使っても、負傷者が担ぎ込まれてくるようになれば、窮屈に感じるようになるだろう。

「とはいえ考え無しに部屋を割り振ってはならぬぞ。戦いが始まれば怪我人がここに運ばれてくる。その者達を寝かせる場所や、薬を煮る場所も必要だ。それをよく考えてやるのだ」

「かしこまりました」

「あとでアルテアにも手伝いに来させるが、あれには戦いにも参加してもらうことになったゆえ、ここはお前一人で管掌することになると思え」

「ええっ!？」

「驚くことはあるまい。人手が足らぬのだ。お前がやるしかないのだぞ」

モイラスは何とも情けない顔をした。子供が一人貼りついていて、神官衣の腰の辺りをつかんでいる。それがまた情けなさを強調していた。

「……この子等を守れるのはお前だということよ」

子供の頭を撫でてやりながら、グレシオスは呟いた。

「頼むぞ」

モイラスは返答をしなかったが、こちらの言いたいことは伝わったと思った。

事態を理解できぬほど愚かな男ではないのだ。

武器庫に入った。昨夜は回想に耽^{ふけ}けるだけで、兜^{かぶと}を見るのみに終わってしまっている。全体を簡単に見ておく必要はあるだろう。

鎧兜に盾などは、己とタデアスの科^{しな}しかないから、考える必要はない。

問題は槍と弓、矢、そして刀である。

武器は村の各所に分割して置いておくつもりである。

槍は急拵^{ごしら}えの物が大分混ざるが、とにかく数を用意する。矢はグレシオスが保存してある分だけで足りるであろう。

刀は扱いが難しいので心得のある者にしか支給しない。村人の主武器は槍である。

槍ならば、心得がない者でもある程度には扱える見込みがある。だが刀は難しい。

メグレイスと、あとはアルテアが刀を扱えるかもしれないが、他の者は無理であろう。軍役に就^ついた経験のある者がいれば別であるが。

どちらにしろ刀がそうはあるとは思えぬし、もし村人が持っているようなら、使える者に優先的に回すよう教えてやらねばならない。頼るべきは槍だ。

加えて戦闘では、一つの武器を使い続けるよりも、むしろ武器を次々に取り替えながら戦うと考え

た方がいい。

だからといって、全ての武器が使い捨てだというわけではない。

グレシオスのセウエルス宗家にはガラドギアという聖槍が伝わっているし、他の七宗家でも、同じような武具や祭器が伝わっているのだ。

それらは聖遺物と呼ばれている。神々の力が宿った聖なるものであり、いずれも超常の力を有している。

無論、どの聖遺物もそれを有する氏族にとっての宝であるから、祭礼以外では大きな事件でも起きない限り持ち出されることはない。

しかしそこまで行かずとも大事にされている武器、道具はあるわけで、それは貴族の家に限らないのである。

個人の場合にしてもそれは同様で、一つの武器や道具を大切にすることがどうかは、持ち主の気持ちの問題である。

そういうことを全て含めた上で、戦場での真理を陳べれば、臨機応変ということになるだろう。

例えば、突き刺した槍が抜けなくなったとする。ならばさっさと手を放して、刀で討ち留めれば良い。槍を回収するのは屍体からの方が安全ではないか。

無論そういった判断の^{だとう}妥当さも、周囲の状況その他によって、猫の目の如く変わるわけである。

いわば突発的な事態に対し、^{いか}如何に早く、正確に対応できるかということであるが、これが中々難しい。何より、口では説明しがたいし、説明したところで無駄なことが多い。

戦場では^{たやす}容易く、素人は^{おちい}恐慌状態に陥ってしまうからだ。

昼食後に村人を広場に集め、生き残るための簡単な心得、規律を教えるつもりではあるが、そういったものは訓練並びに実戦を通して血肉化するものである。

口で言ったところで、どこまで役立つかは判らなかった。

戦い自体が移動を含むものである以上、村のあちこちに武器を置いておき、それらを^{てきぎ}適宜使い分ける方が良いのは確かだ。

当然、敵から武器を奪うということもあるし、仲間の武器を拾って戦うということもあり得るだろう。

しかし考えれば考えるほど、村人達がどこまで行動できるのかが不安になってくる。

出来るならば一人たりとも死なせたくない。

誰にも死んで欲しくはない。

全ての村人と親しくつき合っていたわけではないが、誰もがグレシオスに対して敬意を払い、大切にしてくれたのだ。

グレシオスは溜息^{ためいき}を吐^ついた。これから戦いが始まるというのに、気弱なことだと自分でも思った。だがこうして一人になると、戦いの高揚感よりも、支^{かたむ}払うべき犠牲へと思いが傾いてしまうのだ。

弓は全て横に寝かせてある。これはローゼンディアの定法であり、使わない時は、弓は横にして休ませる決まりなのだ。

矢は全て矢箱^{おさ}に収めてある。おそらくこれで十分であると思われるが、足りなくなることもあるかもしれない。

その時は、周囲にある落ち矢を拾いながら戦うか、殺したジャグルから奪うかするわけだが、いずれにしてもそうそう起こる事態とは思えない。ここにある分を皆に分配すれば、それで足りるであろう。

問題はむしろ弓である。先程男に貸し出してしまったため、己は他の弓を使わなくてはならない。

いささか早計だったかも知れぬ。他の弓を貸しておけば良かったかもしれない。

そう考えて、すぐに己の考えに苦笑した。あの弓は長いこと武器庫の中で休ませてあったものだ。

男が持ち出さなければ、再び使われることはなかったかもしれないのだ。

ところが手に持ってみたらまだまだ使えた。己の気弱さが愚かしい。

しかしだからといってあの弓を使うべきとも限らない。

ナウロス村に来てからは、あの弓を引いたのは先程が初めてであるし、長いこと寝かせてあった武具をいきなり使うというのは微妙な気がする。他に選択肢がないのならばまだしも、今は日常使っている弓がある。それでいいではないか。

グレシオスは^{ひとはり}一張だけ^{つる}弦を張ってある弓に目を向けた。その近くには幾つかの弓が弦を外して休ませてあった。

ふと休ませてある中で一番の強弓に目がとまった。あの強弓を使えたのだから、この弓でも十分引けるはずである。

子供じみた挑戦心を感じた。^{いたずらごころ}悪戯心にも似た気持ちだ。

弓に手を伸ばしかけ、しかし途中で手を止めた。腕を下げた。

^{あきら}諦めで手を引いたのではなかった。自分は十分にこの弓でも引けるだろう。扱えるだろう。

だが今はそんな^{みえ}見栄を張っているべき時ではな

い。

日常狩りに使う弓でも十分に戦いには役立つのだ。わざわざ馴れぬ弓を持ち出そうなど、幼稚な自己満足でしかない。

グレシオスは再び苦笑した。未熟な話よ、と思った。

我ながら何ということか。多少^{りよりよく}膂力を示したからといって、もういい気になっておる。いい歳をしておきながら何たることか。

まるで^{けっき}血気に^{はや}逸る若者のようではないか。

使い慣れた弓を取った。指先で弦を^{はじ}弾いてみた。

問題ない。

弓はこれにしよう。

グレシオスは矢箱を開いた。武器庫で保存してあるにもかかわらず、矢は全て矢箱の中に入れてある。本来ならば同数ずつ束^{たば}ねられ、紐^{ひも}で括^{くく}られてあるのが普通だが、何時^{いつ}必要にならぬとも限らぬ、との考えから矢箱を用意したものである。

矢を^{やづつ}矢筒に盛る時には、二束^{そく}が基本である。

一束は十三^{せき}隻、つまり六手式に一隻を加えたものである。これが基本の単位となる。

どれだけ必要になるかは判らぬが、己は三束あれば十分であろう。

タデアスの分をやはり三束引き、残りは全て弓兵

隊に持たせるつもりであった。

刀を刀架^{とうか}から外し、鞘^{さや}を払ってみた。刀身は磨き上げられた輝きを放った。無論^{さび}錆は浮いていない。

数度素振りをくれてみた。風を切る音が鋭く鳴った。

掌^{てのひら}に柄^{つか}が吸いつくような感触がある。刀身の重みが心地よく、手首には柔らかさがあった。

刀を抜くのは久しぶりだが、これなら十分振るえそうである。

刀を刀架に戻し、槍を手にとった。

家伝の聖槍ガラドギアは、今はヘクトリアスの手にある。

ここにあるのはごく普通の槍であるが、どれもタデアスと二人で、手に持った感じを慎重に確かめた物ばかりである。投げるはもちろん、突いたり払ったりするのも、勝手が良い槍ばかりである。

ただ村人達にとっても、使い心地がよい槍であるかどうかは判らぬ。

自分とタデアスの使う分を除き、ここにある予備の槍と、祭り用の槍は全て対ゴロド用の投槍に回したい。

村人達の槍は、できれば全て自前が希望であるが、さてどうなるか。

槍は屋内で振り回すわけにはいかぬ。槍架から外

したものの、すぐに元に戻した。

長年の習慣から機械的に検査をする癖がついているのか、それとも内心の興奮に、知らず、手が応じてしまったのかは判らぬが、我ながら間抜けである。

ともあれ、武器はどれも問題はなさそうだった。

後は防具であるが、リオブは己とタデアスの物しかないし、鎧立てに飾りつけてあるので調べるのは簡単だった。

裏地を確かめ、鎖の具合を全体にわたって見たが、問題はなかった。

盾と兜も手に取ってみた。こちらも問題はなかった。

今となってみると、リオブはともかくとして盾と兜だけは、もう少し予備の物があっても良かったと思えた。

村人に回せる予備の分が多少でもあれば、それで武装を得られる者がいるかも知れぬからである。

たかだかこの武器庫にある分では、武具検査など、対して時間は掛からない。

タデアスの盾を戻すと、武具検査は終わった。

今回は随分と久しぶりにタデアスの分まで見たが、普段ならば、己の科^{しな}だけを見て終わるものである。

グレシオスは若い時から、いつも自分の武具には注意してきた。具合に気を配り、状態に気を配り、大事に扱ってきた。

戦士たる者、己の身を守る武具に心を配るのは当然である。グレシオスはそう教えられてきたし、そう教えてきた。

ところが世の中には武具の検査を自分で行なわぬ貴族もいるらしい。

とんでもない話である。

貴族とは戦士であることと同じ意味であると言って良いから、そのような貴族はグレシオスからは理解しがたい存在であった。

矢の配分は後でイドナ達が来た時にやれば良い。槍や弓が足りない時にはここにある分を回すが、それはタデアスに任せることにしよう。

グレシオスは武器庫を後にした。

昼食までは村を回って適宜指示を出してきた。

あとは昼食後に簡単な戦闘上の注意を話さなければならぬ。

必要だと思えば、すべき事はいくらでもあった。

第七章 戦支度・二

昼食後、再び集まった村人達を前に、グレシオスは戦闘上の注意を授けた。

兵として戦いに参加しない者達まで集めたのは、万一ジャグルと遭遇してしまった時の対処法を兼ねているからだが、注意を授ければ有効であるかどうかと云えば、残念ながら疑問が残る。

現実的には、武器を持たぬ村人がジャグルに出くわしたら、虐殺されるだけであろう。

だが何も知らぬよりは、知っていた方がましであるのは確かだし、一度に集まった時に伝えておけば手間もかからない。

連絡や、怪我人の搬送^{はんそう}、その他の理由などで村を移動しなければならなくなった時、グレシオスが教えておいたことが、命を拾うに役立つかもしれないのである。

まず戦いに参加せぬ者は、避難先、つまりグレシオスの館から一步も出てはならない。

人手が必要になるとか、連絡などで村に降りる時には、できるだけ物陰伝いに移動せよ。

ジャグルやゴロドに出くわしたら一目散に逃げよ。隠れよ。矢で狙われることも考えて出鱈目^{でたらめ}に走れ。

そして館に戻る時にも、できるだけ目立たぬようにせよ。

もし館に戦えぬ者達が避難していることが、ジャグルどもに知れば、館の者達は皆殺しにされると思え。

次に戦いに参加する者達についてであるが、敵にゴロドがいた場合。

第一に、ゴロドには絶対に近づいてはならぬ。

ゴロドを斃^{たお}す時には儂^{わし}自身が指揮^とを執り、正面に立つので、それまでは決して攻撃を仕掛けてはならない。

つまりお前達が相手にするのは、ジャグルが中心であると思って良い。

それゆえジャグルについて、いくつか注意すべき点を挙げておく。

まずジャグル達は怪力である。子供のような背丈をしているが、甘く見てはいけない。

奴らは暴虐神ゴルドスの加護の元にある。並の大人を凌^{しの}ぐ腕力を持っているので、決して力比べに陥^{おちい}ってはならない。

そのためにも槍で突くことだけを考えよ。斬り合いはできるだけ避けよ。

そして戦いに関しては、必ず複数で一匹のジャグルにあたるようにせよ。

突きかかる前に呼吸を合わせて、二人で一匹のジャグルを突け。同時に突け。さすれば避けられぬ。どちらかが当たる。その際は別々の部位を狙うようにせよ。

一人は胴体、もう一人は腰から下を狙え。もし胴より上を狙うならば首の根本を突け。

脇^{わき}を狙うのも良いが、的が小さいゆえ頭は狙ってはならぬ。

重ねて言うが、胴体を突くことを心がけよ。

上手く突ければ、死なぬまでも相当に弱めることができるはずだ。それから^{うちと}討留めよ。

もしも武器を失ったときは地面に落ちている武器を拾え。

何も武器が落ちていないときは逃げよ。

そして家の角に石積みをしておく。その石を拾って投げろ。

石投げはお前達が思っているよりも有効な攻撃になる。棒きれで打ち掛かるくらいならば石を投げる。

間違ってもジャグルと一対一になってはならぬ。その時は逃げ出せ。

複数のジャグルと一人で向きあうなど論外である。

それからグレシオスは武器防具の確認をした。武

器は鍛冶屋のダイオンが頑張った結果もあり、戦える者達にはほぼ全員に槍が行き渡っていた。足りない分は館の予備の槍を渡した。

そこでまだ穂先がついていない祭り用の飾槍については、できるだけ身の細い、投槍向きの穂先をつけるように命じた。ゴロド対策である。

鎧の方は半ば予想していたとはいえ、悲惨なものであった。

メグレイスと他は、あと二人しか鎧を持ってはいなかった。しかもリオプはメグレイスだけであり、残りは皮鎧であった。

「鎧を持たぬ者達は毛皮を代わりに身に着けよ」

グレシオスはそう命じた。

獣皮というのは中々に防禦力が高く、昔から「鎧のない時は毛皮をまとえ」と言われているのである。重ねて着込めば、結構な防具となるのだった。

最後に戦いの策である。

まずは門を閉じてジャグルどもを待ち構える。

奴らが現れたら門上から矢を浴びせるが、これは
おとり
罠である。

ジャグル達を村の中に引き込むことが目的である。

グレシオスがそう言うと、村人の間に、やや不安げな空気が流れた。

「大丈夫だ。ちゃんと弓兵を伏せておく。奴らを罠わなに嵌はめるわけよ」

村人達は不安を拭ぬぐいきれぬ様子であったが、他に方法はない。

正門には、守るに必要なだけな守備力は期待できなかったし、ジャグルが正門を避けたり、火をかけたりしてきた場合はどうしようもない。

そもそもゴロドがいれば、この村の正門など一撃で粉碎されてしまう。

ならば最初から罠わなに使うという考えである。

ともあれ事実上の正門——守るべき重要地点は決まっている。グレシオスの館から降ってきた坂の入口である。ここを突破されたら、というよりもこの先へとジャグル達が興味を向けたら大変なことになる。

館には、戦えぬ者達が避難しているのだ。

それゆえ村の中を戦場にして、移動しながら戦うということには、二つの目的があるわけだ。

一つには、門を固めて籠城ろうじょうするという手が使えないということの逆利用であり、もう一つには、村内を動き回ることによって真の防衛場所を隠蔽いんぺいするということである。

どちらも現状の不利をそのまま受け入れて、利用できぬかと考えた結果の、苦し紛まぎれの策ではあった

が、他に手はないように思えた。

「皆よく聞くように。戦いにおいて最も重要なのは冷静さだ。我を失わぬよう注意せよ。冷静さを失った者から死ぬと心得よ。怯^{おび}えも、その裏返しの勇氣にも注意せよ。心が己の手綱^{たづな}を失ったとき、オルディヌスはお前達の元を訪れる。それを忘れるな」

グレシオスが厳しく言い放つと、村人の間に緊張が走ったようだった。

それまで漂^{ただよ}っていた不安と興奮が混じったような、雑然とした雰囲気が無くなり、代わって重苦しいような空気が流れた。

死者を連れ去るオルディヌスは、死の神ネストスの使いである。

ローゼンディア人ならば、誰もが死に際してオルディヌスの訪れを願うものだが、死そのものには、やはり恐れを抱いているのが普通である。

オルディヌスが護^{まも}り導くのは善なる者の魂だけだ。

オルディヌスは悪霊を打ち砕き、善なる者の魂を守る者であるが、同時に、人にその生の終わりを告げる者でもある。

それゆえに、人はオルディヌスに対して、相反する二つの感情を持たざるを得ない。

恐れと喜び、歓迎と忌避^{きひ}——ローゼンディアの

人々にとって、死の御使^{みつか}いオルディヌスは畏懼^{いく}される存在なのだ。

「儂^{わし}は誰一人として死んで欲しくない。このような戦いでお前達を死なせたくないのだ」

この村にいる者は、誰一人としてジャグルに殺されて良い者はない。

そのような災厄に見舞われねばならぬ者など、一人もおるはずがない。

「だから呉々^{くれぐれ}も、儂の注意してきたことを忘れずに。決して一人でジャグルと向きあってはならぬ。必ず複数でもってあたるのだ。常に心を澄ませ、逸^{はや}りや恐れに捕らわれてはならぬ」

村人は黙ってグレシオスの話を聞いていた。

グレシオスが壇を下りると、代わってヨルスが壇に上がった。

あらかじめタデアス、メグレイスとグレシオスとで決めておいた部隊の割り振りを、読み上げるためだ。

ヨルスが名前を呼ぶ順に従って、村人はゆるやかに広場の中を移動した。

戦いに直接参加できる数は三十二人、内十三人が女性であり、全体の内では六人が十四歳に達していなかった。

これにタデアスとメグレイス、さらにアルテー

ア、そして己を加えて三十六人。

それでもやはり、^{こころもと}心許ない戦力であることは変わらない。

兵の規模としてみた場合、^{せいぜい}精々三十匹前後のジャグルの相手が精一杯ではなかろうか。

そしてこの顔ぶれでは兵として計算できないので、実際に相手をできるジャグルの数はそれ以下ということになる。

——この内の幾人が死ぬか。

どうしてもグレシオスはそのことを考えてしまう。

「直接武器を取る者は残り、後の者たちは仕事に戻れ。戦わぬ者は全ての仕事が終わったら大殿の御館に避難せよ」

その言葉を最後にヨルスは壇を下りた。村人達は兵になる者を除いて、広場を去っていった。

広場には三十六人だけが残った。この村の、全兵力である。

この者達には具体的な注意、グレシオスが考えている戦いの流れを、話しておかねばならない。

「イドナ」

「はいっ！」

すぐに元気な声が返ってきた。緊張と興奮が感じられた。

「気を静めよ。落ちつけ」

「はい！」

返事からすると、落ちつけといっても無駄なようである。

グレシオスは軽い溜息を吐いた。

「奮^{ふる}い立つのは構わぬが、もう少し落ちつかぬか。

お前には弓隊を指揮してもらわなければならぬ。そんなに勇^{いさ}んでいては、ジャグルの前に誤^{あやま}って儂等を射ることになるかも知れぬぞ」

「そんなことはありませんです」

イドナは首を振った。

戦場では往々^{おうおう}にして、誤って味方を攻撃するということが起こりうる。

特に興奮状態にあったりすれば起きやすくなる。

ましてやイドナは正規の兵ではない。

グレシオス達がジャグルを引き込んできても、間違っ^{まちが}ってグレシオス達に矢を射かけてこないとは言い切れないのである。

恐ろしい話ではあるが、他に適任の者がない。イドナの指揮を信じてやるしかないのである。

「くれぐれも儂等を射らないでくれよ」

タデアスがぞっとしないかのように、情けない口調で言った。

無論、場の緊張^{ほぐ}を解すためのものであろう。

「人とジャグルを見間違えるようなことはねえです」

イドナが怒ったように否定した。

「しかし暗闇だからのう。芝居とはいえ、儂と大殿は這々の体で走ってくるわけだし、間違いがないとは言えぬのではないか？」

タデアスは疑わしそうな目でイドナを見た。

「そういえばイドナは山犬と狐を間違えて射たことがあったな」

グレシオスが口を挟んだ。

「なんと！ さすれば儂は、あの地虫どもと間違えられる虞が十分にありますな」

「まあ、お前がどこまで不恰好に走ってくるかによるであろう」

グレシオスが澄まして言うと、タデアスは天を仰いだ。

村人の間から笑いが起こった。

「間違えねえです！」

イドナが顔を赤くして声を張り上げた。

「儂はお前を信頼しておるが、くれぐれも落ちつくようにな。タデアスが言ったように儂等は暗闇の中を走ってくることになる。すぐ後をジャグルが追ってくるであろう。誤つことなくジャグルを射るのだぞ」

「はい」

^{うなず}頷いたイドナを、グレシオスはじっと見つめた。

澄んだ目をしている。勇んではいても、芯には冷静なものがあるように見えた。

これなら大丈夫だろう。いや、元より他の選択肢はない。

イドナを信頼すると決めたのは己なのだ。それが間違いでないと信じよう。

グレシオスは村人を見渡した。

これからさらに^{くわ}精しく丁寧に、戦う上での注意点、説明を^{さず}授けなければならない。

殺し合いの注意点についてはもう教えた。

あとは兵として動く上で気をつけるべき点、重要な事柄である。

「ジャグルどもが襲ってくるのは早ければ夕方、おそらく日が沈んでからであろう。連中は夜目が利くゆえ、その利を活かそうとするはずだ」

対してこちらは目が見えぬ。人は光の元で生活するよう、神々によって定められた存在だからだ。

昼間に戦えれば問題はないが、今回のように夜戦になることもあるわけで、^{あか}燈りをどう確保するかというのは、ジャグルを相手にする場合はかなり重要な点であった。

^{うかつ}迂闊に手元に燈りを持てば、恰好の標的になるこ

ともあるのだ。

「ゆえに村内の要所にはすべて^{かがりび}篝火を置くことにする。こちらの目を確保しなければならぬからな。それと篝火の^{そば}傍に伏せてはならぬぞ。火の近くは目立つゆえ、恰好の標的になる。^{ひそ}潜む時にも必ず火から離れ、闇の中に身を隠せ。あとでヨルスから説明があるだろうが、幾人かはジャグルを待ち伏せて家の陰に潜むことになる。忘れずに注意するのだぞ。火はものの姿を浮き立たせる。お前達が思う以上に、それはよく見える。絶対に篝火の傍に身を置いてはならぬ。常に篝火を見張るような位置に身を置くのだぞ」

闇の中では灯りはとても目立つ。

その輝きは、遙か遠くからでも目にすることができる。

夜間の目印として火を利用するのは、海に住まう人々だけではない。

平原を駆けるイオルテスの人間とて、その力を知っているのだ。

だがこれが夜戦となれば、その光の強さゆえの危険さをも知らねばならない。

グレシオスはそれを伝えたかった。

「しかし、篝火をあまり多くするのも考えものではないでしょうか？ 奴らに火を放たれた場合も考え

ませぬと……」

アルテアが危惧^{きぐ}するように云った。

ある意味、常識的な心配だと言えたが、今回はほとんど問題にならない事柄であった。

「構わぬ。どのみちそうそう火がつくものではない」

ゆえにグレシオスは、その意見をあっさりと切り捨てた。

辺りには雪が積もっている。家々の屋根にも、道にも雪が拡がっている。

火矢を射込まれた程度では、簡単に火はつくまい。

家屋が火に吞まれ、それが隣家に燃え移るといった事態は、そうは起きないだろう。

しかしジャグルどもが篝火を使って、順々に家に火を付けていく、などという真似をするならば、村が火に包まれる恐れはある。

無論、そのような真似はさせぬが、この問題を無視するのはそれだけではない。

そんなことを考えていられる状況ではないからなのだ。

「万一、火が着いたとしても構わぬよ。我等が使う建物の数は決まっておるし、結果として丘上の館さえ残っておればよい」

グレシオスは言ったが、アルテアは納得できぬようだった。

「戦いがそれほど大規模にはならぬ、と大殿は仰おっしゃつておられるのだよ」

メグレイスが説明を加えた。

戦闘がそれほど大規模なものではないという意味である。

こちらではジャグルは精せいぜい々三十匹との予想である。それで戦いの最中、火を着けて廻られてもたかは知れているし、そもそもその数では戦い自体が、長くは続かないであろう。

決着を求めるならば、戦いは早く終結するはずである。

もちろんそんなことはしない。何故なら早期決戦を求めれば、結果はこちらの全滅と分かりきっているからだ。

ギルテからの援軍頼みなのである。

できるだけ長く持ち堪こたえるように戦う。

だがそれでも、仮にジャグルが途中で兵を退ひき、再度攻めてくるといような真似をしたとしても、二度目の攻撃の際には決着がつくはずである。

だから村の建物のことをあまり考える余裕はないし、意味もないのである。

必要な分だけ無事であれば良い。

こちらとしても、村の中央にある神殿とヨルスの館以外は使うつもりはない。

それ以外の家は全て空家にしてあり、大切な道具なども運び出させてあった。

これらの家は戦いの間、いざというときに逃げ込んだり、ジャグルを待ち伏せたりするする為には使うが、本格的に^よ拠って戦うことを想定してはいない。

だからと言ってそれらの家が燃やされ、破壊されてもよいわけではないが、何よりも大切なのは村人の命である。

そのためにはあらゆる手立てを^っ盡くす。

家も道具も換えがきくが、人の命はそういかぬのだ。

「村人の命が助かるのならば、家など幾ら燃えても構わぬ」

グレシオスが言うと、

「ですが戦の後のことも考えるべきではないでしょうか。村人には生活があるのです」

アルテアが^{しごく}至極まっとうなことを言った。

別段不快感はなかったが、グレシオスとの身分差を考えると、かなり^{ぶしっ}不躰けな態度である。

案の定、メグレイスが渋い顔をした。

アルテアを^{しか}叱るのは簡単であるが、ここはやは

り、彼女にも判るように話してやる必要があるだろう。

そういえば先程ダイオンも同じようなことを言った。

それを思いだして、グレシオスは苦笑した。

「生き残れるかどうかも判らぬのに、戦^{いくさご}後のことを考えるのか？」

「何も考えずに戦うよりは良いと考えます」

真剣な目をグレシオスに向けている。メグレイスが横から制して黙らせようとするが、アルテアは言葉を続けた。

「戦いに勝っても、住む家が失われたのでは苦労することになります。安易に家屋の犠牲を認めるような発言はしないで戴^{いただ}きたいのです」

「神官は随分と自信家であるな」

やはり、実際の戦場を踏んでいない者は楽天的である。

いやむしろ現実を認識する能力に、著^{いちじる}しく欠けていると言うべきか。

「では神官は、儂が何も考えずに指示を出していると思うのかな？」

「いえ、そのようなことは……」

アルテアは口ごもった。

「儂の見るところ、この戦いは厳しいぞ」

言った。後はどこまで話すか、である。

全てを包み隠さず教えるわけにはいかない。本音を語れば、村人達は耐えられないだろう。

絶望に近い気持ちの中で戦いを迎えることになる。それは避けねばならない。

「ゴロドがいれば門は一撃で碎かれるであろう。家屋も容易く突き毀されるであろう。それに加えてジャグルどもの相手をせねばならん。陣を構えての戦という規模でもないゆえ、纏まった動きは取れん。おそらくほとんど、出会い頭の戦いになる。

銘々が目の前の敵と切り結ぶだけで精一杯であろう。乱戦になると言っても良い。しかも逃げ回りながらのだ。他のことに構っておる余裕など持てぬよ。持てるとすれば歴戦の戦士だが、まさかお主ら、己を指して歴戦の戦士だなどと言うつもりはあるまい？」

グレシオスはいったん言葉を切った。

村人を見渡すと、目があつた者の幾人かが俯いた。

責めるつもりがあつて言ったわけではないが、仕方ない反応だとも思った。

「ゆえに家屋敷など、辺りに構っておられるとは思えぬし、そんな余計なことを考えているようでは生き残れぬだろう。お前達が考えているよりも激し

く、厳しい戦いになるぞ」

これでまだ何か言う様であれば、少し厳しい言葉を与えねばならない。

アルテアを含めて、村人の間に硬い表情が浮かんで見えた。

皆、黙っていた。

「誰もが生き残れるわけではないであろう。何人が犠牲になるかは分からぬが、少ない人数ではあるまい。つまり儂も、神官、お主も含めて全ての者に、死が訪れるかもしれぬわけだ。そんな戦いを前にしているというに、もう勝ったつもりになり、後のことを考えろとお前は言うのか。神官は誰もが生き残れると考えているのだな」

「いえ……」

「違わぬ。命が懸かった戦いを前に、住む家、着る服の心配もあるまい。そんなものは現実を見据えた判断とは云えぬ。今すべきことは全ての力を注ぎ、生き残るための備えをすることであろう。家は建て直せばよい。服も織ればよい。だが人の命に換えはきかぬ。取り戻せぬのだ」

「……大殿おっしゃの仰るとおりでございます」

アルテアは目をつむ瞑り、うめ呻くようにつぶや呟いた。恥じ、後悔している様子であった。

「分かればよい。皆もそうだ。余計なことは考える

な。生き延びられれば、後はどうとでもなると思え」

村人達は無言で頷いた。幾人かは俯いたままである。

士気を考えると不安な様子であるが、この程度で落ち込まれるようでは、先が思いやられる。

「万一、家を失う者が出た場合には儂の館を使って良い。着る物も、食糧も館にある物を使用して構わぬ」

グレシオスが言うと、皆が驚いたような顔をした。タデアスもである。

「新しく家が建つまでの間は、儂はギルテに戻ることにするから心配は要^いらぬ。ゆえに無用な心配をするな。己が生き残ることだけを考えて戦え」

「その……お宜^{よろ}しいのですか？」

メグレイスが不安げに尋ねてきた。

「構わん。元々村人を守るために始める戦いよ、細かいことを気にしてはいられぬ」

使える物は全て使えばいいのだ。

生き残るために。ただそれだけのために。

「己が今言ったことを否定するようだがな。そういうわけで、儂とて後のことをまるきり考えていないわけではない。だがな、もう一度重ねるが、後のことを考えてはならぬ。この戦いにそんな余裕はな

い。全てを生き残ることに傾けよ」

ぴしりと言い放った。

これでもう、村人達に言うべきことはない。

教えられることはない。

あとは戦況に合わせて、的確な指示を下せるよう努力するだけである。

「あとはメグレイスとヨルスに任せる。受け持ちと、任務の内容を説明しておくように」

メグレイスが深く頭を下げた。

「門の様子を御覧になりますか？」

タデアスが言った。先程タデアスが館に戻ってきた時に、門の修復具合を聞かされてはいたが、一度自分の目で確認しておくべきではある。

当然のことではあるが、急拵^{ごしら}えの防備であっても、手を抜くわけにはいかないのだ。

「判った。今行こう」

グレシオスはタデアスと並んで歩き出した。

背後でメグレイスが村人の名を呼び始めた。まずは弓隊から説明をするつもりのものである。

「どうやら保ちそうですな」

タデアスが空を見上げて言った。

「まだ判らぬよ」

日射しはぼんやりしているし、雲の数がこれから増えてくれば判らない。雪は夕方から降り出すかも

しれなかった。

肌に触れる空気の気配からは、雪が降るかどうかは半々と感じられたが、どちらにせよ今日は寒い。

毛皮の上着を着込んでいるため、体の方は寒さを免^{まぬ}が^がはいるが、頬や額は寒気を受けてひんやりとしている。

二人とも、すでに^{いくさしょうぞく}戦装束に着替えていた。毛皮を脱げば、下は^{かたびら}戦用の帷子である。

そのままリオブを^{まと}纏^{すねあ}って^{すねあ}臍当てをつけ、カトールを着込めばいいだけの状態だった。

カトールは早い話が鎧の上から着る服である。元々鎧装束というものは革鎧を除けば大体が金属なので、暑さにも寒さにも弱いものなのだ。

その対策として生まれたのがカトールであり、要するに戦装束の一種である。

何でもその昔、ローゼンディア王国軍が南方アウラシールに出征した折に考案されたと言われているが定かではない。

それに防具は^{かさば}嵩張る上に重量がある。特にリオブは全ての重みが肩に集中するため、戦闘の直前になるまでは、下着の帷子だけで過ごすのが通例なのだ。

だから戦場の寒暑に応じて、このように毛皮を上に着たり、そのまま帷子だけでいたりするのであ

る。

もちろん、いざ戦闘装備になれば、長い時間をそのまま過ごすこともあるわけだが、できることならそれは遠慮したいと思う。

この歳で長時間、鎧姿で居るのはかなり厳しいであろうから。

重いだけでなく鉄の鎧は冷える。芯まで冷気を伝えてくる。

「よもや再び、戦装束に身を包むことになるとは思いませんでした」

タデアスが軽く晒^{わら}った。

「儂もだ」

タデアスもグレシオスも、戦装束になるのは久しぶりである。

気持ちが高揚しなかったわけではないが、考えていたほどには興奮しなかった。

もっと興奮するのではないかと思ったが。

今までの戦場に在った時と、同じような気持ちしかない。

静かな緊張感である。そこには僅^{わず}かな悲しみのような気分が混じっているのだが、それが何であるのかは解らない。

言葉にするのは難しい。

だがそれは、どこか遠い何かを見つめるのにも似

た思いである。

戦場に長くありすぎた所^{せい}為かも知れぬ。

己^すが磨り減ったという感覚はないが、気付かぬところで失い続けてきたものがあったのかもしれない。

これから生死を懸けた場に立つというのに、燃え盛るような熱気がまるでない。

だからといって気が^{ゆる}緩んでいるわけでもなく、静かな緊張を感じているのだ。

何が己をそうさせているのか、それはグレシオスにも解らなかった。

村の正門が見えてきた。

正門と言っても貧弱な物である。野盗対策というよりも、獣^よ避けの方が主眼なので仕方ない。

今さら言っても遅いが、ジャグルのことも考えておくべきではあったろう。

とはいうものの、ジャグルが群れを成して村を襲うなど滅多にあることではない。

備えが無くとも、これまた仕方ないと言えた。

正門は、^{いた}傷んである箇所を修繕した他は、簡単な足場をつけ足してあるだけだった。

一応、上に立って矢を射かけられるようになってはいるが、とても^よ拗って戦えるような代物ではない。

門近くに立っていた二軒の家は、板を剥がされ無残な有り様となっていたが、門と、門から延びている道に対しての方角には、かなりの板を残してあった。

見ると槍留やりどめが打ちつけてある。槍を立てかけられるようになっているのだ。

「こんなところに兵を伏せるのか？」

「はい。神殿の横手からイドナ達が矢を射かけますでしょう？」

「いや、そこまで引きよせては危険であろう。斬り合いの舞台が広場になるのは避けられまいが、弓による攻撃は奴らが広場に突入する直前に行ないたい」

「ではあの小屋でありますか？」

タデアスが示した小屋は、修繕用に半解体された家の近くにあった。

「うむ」

弓隊は全部で六人である。多少窮屈になるかもしれないが、上下に分けて列を組ませれば、あの位置からなら十分、通りを走り抜けるジャグルを狙えるのだ。

「ならば同時にここから走り出れば、策はより確実になりましょう」

その場合は背後からジャグルを攻撃する事にな

る。

悪くはない考えであるが、それとは別に、ジャグルどもの突進を正面から受け止めねばならない部隊が必要である。

タデアスの^{けんさく}献策を採用するならば、その事も考えて数を割り振らねばならない。

「何人、伏せる？」

グレシオスは尋ねた。

「四人。お許し下さいますか？」

タデアスが手を開いて答えた。

「……六人伏せよう。東西で三人ずつ。どうだ？」

「お^{よろ}宜しいのですか？」

「構わぬ。兵は一度に投入した方がよかろう」

戦力は一度に大量に、というのが基本である。

弓隊が六人、槍を持って伏せるのが六人となれば、合計十二人。これに己とタデアスと、あとは神殿の付近に待機していた兵達が加わることになる。

味方の数は三十六人である。だが全ての兵をここに配置するわけにはいかなかった。

全てのジャグルが一直線に、広場へ向かってくるとは限らないからだ。ばらばらに村に進入してきた場合を考えて対策せねばならない。

とはいえ一番多数のジャグルがここに向かってくるだろう。敵の全体を三十と考えて、少なくともその

半数、十五匹といったところか。

つまり最低でも、十五人はここに配置しなければならないわけだが、弓兵は白兵には参加しないゆえ、数に加えるわけにはいかない。

となると広場付近だけで二十一人を配置しなくてはならない。これは厳しい。

残りの十一人を遊撃に使い、村内を徘徊するジャグルを狩りたてねばならないからだ。

だがそうして十五人を確保したとしても、突入してくるジャグルどもを、防ぎ止められるかどうかは判らない。

推定とはいえ兵力は五分である。となれば素人集団であるこちらは明らかに不利だ。

果たして防ぎ止められるだろうか？

それは初撃で何匹、矢で仕留められるかにかかっているだろう。

兵力を減らすわけにはいかない。最低でも十五人は絶対に必要である。

加えて、敵にゴロドが居る場合を考えねばならない。かなり厳しい。というか無茶である。

「それとは別に神殿の脇に七人を潜ませる。儂とお前を加えて九、背後から突く六人をさらに加えて十五、これでほぼ考えられるジャグルの半数に達する」

「最低の線でありますな」

「うむ。だがこれ以上は割けまい」

答えると、タデアスが溜息を吐いた。

「まったくもって兵力が足りませぬ」

「まったくだな」

グレシオスは相鎚^{あいづち}を返した。

そうとしか言いようがない。

タデアスが再び天を見上げた。グレシオスも釣られて見上げる。相変わらず、頼りない空模様である。ますます気が滅^{めい}入った。

「無いものを強請^{ゆす}っても仕方ないとはいえ、天から兵でも降ってこないものですかなあ……」

タデアスが唐突に、間抜けな呟^{つぶや}きを口にした。

「別に兵でなくとも構いはしませぬ。それ、言い伝えにございましょう、太陽神^{アクション}のお持ちになるという『戦士の牙』、あれでも一向に差し支えはありませぬ」

「確かにそんなものがあれば、便利ではあるな」

神話に登場する『戦士の牙』は、神秘の武器であり、地に落ちるとたちまち屈強な戦士へと変わるのだった。

そんなものがあれば、今は喉^{のど}から手が出るほどに欲しいと言える。

「天はここのところ雪ばかり景気よく降らせており

ますが、たまには戦士の牙をですな、雪の代わりに降らせて頂きたい」

不満げに眉を寄せて言った。妙にわざとらしい仕草である。

口調もうんざりしたようなものではあったが、どこかおかしみが籠^{こも}っている。

イドナの時と同じく、やはり意識してやっているのであろう。

「せめてゼメレス公が坐^{いま}せば、我等も楽ができたかも知れませぬなあ」

不意にクレオラの名前が出てきた。正確にはクレオラは先代のゼメレス公になるが、グレシオスは敢えてタデアスの発言を修正しようとは思わなかった。

クレオラに最後に会ったのは何年前になるか……三年前か。

昨日からやけにベルガイアの戦いのことを思い出していたが、こうしてクレオラの名を聞くのは、何か不思議な感じがした。

「あの女は人使いが荒いぞ。我等に楽をさせてくれるとは思えぬ」

「そうでございましたな」

タデアスが含み笑いをした。

「エーダ様はお元気でございましょうか……」

エーダはグレシオスの娘である。ゼメレス族のハドリスの元に嫁いでいる。

クレオラの名が出た関係から発せられた言葉であろうが、エーダにつき随った騎士の中には、タデアスの息子ファイオスがいる。

下の息子である。上の息子オスティスは家督を継ぎ、現在はヘクトリアスの下に仕えている。

言葉の裏に寄り添っているタデアスの思いを感じて、グレシオスは済まない気持ちになった。

「元気であろうさ。お前の息子も来年は帰ってくるであろう。その時にエーダの話を知れば良いではないか」

「そういえばそうでしたな」

言われて初めて気付いたという風に、タデアスは肩を竦めた。

「あの馬鹿者めが帰ってくると思うと、今から気が重いですわい」

「何を言う。立派な息子ではないか」

「いやいや、大殿のお言葉は嬉しゅうございますが、間違ってもそのお言葉、あやつにお聞かせするのは御勘弁願いたい。どれだけ増長するかと思うと肝が冷えますわい」

タデアスは鼻の上に皺を寄せた。

「そうか。では言葉をかける時には気を付けるとし

よう」

グレシオスは^{ほほえ}微笑んだ。

「お願い致します」

まじめくさってタデアスは答えた。

「……そういえば、儂とクレオラとは親戚になるのだが、知っておるか？」

「は？ いや、それはもちろんそうでございますとも」

「はは、エーダのことではない。儂とクレオラとは七代^{さかのぼ}溯れば先祖が一致する。儂等は元々、遠い親戚なのよ」

「恥ずかしながら初耳であります」

「そうか。別に憶えんでも良いぞ」

「いえ……」

「似ていない、と言いたいのであろう？」

「そんなことはございません」

タデアスは慌てて否定した。

「気にするな。七代ともなれば、同族と言っても近いとは言えぬ。ましてやこれだけ領地が離れておれば、代を重ねる毎に血は遠ざかる。儂とクレオラとが似ておるはずもない」

「はあ……」

ベルガイアの戦いの後、クレオラは幾つかの戦^{いくさ}の指揮をしたが、戦場から離れたのは早かった。まだ

四十にならぬ内のことである。

王を含めて周囲の誰もが、彼女の才を惜^おしんで引き留めようとした。

だがクレオラの決心は変わらなかった。

兵権を王に返上すると、供回りを連れて、領地に帰ってしまったのである。

何か嫌なことがあったとか、問題が起こったりしたわけではない。

ゼメレス家は七宗家の一つである。

尊貴さにおいても実力においても、クレオラに対して文句を言える者など、あろうはずはなかったし、また言う者もなかったのだから。

誰もが天才の下で戦えることを誇りに思い、神に感謝していたのだ。グレシオスとてその一人である。

つまりクレオラの隠退は、政治的な事情を含んだものではない。単に彼女の、個人的な事情によるものである。

将軍を辞^じすにあたっての経緯を詳しくは聞いていないが、元々クレオラは、あまり戦に興味のある方ではなかったし、殺し合いに厭^{いや}気がさしたのかもしれない。

貴族としては珍しいと言えるが、クレオラは戦場を特別な目で見ることにはなかった。

戦うことに重要性を見いだしてはいなかった——いや、貴族社会での常識的な見方と、自分の価値観とを切り離していたと言うべきか。

「戦争は損」

というのがクレオラの口癖であった。グレシオスも実際に、その言葉を幾度も聞いたことがある。

貴族ならば普通望むであろう輝かしい大勝利や、それに伴う名誉といったものには、大して興味がない種類の人間だったのだ。

変わり者と言ってしまえば早いのだが、それで片付けられるほどの才能ではない。

ベルガイアの戦い以後も、旧大陸ではアウラシールの大連合軍を打ち破った。これも歴史的な一戦となった。

そして南方においてはダルメキアの救援に^{おもむ}赴き、ニムリとバラディアの連合軍を打ち破った。その背後にはレメンテムの元老院の影があったのだが、こちらも見事に勝利を^{おさ}収めた。

政治を含む謀略戦でもクレオラは偉才を発揮したのだ。

諸外国から『東の森の魔女』と恐れられるようになったのは、いつの頃からだっただろう。

周辺諸国にその名も高きバラディアの騎兵、アウラシールの魔術兵団、不死の兵士、東の王の戦象部

隊、火を噴く車、恐るべき流砂、まるで伝説のような戦いを、ローゼンディア軍はクレオラの指揮の下に戦い続けた。

そう、あの戦いを体験していない者達にあっては、まさしくあれらの戦は伝説となっているだろう。

よくぞ己も生き残ってきたと思う。

しかもクレオラがローゼンディア軍を率いていたのは、それほど長い期間ではなかった。

二十年にも満たない。

だがその間、ただの一度も敗れることなくローゼンディアに勝利を齎^{もた}らし続けた。

ゆえに誰もがクレオラの才を惜しんだ。

しかしクレオラは戦場で華々しく活躍するよりも、良き領主として、良き妻、良き母としての人生を選んだのだ。

それはそれで尊いことではなかろうか。

グレシオスはそう思うのだが、その事は別として、あれほどの名将でありながらクレオラは夫を騎士から選ぶことはなかった。

彼女が選んだ夫は、乗馬も槍投げも下手な人物であるばかりか、そもそも貴族でありながら騎士ではなかったのだ。

二人の結婚には誰もが驚いたが、要は本人同士が

幸福ならば、それで良いのである。

祝いの席にはグレシオスも駆けつけた。

己の結婚式であるというのに、クレオラの様子はいつもと変わらなかった。

あの考えの読めない、どこか眠そうな表情のまま最後まで通し、新郎と一緒に館の奥へと消えていったのだ。

見送った誰もが、妖精に化かされたような顔をしていた。

無論その中に己も入っていたであろうことは、グレシオスにも判っている。

二人の結婚生活がどうであるは知らぬが、おそらくは幸せなものであるに違いない。

その後悪い噂を聞くこともなく、現在ゼメレス家はクレオラの娘の代になっているからだ。

娘エーダが、ゼメレス族のハドリスに嫁ぐことになるまでは、クレオラとは疎遠^{そえん}であった。

なお娘婿のハドリスは貴族の出身ではあるが、騎士ではないし、戦士でもない。

強いて言えば獵師であるが、ここにはゼメレス族独特のしきたりというか伝統がある。

ゼメレス族は女性が家督を継ぐことで有名だが、男性の方もその他の氏族とは色々と違っているのだ。

とまれグレシオスは、長いことクレオラの消息を聞くこともなく過ごしていたわけである。

エーダの結婚を機に、久しぶりにクレオラに会った。

見事だった黒髪はすっかり白くなってしまっていたが、相変わらずきっちりと結い上げられており、しゃんと伸びた背筋も変わらなかった。

あの眠そうな表情も健在だった。

若い頃は戦の話くらいしかしなかったし、平常の会話はといえば、王都の戦勝祝いの席でぽつぽつと交わす程度でしかなかったのだが、この時は色々なことを話した。

もっとも話すのは主に妻であって、己は横に^{すわ}坐っていただけと言う方が正確だが。

無論、中心になったのはグレシオス夫婦とハドリスの両親であったが、もてなしは領主館で行なわれた。当然、クレオラ^{おやこ}母娘にも対面することになったわけである。

農作物の話から始まって子供や孫の話まで、沢山のことを話した。

恥ずかしい話ではあるが、エーダとハドリスが結婚しなければ、おそらくは知ることはなかったであろう事も判った。

クレオラの夫、ドウニマコス^は銀細工が巧みであ

るといふ。作品の数々を^{じっけん}実見したが、確かに見事な物であった。

何よりもクレオラが嬉しそうに、自慢そうに見せびらかすのが印象的だった。

利発そうな孫娘にも会った。

領主館から臨むフェルシナ海は濃く、青かった。

酒も食事も素晴らしく、至高と言っても良いであろう美しい皿が並んだ。

元々ゼメレス族の治めるトラケス地方の料理は、ローゼンディア王国でも「王国最高の料理」とか「口中の至福」だとか言われる程で有名なのだ。特に名産のクラーヴァは素晴らしい味だった。

クラーヴァは魚卵の塩漬けである。フェルシナ内海に棲^すむミュイという魚の卵であり、独特の風味と爽^{さわ}やかな塩味を持ち、美味珍味としてよく知られている。

ミュイが捕れるのは主にトラケス地方沿岸部である。内海沿岸部ならばどこでも捕れるというわけではない。

しかもクラーヴァが保つのは精々王都までであるから、フェルシナ海近隣に暮らす者達以外は口にすることができない。

所領であるイオルテス地方のすぐ北がトラケス地方でありながら、セウェルス族はクラーヴァの味を

楽しむ機会は少ない。

というのはイオルテス地方の真北にはスケイオス山脈が聳^{そび}えており、トラケス地方との交通が極めて困難だからである。

唯一、イオルテスの東の涯^{はて}であるデルギリアからはテラモン大森林を抜けてフェルシナ内海に出ることができが、トラケス地方に出ることはできない。

森林奥の大峡谷があるためだ。テラモン大森林はこの峡谷によって東西に仕切られている。

それにフェルシナ内海に出たとしても、この場所からではミュイが捕れることはあまりないし、おまけにそこは人間の生活圏ではない。

内海沿岸部まで森林が張り出していて陸地がほとんどない上に、すぐ近くに雲居^{くもい}山脈が控えている。危険極まりない悪の種族が周囲を徘徊している。

こんな危険な場所で暮そうなどというのは、余程^{よほど}の変わり者か狂人でもない限りは居ない。

そしてただ漁をするためだけにテラモン大森林の奥地に分け入って行き、捕れるか捕れぬか判らぬミュイを求めるというのは、あまり現実的とは言えぬ。

一応フェルシナ海に接した領地を持っていながら、セウェルス族の口にクラーヴァが入らぬのはこ

ういう理由があるからである。

『感謝祭のクラーヴァと夏場の雪は有り得ない』とはイオルテスの言葉だが、欲しくても手に入らないものの代名詞がこのクラーヴァだった。

そういうわけでもグレシオスも久しぶりに口に入れたのだが、^{うまい}美味いとは思ったものの、その素晴らしい味わいの中に引き込まれはしなかった。

初めて食した時には、葡萄酒との組み合わせが生^{げんみょう}む玄妙さに酔い^し痴れたものだったが。

あの婚礼の宴の席では、場の雰囲気^{むし}の所為もあったのだろうか……味わいを楽しむよりも寧ろ、王都で過ごした若き日の記憶がしみじみと思い出された。

口中に広がる爽やかさは、懐かしさと共に王都の思い出を、若き頃のことを呼び覚ましたのだ。

巨人の城壁を歩いたこと。

夜になっても消えることのない繁華街^{あかり}の燈。

ひっきりなしに出入りする諸国の船。

天を^つ衝く大神殿。金銀宝石で飾られた神々と、香と花々と果物の匂い。

人々の祈りの声と聖歌。

そして大神殿の壁面に刻まれた、『^{しせい}至誠なる者』、^{ケルサイオン}剣の守護者。

それらがまざまざと胸^{うち}の裡から^{あふ}溢れるように思い

出された。

宴の後には武芸競技が催された。

グレシオスも参加した。

槍も投げたし、久しぶりにグラティオンもした。

当然の結果であるが、槍ではセウエルスが勝ち、弓ではゼメレスが勝った。

双方健闘を讃え合った。

楽しい滞在だった。

今でも年に一度は、妻はクレオラと会っておるようだから、意気投合するものがあったのだろう。

二人は手紙の遣り取りなどもしておるようだし、グレシオスにも挨拶を兼ねた手紙が良く来る。

わざわざナウロス村の方に分けて出される手紙であるから、あの女は筆忠実なのだ。意外な一面である。

蜘蛛の糸でも貼りつけたような、のたくった、細かい字を書いてくる。

毎回何となく読んでしまうのだが、読みやすいのか読みにくいのか、判別しがたい筆跡である。

ともあれ内容はさすがに明晰であるから、頭脳の健在ぶりにも変わりはないようだ。

「……この戦が終わったら、手紙を書くか」

「ゼメレス公に、でございますか？」

「うむ」

「さすればこの戦のことをお書きになってはいかが
でしょう？ きっと驚きになると思いますぞ」

タデアスが提案した。機転が利いている。

さすがに良いことを言うと思った。

だが今の話にしても、イドナの時にしても、緊張
を解きほぐそうという気遣いから出た会話であろ
う。

タデアスには、昔からそういうところがある。

常に感謝してはいるが、礼を言った記憶は余りな
い。

それにしても不恰好ぶかっこうな気の遣い方である。

だがその不恰好さが好ましいと思ってきた。

「初めて戦場に立った時も、お前と一緒にであった
な」

「はい。槍持ちをお勤め致しました」

ういじん初陣は十五才だった。二人ともまだ少年と言って
良く、前線に出たとは言え、ずいじん随身の騎士達にまも護られ
たお飾りでしかなかった。

騎士として、戦士として戦えるようになるまで
は、それから幾度かの実戦をくぐ潜り抜けなければなら
なかった。

家名に恥じめ騎士として、自らの力で騎馬の先陣
を務めるようになったのは十八の頃か、それともも
う少し早かったか……今となってはもう定かではな

いが、どの戦いの時にも、タデアスは変わらず^{かたわ}傍らに
あった。

いつも無言で手を伸ばした。タデアスの顔を見も
しなかった。

だが、間違いなく必要としている物が手渡され
た。

それは槍であり刀であり、ある時は盾であり、矢
であった。

タデアスが居なければ、己は今こうして、この場
に立っている事はなかったかもしれぬ。

常に変わらず己の傍らにあってくれた。そのためタ
デアスが騎士に叙任されたのは、三十歳も間近に
なってからのことである。

かなり遅いと言わねばならない。タデアスの家柄
を考えれば異常と言っても良い遅さだった。

当然グレシオスは、それ以前にも幾度となくタデ
アスに、騎士の位へ^{のぼ}陞ることを勧めていたのだが、
なかなか首を縦に振らなかったのだ。

その理由は察しがついた。グレシオスの傍らにあっ
て働きたい、その一念がとても強いのだ。

だがそれを、己が子供扱いをされていると思い、
タデアスに食って掛かった事もある。

その行為自体が己の未熟さを示しているのだが、
当時は気付かなかった。今となっては恥ずかしい限

りである。

タデアスが己の如き凡小^{ほんしょう}に、誠心誠意仕えてくれる事には感謝するのみである。得難^{えがた}い家臣を持てる事を、感謝するのみである。

「お前には苦勞ばかりかける」

「なんの。お気になさることはありません」

ギルテにはタデアスの妻と息子夫婦、孫が暮らしている。そこはグレシオスと同じであるが、タデアスの場合、別に悩みを持って隠棲^{いんせい}しているわけではないのだ。

グレシオスがナウロス村に引っ越すというので、ついて来ただけである。

一方的に迷惑をかけているわけだが、タデアスは嫌な顔一つせずに、よく盡^つくしてくれる。

「儂とて休みたかったのですよ。ギルテの御館と違い、我が家は狭^{せも}うございましてな。孫達が走り回っていたりすると、おちおち昼寝もしてられんです。その点、この村は静かで申し分もございません」

「だが家族には会えぬ」

「それはまあ……たまには寂しくもなりますかな」

タデアスは目線を下げ、恥^{ほほえ}ずかしそうに微笑んだ。

グレシオスは済まないと感じた。巻きこんでし

まったからである。

己が妙な気持ちに取り憑^つかれずに、大人しくギルテの領主館で暮らしておれば、このような事態にタデアスを遭遇させることには、ならなかったはずである。

だがしかし、だからといってナウロス村に移ってきた事を、間違いだったとは思えぬ。

では逆に正しかったろうか？

グレシオスは目を閉じて、内に意念^{いねん}を向けた。

——ナウロス村に移った事は、正しかったと言えるだろうか？

すぐに答えは出た。目を開いた。

今なら言える。正解だったと。ただ満点はやれぬ。

何故正解だったか？

もし己が居なければ、ナウロス村の住人達はジャグルの群に一呑^{ひとの}みに揉^もみ潰^{つぶ}されてしまっていただろう。だが己が居る以上そうはさせぬ。

たとえ敗れるにせよ、高い代償を支払わせる。絶対にだ。

何故満点をやれぬか？

ナウロス村に移住して二年である。危険な辺境の村に暮らしていながら、今まで備えらしい備えもせず、それに心を向けてきた事もなかった。愚かであ

る。

ゆえに満点はやれぬ。だが己が居る事で幾いくばくかの助けにはなろう。

ゆえにこの村に暮らした事は間違いではない。

「大殿がお気になさる事ではありませんぞ」

タデアスが気を遣って言うのを、グレシオスは手で制した。

「いや、儂がお前に面倒をかけているのは変わらぬよ。その事についてはお前に済まなく思っておる」

「もったいないお言葉です」

タデアスは表情を引き締めた。

「だが済まなく思う反面、儂等が今ここにいるのはイスターリス大神のお導きかもしれぬとも思う。儂等の他に、村人達をまも護ってやれる者は居ないのだからな」

「はい」

「だから儂は間違っておるわけではないぞ。迷惑はかけたが儂の判断は正しいのだ」

グレシオスは胸を張った。滑稽に見えるよう心がけた。

タデアスが呆ほうけた表情をしている。にやりと笑いかけてやると、タデアスは吹き出した。

こら堪えようとするのだが、なかなか収まらないらしく、タデアスはひとしき一頻り笑い続けた。

「あまり笑うな。情けなくなるではないか」

いい加減恥ずかしくなってきた文句を言うと、タデアスはやっと笑いを収めた。

「……失礼を致しました。いやいや、大殿の御余裕にはこのタデアス、敬服いたしました」

「嫌味に聞こえるぞ」

「とんでもございません」

タデアスは深妙な顔をしている。

だがグレシオスがじろりと見ると、また吹き出した。

「ひどい従者もあったものよ」

「いや、これは……大殿が普段なさらぬような事をなさるからです」

「儂の^{せい}所為か」

「いえ、そうは申しません。責任は私が、原因は大殿がお納^{おさ}めになるということで、いかがでしょうか？」

「狡猾^{こうかつ}な奴だ」

タデアスの気が利いた返答に、グレシオスも吹き出した。

二人して笑った。

笑いが収まると会話が途切れた。二人で黙って村の門を見た。

貧弱な門である。今日の夜には破壊され、火に包まれるかもしれぬ門である。

「……久しぶりでありますな」

タデアスがぽつりと云った。

「そうだな」

グレシオスもぽつりと返した。

戦場に立つのは久しぶり。

そしてこれが、最後になるかもしれなかった。

第八章 襲来

兵の配置、部隊の構成員を決めた。

見張りも置いた。少年である。マイアスという名であり、ヨルスの孫である。

本人は兵になることを望んだが、年齢がそれに満たなかった。

目がよい。そして利発な子供である。鉦^{かね}の叩き方を教えたところ、ほとんど一度で憶えてしまった。

鉦はただ叩けばいいわけではない。状況に応じて幾種類もの叩き方がある。

地上にいるグレシオスやメグレイスがそれを聞き、判断するためだ。

「任せるぞ」

グレシオスが言うと、しっかりと^{うなず}頷いた。

危ないと感じたら、綱^{つな}を使って櫓^{やぐら}から逃げ出すように言い含めてある。

このような子供まで駆り出さねばならぬのが心苦しかった。

残っていた仕事を片付けると、村人全員、少し早めの夕食を^と摂った。

静かな^{ゆうげ}夕餉であった。

兵になる者は全て神殿に集まっていた。夕食も神殿隣にあるメグレイス達の館で摂った。

食事をしながら戦い方の流れを確認し、起きそうな事態を想定して討論を交わしていたのである。

もっとも討論といってもグレシオスとタデアスが話すことを村人達が一方的に聞いているだけだったが。

質問をしてくるのはイドナとアルテアだけであった。

何であれ質問は有用である。アルテアの質問が切っ掛けになり、新たな罫が採用された。

折角待ち伏せているのだから、より戦果を大きくするために広場に綱を張ろうということになったのだ。

薄くとはいえ雪が積っている。その下に隠れるようにすれば、夕方以降であればほとんど気付くまいということだが、無論それは人間の視力を前提とした話である。ジャグルであれば判らない。

とはいえ奴らは突進してきているはずである。

綱に気付いたとしても、十分有効ではないかと考えられた。

食事は昼に比べると質素なものであった。

村の倉庫を開くよう命じたので、いくらでも豪華な食事ができるのだが、この夕食に限っては軽めに済ませるように命じた。この後、戦いが控えているからである。

酒も禁じた。酒は^{からだ}身を温めてくれるが、動きの俊敏さや的確さを^{いちじる}著しく失わせる。寒い時に一口二口含むのならば良いが、その辺の加減を村人ができるとは思えなかった。

代わりに各自、干肉などの保存食を持たせた。戦闘の合間に空腹を覚えたら食べられるようにである。無論、安全を確かめてから食うように命じた。

食事が終わるとグレシオスは兵達と共に神殿の中へと移動した。

^{しせいじょ}至聖所の扉を開き、イスターリスに礼拝した。

本来ならばメグレイスが中心に立って行なうべきことであるが、グレシオスが取り仕切った。

^{くもつ}供物を^{ささ}献げ、^{とな}祈りを誦えた。

ヴェルデスの直系の^し嗣たるグレシオスは、イスターリス崇拝においては別格の存在だからである。

ゆえに遥かな昔からセウェルス宗家の人間は、イスターリス祭祀の主教としての役割をも受け持つのであった。

つまりイスターリス神殿の主教は別に存在するが、セウェルス宗家の人間はそれと同格、あるいはより以上の存在として信徒に認識されているのである。

主教というのは最高位の神官の事であり、イスターリスを始め、各神々について存在する。

これら主教の頂点に立つのが主神ヴァリアの主教であり、それは総大主教と呼ばれる。

現在の総大主教はネヴィアロス十二世である。ローゼンディアの全ヴァリア教徒の頂点に立つ聖者である。

イスターリス神殿に属する者達の中にはグレシオスやヘクトリアスの事を、地上におけるイスターリスの化身と考えている者も少なくない。

イスターリスの信者にとって、セウェルス宗家の人間は最大の尊敬を払うべき人々だからである。

メグレイスはイスターリス神殿の神官であるから、グレシオスに己が役割を譲^{ゆず}る事を当然だと考えているのであろう。

拝礼が済むと何人かずつで円陣を組んだ。それぞれが己の武器を面前に掲^{かか}げた。それから武器を回旋^{かいせん}させて地を打った。

古代ヴォルグヘル族の作法である。

「イスターリス」

「イスターリス！」

全員がグレシオスに倣^{なら}って唱和し、互いの武器を交差させた。

ほとんどが槍であるが、弓兵は弓を捧^{ささ}げた。ダイオンとその息子達のみが戦斧^{せんぶ}であった。

ドヌスヘーレイ嵐神の末裔でもないのに斧を選んだのは、鎚^{つち}に近

いからではないかと考えられる。

鎚ならば日常振るい慣れているだろうからである。

ゆえに戦斧は槍よりも技術を要する武器ではあるのだが、鍛冶師^{かじし}にとっては扱いやすいのかもしれない。

舞^{まい}は省略した。メグレイスとアルテアはともかく、他の者達が舞えるとは思えなかったからである。

古代においては戦いの前には熊や狼、あるいはワタリガラスを真似て戦士達が舞ったそうだが、今では祭儀などを除き、舞が行なわれることはあまりない。

最後にグレシオスが一人一人に祝福を与えて儀式は終わった。

あとは敵を待つだけである。

戦いが終わるまでは館へ戻るつもりはなかった。

兵達も一緒である。この人数が集まるとメグレイスの館では少々手狭^{てぜま}になるが仕方あるまい。

幾人かは神殿の方へと移動したり、門の見回りに行ったりと、ある程度の出入りがあるので、それで我慢してもらおうほか無い。

ジャグルが襲来した時に、即座に広場に集まることが出来る状態であればいいのだ。

これだけの人数が集まりながら、会話らしい会話がまるで生じない。

誰もが緊張していたが、さすがにメグレイスはいつもどおりの様子で、村人の質問に答えたり、火のそばで暖まったりと寛いでいるようだった。

いつもどおりの状態を崩さなかったのはグレシオスとタデアス、そしてメグレイスの三人だけであっただろう。

ジャグルが現れたのは夕陽がテラモン大森林へと沈み込もうとする頃であった。

鉦を叩く音が村内に響き渡った。誰もが動きを止めた。

「現れたか」

「のようですな」

グレシオスとタデアスは悠然と立ち上がった。臍^{すね}当ては既に身に着けてあったので、リオブを纏^{まと}い、その上からカトールを羽織^{は お}った。

火を囲む者たちは皆緊張していた。表情も、肩も強張^{こわば}っている。初陣^{ういじん}だから仕方あるまい。

反射的にアルテアが立ち上がった。武器を取りに走り出ようとした。

「待て。まず様子を見てからと言ったであろう？」

「神官殿は長神官様の指揮に従うという話を、お忘れになったか？」

タデアスも^{たしな}窘める。

メグレイスがアルテアの肩に手を置いた。

「大殿様にお任せ致しましょう。して、我等は先程のお話通りに配置につけば^{よろ}宜しいのですか？」

「うむ。村内に入ってくるジャグル達を各個に始末してもらいたい」

「かしこまりました」

グレシオスは^{やぶっ}矢筒を背負い、弓を取って脇身にかけた。タデアスも同じくした。

外に出ると兵達が集結していた。

「みな気を抜くな。これからが正念場ぞ！」

グレシオスは大声で言った。

館からメグレイスが出てきた。やはり大声で指示を飛ばした。兵達が配置につき始めた。

グレシオスはタデアスを連れ、小走りに正門へと向かった。薄く固まった雪を踏んで走る。

正門の前にはあらかじめ立たせておいた者の他に、配置外の兵二人が槍を持って立っていた。混乱して思わず駆け付けてきたのだろうか。

だがそれ以外の者達も戸惑うような、どうしていいか判らないような様子である。その場の皆がグレシオスの方を見た。

「お前達は神殿に戻れ！」

タデアスが鋭く言うと、配置外の二人は^{はじ}弾かれた

ように駆けていった。

グレシオスは素速く梯子^{はしご}を登って足場の上に立つと、矢避けの板の隙間から顔を出して外を覗いた。

道を歩いてくる集団がある。

小柄な姿が近づいてくる。短く湾曲した足、不恰好な歩き方、その割には妙に力強さを感じさせる歩みである。

夕陽が背後にあるため、ジャグル達の姿は影にならず、よく見えた。

黒目と白目の区別がない、南天の実のような赤い瞳、汚い牙をぞろりと口から覗かせた締まりのない顔、禿げ上がった頭^は、紛れもなくジャグルである^{まぎ}。

薄汚い鎧^{よろい}と鉞^{なた}のような造りの刀、無骨な槍、斧、弓矢、武装がてんでになっているので統一感が全くない。野盗の群のようである。

だが集団が醸^{かも}し出す異様な雰囲気は、絶対に人の集団では持ち得ないものだ。

どれだけ非道な野盗であろうと、この雰囲気は絶対に出せない。

ジャグル達からは人の気配というものが感じられなかった。人ではないのだから当たり前だが、不吉さが尋常ではない。

それは獣の気配に近いが、もっと遥かに暗く、邪悪さを感じさせるものだった。

「奴ら考えていたよりも足が速いですな」

タデアスが^{つぶや}呟いた。はっとしてグレシオスはその横顔を見た。

不意に強烈な懐かしさがこみ上げた。

髪も^{ひげ}鬚も白い。顔にはいくつもの^{しわ}皺がある。タデアスは老いている。

だが何故か、今は過ぎ去った遠い日に戻ったような気がした。

あの日の空は青かった。透明な、朝の光が辺りを満たしていた。

今は夕陽が、^{うすねずいろ}薄鼠色の空を^{かす}微かに染めているだけだ。

幾つもの要素が大きく異なっている。にもかかわらずグレシオスには何故か、今の状況はあの日の朝と、重大な決戦の日と同じであるように感じた。

いや、重大でない戦いなど無いのだ。

敗北は破滅を意味している。戦いとは、そういうものである。

「どうされました？」

「いや……昔の事を思いだしてな」

「はあ」

タデアスには分からないようだった。

「ベルガイアの戦いよ。あの時もな、お前は今と同じ事を言った」

「まことでござりまするか」

「まことだ。判っていて言ったのではないのか？」

タデアスは無言で首を振った。目が真剣である。

嘘ではないようだ。

何やら、世の理ことわりを超えた力の働きを感じた。タデアスもそうであろう。

「……イスターリス大神のお導きかも知れぬ」

グレシオスは天を見上げて言った。

「はい」

タデアスはしっか確りとした頷きを返し、そして二人は、再びジャグルの群に視線を据え直した。

ジャグル達は大分近づいてきていた。大きな丸木が三本見える。柱のようだ。

何匹かのジャグルでかつ担いでいるのだが、はじょうつい破城槌ではないらしい。おそらくは梯子の代わりか。

「ゴロドの姿が見えませんな」

そうである。小柄なジャグルばかりで、ゴロドの姿がない。

イゴールの姿もなかった。こちらは歩兵戦しか想定していないから有難い。

妙な言い方だが安心した。

これから、殺し合いが始まるというのに。

「大分楽になるな」

「はい」

とはいえ油断するつもりは毛頭無い。その確認をする必要もない。

己もタデアスも、あとはできる限り冷静に殺し合いをするだけである。

手慣れた仕事をする職人のように殺し合いを行なうだけである。^{たと}喩えるならば、靴の具合を見る靴職人のように。

この距離になると、ジャグルの姿を観察できるようになってきた。

予想通りの姿だった。村人には見せられぬ。

腰の周りに、幾つもの首をぶら^さ提げているものがある。

棒を担ぎ、そこから人の手足が^{ひも}紐で吊るされているものがある。

人の腕と見られる肉の塊を、^{かじ}齧りながら歩いてくるものがある。

ジャグル達は食糧と一緒にやって来たわけだった。

「タデアス、配置は？」

短く言った。それで通じると思った。

タデアスが身を引いて背後を振り返った。グレンオスはジャグルの群から目を離さない。

「^{かがりび}篝火は全て^{とも}燈っております。我等の足元に兵三人」

先程あらかじめ待機させておいた兵である。

この兵達には槍を持たせず、刀を持たせてあった。

「二人登らせろ。一人は神殿に戻せ。メグレイスに予定通り動くよう伝えさせろ」

「はっ。デリオスとドーロス、上に登ってくるのだ。ハイゼースは長神官様に予定通りだと伝えに行くのだ」

タデアスが命令を伝えた。ハイゼースの駆け去る音が聞こえ、続いて足場に人が登る振動が伝わってきた。

デリオスとドーロスが^{そば}傍に来ると、グレシオスは顔を向けた。

「これからジャグルが攻めて来る。取りついたものをここで殺す」

グレシオスの言葉に、二人とも緊張した面持ちで頷いた。

無論、全てのジャグルを殺せるとは思っていない。^{せいぜい}精々が二、三匹であろう。

だがそれでいいのだ。この規模の戦闘では、とにかく効率よく敵の数を減らすことが重要である。

「六……九……」

タデアスが小さな声でジャグルを数えている。グレシオスも同じように数えた。

「二十二。弓七」

「二十二。槍九」

二人で確認した。弓と槍の数を引けば、刀ないし斧が六匹ということになる。

今問題なのは弓である。こちらが放てば、当然射返してくるだろう。

元から門に^よ拠って戦うつもりはないが、ここから射ても、あまり数を減らす事はできなさそうである。

「おそらく奴らは梯子をかけて一気に登ってくるはずだ。最初の一匹でいい。叩き落とせ」

二人に向かってグレシオスは言った。

この状況でジャグルから目を離すのは危険だが、しっかりと念を押すために敢えてそうしたのだ。

気持ちが通じたのだろう。再び、二人は硬い顔で頷いた。

もっともグレシオスが目を離しても、代わりにタデアスが見ているのだが。

「先程も教えたが、ここで食い止めるのが目的ではない。下からは矢も射かけてくるから決して長居してはならぬ。登ってきたジャグルを叩いたら、すぐに飛び降りて広場へ戻るのだ」

グレシオスとタデアスはさらに一拍遅れて、二人の後を追う予定であった。

この門の規模と味方の兵力では、それが限界である。

ある程度戦うといっても、数を算^{かぞ}える間もないであろう。登ってくるジャグルを素速く叩き、そのまま逃げ出す。

弓兵が先に登ることは、まず考えられないからこそ採れる行動である。

なんとなれば、弓兵は下から味方を援護するだろうからだ。

^{じょうかく}城郭に取りつくときの定石なので、グレシオスはそう判断したのだが、ジャグルが人間と同じ戦法を採る確信はない。

不安といえばそこが不安だが、ある程度戦ってみせる事は、広場にジャグルを引き込む上でも有効であろう。

与えられた状況でどこまで行動できるかは、その時々瞬間的に決まる面がある。

戦場では特にそうなのだ。

「そしてあまり前に出るな。弓に狙われる。あくまで登ってきた一匹目に刀を叩き込むか、突き刺すかして、その後はすぐに逃げよ。ぐずぐずしていると死ぬと思え」

「儂と大殿も同じようにするゆえ、細かい指示を与える事はできぬし、止^{とど}めを刺したかどうかの確認を

する必要もない。叩き落としたらすぐに逃げよ」

タデアスも加わって、二人に念を押した。無論タデアスはその間もジャグルから目を逸^{そら}さない。

デリオスもドーロスも質問はせず、ただ頷くだけだが、その様子に怯^{ひる}みは見えなかった。

「大殿、やつら変ですぞ」

ジャグルを監視し続けたまま、タデアスが言った。

「どうした？」

グレシオスは矢避け板の間から目を覗^{のぞ}かせた。

ジャグル達は足を止め、何やら話し合いながら列を整えている。

前の方、村に向かって立っているジャグルの背後で、動きがある。何か作業をしているようだ。

嫌な予感がした。

「背後で何か組み上げておるようです」

奴らの担いできた丸木柱が動いているのが見えた。

前列のジャグルが、盾を前に掲^{かか}げて横に並んでいるため、背後を見る事ができない。

「どうせ碌^{ろく}でもない事に決まっておる」

答えながらグレシオスは考えた。この距離なら矢は届く。

こちらから手を出してみるべきだろうか？

だが、それが戦端を開く切っかけになるかもしれない。

だとしたらそれは良いことなのか。つまり、こちらにとって有利になるかどうか。

このまま何もせずに、ジャグル達に変化が現れるのを待つというのも、一つの手である。

如何いかにすべきか。

グレシオスに意見を求めてくる者はない。デリオスとドーロスは、そのようなところまで考えが及ばぬからであろうが、タデアスも何も聞いてこない。

おそらくタデアスも又、判断がつかないのだろう。

何もしない、というのは嫌な選択である。動けばいいと言うわけではないが、何もしないのは神経を使う。

——しかし、どのみちこちらが採れる手段など決まっているのだ。

もうすぐ日が沈む。

アクション
太陽神が、その住まう島へと帰還する前に手を打たねばならない。

篝火が用意してあるとは言っても、夜は夜である。そこには闇がある。そしてジャグルは闇ひそに潜むものどもである。

——こちらから手を出してみるしかあるまい。

グレシオスは決心した。弓を構え、矢筒から矢を一隻引き抜いて番えた。

軽い。今朝男と登った櫓やぐらの上で引いたあの弓とは、比べものにならぬ。

狙いを定めた。弓を引き絞った。呼吸と意識が、体を通して一つに結び合わされてゆく。

心臓の鼓動を感じる。己の心臓の鼓動を。

放った。

左から三列目のジャグルが仰あおのいた。頭を跳ね上げたと言った方が正しい。

そのまま後ろに倒れた。右隣のジャグルが、肩をつかんで起こそうとするが無駄だった。

左のジャグルも覗き込むようにしている。

だが混乱は生じなかった。何事もないように列を戻すと、今度は心持ち盾の位置を上げてジャグルは並んだ。

こちらを見ている。

赤い色石でも嵌め込まれたような瞳、だらしなく開いた口、尖った歯の間からは舌が覗いてる。

だがそれだけだ。表情というものが感じられない。

仲間が殺されたというのに、ジャグル達は一向気にしていない様子だった。

それともそう見えるだけで、実は怒りや恐れを感

じているのだろうか？

どちらなのか判断がつかぬ。

ここからだと言距離が遠すぎるというだけでなく、おそらくは種が違うからだろう。表情が読めない。

同じ人間ならばともかく、グレシオスにはジャグル達が何を考えているのか、何を感じているのかが判らなかつた。

「奴ら動きませんな」

「うむ」

「ならばこのまま射続けてやりましょう」

タデアスが^{しごく}至極もつともなことを言った。

反撃もせず、ただ突っ立っているだけの敵ほどありがたいものはない。

こちらは淡々と作業するだけでいいのだから。

「精々数を減らすとしようか」

「はい」

タデアスも共に弓を構えた。と、ジャグル達に動きがあった。

列が^と解かれ、左右に割れた。

代わって板塀^{いたべい}のようなものが現れた。板塀には、例の柱が固定されていた。

柱の角度は上を向いている。

「なんですか、あれは」

タデアスが^{つばや}呟いた。

「梯子の代わりであろうと思っていたが、それだけではないようだな」

得体のしれない大道具は全部で三つある。

柱が梯子になるというのは間違いあるまいが、いまいち判らない。

あの板は何なのか。

と、ジャグル達が板塀の背後に隠れた。それで判った。

あの板は矢避けなのだ。つまり、あれは簡略な攻城具である。

「意外に頭がいいのだな」

「悪知恵が回ると言った方がいいかもしれません」

タデアスも了解したようである。憎々しげにくにくにそう言った。

「あれをかつ担げますか」

「担げるのだろう」

でなければ作りはしない。

人間ならば台車に乗せるという手を採るだろう。あの重さの物を運ぶにはそれなりの人数が要るし、その人数をえんべい掩蔽できるほどには大きくはないからである。

つまりあの攻城具を用いるには台車が不可欠になる。

だがジャグルはそうではない。奴らはあれを、あ

の人数で担げるのだろう。驚くべきことだが、ジャグルの怪力からすれば無理ではないのだろう。

ナウロス村に近附くまでは分担で材料を運び、到着してから一気に組み上げたわけだ。

ということは、さすがにあれを長時間持ち運ぶのは無理だということでもある。

連中が取った距離もそれを証明している。ここから連中までは矢が届く。事実一匹射殺せた。そのことを考えても、距離が近すぎるはずなのだ。

その疑問も、今までのことを全て合わせて考えれば納得がいく。

連中はきちんと考えた上で行動している。

戦いの効率を考えているのだ。

そこまで気付くと、グレシオスはぞっとした。背筋を嫌な気配が走った。

あまりある事ではない。何より、戦場では不吉な感触である。

ジャグルと言えば、人の世界の周辺を荒らすしか能のない、薄汚い獣でしかないと思っていた。

その認識は改めなければならないようだ。

ジャグルは人とは異なる、しかし人と同じように考えて行動する存在なのだ。

父祖達の壮絶な戦いの記録へと心が飛んだ。かつての大戦、幾多いくたの戦い、人間達が死力を盡つくして

戦ってきた物語。

己は、今それを体験しようとしているのか。

ぐらり、と攻城具が持ち上がった。ジャグルが内側から支えているのだ。板の下から、汚い足が左右に二列ずつ並んでいるのが見える。

グレシオスの全身が、殺気のようなものを感じ取った。

「来るぞ！」

大声で警告した。

第九章 戦闘

^{おめ}叫き声を上げながらジャグルが突進してくる。デリオスとドーロスが息を呑む気配がした。

「ぶつかるぞ！ 足場の柱につかまれ！」

再び警告し、グレシオス自身も中腰になって柱にしがみついた。

直後に激突。全身に衝撃が叩き込まれた。体が大きく横に流れ、足場からずり落ちそうになる。

両手で柱を押さえて体を戻し、立ち上がった。

^{さや}鞘走る音がした。タデアスである。腰を上げると同時に^{ぱっとう}抜刀したのだろう。さすがである。

そのまま足場の一番奥に早足で向かっていった。その先に攻城具の柱が見えている。

村の正門越しにあの丸木の柱が突き出ている。と、もうジャグルの頭が見えた。

「来るぞ！」

グレシオスは叫んだ。未だもたついているデリオスとドーロスのためである。

一瞬の間が生死を分ける。一瞬の判断が流れを変える。考えるよりも早く行動し、行動するよりも早く考えなければならぬ。

グレシオスは別の手近な柱に駆け寄った。

「ぬんっ！」

気合いを込めた一撃をジャグルの首元に叩き込む。

刃が頸椎^{けいつい}にまで達した感触が返ってきた。ジャグルの首が曲がり、そのまま柱を滑り落ちてゆく。

弦音^{つるおと}が聞こえ、矢が下から飛んできた。大きく身を引いて矢を避けるようにし、隣の柱に目を向けた。

デリオスの胸に矢が突き立っていた。デリオスは動きを止め、押し殺した呻^{うめ}きを漏らした。すぐに次の矢が、又次の矢がデリオスの体に立った。

ドーロスはまだ立ち上がっていない。立とうとしてはいるが遅すぎる。

デリオスはもう助からぬ。

「飛び降りよ！」

耳に届くことを祈りながらドーロスに叫ぶと、グレシオスはそのまま下に、村の側に飛び降りた。全身にリオプの鎖が食い込んだ。凄^{すさま}じい重量が体に掛かり膝がぐんと折れそうになる。

「むうっ！」

呻いた。だがそのまま無理に立ち上がった。肩と背骨が軋^{きし}むような気がする。膝に大きな負担が掛かっているのを感じたが無視した。

少し離れたところにタデアスも着地している。

合図を交わす必要はない。ほぼ同時に動いた。

駆けた。

村の広場に向かって駆けた。

背後は振り返らない。ドーロスがついて来ていることを祈った。

浅い雪を踏んで走る。雪を踏んだ音は耳に届かない。

聞こえるのは己の呼吸とリオプが鳴る音だけである。

左右に大きな^{かがりび}篝火が見える。いつの間にか日は沈み、村の中には闇が広がっていた。

足元だけは雪の^{せい}所^い為か白く^{おぼろ}朧に見ることができるが、周囲は篝火が^{きわ}際立って見える他は何も判らなくなりつつある。

ジャグルはここまで考えて行動しているのだろうか。

多分、そうであろう。

最初の小屋を超え神殿の^{そば}傍まで来た。矢は飛んでこない。

走りながら矢を射るのは^{しなん}至難^{わざ}の業であるし、門を超えて飛び降りて、すぐに弓で狙ってくることはおそくない。むしろ追ってくるだろうと判断しての作戦だったが、その通りになったのか。

神殿の横手に駆け込んだ。槍を持った兵達が反射的に身を動かした。しかとは見えぬ。気配と、影で

ある。

篝火は広場の方に設置してあるので、兵は闇の中にいるのだ。

「……来たぞ」

荒い息の下から声を絞り出した。リオプを着込んで高所から飛び降り、そのまま駆けたのだ。

予想していたことではあるが、かなり堪えた。

胸の中では心臓が踊り廻っているように感じるし、背骨と肩に重みのようなものが食い込んでくるのを感じる。この歳では無理もないことであろうが。

「少しお休み下さい」

ヨルスが近くで囁いた。

何を言う。

そんな余裕などあるものか。

答えようとしたが声にならない。神殿に背を預け大きく呼吸を繰り返した。

「……早くいけ」

何とかそれだけを命じた。ジャグル達の悲鳴と怒声が響き渡った。甲冑の鳴る音、武器を取り落とした音が聞こえてきた。イドナ達が矢を射かけたのだろう。次は広場に張ってある綱が引かれるはずだ。

こちら間を置かず突撃しなければならない。

「行かぬか！」

情けない怒声を上げた。声が掠^{かす}れている。情けない。

命令に従い、兵達は闇の中を広場に向かって移動し始めたようだ。

影が動くのが見える。

まだ目が暗さに慣れない所為か、それとも老いで弱くなった目では姿を捉^{とら}えられないのか。

額から流れる汗が目に入ったので、グレシオスは手の甲で拭^{ぬぐ}った。

すぐ近くでタデアスが、同じように息を吐いている。

目が合うと、情けなさそうにタデアスは微笑んだ。多分、己も同じような顔をしていると思った。

二度深呼吸した。気持ちが肚^{はら}の底に沈み込むように念を凝らした。

それでようやく恢^{かい}復^{ふく}した。完全とはいかぬが、十分である。

戦える。

「参りましょう」

「うむ」

神殿から背を離し、近くに置いてあった槍と盾を手にとった。あらかじめ昼間の内に準備しておいた物である。

広場に出た。綱が持ち上がっていた。ジャグル達

が転倒し、あるいは綱に身を止められている。そこに兵達が襲いかかっていた。

策は上手く決まったようだ。

怒号なのか悲鳴なのかすら定かでない大音声だいおんじょうが辺りに響いている。

篝火の照り返しを受けて槍や斧、甲冑が輝いている。

腹を突き刺されたジャグルが自分を貫いた槍をつかんでいるのが見えた。既に倒れている村人もある。長い銀髪が雪上に拡がっていた。

槍を構えた村人を前に、鉈なた刀を振り回して威嚇いかくしているジャグルもいる。

今のところ有利に展開しているようだがわず僅かの間だ。

思う間に綱が断たれ、地面に落ちた。

広場の中で押し込められていたジャグルの群が解き放たれた。

ばらばらに駆けだしてくる。

「ひる怯むな！　ここで皆殺しにするのだ！」

大声で言いながらグレシオスは槍を構え、ジャグルに向かっていった。

鉈刀を持ったジャグルが迫ってくる。槍を突き出した。振り下ろされる鉈刀と槍の穂先がぶつかって火花が散った。槍は当たらず、ジャグルの横を流れ

た。

荒っぽい^{ふせ}禦ぎ方だが外されたことには変わりない。

予想外である。

鋭さが無かったのか。それともまだ疲労が残っているのか——そう考えた方が良さそうだった。

とにかくそのまま、グレシオスは右肩からジャグルに当たっていった。

ジャグルの顔に肩がぶつかる。鎧同士が接触する音が鳴り、ジャグルが吹き飛んだ。

怪力とはいえ子供に近い体格である。グレシオスの方が体重がある分、安定しているのである。

ジャグルが転がろうとせずに、そのまま起きあがる気配を感じたので、グレシオスはジャグルが身を起こしかけるのを待ってから槍を突き刺した。

倒れたところを即座に突くというのも定法ではある。普通はそうする。

しかし周囲の状況と敵の対応によっては、より確実に殺すべく突いた方が良いからである。

ちょうど上半身を起こしかけたジャグルの首元に槍の穂先は吸い込まれた。

「ギイイイーー！」

斜め上から下に向け、気持ち^そ反るように槍を滑り込ませる。あっさりと穂先が背中から飛び出てき

た。ジャグルは体を突っ張らせ、すぐに脱力した。

^{とど}止めを刺す必要はないであろう。

横手から影が伸びてきた。反射的に槍を離し、^{ぼっ}抜
^{とう}刀する。

^{さやな}鞘鳴りの音が消える間もなく、ジャグルの鉈刀が
振り下ろされてきた。

重い衝撃。盾に刃が食い込む^{てごた}手応えを感じた。

ジャグルはそのまま押し込んでくる。

「むっ」

グレシオスは後ろ足を伸ばして体を支え、^{こら}堪え
た。ジャグルの突進が止まる。

「ジャアアア！」

赤い瞳が見上げてくる。篝火の炎に照らされて、
まるで紅玉のようだ。

その目玉^め目懸^がけてグレシオスは右の^{こぶし}拳を叩き入
だ。刀を持ったままであり、^{しゅこう}手甲^はを嵌めた拳であ
る。それは鉄の塊^{かたまり}で殴られるに等しい。

ジャグルが^の仰^そけ反った。裂けた顔から血が飛び散
る。容赦なく、今度は^{ひじ}肘を顔に打ち込んだ。

足を動かせる距離になったとみると蹴りを胸に食
らわせた。ジャグルが^{しりもち}尻餅をつくように倒れた。

だが止めは刺せない。すぐに新手のジャグルが槍
を構えて走り寄ってくる。グレシオスは素速くそち
らの方を向いた。

走ってくるジャグルの向こうにタデアスが見える。すでに槍を捨て、刀で戦っていた。

穂先が迫る。恐怖が痺れるように^{しび}身体^{からだ}を走る。喜びが痺れるように身体を走る。

グレシオスは自ら踏み込むと、体を開くと同時に刀身を槍に叩きつけ、己が斜め後ろへと槍を受け流した。槍上を刀が伝うように滑っていく。このまま手首を切り落とすこともできるが、グレシオスは途中で刃の角度を変え、ジャグルの^{のどもと}喉元へと^{きっさき}切先を滑り込ませた。

幼時から繰り返し修練してきた、槍を刀で制する技法である。

おそらくジャグルには何が起こったのか判るまい。叔父エウスタスによって初めてこの技法を示された時がそうだった。グレシオスには何が起こったのか解らなかった。

気が付くと喉元で刃が止まっていたのだ。

ジャグルの腰から力が抜けた。崩れるようにへたり込むと、それから^{あおむ}仰向けに倒れた。

辺りに目を配る。背中にも目がある如く、全身を目にしてさっと周囲を見回した。

自分に襲いかかってくるジャグルがいるかどうかを確認した。

いない。今はいない。数瞬のことであろうが、そ

の長さは関係ない。

『間』として『時』を得られるかどうか重要なのだ。

先に蹴り飛ばしたジャグルは姿を消していた。どこぞに隠れているか、それとも別の相手を求めて去ったのかも知れぬ。

グレシオスは刀を地面に差し、変わりに手近な槍を拾い上げた。今殺したジャグルの槍である。

手頃な位置のジャグルを見つけた。今にも村人に襲いかからんとしている。その背中目懸けて槍を投じた。

槍は左の^{けんこうこつ}肩胛骨の下の辺りに突き刺さった。穂先が右の胸から飛び出たと見えて、ジャグルは前のめりに倒れた。

刀を抜いて^{ちぶ}血振りをくると、一番近くにいるジャグルに早足で近附いた。雪をざくざくと踏む音が立った。

ジャグルは村人と槍を交差させている。あれほど注意したにも関わらず、村人は力比べの体勢に^{おちい}陥ってしまっていた。

「イーザイツ！」

ジャグルの気を^そ逸らすため、^{おたけ}雄叫びを上げた。古代ヴォルグヘル族の雄叫びである。振り向いたジャグルの首もとに刀を振り下ろした。

「ギシャアツ！」

苦痛と驚愕の混じる絶叫をあげ、打ち込まれた刀身を両手でつかんだ。

その途端グレシオスはあっさりと刀から手を放した。

腰の後ろから逆手に短剣を引き抜くとジャグルの喉に突き刺した。そのまま西瓜^{すいか}でも割るごとくに、手前へ向けて短剣を引いていく。手慣れた動作である。

刃が骨を削り、肉がぶちぶちと裂ける手応えがあった。

ジャグルが、がばっと血を吐いた。体を痙攣^{けいれん}させた。胸から口から血が溢れ^{あふ}、グレシオスの手甲を汚した。

「御領主様！」

村人が叫んだ。喜びの叫びである。危険を告げる危機感がない。

つまり注意を知らせたわけではない。今のところは安全だということである。

数えるほどの間ではあろうが。

頭の片隅でそんな風に判断しながら、グレシオスはジャグルを蹴り転がし、刀を引き抜いた。二振りとも手早く拭いをかけて鞘に収めた。近くに落ちていた槍を拾った。

「あっ、ありがとうございますっ！」

礼を言う村人を手で制した。見ればダルスである。今年で十七になったか。

「あいつらを助けてやれ」

離れたところで戦っている二人の村人を指差した。

ダルスは頷いた。槍を握りしめて駆けていった。

足元は赤々^{あかあか}としているが、それは篝火^{せい}の所為^いだけではない。

既に夜気^{すで}の冷たさの中には血臭が混ざっている。

鼻と胸の内をねっとり^すと焼くような、あの鉄臭い香りである。

馴染み深い臭いである。

金属の激突する音と怒号が、周囲、至る所から聞こえてくる。

見た感じは、先程と大して変わりがないかもしれない。

だが最初に広場に飛び出したときの全身に水^{かぶ}を被るような激しい気配がない。

広場では殺し合いが続いているし、村のあちこちでも戦いが行なわれている感じはあるが、どれもばらばらな戦闘のようである。

少し戦闘がまばらになってきたようだ。

無論直感的にそう思っただけである。確^{かく}と言える

ような根拠はない。勘である。

しかし、戦いは次の段階に移行したと見ていいだろう。

グレシオスは再び周囲を見回した。

この規模の戦闘ではいちいち戦況を判断している余裕はない。ただただ目の前の敵を殺し続けるだけで精一杯なのである。

こうして一息吐けるときに素速く流れを判断するしかない。

当然長い時間は取れないし、正確さも保証できるものではないが、それは勘で補うのである。

あちこちに倒れているジャグルや村人の姿が見えた。

数としてはジャグルが優勢であっただろう。だが今は、ほぼ互角と言えるのではないだろうか。

「大殿！」

タデアスが駆け寄ってきた。全身に返り血を浴びている。己も、人のことは言えないが。

いちべつ
一瞥をくれて安全を伝えると、広場へ、ジャグルの方へと目を戻した。

ざっと動いている数に目を走らせる。十はいない。それに対して味方の数は六である。

あちこちに倒れている姿がある。ジャグルの方が多いが、村人も幾人かある。

さらに減らされる前に突撃しなくてはならぬ。

味方が多い内の方が身の安全が高くなるからである。

非情なようであるが、それが戦場の現実というものだ。この規模での戦闘では特にそうである。

逆を言えば、グレシオスやタデアスと一緒に戦えば、村人の安全度も高くなるわけである。

ゆえに、どちらがどちらを利用しているという話ではない。単純に戦力と、そこから想定される戦況推移の結果でしかないのだ。

「無事か？」

「はい」

カトールで手の平の血を拭い、槍を持ち直した。

タデアスも同じようにした。

嫌になるくらいカトールは血まみれであり、胸に描かれたワタリガラスも、まるで^{あか}殷い血の中を飛翔しているようだった。

「ゆくぞ」

「はっ！」

タデアスと共に、ジャグルが五匹^{まと}纏まっている所目指して駆けだした。

一匹のジャグルが雄叫びを上げながら戦斧を振るっている。

一人の村人が頭を叩き割られ、崩れ落ちるその身

に、さらに斧の刃を受けている。滅多打ちであった。

左右の村人二人が^{ひる}怯みを見せた。危ない。

「怯むな！」

タデアスが^{おめ}叫いた。ジャグルどもがグレシオス達の方を向く。

その隙に戦いの中に入った。死んだ者の代わりに、二人の村人の中央に槍を構えて入り込む。タデアスが右に並んだ。

ジャグル達が喉と歯を鳴らし、^{みみざわ}耳障りな音を立てた。何か言ったのかも知れぬが地虫どもの言葉など解らぬ。判るつもりもない。

「グオオオッ！」

戦斧を振りかざしたジャグルが突進してくる。

迫力はある。だがグレシオスもタデアスもこの程度では怯まない。

グレシオスは槍を滑らかに、地面を探るように伸ばして払った。

ジャグルが転倒した。起きあがるよりも先に、その肩先にタデアスの槍が入った。

左の村人にジャグルがぶち当たってきていた。ゾイアスである。必死の^{ぎょうそう}形相で槍を支えているが、押し込まれる体勢になっていた。

「蹴り上げろ！ 近くで戦ってはならん！」

グレシオスは指示を飛ばした。一拍遅れて村人はジャグルの胸を膝で蹴った。少し距離が空く。もう一度蹴った。さらに離れた。村人が槍を持ち直した。

別のジャグルがグレシオスに向かってきた。^{えもの}得物は槍である。力任せの一撃を繰り出してきた。

ジャグルに限らず、力で競うのは愚かである。技で制する。それが戦いの基本である。

「力を出し^っ盡くしてはならぬ」

エウスタスはそうグレシオスに教えた。常に働きが死なぬように、心身を効率的に使えということである。

力を振り絞れば^{かたよ}偏りが生じる。偏りは隙を生む。そして隙は命取りになる。

技とは統御された力のことである。技を用いるのは心である。心もまた力である。

それゆえに力で競うのではなく、力で制するのだ、と。

そうエウスタスは教えた。まだグレシオスが幼き日から、繰り返し、繰り返し教えた。

ジャグルに合わせて槍を出す。^{しな}靱やかに槍に力を乗せた。

戦神の末裔にとって槍は聖なる武器である。ジャグル如きに、後れを取ることなどあるものか。

巻きつくように槍を使う。グレシオスが手首を返したときにはジャグルの槍は斜め上へと吹き飛んでいた。戻した槍でジャグルを打った。衝撃に蹠踉よろめいたところを突いた。

胸を突かれたジャグルは前のめりになり、口からごぼごぼと血を吐いた。

タデアスも見事に戦っていた。新手のジャグルの喉を突き、吊り上げるようにして横に投げ倒している。

悲鳴が聞こえた。ゾイアスの胸に短剣が突き刺さっている。ジャグルが左逆手に持った短剣で突いたのだ。

ゾイアスが呻きながら血を吐く。蹠踉よろめいたところを、鉞刀を肩先に打ち込まれた。ゾイアスの首が力を失い、頭がぐらりと傾く。

ジャグルはさらに鉞刀を振るった。濡れた木を斧で割るような音がした。血が飛び散る。ゾイアスの体が力を失い、倒れてゆく。

これで左が空いた。対処しなくてはならなかった。

ジャグルを突き刺している槍を戻すのを止め、さらに深く押し込んだ。貫かれたジャグルが呻き、完

全に槍に凭れ掛かってくる。おそらく穂先が体を突き抜いただろう。

素速く槍を離し、刀を抜いた。ゾイアスを倒したジャグルと目が合った。

ジャグルの表情が動いた。上手く形容することができぬが、確かに顔が動いた。

何と言って良いのか判らぬ表情だった。人のそれとは余りに違う。

喩えるならば獣が人の精神を宿したら、このような顔をするのかもしれない。

しかし、その意味だけは判った。

ジャグルは喜びを見せたのだ。その表情は、殺戮の喜びを表すに違いないと思った。

「ガアッ！」

汚い口を開け、吠えた。叩きつけるようにゾイアスを腕で払った。すでに事切れているのだろう。倒れかけていたゾイアスは、人形のように横倒しに投げ出された。同時にジャグルが前に出る。

グレシオスに向かってくる。

鉞刀を振りかぶった。刀身がゾイアスの血で濡れ光っている。

ジャグルの打ち込みに合わせ、下から切り上げた。傍目からは同時に動いたように見えるかも知れぬが、そうではない。

そのことは結果になって現れる。ジャグルの肘^{ひじ}から先が宙に飛んだ。鉈刀を握りしめたままである。軽く回転して飛んでゆく。

驚きと、そして多分怒りで吠えようとしたジャグルの口内に、刀を突き入れた。首の後ろから切先が飛び出した。禿^はげた頭に左手をかけて刀を抜いた。

ジャグルの赤い瞳は、篝火を受けてまだ光ってはいたが、意思のゆらめきが急速に消えていった。

刃が鉄と、その下にある肉を断つ音が聞こえた。タデアスが横に払った一太刀^{ひとたち}である。

喉を切り裂かれたジャグルが、血を勢いよく吹きつつ膝をつくのが目に入った。

タデアスの右にいた村人が槍を構え直して、その胸を突いた。ジャグルは喉元を押さえながら、仰向けになって倒れた。

まだ体をもぞもぞと動かしている。村人がもう一度槍で突いた。引き抜いて、さらに突いた。表情を強張らせ、槍を振るっているのはアイダスであった。

この上さらに突こうとするのをタデアスが止めた。

「もう死んでおる」

タデアスの声がすっきりと耳に通った。

グレシオスは周囲を見回した。広場での戦闘は終わっていた。

ジャグルを皆殺しにできたかどうかは判らない。広場から他へと逃れた奴がいるかもしれない。

だが少なくとも広場からは剣戟けんげきの音は消えていた。

代わりに篝火が燃える音に混じって呻き声があちこちから聞こえてくる。

いくつもの影が目に入った。人間もあるし、ジャグルもある。

足の下の雪は融け始めている。それだけの血が流されたのだ。

広場の全域が戦場になったのだ。どこも一面、血が流れている。じきに足元は赤い囊みぞれでぐちゃぐちゃになるだろうが、それも夜が更ける頃には氷となるだろう。

グレシオスは刀に拭いをかけ、鞘に収めた。タデアスが近くに来た。

「無事か？」

「はい。大殿は？」

「手傷は負っておらぬがな」

いささか疲れてきた。その言葉を口中に呑み込んだ。

「この歳では堪こたえますな」

しかしグレシオスの胸中を察したのか、タデアスが代わって言った。

「やれやれ、情けない話だ」

グレシオスは首を振った。

不死を楽しむ神々ならば一笑^{いっしょう}に付^ふすかもしれない。

だが人の身にあってはそうもいかぬ。それは運命であると言って良い。だからこそ滑稽なのだが。

グレシオスはアイダスに目を向けた。槍を握りしめたまま、立ちつくしている。

「アイダス」

呼びかけられて、アイダスはグレシオスの方を向いた。

「お前は負傷者を確認しろ。動ける者とは助け合い、神殿で治療をせよ」

「儂と大殿は村の中を調べて回る。お前達は取り敢えず神殿に避難するのだ」

遊撃隊がジャグル^{そうとう}を掃討しているはずである。その様子を見に行かねばならない。

「血止めを優先しろ。動かせない場合はそのままでもいい」

「村内の探索が終わったら、すぐに人を遣^やるから心配するな」

タデアスと交互に指示を飛ばす。

あらかじめ教えてある内容ではあったが、こうして言ってやる必要があるそうだからである。

「ゆけ」

倒れて呻き声をあげている村人を指差すと、アイダスは槍を捨てて走り寄っていった。

「さて、我等もゆこうか」

「働き過ぎという気がしますかな」

「まったくだ」

軽口を叩きながら広場を歩いて、それぞれ使えそうな槍を拾った。

盾の方は悲惨であった。攻撃を直^{じか}に受ける以上当然ではある。

グレシオスの物はまだ使えそうではあるが、タデアスの方は当たりが悪かったのか完全に裂けており、使い物にならなかった。

代わりに手近にある盾を拾った。村人の誰かが落とした物だろう。

鉦^{かね}を叩く音が聞こえた。北東の柵を示している。鉦の音は止まず、すぐに西の柵を示す叩き方が続いた。

それを裏付けるように西から叫び声が聞こえた。今、戦っているようである。

「ゆくぞ」

「はっ！」

第十章 柵

正門を守護するグレシオスの元にどれだけの数が向かったのかは判らない。

ただしハイゼースの知らせによれば、ゴロドがないことは確かである。それが大きな救いであった。

アルテアは村人三人を連れ、西の柵に向かっていた。グレシオスの指示によるものである。

同様に鍛冶師のダイオンとその息子達が北東の柵に向かっている。

メグレイスは四人の村人を率いて広場の後方、グレシオスの館へと通じる坂の入口近くに控えている。

ジャグルが広場を突破してくることは難しいのではないかと思うが、それが起こらないとも言い切れないし、はぐれのジャグルが迷い込まないとも限らない。

グレシオスの館は戦えぬ者達の避難先である。そこにジャグルを行かせてはならない。

断じて防がねばならない。

そもそも館に注意が向かないようにすることが肝要である。

ゆえにメグレイスは一箇所に留まらず、ある程度

村内を歩き回って行動している。

見せかけではあるが坂の入口を中心に村を東西に移動しつつ警護している。

グレシオスとタデアス、そしてメグレイスとで考えた配置であるが、アルテアには疑問が残っている。いや、疑問と言うより不安であるか。

戦力を分散させ過ぎたのではないかという恐れだ。

無論軍議の時にその話も出た。だがこれでいこうということになった。

実際、他の選択肢は無かったと云えるのだ。現状は必然であると云えよう。

全ては『ジャグルが三十匹前後である』という前提上に成り立っている。

その想定が外れたとき、つまりジャグルの数が予想を遥かに超えているなどした場合、村は全滅することになる。

そのことを考えると、アルテアは胃が縮むように思い、喉が^{つか}疼えるのを感じた。恐れが体に染み込んでくるのを知覚した。

グレシオスにタデアス、そしてメグレイスも、その事については一言も触れなかった。

ヨルスは気付いていないだろう。戦場経験のない、ごく普通の老人であるから当たり前だと思う。

自分は気付いた。が、やはり一言も触れなかった。

言っても詮無いことであるし単なる架空の話としても、つまり起こるかも知れぬだけの話であっても、村人達は大きな恐怖に襲われることだろう。

そして恐れようが、はたまた逆に意気を上げようが、ジャグルが襲って来るという現実には一向関係ない。

——ならば士気が減じるようなことには触れぬ方が良いのではないか。

神職にあるまじき考えである。

真実を話すべきだ。

だが話したからといってどうなるのか？

どうもならない。むしろ悪い結果を齎^{もた}らすだけだろう。

となれば彼らにとって最善の道を、迷い無く完^{まっ}うさせてやれることに全力を盡^つくすべきではないか？

狡^ずさが潜んでいる、と思った。

やはりどこまで考えても隠蔽^{いんぺい}は隠蔽、神への裏切りである。

神罰^{くだ}が降るならば甘んじて受けよう。

今はとにかくジャグルを殺すことである。村を守らなければならぬ。

迷いを払い捨て、アルテアは走った。

西の柵は高さも人の背丈を多少超えるくらいであり、その気になれば容易に進入してこられる程度のものだ。

北東の柵も同じであるが、こちらにはダイオン達に向かっていて、そしてジャグルの進入がなかった場合には合流することになっている。

その際には必ずメグレイスの守備する坂の入口を通過すると決めてある。

そうすれば移動を通して状況の確認ができるからだ。

正門以外の場所からジャグルが多数進入してきて、一直線に避難先の館を襲撃するということは考えにくい。

その理由の一つには、それほど多数の別動隊をジャグルは有していないであろうという事である。

もう一つは奴らの習性からして、目の前の相手に襲いかかることに集中するだろうからである。

つまり広場でジャグルの本隊を叩き、館への進入経路である坂の入口を塞いでしまえば、避難している者達はさしあたって安全だろうと予想できるのだ。

ゆえに常備する守備隊を置くが、どこを守っているのかを悟らせないようにする必要がある。

自分を含め、他の遊撃隊も全て、坂の入口を中心

に行動するように定められている。

その意味では村の戦力は各部隊に分けられているとはいえ、実質はグレシオス率いる広場守備隊と、坂の入口を守備する部隊との二つだけであるとも云える。

小さな村である。狭くはないが、規模としては小さい村である。

移動にそれほどの時間を要するという事はない。

アルテアと三人の村人はそれほどの間を置かずに西の柵に^{たど}辿り着いた。

今頃は正門前では戦いが始まっているかもしれない。

あの人数でジャグルを防げるかどうかは判らなかったが、指揮をするのは、あのグレシオス・セウェルスである。

必ずや戦神の加護が与えられるであろう。

柵の近くにある家まで来ると、アルテアは走るのを止めた。

村人に手で合図をしながら家の壁に沿って進み、家の陰から柵の様子を^{うかが}窺った。

予想通りジャグルどもはこっそりと柵を越えて村内に進入してきていた。

^{かがりび}篝火は家と柵の間の辺りに設置してあり、既に赤々と燃えている。火の向こうに、^{うごめ}蠢くジャグルの

姿が見える。

総数は確認できない。だが多くて五匹というところではないだろうか。

その内何匹のジャグルが柵を越えて進入してきたのかは定かでなかった。

ジャグル達はときおり囁き^{ささや}交わしながら一匹ずつ柵の下を^{くぐ}潜ってくる。肘と腹を使い、ずりずりと地を^は這う物音が聞こえてくる。

見回りの時に確かめたはずなのだが、いつの間にもやら進入用の穴が通じているのだ。

さすがジャグルは地中で暮らしているだけあって穴掘りに^た長けている。

敵ながら感心する^{てぎわ}手際の良さである。

「神官様……」

ニーガスが囁きかけてきた。アルテア指揮下の内の一人である。その他はリュコメノンとトゥーサである。

四人とも家の陰にすっぽりと隠れてジャグルの様子を窺っている。

「どうしますか？」

闇の中でニーガスが目を動かした。やや落ち着きがないように見えるが、^{おび}怯えていると言うより闘志を抑えているようである。

早く戦いを始めたくて仕方がないのかもしれぬ。

こちらは四人しかいない。

相手にできるジャグルの数は精々^{せいぜい}四、五匹というところだろう。

こちらは実戦は未経験。それでもかなりの危険をおか^{おか}冒すことになる。

先程正門の方から激突音が聞こえた。

今は喚声^{かんせい}が聞こえてくる。

耳を澄ませば金属の打ち合う音も聞こえてくる。

向こうはもう戦闘が始まっているのだ。

小規模戦闘であるから長引くことはあるまい。そしてセウエルスのおお^{おおとの}の大殿は必ずお勝ちになる。

勝たぬはずがない。あのヴェルデスの血を引く勇者である。

アルテアはグレシオスが敗れることを全く考えていなかった。

ゆえに問題となるのは正門とこちらとの戦闘時間の差だけである。

どちらがより早く決着するかは判らない。

自分達が正門側に駆け付けるにしる、正門のグレシオスの部隊がこちらに来てくれるにしる、いずれにしても双方相手の援軍を頼める状態にあるわけである。

ならば全てのジャグルが入って来るまで待つべきだろうか？

——いや、それはまずい。

少なくとも当面は四人で相手しなくてはならぬわけだし、やはり一度に相手取る数は絞^{しぼ}った方が良い。

こちらから仕掛^{しか}けるといふ条件つきではあるが、自分一人で二匹まで始末したい。

最初の一撃で一匹を仕留^{しと}め、即座に二匹目に向かえば可能ではないだろうか。

そして村人達が一匹ずつ。素人である彼らには荷が重いかとも思うが、最低でも一人で一匹、始末してもらわなくてはならない。

無論自分も素人ではあるが本格的な訓練を受けている。腕には自信がある。

その自信が危険であることも自覚している。

「実戦は訓練とは違う」のだ。

グレシオスなどを含め、その他にも戦働^{いくさ}きをしてきた幾人かの戦士達から同じ教えを受けた。

考えるまでもなく、その正しさは判っている。

だが、今は悠長に構えている暇はない。

戦うしかないのだ。

「もしもジャグルの数が多いときは、すぐに笛を吹くのだ」

トゥーサに囁くと、無言で頷き返してきた。

彼女には笛を持たせてある。小さな笛で、高い音

を発するものだ。それを首から提^さげてある。

巡廻中の遊撃部隊は笛の音を聞けばすぐさま、そこに駆け付けるよう取り決めてあった。

「行くぞ」

アルテアは三人を促^{うなが}し、闇の中へと躍^{おど}り出た。

槍を腰だめに構えて小走りに柵へと近づいた。

ジャグルは夜目が利くというから、こちらの姿に気付くのもすぐであろう。

とにかく先に槍をつけなくてはならない。

篝火に照らされて三匹のジャグルが目に入った。

小柄な立ち姿はまるで少年のようだが、どこか猿が直立しているような、不気味な安定の無さを感じさせた。

一匹が振り向いた。炎に照らされて赤い目が光る。

「いやあああっつ！」

アルテアの喉の奥から気合いが迸^{ほとばし}った。

ジャグルが戦斧^{せんぶ}を構えようと動いた。が間に合わず、その胸にアルテアの槍が突き刺さった。

何かを吐き出すような呻^{うめ}きを漏らし、ジャグルはよろめ^{よろめ}蹠^{よろめ}いた。

素速く槍を抜いて二匹目に向かおうとしたとき、鉞^{ひらめ}刀が目の横で閃いた。

「ギイッ！」

槍で受けようと思ったが身体からだはそうは動かなかった。アルテアアの体は素速く後ろに下がり、同時に槍を半回転させ、柄えのところでジャグルの腕を打った。

もしも槍で受けていたら押し込まれるか、下手をすれば槍の柄を両断されていたかもしれない。

思考の間違いを身体が正したのである。思考よりも適確に体が動いたのである。日頃の修練の結果であった。

胸を突かれたジャグルが尻餅しりもちをついた。今にもアルテアに斬りかかろうとしていた方は鉞刀を取り落とし、呻いている。

そこをトゥーサが突いた。脇腹を突かれたジャグルうずくまが蹲った。アルテアがさらに首元を突いた。

少し離れたところではニーガスとリュコメノンが一匹のジャグルを槍で突き殺しているところだった。

どうやら上手く片付けたようだ。

アルテアアの胸に僅わずかながらの安堵感が広がった。とその時、木を打つ音が鋭く響いた。はっとして柵の方を振り向いた。

赤い瞳が炎の向こうに幾つも並んでいた。二匹や三匹ではない。その倍以上はいる。

「あ……」

トウーサが小さく声を上げた。

ジャグル達は戦斧を柵に叩きつけている。木樵^{きこり}のようだ。激しい音がしている。ジャグル達は急いでいる。

「笛を！」

アルテアが叫んだ。

第十一章 戦士

坂の入口にまで来ると、家の陰から幾人かの人影が現れた。

おおとの
「大殿様」

ひときわ
一際大柄な影が呼びかけてきた。メグレイスである。

「おう。長神官殿」

「はい。お二人とも御無事でありましょうか？」

かがりび
篝火がやや遠くにあるため、その姿は余り判然としない。

しかし狼の毛皮を頭から被^{かぶ}っているのはメグレイス一人であるし、斧槍を持っているのもこの男だけである。

容易に何者であるか知れるのであった。

斧槍というのは槍の穂先に戦斧を加えた^{ながえ}長柄の武器である。

振るうにはかなりの^{りよりよく}膂力を必要とするが、メグレイスならば全く問題はないであろう。

「うむ。儂もタデアスも無事よ」

「それはようございました」

「して、そちらは異常ないか？」

「何もございませぬ。ですが先程イドナ達が西の柵に向かいました」

広場にいた時、西から戦いの音が聞こえてきたが、おそらくそれであろうか。

「笛か？」

グレシオスの問いにメグレイスは黙って頷いた。

最初の攻撃が終了次第、弓隊は遊撃に編入されることになっていた。

広場の戦いは乱戦になるゆえ弓による援護はあまり効率的とは言えないからである。

統率された兵士達ならば敵味方入り交じる中であっても、状況に応じて弓を投入することは可能であろうが村人の間では無理だ。同士討ちの危険性がある。

ゆえに弓隊は遊撃に回り、正門以外の柵を越えて忍び込んでくるであろうジャグル達を地道に始末する役に回されたのである。

「我等の戦いよりも前ですか？」

タデアスが尋ねた。

「ほとんど同じであろうかと思われます。ジャグル共はどうやら正門以外からも同時に村を襲ってきたようです」

思った通りである。

だがそうになると、ジャグルの数がグレシオスの想定を超えているのかもしれない。

不吉な感じが胸をよぎった。

この戦^{いくさ}には始めからどこか妙な不吉さがある。

言葉では上手く言えないが、そう感じるのだ。

そしてグレシオスには長年の経験から、その『感じ』がいかに危険なものであるか判っている。

「……ダイオン達は？」

「いまだ何も」

「そうか」

グレシオスは考え込んだ。

何もないというのは、それはそれで不^ぶ気^き味^みである。

もちろんダイオンとその息子達が何事もなく村内を見廻っているということは考えられる。

だが嫌な予感がした。

「イドナ達は全員で西の柵に向かったのか？」

「はい」

メグレイスは頷いた。

となると先に向かったアルテア達と合わせ、西の柵にはかなりの兵力があると考えていい。

ジャグルを食い止められれば良し。もし敗退するとしても広場にまでは出てくるであろう。または直接メグレイス達と合流するか。

いずれにしても指揮はメグレイスに任せて良いだろう。

「良し。我等は北東の柵に向かうことにする」

「お宜^{よろ}しいのですか？」

メグレイスが遠慮がちに問いかけてきた。

何を言いたいのかは判った。ダイオン達を確かめに行くのは自分が引き受け、代わりにグレシオスとタデアスはここで守りについてはどうかというのであろう。

今一戦交えてきたばかりである。少し休憩を取ったらどうかということか。

いや、休憩を取る意味も含め何よりも、坂の入口という最重要な場所を守るのはグレシオスであるべきだとの気持ちもあるのではないだろうか。

だがグレシオスにはそんなつもりは更^{さらさら}々なかった。

「いや、このままゆくことにする」

「幾人かお連れになりますか？」

グレシオスは晒^{わら}った。

「そんなことができるはずもなからう」

坂の入口の兵力は減らせない。たとえ、最後まで休眠兵力となったとしても。

「我等のことはお気になさいませぬよう」

タデアスが言った。

「それと戦斧を一丁いただけませぬか」

「わかりました。ビゼ、タデアス殿に戦斧をお渡ししろ」

「はい」

ビゼが近くの小屋に入り、すぐに戦斧を持って出てきた。

小型であり、片手で扱う大きさだった。ただし手斧ではなく、ちゃんと戦斧の恰好をしていた。

ビゼはタデアスに戦斧を渡すと再び小屋に戻り、今度は角杯かくはいを両手に持って現れた。

「あの、これを」

グレシオスとタデアスに角杯を差し出した。林檎酒のようである。

「どうぞ。暖まります」

「すまぬな」

「かたじけない」

それぞれ受け取って一気に飲み干した。グレシオスの流儀からは外れるが悠長に飲んでいる時間はない。

角杯を返そうとしたとき、笛の音が闇を渡ってきた。

「西ですな」

タデアスがつぶや吹いた。

笛が二度鳴ったということである。混乱から思わず吹いてしまったのか、それとも実際に危機的な状況にあるのか。

いずれにせよ行ってみなくては判らない。

「いかがいたしますか？」

タデアスが聞いてきた。

このまま北東の柵に向かうのは少し考えものであろう。

二度も鳴った笛が気懸かりである。

少なくとも西の柵で何かがあった、または生じているというのは間違いがないだろうからだ。

はっきりしている方を優先した方が良いかもしれない。

「これで西の柵を無視できなくなったな」

「はい」

タデアスが^{うなず}頷いた。

「取り敢えず確かめに行った方が良いのではないで
しょうか」

「うむ」

グレシオスは歩き出した。タデアスが従う。

「お気をつけ下さい」

メグレイスが心配げに言った。

気持ちは急^せいたが走ることはせずに歩いた。

もし村内にジャグルが進入しており、途中で待ち構えていたりすれば危険だからである。

要所要所に篝火を置いてあるとはいえ、辺りは闇に包まれている。物陰から射かけられないとも限ら

ないのだ。

そうした気配を探るようにしながらグレシオスとタデアスは西の柵へと急いだ。

ここら辺りの道は、まだ白い。

幾つもの足跡が残り、土が混じってはいるがまだ白かった。広場のように一面赤く染まっただけではなかった。

角を曲がり西の柵に続く道へと入ってすぐ、家の軒先にうずくまっている影を見つけた。一瞬ジャグルかと思ったがそうではない。村人だった。

幸い場所が道の角にあたるので近くに篝火があり、すぐに人と判ったのだ。

村人は家の壁に背中をつけ、胸を抱くようにしてすわ坐っていた。

近くに行くと、おび怯えた様子でグレシオス達を見上げた。

「フィオレではないか」

弓隊の娘である。イドナの指揮下にあったはずだが。

凄い汗を掻いていた。額に髪を貼りつかせている。

「ご、ごりょうしゅさま……」

「何があった？」

左手で右手を包むようにして胸の前に抱えこんで

いる。暗くてよく見えないが傷を負っていることは判った。

「見せてくれるか」

タデアスが^{そば}傍にしゃがみ込んだ。

グレシオスは篝火から一本抜いてきてタデアスの手元を照らした。途端に胸から腹まで血まみれになったフィオレが目に入った。

重傷だと思った。^{きも}肝が冷えたが、すぐに出血は胸でも腹でもなく、右手からのものだと判別がついた。

「開くぞ」

丁寧な仕草でタデアスが、しっかりと握られた左手を開かせてゆく。

^{ちぎ}千切れかかった指が見えた。^{すじ}骨と筋が飛び出しているところを見ると、鈍器で叩き折られたものだろう。

元に戻る傷ではない。

「いいいっっ！！！」

フィオレが体を突っ張らせた。

「大丈夫だぞ」

力強く言うとタデアスは、まず^{ひも}紐でフィオレの腕を縛った。それから包帯を取り出してフィオレの右手を巻いていった。

急場^{しの}凌ぎの、治療とは言えないようなものではあ

るが血止めにはなる。

「良いか？ この角を曲がって真っ直ぐ進めば長神官様がいらっしゃる。そこで治療をしてもらうのだ。一人で行けるな？」

フィオレは歯を食いしばって頷いた。

「西の柵からジャグルが入って来たのだな？」

確認するためにタデアスが尋ねたが、痛みのあまりフィオレは声が出せぬらしい。無言で頷いた。

タデアスがグレシオスに振り返った。何も言わなかったが、グレシオスにはタデアスの言いたいことが判った。

「我等はこれから西の柵に向かう。ジャグルどもは一匹残らず始末するゆえ、安心いたせ」

グレシオスは言った。

フィオレはタデアスの手を借りて立ち上がった。顔中に脂汗が噴き出していた。

「……神官様が」

「大丈夫だ。我等に任せよ」

今度はタデアスが言った。

弱々しい足取りでフィオレが去っていくのを見送ってから、グレシオスとタデアスは再び歩き出した。

「まずいですな」

「うむ」

言葉はそれだけだったが、事態はお互い判っていた。

フィオレは増援で向かった弓隊の一員である。

それがあのような所で傷を負って倒れていたとなると……。

先に向かったアルテア達の安否が心配であった。

ここから先、西の柵まで道は真^まっ直^すぐである。

辺りの気配に注意しながらグレシオス達は進んだ。

柵の傍の篝火が消えている。篝火のあった辺りには闇が広がっていた。

嫌な予感がした。

盾を構えながら慎重に進んだ。

灯りが完全にとどかない場所にまで足を進めるつもりはない。

まずは柵の手前にある篝火を頼りに、灯^{あか}りのとどく範囲で周辺を見極める。

それから松^{たいまつ}明を一本を持って闇の中を調べて回るつもりであった。その頃には誰か他の者もやって来るかもしれない。

人手が増えれば安全も増すし、現状の精確な把握も可能になる。

消えてしまった篝火の周辺に倒れている人影がい

くつも見いだされた。暗くてよく判らないが、小柄な影はジャグルだろうか。

まだ体格の定まっていない、若い村人だという可能性もあったが、それは考えたくなかった。

そして驚くべきことには柵が無くなっていた。

境界に沿って並び、影を作っているべきはずの柵がないのだ。

つまりジャグルに破壊されたということである。

地面近くに長い影が横たわっているようだから、おそらくは倒されたのだろう。柵の姿は闇に沈んでしまっており、しかとは見えなかった。

背後から燈りを受けつつ、グレシオスとタデアスは歩いた。

燈りが大分遠ざかったと感じた頃、影の判別がつき始めた。だが村人とジャグルの見分けがつく程度には燈りは届いていた。

雪は踏み荒らされ、土と混じって泥と化し、しかも至る所に血が拡がっている。

村人の中にも矢が突き立った屍体があった。

ジャグルが弓を用いたというのは意外だったが、村人とジャグルとで互いに射たということになれば、村人側の犠牲が大きくなるだろうことは予想がつく。

倒れている者の中には神官衣の姿が見えた。

「神官殿！」

タデアスが駆け寄った。グレシオスも後を追った。

アルテア^{なきがら}の亡骸には首がなかった。

最後まで戦ったのだろう。その体は俯伏^{うつぶ}せに倒れていた。神官衣^{すそ}の裾からは力を失った二本の足^{のぞ}が覗いていた。右腕の下には振るっていたであろう槍があった。

左手はなかった。神官衣は左肩から先が血まみれになっていた。

首を落とされた時^{おびただ}でもであろうが、夥しい血が流されており、文字通り血の海に沈んでいた。

近くには村人^{しがい}の死骸が二体あったが、恥ずかしいことに誰のものかは判らなかった。

ジャグルの屍体もあった。

「……燈りを」

タデアスに命じた時、突然近くで笛の音が鳴った。

笛のした方を素速く見ると幾つか歩いてくる影が目に入った。

小柄である。歩き方に、どうしようもない獣臭さのようなものがある。

ジャグルである。

赤い目が闇の中に光っている。影は全部で六体

あった。

燈りがぼんやりと届く辺りにまで、ジャグルの群は歩いてきた。

一匹のジャグルが笛を持っている……あれは、トウーサに持たせた笛ではないのか。

口の回りを血まみれにしたジャグルがいる。その手には人の首があった。長い銀髪を引つつかんでぶさ^さら提げている。

他にも口の回りを血まみれにしたジャグルが二匹いた。

笛を持ったジャグルが再び笛を吹いた。高い音が間近で鳴った。

首を持ったジャグルが腕を振りかぶり、グレシオス達に向けて首を投げつけてきた。

それほど勢いをつけて投げられたのではないため、首は小さな弧を描いて雪上に落ち、ぼそぼそとグレシオスの足元にまで転がってきた。

アルテアの首であった。片目を失っている。割り抜かれた目玉の回りから頬、あごの辺りにかけてまで皮膚がむしり取られていた。いや、齧^{かじ}り取られたのであろう。

「大殿」

タデアスが注意を促す口調で囁いた。^{うなが}

「判っている」

もしアルテアの首を拾おうとすれば、その途端にジャグルどもは襲いかかってくるだろう。

だから拾い上げるわけにはいかない。

「意外と頭が良いのですな」

「悪知恵が回ると言うべきだな」

云ってからグレシオスは、先程正門の前でタデアスと交わした言葉を思いだした。

あの時とは言葉が逆になっているが。

ジャグルどもはこちらの様子を窺^{うかが}っているようだった。

相変わらず表情が読めないので何を考えているかは判らない。だが攻撃の機会を待ち受けているという感じは伝わってきた。

おかしい話ではある。

その考えを、心を理解することなどできぬ相手であるのに、戦いにおいてのみは察しがつくというのは。

戦うことを恥じたことはない。大神の裔^{すえ}として、戦いは神聖なものだと自覚している。

たとえどれほど恐るべき光景、醜悪な光景が現出したとしても、戦いそれ自体には胡麻化^{ごまか}しようのない純粹さがあると確信している。そこには真実があるのだ。

真実は尊ぶに値するものだし、それから目を逸^{そら}す

べきではない。

そう考えることこそが、己もまた、戦いに取り憑つかれた亡者であるという証であるにしてみてもだ。
もうじゃあかし

グレシオスには間違いなくジャグルがこちらの隙に乗じてくるであろうと思えた。タデアスも同様である。

ジャグルの獰悪どうあくさは、しかし戦いにおいては己等と共通する何かがあるということなのか。

おもしろい話ではない。だが無視してよい話でもない。しかし今考えるべき話でもない。

グレシオスは金具の外れる音を聞いた。できるだけ顔を動かさずに見ると、タデアスが腰の後ろに手を回して槍投げ機を取っていた。

ジャグルの数は六匹である。先程の戦いの感じからして、己とタデアスならば三、四匹までなら同時に相手にできると思えた。

五匹を超えると危ないだろう。六匹なら相打ち、七匹以上になるともういけない。全滅の危険があると見ていい。

とはいえ戦闘における兵力差というのは実に微妙なものだから、一概には云えないのであるが。

僅わずかな差が彼我ひがの立場を一変させてしまう。ゆえにこそ戦況の見極めには細心を要する必要がある。

グレシオスも槍投げ機を取った。それはイスター

リスの姿が浮彫りにしてある物で、グreshiosの父の、そのまた父も使っていたという古い武具である。

「^{のんき}暢気な奴等だ」

ジャグルたちを刺戟しないように静かで自然な動作を心がけた。槍を返し、^{こじり}鎧に槍投げ機を噛ませる。

「そうですね」

答えながらタデアスも同じことをする。

襲いかかるならすぐにそうすれば良いのだ。

敵は二人、味方は六体となれば必ず^{たお}斃せよう。犠牲は出るにしてもだ。

なのにそれをせず、隙を作るような真似をしている。

ジャグルどもは判っていない。

敵に隙を作るために^{ほどこ}施した行為は、同時に自分達にとっても隙を作る行為であるということ。

戦場ではあらゆることが流動的であり、時にはしばしば両義的なのだ。

これを教えてくれたのはクレオラだった。

槍を肩に^{かつ}担ぎ上げた時、ようやくジャグルの群に動きが見えた。「カツ」とか「ゲツ」とか、例の呻きとも叫びともつかぬ声を上げながら、雪を踏んで走ってくる。

いや、もはやその足元は溢れ流れた血で、囊のよ
うな状態になっている。

だからじゃくじゃくと音がした。ジャグルの鉄の
靴が、融けかけた赤い囊を撥ね散らしながら迫って
くる。

時間にすれば一呼吸二呼吸の間である。しかし、
グレシオスには十分な長さを持って感じられた。

槍を放った。

斧を振り上げていたジャグルの胸に突き刺さっ
た。穂先が背中に飛び出す。ジャグルは仰け反りな
がら蹠踵き、横倒しに倒れていく。その体を押しの
けるようにして、後ろにいたジャグルが前に飛び出
してくる。

右手ではタデアスの槍を受けたジャグルが同じよ
うに倒れていく。

「イーザイツ！」

タデアスが叫んだ。戦斧を左手に、右手に刀を抜
き放つと自分から駆けていった。

グレシオスも刀を抜いた。左肩に担ぎ上げるよう
にして大きく半身になる。タデアスとは違い、駆ける
ことはしない。ここで迎え撃つ構えである。

二人で同時に飛び込めば、互いの武器で仲間を傷
つける虞があるからだ。

包囲されているのならいざ知らず、この状況では

適度な距離を取って縦横に戦った方が良い。

どうせ時間は長くはない。刀槍をっての殺し合いは文字通り一撃必殺である。

敵よりも早く己が刃を相手に叩き込み、すぐさま次の相手に向かう。それが全てである。

ゆえに複数相手の時には辺り構わず武器を振り回せる状況が望ましい。

最初の当たりで敵の数を減らし、大きく味方に有利に持っていく、二人目を斃^{たお}す頃には五分になる、そういう状況を作るためである。

ジャグルの顔が目の前に迫った。

「イーザイツ！」

グレシオスも叫んだ。身を沈めつつ、引き斬りにジャグルの脇を抜ける。刃がジャグルの首筋を捉え、皮膚と肉を断つ手^た応え^{てごた}があった。証拠とばかりに左の頬に返り血が飛んできた。

すぐ目の前に別のジャグルの胴。肘を翳^{かざ}し体当たりの要領で突き飛ばした。

そのまま素速く身を反し盾^{かえ}を掲げた。相手の確認などしていない。勘である。

盾に激突する感触。刀か？ それとも斧？ 一瞬思ったが判断はしなかった。それよりも先に足が出た。

「グヴァツ」

ジャグルが呻いて吹き飛んだ。背中に体が当たる感触があった。タデアスである。

「何匹やった？」

「二匹！ 大殿は？」

「お前の勝ちだ！」

互いに背中合せに立ったまま周囲を見回した。思わずいつもの癖でそうしたが、ジャグルはもう一匹しか残っていなかった。今グレシオスが蹴^け倒したジャグルである。

先に突き飛ばしたジャグルは、すでにタデアスが仕留めたようだった。

当たり所が悪かったのか、ジャグルは咳^せき込みながら雪の上を転がった。無論それでも起きあがろうとはしている。

タデアスが槍を拾ってきた。

「大殿」

アルテーアの槍であった。

グレシオスは槍を受け取ると、地面に倒れたジャグルの元へ歩いていった。

「ジャグルよ」

声をかけた。ジャグルがグレシオスを見た。赤い目がこちらを見上げる。

その目玉に向けて槍を突き刺した。

「ギィイヤァアアツツ!!」

ジャグルが藻掻く。その手足が勢いよく動く。

「お前がやったかどうかは判らぬが――」

食べた、という言葉は使いたくなかった。

「同じことであろう」

槍を深く突き刺してゆく。ジャグルの体が痙攣し始める。頭蓋の奥に穂先が達した感触があったが、グレシオスはさらに槍を突き刺した。だが頭骨が頑丈なため、穂先が内側を滑って流れた。その結果、ジャグルの頭を槍で吊り上げるような恰好になってしまった。

グレシオスは槍を離れた。

タデアスがアルテアの遺骸の傍に膝をついている。

遺骸は既に仰向けに返されており、右手が胸の前に置かれていた。

グレシオスはアルテアの首を拾い上げた。雪を払い落とし、残された目を閉じてやった。

「立派だったぞ」

労りをもって話しかけた。

「神官は立派だった」

戦いの現場を見たわけではない。

だが死体を見れば判る。アルテアは勇敢に戦い、そして命を落としたのだ。

戦神に仕える神官として義務を果たしたのだ。

タデアスが丁寧な仕草で首を受け取り、もと在った場所へと戻した。

むざん
無残な姿ではあったが、勇敢なる戦士の姿でもあった。

第十二章 影

広場に向かう途中、雪が降り始めた。

恐れていた雪だが、いざ降り始めてみると不思議と恐怖や危機感は感じなかった。

風さえ、吹雪さえ吹かなければいいのだ。ならば雪は暖かさを齎^{もた}らしてくれる。

デルギリアの雪は水気が少なく、さらっとしている。

音もなく天の闇から雪が降りてくる。

はらはらと軽く降りかかってくる。

それが何故だかひどく物寂しく感じられた。

広場では動ける者達が負傷者の治療にあたっていた。見ていて手際^{てぎわ}が良いとは言えなかったが、治療にあたる村人達は真剣に黙々と作業をしていた。

薬草を煮る臭いが辺りに漂^{ただよ}っており、神殿からは呻^{うめ}き声や泣き声のようなものも漏れ聞こえていた。

「御領主様！」

見張りに立っていた村人が気付いて駆け寄ってきた。

「何人、犠牲になった？」

グレシオスの言葉に村人は辛そうな顔をした。

「……十人です」

予想していたよりも多い。グレシオスは瞑目^{めいもく}し

た。

「そうか……皆よく頑張った」

「はい」

タデアスが^{ねぎら}ろうように村人の肩に手を置いた。村人はこみ上げる思いを^{こら}堪えるような表情をした。

「……みんなの様子をみてやって下さい。俺たちではよくわからねえこともありますんで」

「判った」

^や遣り取りを見ていた他の村人が寄ってきた。グレシオスとタデアスはその者達に自分達の槍と盾を渡した。

神殿の中には負傷者が並べて寝かされていた。その間を、やはり治療役の村人達が動き回っている。中にはグレシオスの館から呼び出された女達もいる。メグレイスの指示によるものだろう。

負傷者の横に^{すわ}入り込んで泣いている女がいた。女の背後に隠れてよく見えないが、様子からしてもう死んでいるのではないかと思えた。

多分、息子であろう。床に寝かされた姿はまだ若く、骨も細そうな頼りない体つきだった。

女は声を上げて泣くのではなく呻くように泣いていた。

しばらくグレシオスはその姿から目が離せなかった。

「御領主様……」

治療にあたっていた村人が指示を受けるべく話しかけてきた。

「血止めを優先しろ。それとモイラスを呼んでくるように。子供と老人はそのまま館で待機^{たいき}させろ。それともう数人、女達に降りてきてもらえ」

村人が頷^{うなず}く。

「男達には村内の見回りをさせろ。まだジャグルが残っているかもしれん」

「そんな……」

「油断するな。特に村の境をよく見回れ。最低でも二人一組でな。決して一人で見回ってはならぬ。夕デアス」

「はい」

「見回りの指揮を執^とれ。儂^{わし}は負傷者を見て回りた

い」

「かしこまりました」

話しかけてきた村人を連れて夕デアスは外に出て行った。

グレシオスは負傷者の間を歩いた。

血の臭いと薬草の臭いが混じり合って漂い、苦悶の呻き声が耳に入ってくる。

見知った顔の者達が苦痛に呻き、あるいは死して寝かされている様を見るのは辛い。

立場上こうした状況に多く接してはいる。だが慣れることは無い。いつになってもやはり胸の奥には痛みのようなものが走るのだ。

それは変わらないが、今回の戦いは常にも増して辛かった。

戦場では日常的な光景であっても、ここに傷つき死しているのは、戦士ではない村人なのである。

そのことが今までよりもグレシオスの気持ちを暗くさせているのだった。

「ご、御領主様……」

ひび割れたような声で呼ばれた。柱の陰になっているのですぐには誰だか判らなかつた。

「……ダイオン」

変わり果てた姿であった。全身に包帯が巻かれていて、あちこちに血が^{にじ}滲んでいる。

一目見て助からないと判った。

「やりましたぞ……一匹残らず……」

「無理をするな」

云ってダイオンの傍に膝を着いた。

「……ハノンがやられちゃいました」

「そうか」

グレシオスは頷いた。ハノンはダイオンの真ん中の息子である。

「ネモンとイドンは？」

ネモンが長男、イドンは末の息子である。

「ネモンが……俺を、^{かつ}担いできたそうです……イドンは……しらねえ」

「二人とも無事であろうよ」

気休めだと思いつつ云ってやると、ダイオンは顔を歪めて笑った。

「あいつらには……まだまだ、教えてやらにゃいけねえ」

「そうだな。武具の修理もして^{もら}貰わねばならぬし、何よりもこの戦いが終われば沢山の仕事が待っているぞ」

「まかせて貰いましょう……そう言いてえが……」

「うむ。頼むぞ」

ダイオンは呻いた。血を吐いた。その様子に気付いた者が急ぎ寄ってくる。治療役の娘だ。グレシオスは手で制した。

「俺は、もう……駄目みてえです」

「そんなことはないぞ。傷は浅いとは言えぬが助からぬと決まったわけでもあるまい。気持ちをしっかり持て」

「人使いの^{あれ}荒え、お方だとは思ってましたが……」

「性分だ」

知らずダイオンの手を握っていた。大きく分厚い頑丈な手だが、やけに冷たかった。

ダイオンの呼吸が怪しくなってきた。近くに立った娘が狼狽ろうばいしている。

「あの世でも……鍛冶かじの仕事は、ありますかね……」

「儂の父祖達いまが坐す。武具の修理が山ほど有るぞ」

イスターリスの信者の内、特に剛勇傑すぐれた者は死ユノー後冥界において特別の待遇を与えられるのだと信じられている。

その者達はイスターリス自らによって『勇者の館』と言われる宮殿に集められ、日夜武技の訓練に明け暮れているのだという。

やがて来る戦いに備えて、戦神の下で再びその武勇を振るうために。

グレシオスの父祖達はそのほとんど全てが勇者の館の住人となっているはずである。

グレシオスはそう信じているし、セウェルス族の者達もみな同じように信じているであろう。

「……そりゃあ、名誉なことだ……」

「お前の手で剣を打ち、鎧よろいを直して差し上げてくれるか？」

「……俺は、勇者の館に……呼んで貰えるんですね？」

「お前が嫌だと言ってもな」

ダイオンは苦しそうに笑った。再び血を吐いた。

「名誉な……ことだ……」

その言葉を最後にダイオンは静かに息を吐き、動かなくなった。

グレシオスは目を閉じた。

祈った。このような時、そうしてきたように心底祈った。

——我が父祖たる大神イスターリスよ。この者を
なにとぞ
何卒、勇士の列にお加え下され……。

ダイオンの目を閉じさせてやった。

「あの……」

立っていた娘が^{こわごわ}怖々話しかけてきた。

「……死んだ。必ずや勇者の館に向かったことであろう」

グレシオスは立ち上がろうとした。大きな力が必要だった。肉体的な力だけではなく、気持ちの上でも力が必要だった。

「引き続き治療にあたれ。死んだ者はそのままよい。葬儀は後で行なうゆえな」

「はい」

娘は^{すで}既に^{すす}啜りあげていた。

一当たり順に負傷者を見て回るとグレシオスは神殿の外に出た。

雪が降っていた。^{かがりび}篝火はまだ燃えている。この程度の雪ならば大丈夫だろう。

「御領主様……」

雪の中にイドナが立っていた。

「無事だったか」

「……はい」

イドナは俯^{うつむ}いて、消え入りそうな声で答えた。

理由は分かった。おそらくイドナは連れていた弓隊やアルテア達を置いて逃げ出したのだろう。

メグレイスの所へ向かわせたフィオレや、アルテア達の屍^{したい}体のあった様子からそれは想像がついた。

「お前はよく戦った」

「……」

「自分を責めるな。生き残った者達の手当てを手伝ってやれ」

「……はい」

イドナは洩^{はな}を啜^{すす}った。グレシオスはイドナの肩を叩き、その頭^なを撫でてやった。

「お前は十分に戦った」

イドナは泣きながら頷いた。弓をしっかりと握りしめている。手は返り血にまみれていた。

グレシオスはイドナを連れて神殿近くにあるメグレイス達の館に向かった。

神官^{ききよ}達が起居する施設であるが、今は前線基地というか、治療所として機能している。

湯を沸かしに来る者、切り取った衣服や包帯を持ってくる者が繁茂^{はんも}に出入りしていた。

イドナは入り口に立ち、やや戸惑うような表情でその様子を見ていた。近くに懸かった夜光燈^{やこうとう}の燈り^{あか}がその顔を照らしていた。

「手伝えるか？」

イドナに聞いた。

「はい。手伝わせて下さい」

「そうか。だが疲れているようなら休んでもよいぞ。あまり無理はせぬようにな」

イドナは頷いた。

「御領主様は……」

「儂はこれからやることがある」

答えながらカトールを脱いだ。大分返り血を浴びたので濡れてしまっていて少々脱ぎにくい。イドナが手伝ってくれた。

カトールと一緒に兜^{かぶと}も脱いだ。近くのテーブルの上に置いた。雪が降ってはきたが、このままだと寒いので壁に掛けてあったフェトウーラを取った。

肩の周りにフェトウーラを巻き付け、固定すると、椅子を引いて腰を下ろした。

途端、疲れがずしっと身体^{からだ}にかかってきた。口から軽く溜息^{ためいき}が漏れた。

イドナが湯を持ってきてくれた。

「すまんな」

負傷者に使う湯を分けて貰^{もら}ってきたのだろう。今は酒よりもありがたかった。

熱い湯を啜^{すす}っていると神殿の方から人の気配が近づいてきた。

「ここに坐^{おわ}しましたか」

タデアスだった。

「ごくろう。ジャグルは？」

タデアスが兜を取り、近くの椅子に腰掛けるのを待ってからグレシオスは尋ねた。

「予想よりも多くいたようすな」

グレシオスは頷いた。それはアルテアがやられた時に薄々感じていたことでもある。

「逃げ去るジャグルなど見なかったか？」

「姿は。ただし北東の柵の下に穴が掘られておりました」

進入用の穴であろうが逃げ出すのにも使われたかもしれぬ、ということである。

「そうか……ところでネモンとイドンを見なかったか？」

「ダイオンの倅^{せがれ}ですな」

タデアスの表情が曇った。

「ネモンは無事だと聞いている」

「はい。今、広場におります」

「……イドンは？」

「残念ながら……」

わず
僅かな沈黙があった。

「そうか」

グレシオスは^{つぶや}呟くようにそれだけを云った。

「……一応、正門を見てこよう」

「屍体の山の他は何もありませんぞ」

腰を上げかけるとそれを制するようにタデアスが言った。無駄足をする必要はないと云いたいのだろう。

「なに、気分的なものよ」

「では私も」

タデアスも立ち上がった。

「お前は休んでいるがよい」

「いいえ。大殿がゆかれるのですから」

万が一があっては、とでも言いたげである。

「屍体の山しかないと言ったではないか」

あき
呆れて指摘してやると、タデアスは困ったような顔をした。

「ですが……」

「判った。取り敢えずカトールを脱いでフェトゥーラを^{は お}羽織れ」

諦めて手を振った。タデアスはいそいそとカトールを脱ぎ、丸めて床の端に投げた。雑な扱いだが、

どのみち返り血が酷くてもう着られたものではないからだ。

壁に歩み寄るとフェトゥーラを取り、手早く身に着けた。それから今脱いだばかりの兜を手にとった。

「参りましょう」

グレシオスはタデアスを連れて外に出た。

神殿の入り口で火にあたっている村人から、それぞれ槍と松明^{たいまつ}を受け取った。盾は持たなかった。

正門に向けて歩き出した。広場に出るとすぐにあちこちに戦いの跡が見いだされた。ジャグルの屍体は一纏^{ひとまと}めに積み上げられており、武器は回収してあった。

村人の遺体は一つもなかった。

広場を抜けると道は綺麗になった。と言っても血の汚れがなくなっただけで、踏み荒らされた跡は依然残っているのだが。

しかしその上にも雪が積もってきており、明日の朝には真っ白に蓋^{おお}われることだろう。

手元の松明がぱちりと音を立てた。火の粉が僅^{わず}かに舞う。

村の正門が見えてきた。

「ドーロスは無事だったのであろうか」

呟^{つぶや}くと、タデアスが後ろから答えた。

「戦死いたしました」

「……そうか」

再び二人とも黙り込んだ。交わすべき言葉がなかった。

今は何かを云って気分を紛れ^{まぎ}させるよりも、じつとこの沈黙に耐え続ける方が良いという気がした。タデアスもそうであろうと思った。

「上に登ったか？」

「いいえ」

「それでは意味がないではないか」

「申しわけございません」

たしかに今さら門に登ったところで何も見えはずまい。逃げたジャグルの背中すら見えないだろう。

そう思っ^はいたがグレシオスは梯子^{はしご}に手を掛けた。手のつく辺り、軽く雪を払う。

槍を立てかけて梯子を登った。

足場上にも雪が薄く積もっていた。デルギリアの雪は融けない限り滑る事はそうないが、高所でもあるし、一応用心して立った。

村へと続くブレイオン街道へと目を遣^やった。松明を翳^{かざ}してみるが無論ほとんど先は見えぬ――はずだった。

道の先。

木の傍^{そば}に、小柄な影が立っている。

赤い瞳がこちらを見ている。

グレシオスは総毛立った。

すぐに考え直した。たかが松明の火でここから細部を確認できるわけがない。ひょっとしたらジャグルではないのかもしれぬ。何かの影がそう見えているだけかもしれぬ。

赤い瞳などそもそも見えてはいない。そう感じただけだ。

グレシオスはもう一度しっかりと、木の傍の影を
みす
見据えた。

影が動いた。

道に向かって歩き出す。すぐに闇に溶け込んで見えなくなった。

いかが
「如何いたしました？」

続いて上がったタデアスが傍に寄ってきて尋ねた。

「村人を集めろ」

グレシオスは短く、そう命じた。

第十三章 覚悟

怪我人はメグレイス達の神官館に残すことにした。重傷のため、動かさない者がいるからである。

戦える者達は全員でヨルスの館に移った。ここが新たな陣屋じんやとなった。

屍体は神殿にそのまま残した。

今は動かしている時間が取れないというのもあるが、すぐ近くに負傷者達がいるためである。

つまり屍体に『紛れまぎ』を期待しているわけである。近くに屍体が有れば、負傷者が息を潜ひそめて隠れていれば、ジャグルをやり過ごせるかもしれぬというわけである。

連中にとって人間の屍体は御馳走に違いないが屍体は歩いて逃げることはない。

ジャグル共が勝利の宴会を始めるにしる、先に村人を皆殺しにする方を選ぶであろうから。そのぐらいの智恵はある連中だとグレシオスは考えている。

ヨルスの館に集まると、まず鎧よろいを脱いだ。それから軽い食事を摂とった。

麺めんである。それもごく簡単に調理されたものだった。

ローゼンディアの食文化は非常に豊かであり、その内容は多岐わたに亘るが、ここイオルテス地方では麺

が一般的な食事なのである。

ただし騎乗でも片手で食べられるように具材を挟んだパンや、肉や煮野菜などの餡を詰め、蒸し上げた饅頭モーロというものもあり、こちらも麺と同じくらい食べられている。

尚、西方レメンテム帝国では主食はパン、または粥かゆである。更にその辺境で暮らすヴァルゲン人は魚を主食としていると聞く。

しかしローゼンディア人はと言うと一定しないのだ。

各地方によって色々なものを食べ、食文化を発達させている。

ここでも豊かなるローゼンディアという常套句が成り立つわけであった。

器に入っている麺は温かい湯気を上げていた。温麺と呼ばれるものであり、スープの中に麺を浸すのである。

このスープの味付けにも様々なものがあり、麺の方にも太さや形だけでなく風味付けの有る無しなどの様々な違いがある。

つまりは一口に麺と言っても実に多様な種類があるのだが、今出てきた麺は一般的なパリエと呼ばれる味なし素打ちのものであり、スープは塩味であった。

もっとも料理人もパリエだけではさすがに見映えが悪いと感じたらしく、ビエー口と呼ばれる豚ばら肉の燻製と、^{いろど}彩りと香料を兼ねた香草が入ってはいたが、いまいちの感は^{ぬぐ}拭いきれなかった。

しかしあまり重い物を食べるわけにはいかない。敵の襲撃を前提しているのである。

こんな時レメンテム人ならば塩水で味付けした^{かゆ}粥でも掻き込むのであろうが、ローゼンディア人、それもデルギリアの人間ならばこのぐらいが^{だとう}妥当だろう。

蜂蜜を溶かした紅トラナ茶を飲みながら皆で静かに食事を摂った。

トラナ茶はローゼンディアでは一般的に飲まれるお茶であり、いくつかの種類があるが、紅トラナ茶は蜂蜜や砂糖、牛乳などを加えて飲む事が多い。

黙々と麺を食べる。暖かい湯気が顔に当たるのが大層心地好い。

^{さじ}匙を使いながら丁寧に麺を受け、口に運ぶ。

その合間に熱い汁を胃に流し込む。スープはあっさりとした塩味に香草の香りが混じっていてとても美味だった。

ビエー口は柔らかく歯の間で崩れる。スープに旨みを吸い取られていたが十分いい味をしている。

腹の中に温かさが、力が満ちてくるのを感じた。

それとなく辺りの様子に目を走らせると、皆、浮かぬ様子で麺を口に運んでいるのが見えた。

戦いが終わったのに解散もさせず、再びこのように集まっている時点で誰もが嫌な予感を抱いているのだろう。

その予感は正しい。そしてその正しさを言葉にして発するのが自分の役目だとグレシオスは心得ていたし、覚悟もしていた。

「――皆そのまま聞いてくれ……」

再びジャグルが攻めてくるかもしれぬと告げると、村人の間に驚きと苦悶^{くもん}の空気が広がった。頭を抱えて呻き^{うめ}声を上げる者さえあった。

「……間違いないのでしょうか？」

メグレイスが静かに言った。動揺の様子は見られない。さすがである。

「奴等は来る」

あ
敢えて、グレシオスは断言した。

実際は確証があるわけではない。先程の影にしたところでジャグルではないかもしれず、ジャグルであったにしても再び襲って来るとは言い切れないのである。

だから本来は断言などできないし、するべきでもない。

にもかかわらずグレシオスは断言した。それは間

違いなく再び襲撃があると直感したからである。

無論、実際の状況は判っている。襲撃に備えるのならば正しくはまず第一に先程見かけた影がジャグルであると仮定すること、次にその上で再び村を襲ってきた場合を考えて対策するべきなのだろう。

しかしそれは判らない事を判らないままに放置した上での正しさでしかない。

現実の戦場にあってはそれは通らない。というのは、こちらが判ろうと判るまいと関係なく敵は自らの意思と目的によって行動するからである。

つまり情報不足であっても判断を下し、行動せねばならぬ事など戦場にはいくらでもあるのだ。

その結果失敗すれば死ぬ。成功すれば生きる。ただそれだけのことである。

しかしそこまで含めて今、村人達に説明をしたところでそれは無駄というものであろう。

判る者はいるかもしれない。だがほとんどの者には通じまい。

そして無用の混乱や恐怖、おそらくは厭戦^{えんせん}気分を呼び起こすだけになろう。

今指揮しているのは歴戦^{つわもの}の兵達ではない。

いかなる場合でも冷静に話を聞き、適確に行動できる相手ではないのである。

ならば必ず襲撃があると断言してしまい、緊張感

を維持しておく方が良い。

とにかく重要なのは皆が生き残ることだ。

村人に重要な選択を迫りながら、時によって真実を話したり、またはこのように話したりはせぬと言うのは卑怯^{ひきょう}であるとは思う。

その姿勢は決して褒められたものではない。が、今は最善と信じて迅速に判断を下していくしかない。

考える事は後でもできるのだ。

「数はどの程度になるでしょうか？」

「どうかな……」

メグレイスの問にグレイシオスは曖昧^{あいまい}な答え方をした。

正確な数は無論判らない。それもある。

だがもしも先程と同数、いやそれ以上の数が襲ってきた場合、全滅^{まぬが}は免れないのではないか。

必ず全滅するとまでは思わない。先程の戦いで村人の動きは大体つかめた。

想定していたよりも戦力は低かったが絶望的な程ではない。

ゴロドが混じっていれば別だが、敵がジャグルのみならば仮に三十程度の数がいたところで現有戦力でもどうにかなるかもしれない。

それはほとんど相打ちに近い状態であるにしても

だ。

極言すれば丘の上の館に避難している者達さえ無事ならば、後は全て死んでしまっても仕方がないという気はしている。

己自身、そしておそらくタデアスも、ここで死ぬことには抵抗はない。

ただしそれは村人の命と秤はかりに掛けてのことであって、無駄死にをやるつもりはないし、元より死にたいわけではない。

その先に生き残れる見込みがあるならば、たとえ危険なことであっても挑戦する覚悟はあるが、最初から死ぬと判っていることを実行するのは嫌である。

ゆえに現状でも生き残れる目を摸索もさくすること——そのことが大事なのだが、どうにも良い思案が浮かんでこないのだった。

「だが先程よりも多いという事はあるまいよ」

「何故でしょうか？」

メグレイスは質問を重ねてきた。おそらく周囲の村人に聞かせるためだろう。

村人達を安心させたいのだ。メグレイスは。

敵について情報があり、しかも何とかかなりそうだとこの予測を立てば村人も気力を奮ふるい立たせるのではないかと期待したのか。

となれば、そのように答える必要があるだろう。

敵の規模をある程度推定できること、そしてその事を兵達が知っておくことは重要だが、それは内容によるからだ。

敵があまりにも強大で勝算が無さそうな場合には、むしろ逆効果になることがあるのだ。

「もしも先程以上の数となれば、ゾエ村からこちらへ向かうまでの時間を、説明しにくくなる」

「どういうことでしょうか？」

やはりメグレイスは村人たちに聞かせたがっているのだ。

彼に判らぬはずがないからである。

「……もしも先程の倍、ジャグルがいたとする。それがゾエ村を襲ったとすれば、ゾエ村の住人達では、ジャグルの胃袋を満たしきれまい」

「ジャグルの数が多ければ、あっという間に全ての住民を食いつくしてしまうということよ」

タデアスが補足した。

普段ならばこのように口を挟はさんでくる事はない。意外に感じて目を向けると、タデアスもグレシオスを見て僅わずかに頭を下げた。

差し出口をして申しわけございません、とでも言いたげである。

何か考えがあるようだ。

「ここからゾエ村までは徒歩で二刻半ほどだろう。ジャグルどもが襲ってきた時間から考えて、ゾエ村を^た発したのは今日の昼頃であろう。ゾエ村を襲ったのは昨日の夜、となればその間は何をしていた？」

「酒盛りですか」

再びタデアスが口を挟んだ。わざと、^{いや}嫌みになるような言い方をしている。

道化のような役回りを買って出るつもりかもしれない。それで戦意を落とさせずに村人の理解を^{うなが}促そうというつもりか。

タデアスらしいとは思った。

「つまりジャグルの襲ってきた時間から考えて、次の襲撃はそれほどの規模にはならないということでありましょうか？」

メグレイスが分かりやすくまとめた。おそらく言いたかったであろう言葉である。

「うむ」

グレシオスは頷いた。

「どんなに多くとも二十といったところでしょうかなあ……今の我々でも十分相手できる数ですわい」

タデアスもまた、言いたかったであろう言葉を言った。

ややもったいぶるような印象を受けたが、それは己がタデアスの考えていることを読み取っている^せ所

い
為か。

「この戦いを凌^{しの}げば援軍が来る。次の戦いだ。次の戦いが勝負になる。皆、疲れもあり恐れもあろう…
…だがもう一踏ん張りだ。明日、太陽神が天を駆け^{アクション}る頃には全てが終わる」

グレシオスが静かな口調でそう告げると、誰もが
うなず^{うなず}頷いた。項垂^{うなだ}れていた者でさえ目を上げて頷いた。

——だがこれ以上には耐えられまい。

グレシオスはそうも感じていた。

実際に援軍が来るのは明日の日没後になるだろう。

使いに出てくれた男の馬の早さ次第だが、日のある内に援軍が来るということは考えにくい。

だがその事実をここで村人に告げる気にはとてもなれなかった。

「見張りを交替で出せ。間隔や人選は長神官殿に任せる」

外の空気を吸いたいと思い、グレシオスは毛皮を取って立ち上がった。タデアスも立ち上がる。

鬱陶^{うっとう}しいほどの貼り付き様であるが、普段ならばここまで一緒にいることはない。

戦場だからである。

戦場では、タデアスは片時もグレシオスの傍^{そば}を離れることはない。

グレシオスが何か命じるなどして単独行動している場合を除けば、常に身边を^{まも}護るように付き従ってくれるのだ。

雪はまだ降っていた。

風がないため、ほとんど真っ直ぐ地面に落ちてきている。

この分だとそれなりに積もるかもしれない。ここデルギリアの北部ではそれほど珍しくもないことだが東部の方はあまり多く雪は降らない。

そもそもデルギリアが属するイオルテス地方全体について言えば、内陸高原であるために雨や雪は少ない地域なのだ。ナウロス村はそれでも北にテラモン森林を臨むように、デルギリアでも比較的降水の多い地域だからだろうか。

年による差はあるものの冬場は結構な積雪があるのだ。

ヨルスの館から少し歩いた所でグレシオスは手近な雪をすくい取り、それで顔をこすった。鋭い冷たさが眠くもない目を覚まさせてくれるようで心地好い。タデアスが差し出した布で濡れた顔や首筋を拭いた。

「……ゴロドは来るでしょうか？」

^{ささや}囁くような声でタデアスが云った。

「判らぬ。だが敵にゴロドが混じっている場合、次

の襲撃には姿を現すだろう」

「……」

「不安か？」

「正直を申せば不安であります。この人数でゴロドを相手にできるのかどうか……」

「だがやるしかない。もしもゴロドが現れたら我等とメグレイスが中心になって戦う。それと槍投げに秀でた者が幾人か欲しい」

それで^{たお}斃せるかどうかは疑問ではあるが、他に手はなかった。

「ジャグルの方はいかが致しますか？」

「坂の入口さえ^{ふさ}塞いでおけば、ほうっておいてよい」

坂の入口へ通じる道は三つしかない。その内、村の正門へと向かう正面の道は広場に続いている。

広場は引き続きグレシオス達が守備することになるから残るは二つである。

その両方向からジャグルが襲って来るとしても、障害を置いて対すれば何とかなるかもしれない。

もっとも敵にゴロドがいるかどうかで、大分想定が変わってくるわけだが。

「……ゴロドが居るとすれば、ジャグルどもはすぐには襲ってきまい」

「ですな」

タデアスも同意した。

ゴロドの戦い振りは^{すさま}凄じい。敵も味方もない。目先で動いている者には全て襲いかかると言っても良い。例外は同族だけである。ゴロドはゴロドを襲うことはない。少なくとも襲ったという話は聞かない。

しかし味方のジャグルが足元で戦っていても一向気にする気配はなく、踏み殺したり、空振った武器で撃ち殺したりといったことを、よくしでかす。

それゆえジャグルたちはゴロドの戦闘圏内に入ることがないように、協同で動くときには気を遣っているのである。それでも犠牲になるジャグルが結構いるようではあるが。

要するにゴロドは味方から頼りにされる反面、恐れられているようなところがある。

人の例で云えばイスルバルディスのようなものだ。イスルバルディスというのはイスターリス信者の内、特別な密儀に参入した戦士達のことである。

彼らは生肉を喰らい、狼のように^ほ吠える。そして戦闘になれば狂ったように戦うのだ。

極度の興奮状態のため戦闘中に味方を攻撃することも決してまれではない。

イスルバルディスが強力な戦士として尊敬される反面、恐れもされる^{ゆえん}所以である。

ゴロドの場合イスルバルディスほど上等なものではないが、ある面似通ったところがあるのは確かだ。

「もし同時に村に入ってくるとしてもゴロドとは別に行動するであろう。我等はゴロドに集中し、あとの者達でジャグルの相手をしてもらう」

「それでは残りの村人達には坂の入口を死守させておくのみ、ということになるわけでございますか？」

「そうだ」

タデアスは呑み込みが早い。

先程に比べこちらの戦力も減少している。細かく戦力を割^さいている余裕はないし、またゴロドが居る場合には、指揮能力のある三人が全員でゴロドにあたるわけであるから細かい兵の運用など出来ようはずもない。

ゴロドが居ない場合にはやはり先程に続いて正門先の広場が主戦場になるであろう。そこを守備するのは己とタデアスである。

となれば、坂の入口に面した東西二つの道をやっ
て来るジャグルどもは大した数にはならないだろ
う。

この場合には主兵力をグレシオスの元に移し、全
力でジャグルを叩く。

いずれにしても途中にあるのがヨルスの館である。敵を確認次第、ここを經由して連絡を走らせ、こちらの動きを決める。

「ゴロドが居なければ少しは楽になりますな」

「援軍が来なくとも凌^{しの}げるかもしれぬな」

「頼もしいお言葉です」

「なに、空威張^{からいば}りよ。本当はどうなるものかと脅^{おび}えておるさ」

グレシオスの言葉にタデアスは僅^{わず}かに微笑^{ほほえ}んだ。

「何がおかしい？」

「失礼致しました。そのようなお言葉を口になさるとは思いませんでしたので」

「不安か？」

「いいえ。むしろ安心いたしました」

「ほう？」

問^{とい}を向けたが、タデアスは困ったような顔をした。口にするのを躊躇^{ためら}っているようだった。

「構わぬ。何でも云え」

「はあ。でしたら口にいたしますが、どうもその、大殿はいつも気張っているように見えましたもので……」

「儂が無理をしていると？」

「私にはそのように見えることがよくあったのです」

「……」

云われると思い当たる気がしないでもない。もっともそう考えられるのはつい最近、いやさ今日になってからのことだが。

物見櫓ものみやぐらからの一射によって、何かが大きく変わったのだ。

「それがここ数日、大殿は徐々に柔らかくなってまいりました。私にはそう感じられたのです。思うに、あのお客人の御陰おかげではありますまいか——」

グレシオスは答えなかった。答える必要がないと思ったからである。

そうなのだ。

あの男はいきなり現れ、僅か数日でグレシオスの中にあった何かを大きく変えてしまった。

それは何であるか？ 今は判っている。

恐怖だ。気付かないようにしてきた恐怖である。

今は違う。あの一射は恐怖の正体を暴あばき出し、それと抗あらがう必要のないこと、ただその正体を認識すればよいことを示した。

認識すれば、恐怖は去る。

そのためには正しい認識、人間精神の完全な自由さが必要だ。

まるで神官のごとき言い種ぐさだが、今のグレシオスには王都の神官たちが云う言葉の意味が身の内に響

くように感じられた。

己だけではない。タデアスにも活力のようなものが漲みなぎっている。

あの男は主従の何かを大きく変えてしまったのだ。

ただし生きるか死ぬかの戦いの場に投げ込まれることがなくば、その変化には気付けなかったかもしれない。

それともこの戦い自体が変化の一部なのか……。

そこまでは判らない。タデアスにも判らないであろう。

運命は人智を越えている。運命デューノイの女神の支配する天秤は何者によっても動かされることはなく、ただ定めを告げるだけである。

「あのお客人は無事にギルテに着けましたでしょうか……」

「奴ならば問題はない。必ずギルテに辿たどり着く」

確信を持ってグレシオスは言った。タデアスが顔を窺うかがったが何も云うことはせず、二人は黙って歩いた。

足の下では雪がきしきしと鳴った。その下では氷が生まれている気配がある。

雪が降ってはいるものの、これから朝に向けて寒さはさらに厳しくなりそうであった。

第十四章 休息

少しでも防備を固めるべく見張りを立てつつ作業にあたった。

まずはジャグル共の攻城具を分解し、防壁に加工した。

村人たちは寒さに^{かじ}悴かむ手で必死に作業を進めた。

幸い三つあったので二つを坂の入口に東西に向けて配し、一つを広場の前に置いた。

三つとも広場に配置するという手もあったが、もしも敵にゴロドが居る場合にはこんな防壁など何の役にも立たぬ。ゴロドが襲えばひとたまりもない。

敵がジャグルの群だけならば防壁は取り敢えず一つあれば何とかなる。先程と同じく乱戦になるに決まっているからだ。

雪の中、寒さは厳しく、短い時間で交替をさせながら作業にあたった。

今度は村内を歩き回る必要がないので^{かがりび}篝火を幾つか広場に移動させたり、不要な篝火を消したりした。

正門はしっかりと閉じたが、もしもゴロドが攻撃してくれば一撃で破られるだろう。

敵がジャグルのみの場合でも正門に^よ拠って戦う手

は採らない。破らせる。

ジャグルがそれを避け、迂回^{うかい}してくる場合にはそちらに布陣^{ふじん}を変形させる。

いずれにしても今回はあまり動き回らず拠点守護の作戦で行く。

全滅するか、それとも生き残れるかは神のみぞ知るところである。

村人たちには話していないが援軍が来るのは明日の日没後と考えられる。

男が村を^た発った時間から逆算しての事である。

どんなに早くとも日が沈んで半刻の時を切ることはないだろう。

そしてジャグルどもが日中に襲いかかってくるとは考えにくい。こちらから戦闘を仕掛けたのなら別であるが、ジャグルどもが好き好んで昼間に戦闘をするとは考えられない。

ゆえにジャグルが襲ってくるのは日が昇る前、今夜の内だと予想できる。

つまり援軍をあてにすることはできない。

先程グレシオスは「この戦いが終われば援軍が来る」と言った。それは嘘ではない。

問題はこの戦いが最後になるであろうこと、最後まで自分たちは援軍無しに戦わなければならないということだ。

グレシオスは神官館の前に立ち、暗闇の中、^{かがりび}篝火の光を頼りに働く村人達の様子を見ていた。

「ゴロドは現れますでしょうか？」

メグレイスが^{つぶや}呟いた。グレシオスの^{そば}傍に立って作業の様子を見ていたのだが、周囲に村人が居なくなるのを見計らって口に出したものらしい。

「おそらくな」

グレシオスも呟き返した。メグレイスの方は見なかった。

何か気配が返ってくるかと思ったが、何も感じられなかった。

つまり気負いも恐れもないということだろう。やはり戦場を幾度も踏んでいる者は性根の^{すわ}坐りが違う。

「ともに戦うことをお許してください」

半ば予想していた言葉であった。

「こちらもそのつもりよ。ゴロドがおれば長神官殿の手を借りる他ない」

「光栄でございます」

「……我等の^{ほさ}輔佐を除き、村人たちは坂の防備に集中させる」

グレシオスとタデアスが中心になって対ゴロド用の槍投げ隊を編成する予定である。

ゴロドが現れない場合にはそのままジャグルと戦

う前衛になるが、その際には連絡を坂の入口を固める部隊に飛ばし、増援を回させるつもりである。

「作業が終わったら村人を半刻交替で休ませてやれ」

「かしこまりました」

タデアスは作業の監督をしている。先の戦いで兵を伏せた小屋から更に木材を持ってきている。なかなか本格的に防壁を構築するつもりのようだ。

坂の入口の方でも作業をしている。ここにまで物音と気配が伝わってくる。

あとどれくらいでジャグルどもが到着するのか判らないが、防壁作りが終わるまでは来ないで欲しいものだ。

「大殿もお休みになってはいかがでしょうか。あとは私が見ておりますゆえ」

メグレイスが控えめに提案した。

「いや――」

グレシオスは反射的に断ろうとし、しかし考え直した。

己がこのままここに立っていたとて何の意味があるものでもない。

敵襲があれば起こしてもらえばいいのだ。

若武者ならば、起きたまま備えるというのもありかもしれぬが己は老人である。虚勢を張って無理を

することはない。

自分なりに最も効率的に戦えばよいのだ。

「そうだな……では一刻経ったら起こしてくれ」

「かしこまりました」

「必ずだぞ」

メグレイスに念を押し、グレシオスはヨルスの館に向かって歩き始めた。

道に出るとたちまち雪が降りかかってくる。

小さな、軽い雪だが一向に降りやむ気配がない。

タデアスは防壁の傍に立ち、白い息を吐きながら指示を飛ばしていた。右手には斧を握りしめている。

「タデアス」

「はっ」

振り向いた顔が白い。気合いは十分だが、身体の方にはかなりの負担が掛かっているのは明らかだった。

「儂わしはこれから仮眠とを摂る。お前も付き合え」

「大殿ぜ ひは是非そうなさって下さい。私はまだ仕事がありますゆえ」

「付き合え、と言ったのだ」

「はあ……」

グレシオスは逡巡しゅんじゅんしている様子のタデアスの肩をつかんだ。

「自分の歳を考へろ。儂など、さっきから背筋が寒くてかなわんぞ」

「ですから大殿はお休み下さい」

グレシオスは溜息^{ためいき}を吐^ついた。

「お前な、儂一人ではばつが悪いではないか。だから「付き合え」と言ったのだ」

耳元^{ささや}で囁いてやると、タデアスはなるほどとばかりに幾度^{うなず}か頷いた。

「かしこまりました。そういうことでしたらお付き合いいたしましょう」

「すまんな」

無論、タデアスを休ませるための言い訳である。

こうでも言わなければタデアスは休み無しに働き続けることだろう。

その結果、いざ戦いが始まったときには体力を使い果たしているかもしれない。

タデアス自身、身体^{からだ}はきついはずである。若い頃とは違うのだ。

にもかかわらず頑張りを見せるのは、意地と責任感、何より戦場^あに在^あっての気の高ぶりがあるのだろう。

しかしそれらの中に老いへの抵抗と恐怖が含まれてはいないだろうか？

グレシオスが悟ったようにタデアスもいつかは、

それもそう遠くない先に老いの事実を悟り、受け入れることになるだろう。

だが今はそれを語り諭^{さと}している時間はない。

強引にしてでも、己の方で気遣ってやるしかないのだ。

「村の衆も交替で休むようにな。詳しくは長神官殿に聞け！」

杭^{くい}を打ち、斧を振るっている村人たちに大声で教えると、グレシオスとタデアスはその場を離れた。

ヨルスの館ではすでに休憩を取りに集まった村人達がいた。火の傍で紅トラナ茶を飲んでいる者や、床に毛皮を敷いて横になっている者がいる。

ごろ寝用の毛皮を貸してくれるようヨルスに言う
と、

「大殿様はどうぞ息子の部屋でお休み下さい」

と言われた。グレシオスはここでも意地を張ることなく、すなおに従うことにした。

タデアスはヨルスの部屋を借りることになった。

装飾のないしっかりとした作りの寝台に倒れ込むと猛烈な睡魔が襲ってきた。

慌てて寝台に潜^{もぐ}り込み、蒲団^{ふとん}を被^{かぶ}った。天井に暖炉の火の影が揺れている。

火が燃える音が急速に遠ざかっていく。

身体^{からだ}がふわりと浮かび上がるような心地がしたと

思うと、そのまま意識が吸い込まれていった。

第十五章 雪刃

激しく扉をたた叩く音で目が覚めた。

「一刻経ったか？」

答えざま、気合いを掛けて身を起こした。思っていたよりも身体からだが軽い。

寝起きは身体が重いのが常なのだがどういうわけか調子がよい。

背中と肩の付け根にはまだ疲れを感じたが、あれだけ激しく動いた割には気味悪いくらい具合が良かった。

短い睡眠ではあったが、かなりの効果があったようである。

「構わぬ。入れ」

「奴らが現れたようです」

ヨルスが扉を開け、早口で言った。

「あれからどのぐらい経った？」

グレシオスは立ち上がり、軽く首や肩を回しながら尋ねた。

「もうすぐ夜明けでございましょう」

これも半ば予想していた答えであった。

メグレイスはわざと起こさなかったのだ。始めからそうするつもりだったに相違そうい無い。

問い詰めた所でもっともらしい言い訳を答えるだ

ろう。メグレイスに限らず昔からこういう事はあった。

必要以上に気を遣われたり、大切にされるのは仕方ない。

それはセウェルス氏族の長としては立場上受け入れられるしかない面もあるのだ。

メグレイスにしてもグレシオスの血筋をあまりに尊貴に考えすぎた故か、それとも老人の体力を慮ったのかは定かでないが、今更文句を言っても仕方がない。

腹立たしいが、今はそのことを怒っている暇もなかった。

この割り切りも昔から変わらない。状況に怒る余裕が出てくる頃にはどうでもよくなってしまふのだ。

広間に出るとタデアスが鎧を身に着けているところだった。

「お前もか！」

「してやられました」

ばつが悪そうに苦笑いを浮かべている。

「なに、お前が散々儂にやってきたことではないか。今度ばかりは我が身に返ってきてても仕方がないであろうよ」

「これはまた意地の悪いお言葉」

「はは。それよりも疲れは取れたか？」

「おかげさまで」

「よし。急ぐぞ」

グレシオスも手早く^{すねあ}臍当てをつけ、リオブを着込み、フェトウーラを身に着けた。

太刀を^は佩き、槍を手にとると、タデアスと共に広場へ向かった。

防壁の前にはメグレイスが居た。

その他村人が三人。ブロス、ザビオス、ハサデルスである。皆、槍投げに秀でた者たちだ。

彼らが先の戦いを生き残ってくれたのは^{ぎょうこう}僥倖だったと思う。

非礼な考えであるかもしれぬが今はそう考えざるを得なかった。

「ゴロドがおります」

開口一番、メグレイスは最も聞きたくなかった言葉を口にした。

グレシオスは正門の方へ目を向けた。まだ正門は^{そび}聳えている。先程と何も変わった所は見られない。

おそらく門の直ぐ外に^す奴等は集まっているのであろう。

「間違いないのだな？」

「私が確認いたしました」

ならば間違いはあるまい。

「ゴロドは一匹か？」

「一匹です」

グレシオスは皆を見渡した。

——この六人で相手しなければならぬわけか。

覚悟はしていたが、こうして考えてもかなり苦しい事態である。

「接近戦は避ける。お前達はひたすら槍を投げろ。決してゴロドに近附いてはならぬ。突進してきたら、ひたすら逃げるのだぞ」

グレシオスは三人の村人に言い聞かせた。

「手持ちの槍が無くなったら坂の入口に居る者達と合流しろ」

ここ第一の防壁の近くには予備の槍の約半分が集めてある。

全て、対ゴロド用に用意した物だ。

「長神官殿はゴロドの足を止めて欲しい。足を殺せれば大分楽になる。^{とど}止めを刺すのはその後でも良い」

「かしこまりました」

「手順はこうだ。まず全員でひたすら槍を投げる。槍が^っ盡きたらお前たちは逃げよ」

「御領主様がたは戦われるので？」

ブロスが聞いてきた。タデアスが軽く笑った。

「儂等が戦わねば誰がゴロドを^{たお}斃すのだ？」

そのとおりである。

「あとは我等三人に任せよ」

「……儂とタデアス、長神官殿とでゴロドの気を惹ひく。その際に逃げよ」

ブロスは何か言いかけたが口を噤つぶんでしまった。かけるべき言葉がなかったのだろう。

あとの二人も同じような様子だった。三人とも不安げである。

だが他に方法はない。

ふと気付いてグレシオスは東の空を見上げた。

暗く雲に蓋おおわれた空だが、確かに色が変わり始めている。

アクション
太陽神が東の島を出発する時が迫っているのだ。

雪は相変わらず降り続けている。大雪になってきた。足元の積もり具合も馬鹿にならぬ。

下手をすれば戦いの最中、足場の安定を失うのではないか。

己やタデアスはともかく、あとの者たちは危ないのではないか。

そんな不安がグレシオスの胸中をわずかに掠かすめた。

「……もうすぐ夜が明けますな」

そうタデアスが呟つぶやいたとき、轟音ごうおんがした。

皆が一斉いっせいに音のした方に目を向けた。

正門が大きく軋^{きし}み、内側に向けて倒れてくる。常^{じよ}
軌^{うき}を逸^{いっ}した力が加わったのだ。

重い倒壊音と同時に雪が舞い上がった。衝撃で爆^は
ぜた篝火^{かがりび}の火の粉と混じり合い、宙に舞う。

その向こうに巨大な影^{たたず}が佇んでいた。

一瞬、樹ではないかと思える。だが樹の形をして
いない。

ひどく伸びた人の影のように見える。

全体に細く、長い。

影が一步踏み出した。重い足音と共に振動が伝
わってきた。家の軒先から雪が落ちる音がした。

篝火の光を受けてその姿が浮かび上がった。

黒ずんだ生気のない皮膚と節^{ふし}くれ立った長い手
足。落ちくぼんだ眼窩^{がんか}の奥で、炭のように暗く燃え
る赤い瞳。

ジャグルと同じく黒目と白目の区別が無く、ただ
穿^{うが}たれた穴の奥で不吉な光を放っているだけの瞳
だ。

ゴロドである。

やや前屈^{まえかが}みになりながらゆっくりと歩を進めてく
る。

胸から上が軽く家の屋根を越えてしまっている。
頭は二階屋にまで優^{ゆう}に届くのではないか。

やはり大きい。

ずいぶん
随分と久しぶりに目にするが、記憶にあったよりも大きく見える。

手には巨大な丸太を持っている。家の柱か何かであろうか？ いや、あの大きさからして神殿の建材かもしれない。そんな物さえゴロドの手にあっては驚異的な武器となるのだ。

あれが当たれば人の身などひとたまりもない。即死だろう。

歩いてくるゴロドの向こうには幾つものジャグルたちの影がある。

それが動き出した。

ゴロドに遅れて村に入ると、すぐに左右二手に分かれた。予想通りである。

決してゴロドと歩を合わせることはない。

戦闘に巻き込まれることを恐れているのだ。

「笛を」

グレシオスは短く命じた。坂の入口を守る村人に合図を送るためである。

『ジャグルは東西から襲ってくる。それに備えよ』

そう報^{しら}せる笛である。

笛を吹くのはザビオスの役目である。だが命じたにもかかわらず笛の音が聞こえない。

「どうした？」

グレシオスは振り向いた。命令が実行されない理

由が分かった。

ザビオスは目を見開き、ゴロドを見上げていた。

その表情が細かく震えている。驚きと恐怖で目が離せないのだ。

「笛を吹かぬか！」

タデアスが叱咤^{しった}した。ザビオスははっとしたように慌てて笛を取り出すと危なっかしい仕草で口に持っていき、吹いた。

すぐに応える笛があった。こちらの報せは正しく伝わったようだった。

「恐いか？」

グレシオスは静かに尋ねた。三人の村人に向けてである。

三人はじっとグレシオスの方を見た。その顔には緊張と恐れとがあったが、なお戦う意思を残しているように見えた。

「儂とて怖い」

グレシオスは微笑^{ほほえ}んだ。顔の皺^{しわ}が深くなる。穏やかな笑みであった。

「戦場ではな、命は皆同じく危険に曝^{さら}される。そこには貴族も平民もない。生きるか死ぬかは皆同じよ。誰もが恐ろしいのだ……むしろ恐れを感じないようになったらお終^{しま}いよ。恐怖を知らぬ者は長生きできぬ——」

グレシオスは白い息を吐いた。体が冷える。冷たさが染みこんでくる。

だがもうすぐ火のように熱くなるだろう。

「恐れに捕らわれるな。恐れを支配せよ。さすれば恐れは身を守る^{よろい}鎧となる」

叔父の言葉が自然と口から滑り出た。

誰一人返事はしなかった。だがタデアスを含め、全員が強く頷いた。

「これが最後の戦いとなろう。皆、死ぬでないぞ。そして語ろうではないか。この戦いを子等に。いや孫たちにまでな。語り草になるぞ」

冗談のように云うとグレシオスは眉を上げた。滑稽な顔になった。

「……自慢になりますだね」

ハサデルスが応じて笑い、白い歯を見せた。

「我等全てに大神の御加護^{ごかご}がありますように――」

メグレイスが^{おごそ}厳かに呟いた。

「魔術を司^{つかさ}どる^{たけ}猛き神、飛び越える神、天を駆ける神よ、胸板広き戦士、詩と魔術の達人、勇者の館の支配者、死の道化イスターリスよ！ 我等に力を！」

^{うな}唸るようにグレシオスは唱え、槍を天に向けた。

「もしも^{おんみ}御身が我が父祖であるならば、この槍に祝福を、我が戦士達に勇気を、そして我等に勝利をお

与え下さい！」

天を見上げた。太陽神アクションが駆ける蒼穹そうきゆうは、イスターリスの駆ける蒼穹でもある。

ある時は槍につかまり、ある時は天馬またに跨がり、またある時はワタリガラスに姿を変えてイスターリスは天を駆ける。

誰が言うともなく男たちは槍を重ね合わせた。

「イーザイツ！」

唱和し、槍の石突きで地を打った。

ゴロドが迫っていた。篝火に照らされて、その異様な姿がはっきりと見て取れる。

アオオオオオオンン……。

ゴロドが叫おめき声を上げた。不気味ぶきみな声である。冷たい大気を重く振るわせる。

聞けば、誰もが恐怖を感じるだろう。

グレシオスも恐ろしいと思った。他の者たちも同じく感じているに違いない。

だが戦う。

——儂は最後まで戦う。

覚悟はできている。

「ゆくぞっ！」

槍を構え、グレシオスは防壁から飛び出した。タデアスとメグレイスがすぐに続いた。

グレシオスの頭上を越えて槍が飛んでゆく。ブロ

スたちの攻撃である。

鈍い音とともに槍はゴロドの腕や胸に突き立った。

だが一向に効いていないようである。全く頓着^{とんちゃく}する様子もなしに、ゴロドはこちらに向かってくる。メグレイスが身を低くして神殿伝いに走った。

突然ゴロドの手が動き、メグレイス目懸^{めが}けて横薙^{よこな}ぎの一閃^{いっせん}が走った。尋常な速さではない。

手に持った丸太による一撃である。幸い空を切^{さいわ}ったが途轍^{とてつ}も無い風切り音がした。

当然であろう。

神殿を支えられる程の頑丈な丸太が目にも止らぬ速さで繰り出されたのだ。

当たればどうなるかなど考えるまでもない。

一撃目を外したことが気に入らないのか、それともメグレイスが気になるのか、とにかくゴロドはメグレイスを殺すことに決めたようだ。向かってくる方向を変え、神殿の方に歩き始めた。

「気をつけよ！」

グレシオスは大声で注意^{うなが}を促した。

タデアスはメグレイスとは反対の方向に駆けている。グレシオスたち三人はゴロドの周囲を回りながら戦うつもりである。かつての戦いもそうであった。子供の頃に見た、アウラシールの獣騎兵もそう

であった。

ゴロドに比して小さい我々はそうするより他無いからだ。

人が勝っているのは小回りの利く動きだけなのだから。

タデアスが槍を投じた。ゴロドの首の近くに突き立った。

ゴロドは呻き、少し体を傾けた。

さすが村人とは狙いの正確さも、強さも違う。

だがその所為で今度はタデアスがゴロドの注意を引いてしまったようだった。

ゴロドがタデアスに向かっていく。グレシオスに背を向ける恰好になった。

好機である。グレシオスは槍を肩上に担ぎ、走り込んで思い切り投じた。

遅しい音とともに槍は夜空を飛び、ゴロドの背中に突き刺さった。

その間にも村人たちの槍が投じられている。

ゴロドの体に槍が幾筋も立ち始めた。

メグレイスが走ってきた。

「ぬうりゃああっ!!」

身を低くしたまま走り寄るとゴロドの足を目懸けて斧槍を振った。

濡れた木に斧を打ち込むような音がした。斧槍の

刃はゴロドの左足、横^{よこ}臍^{ずね}に食い込み、どす黒い血が噴き出した。

グレシオスは二筋目の槍を投じた。これも背中に命中した。

いまやゴロドは全身から血を流していた。血は足元にまで流れ、雪の色を大きく変えていた。

だがゴロドの動きに変化はなかった。声を上げることもない。

傷を受けていることも気になっていないようである。

そしてタデアスやメグレイス、時には己目懸けて恐るべき一撃を繰り出してくる。

攻撃の前動作が大きいために何とか逃れられるが速度自体は尋常ではない。

何よりも攻撃の範囲が広い。神殿に使うような丸太を振り回しているのだから当然である。

村人の槍が^っ盡きた。

グレシオスは振り返った。ブロスたち三人は、まだ防壁の背後に居た。

「何をしている！ 早く逃げぬか！」

怒鳴ったが、三人は逃げる気配がない。手持ちの槍を握りしめている。

——いかん。

「馬鹿なことは考えるな！」

グレシオスは三人の元へと走った。

その時ゴロドが動いた。グレシオスの後を追ってきた。突進である。

巨大な影が覆^{かぶ}さってきた瞬間、グレシオスは逆にゴロドに向かい、ぶつかる寸前で横に飛んだ。雪上に体を投げ出すようにして転がり素速く起きあがる。

すさま^{すさま}しい破壊音がした。

防壁が踏み潰^{つぶ}されている。

三人と共に。

ゴロドが丸太を振り上げ、振り下ろした。

叩き潰^{つぶ}す音。逃げる間もない。再び丸太を振り上げる。悲鳴さえ聞こえぬ。そして振り下ろす。

それから足で踏み砕いた。

ゴロドは雄叫^{おたけ}びもあげることなく殺戮^{さつりく}を行ない、村人は悲鳴を上げる間も無く死んでいった。

ただ破壊の音だけがしていた。木材を砕き、肉を踏み潰^{つぶ}す音だけが。

わず^{わず}かの間に防壁のあった辺りは砕けた木材と血の海に変わっていた。

三人の村人は一瞬の内に挽肉^{ひきにく}と化したのである。

雪煙の舞う視界の隅で、メグレイスが立ち上がっていた。急なゴロドの突進を避けて伏せていたのかもしれない。グレシオスも立ち上がった。タデアス

がこちらに走ってくるのが見える。

来るなど言おうとしたが声が出ない。息が上がっている。

心臓がどくどくと動くのを感じる。

まるで戦闘速度を出してるバラカー船の太鼓たいこのようだ。

休みなく胸の中で動いている。

出せぬ言葉の代わりに手を突き出してタデアスを制した。

固まればやられやすくなる。散開していた方がいいのだ。

深呼吸をする。心臓を落ち着けなくては。

ゴロドがこちらに向き直った。グレシオスの方へと歩き出す。

手持ちの槍はない。防壁を飛び出すときに持った二筋は既に打ち込んでしまった。

広場周辺には対ゴロド戦を考えて、あらかじめ家の壁に立て掛けるなどして用意してある槍があるが、それを取りに行かねばならない。

グレシオスは敢あえてゴロドの正面に身を曝さらした。注意を惹ひくためである。

その間にメグレイスとタデアスが攻撃するのだ。

二人の攻撃の直後に、今度はグレシオスがゴロドの視界から消え攻撃に回る。これを繰り返す。車懸くるまがか

りの戦法である。

地響きを立ててゴロドが迫る。巨大な足をつくたびに大きく雪が舞い上がる。

再び左足を狙うべくメグレイスが横手に回り込んだ。

「さあ、来い！」

グレイシオスは両手を掲^{かか}げてゴロドに怒鳴った。

ゴロドが見下ろしてくる。半開きの口の間から白い息が漏れている。だが声はない。

ゆったりとした動作で丸太を振りかぶってくる。すぐに飛び退^のけるよう、グレイシオスは軽く腰を沈めた。

巨大な丸太が振り下ろされた。振りかぶるのは鷹^{おう}揚^{よう}とさえ云える動きであったが、攻撃に転じると速い、速すぎる。

グレイシオスは大きく後ろに飛んだ。飛びながら、しかし驚いた。

丸太はグレイシオスを狙ったものではなかった。右斜め上から大きく弧を描いて足元に振り下ろされた。ほとんど真横を薙^なぎ払うほどの一撃である。

「長神官っ！」

叫んだ。だが忌^いまわしき光景は目に入ってはこなかった。すんでのところメグレイスは躲^{かわ}したのだ。

そして素速く身を^{ひるがえ}翻し、神殿の方へと走った。ゴロドが後を追う。

グレシオスは一瞬^{あぜん}啞然とした。

——何という奴！

己を攻撃すると見せかけて、実は足元を^{おびや}脅かすメグレイスを殺すつもりだったのだ。

昔戦ったゴロドはこんな真似はしなかった。闇雲に暴れ、そして死んでいった。

多くの犠牲を払いながらも^{たお}斃すことができたのは、そのような考えなしの怪物だったからである。

このゴロドは違う。

嫌な予感が首筋を駆け抜けた。だがとにかく武器を取らねば。

グレシオスは槍のある場所まで走った。タデアスがゴロドの後ろから槍を投げているのが見えた。

一番近くにある槍は広場に面した家の裏手にあった。

小道を入り込み、軒下に掛けてある槍を二筋取ったとき、神殿から^{ごうおん}轟音が聞こえてきた。

広場に出てみるとこちら側に面した列柱が叩き折られている。爆発するように雪が舞い上がり、ゴロドの姿しか見えぬ。メグレイスは無事か、どうか。

ゴロドは丸太を振り上げて再び神殿を打った。

「罰当たりな真似をしおる」

距離を測りながらグレシオスは近附いた。^{うかつ}迂闊に槍を使うわけにはいかない。村人は^{たお}斃され、もはや援護は受けられぬ。

戦いの局面は変化している。注意しなければ。

神殿が叩き壊され破片が辺りに飛び散っている。柱が幾本か続けて倒れ、重い地響きが足裏に伝わってきた。

風が吹いた。

北から吹き下ろしてくる風である。雪が炎のように舞い上がった。

メグレイスが姿を現した。雪煙を巻いて飛び出してくる。

「おおおおっ!!」

素速くゴロドの後ろに回り込むと雄叫びを上げながら斧槍を振った。

体を大きく廻し、低い姿勢から伸び上がるようにして大上段を打ち払う。

本来は地上から騎士を叩き落とすための技だが、こうでもしない限り人の身ではゴロドの足しか攻撃できぬ。

鈍い音とともに斧槍はゴロドの腰の後ろに命中した。人間ならば致命傷だが、あまり^{こた}堪えていないようである。

「むうん！」

グレシオスも槍を放った。肩の後ろに突き立った。

ゴロドは気付いてすらいらないようだった。もう一筋も投じた。背中に突き刺さった。

その衝撃で近くに刺さっていた槍が二筋抜けて落ちてきた。当たりが浅かった槍であろう。

ゴロドが鬱陶^{うっとう}しそうにグレシオスの方を振り向いた。口を開けてこちらを見ている。

ジャグルよりも遥かに人間に近いその顔がグレシオスを見下ろしている。

顔色の悪いぼんやりとした表情、炭火のような瞳、意思も思考も感じさせないようでありながら邪悪さだけは強烈に感じさせる、その顔。

僅かの時間、グレシオスはその顔に見入った。息を詰めて見た。

限りない不吉さだけがひたひたと伝わってきた。

——こやつを生かしてはおけぬ。

「大殿！」

メグレイスが槍を投げ渡してきた。近くに落ちたそれを拾う。

その時に気付いた。

タデアスの姿がない。

「タデアスはどうしたっ！」

グレシオスは怒鳴るように尋ねた。

メグレイスは答えなかった。ただ腕を伸ばして破壊された神殿の方を示した。

どういう意味か。

あそこに何かがあるのか。

グレシオスは問おうと思った。だが口が震えて言葉が出てこない。

寒さの^{せい}所為か。

広場は風を^{さえぎ}遮らぬ。戦いの間に^{ずいぶん}随分と体が冷えてしまったのか。

いや、それとも疲労の所為かもしれぬ。槍を持つ手が震えて仕方がない。

「大殿っ！」

メグレイスが^{わめ}叫いた。はっと我に返った。ゴロドが目の前に迫っていた。

反射的に横に逃げた。地を蹴って体を大きく横に逃がす。

両足を下から^{すく}掬い上げられる感触があった。恐ろしい予感が全身を走り抜けたが、すぐに足は自由になった。

グレシオスは前回りをする恰好で雪上に足を着いた。リオブを^{まと}纏っているので肩と背骨に痛いほどの衝撃が掛かった。

だがそれどころではない。メグレイスに聞かなくては。

グレシオスは目を上げた。ゴロドが丸太を振り回しているのが見えた。ぎりぎりのところでメグレイスは^{かわ}躲している。勢い余った丸太が地を打った拍子に雪と土とが波のように碎けて散った。

「大殿おーっ!!」

メグレイスが叫んでいる。

「タデアス殿はっ！」

言うな。

「神殿の下敷きにっ！」

「何を言うかあーっ！」

^{とっさ}咄嗟に叫び返した。馬鹿な。そんなはずがあるわけがない。

あのタデアスがそんな……。

崩れる柱に^{うも}埋れてしまうなど、あるわけがない。

^{でたらめ}「出鱈目を言うなっ！」

槍を拾いあげ、槍投げ機に噛ませた。大きく振りかぶってゴロドに投じる。全身の力を槍に乗せて放った。

槍はゴロドの首の後ろに命中した。ゴロドがたたらを踏んで動きを止めた。低い、^{うな}唸るような^{うめ}呻きをあげ、周囲を見回している。

「出鱈目を言うな。タデアスがやられることなど…
…」

グレシオスの鼻が嫌な臭いを^{とら}捉えた。素速く臭い

のした方を見る。それで辺りが大分明るくなってきているのに気付いた。夜明けが近い。

薄紫色に変わり始めた空に向けて村のあちこちから煙が立ち昇っている。

「やりおったか……」

ジャグルたちが火を放ったのだ。雪のために火はつきにくいと思っていたが、それくらいでは放火を諦めなかったものに見える。

さすがにまだ炎は見えないが、じきにあちこちから火が上がることだろう。

「だが村人は殺させぬぞ」

唸るようにグレシオスは^{つぶや}呟いた。

ゴロドは神殿の方へと歩き出した。何をするつもりなのか、己が打ち壊した神殿の柱を拾い上げている。

直感的に危険を感じた。

「いかん！ 長神官っ！」

メグレイスに向けて警告を発した。ゴロドが両手に柱を持ち、それを肩上に振りかぶっている。

あれを投げつけるつもりなのだ。

メグレイスもそれを読み取ったらしい。一目散に広場から逃げ出した。路地に逃げ込むつもりなのだ。

グレシオスは槍を放ってしまった事を悔^くやんだ。

今手元にあればメグレイスの援護ができるというのに！

先程ゴロドより抜け落ちた槍が目に入った。黒い影のように雪の上に横たわっている。

グレシオスは走った。

——間に合わん！

ゴロドがメグレイス目懸^{めが}け柱を投げつけた。

轟^{ごうおん}音を発して巨大な柱が宙を飛ぶ。メグレイスは気配を察して右に避けた。

柱が地面に当たって跳ね、雪と土とを飛び散らせる。ゴロドはすぐに二本目の柱を投げつけた。

一本目を^{かわ}躲したことにより、メグレイスの逃げられる範囲は大きく限定されている。

冷水を浴びせかけられるような嫌な予感がした。

槍を指して走りながらグレシオスは叫ぼうとした。だが叫んで何になるのか。

もはやメグレイスに逃れる手はない。

二本目の柱は背後からメグレイスに襲いかかった。

予感は現実になった。

大柄^{おおがら}な神官は飛来する柱に跳ね飛ばされ宙を飛んだ。

二階屋を超えるほどの弧を描き、槍の間合^{まあい}よりも遠くへと落ちた。

斧槍もまた宙を飛んで地へと落下した。突き刺さり
はせずに雪の上をグレシオスの方へと滑ってくる。
る。

「長神官っ……」

グレシオスは^{はぎし}齒軋りをした。眉間に力が入り、ぎ
りぎりとしわ^{しわ}が寄った。

山から落ちてくる大木が激突したようなものだ。
あれでは助かるまい。

骨は砕け、^{そうふ}臓腑は^{つぶ}潰れているだろう。息があった
としても苦しむだけだ。

ゴロドがグレシオスを見ている。

暗く燃える双眼が、じっとこちらに注がれてい
る。

「……今度は儂というわけか」

呟くと、身の内が熱くなった。怒りである。怒り
の力が全身に^{みなぎ}漲ってきた。

無論恐怖はある。だがそれよりも怒りの方が遙か
に大きかった。

「貴様のおるべき世界へと送り帰してくれるわ」

云いながらもまた息が上がってきているのに気付
いた。

息が苦しい。

^{もも}腿が重く、リオプが肩に食い込むのを感じる。

歳相応に^{こた}堪えているのだ。

ジャグルとの戦いよりも遥かに過酷な大きく激しい動きの連続が、この身に堪えているのだ。

^{じき}直に動けなくなるだろう。

そうなれば死だ。

動けるように戦わなくては……。

そもそもゴロドが相手ならばリオプなど纏っていたところで何程のこともない。

その攻撃はたとえるならば巨岩が飛んでくるようなものなのであり、防具などほとんど意味が無いのだ。邪魔になるだけだ。

戦いの前にリオプを脱いでおくべきだった。今となっては^{せん}詮無いことではあるが。

グレシオスは周囲に目を^こ凝らした。何か、何かないか。

ゴロドを^{たお}斃し、己が生き残れる暗示を探した。

目に入るのは、雪に^{おお}覆われた広場である。雪は踏み荒らされ血で汚れ、ゴロドの投げつけた丸太によって^{えぐ}抉られている。

広場の端の方にはまだ踏み荒らされていない雪が一面に紫がかって見える。

雪は降りやむ気配を見せている。朝日が昇る頃にはやむのではないだろうか。

メグレイスの斧槍が目についた。

ゴロドがゆっくりとこちらに歩いてくる。

グレシオスは意を決して斧槍を取った。本来は得意な武器ではない。

苦手と云うほどではないが槍の方が遥かに扱い慣れている。

だが斧槍を拾い上げた。これに賭ける事にした。

ゴロドが丸太を抱え上げた。投げつけてくるつもりかもしれない。一本しか持つてはいないが何を仕掛けてくるか判らぬ。

「ぬううううっ!!」

斧槍を引きずるようにしながらグレシオスは駆けた。

ゴロドが目前に迫った。向こうの方が早い。巨大な丸太が大きく振り上げられるのが見えた。

——やられる！

思った瞬間、ゴロドの頭がびくんと動いた。同時に体の釣り合いを崩したように^{よろめ}蹠踉いて動きを止めた。それから巨大な手を顔の辺りにもっていった。

矢が立っている。

ゴロドの左目に矢が立っていた。

「御領主様っ！」

若い娘の声だった。イドナである。広場へと走り出てきた。

「今の内に！」

言いながら二の矢を^{つが}番えた。放った。ゴロドの頬

に突き立った。

「何をしているっ！」

馬鹿な。ゴロドは矢でどうにかできる相手ではない。

無駄死には目に見えている。そんな真似はさせられぬ。

「逃げよ！ 今すぐに逃げよ！」

グレシオスは怒鳴った。

「逃げねえ！」

イドナは怒鳴り返してきた。

「あたしは逃げねえぞ！」

三隻目の矢を指で取った。弓に番^{つが}える。イドナは泣いていた。

「くたばれ！」

叫びながら矢を放った。矢は再びゴロドの顔に突き立った。

イドナの方を向こうとしてゴロドは蹠^{よろめ}いた。血が噴き出す音がした。左足から出血している。

斧槍の傷であった。

先程メグレイスが打ち込んだ斧槍の傷であった。

閃くものがあった。グレシオスは身を低くし、ゴロドの左側へと回り込んだ。具合の良い事にゴロドは左目を失っているため死角に入ることになった。

大きく身を引いて構えた。メグレイスと同じよう

に低い姿勢からほとんど一回転するほどに体を回転させた。

「ぬおおおおっ！」

^{おたけ}雄叫びを上げながら斧槍をぶん廻した。思い切り加速をつけてゴロドの左足目懸けて打ち込んだ。

反動はなく、衝撃が吸い込まれるような感じがあった。

刃は深く食い込んでいた。骨の奥まで達した感触があった。どっと血が^{あふ}溢れてきた。

余りに深く食い込んだために斧槍を抜くことができない。

グレシオスは斧槍を手放し、死角から出ないようにしつつゴロドから少し離れた。

ゴロドが己を捜している。体をこちらに向けようとした途端、めりめりと^{なまき}生木が折れるような音がした。ゴロドの足が折れたのだ。

巨体が大きく^{かし}傾いた。倒れる。

グレシオスは慌てて後退した。下敷きになっては^{たま}堪らない。

ゴロドは緩慢な動作で手を動かし、なにやら宙を^{もが}藻掻くように見えたが、上手く体を支えることができず轟音を立てて転倒した。

地響きで雪が舞い上がった。近くであった^{せい}所為かグレシオスの体まで浮き上がるかと思われた。

「御領主様！」

イドナが駆け寄ってくる。グレシオスは無言で手で制し、ゴロドの様子を観察した。

ゴロドの背中から幾本もの槍が飛び出していた。

背中に打たれた槍ではない。正面に打たれた槍が、うつ伏せに倒れた拍子に体を突き抜けたのだ。

グレシオスだけではない。三人の村人が、タデアスが、メグレイスが打った槍である。

幾度打ってもゴロドには効果がないように見えた。

だが諦めなかった。

そして今、皆が必殺の^{きはく}気魄を持って放ち続けてきた槍が、ついにその威力を発揮したのだ。

巨体の下には^{すさま}凄じい量の血が拡がり始めている。

だがゴロドは生きていた。いまだ右手に丸太を持っているためにゴロドは左手で体を支えようとし、起きあがろうとしていた。

ゴロドが呻き、^{おびただ}夥しい量の血を吐いた。そうしてグレシオスの方に顔を向けた。

一つとなった燃える瞳がぼんやりとこちらを見つめている。

グレシオスは無言で刀を抜いた。刃を上にしてゴロドに向けて突き出すようにし、^{はんみ}半身に構えた。突進する猛牛と呼ばれる構えである。

「死ぬがよい」

一言呟くと、ゴロドに向けて走った。

「おああああああああっっっ!!」

ゴロドの顔が迫る。呪われた表情が視界に拡がってゆく。

その中心、燃える炭火の輝きの中へとグレシオスは刀を突き入れた。

「イーザイツ！」

刀を押し込んでゆく。刃が止まると見えても、まだ押し込んでいった。足が雪を掘り返し、肩が震えだしてもまだ押し込んでゆく。

「ぬうう……」

籠められた力に震えながらも刀はずぶずぶとめり込んでいった。柄^{つか}まで拳^{こぶし}二つ分というところで、ようやくグレシオスは刀を止めた。

ゴロドは動かない。相変わらず血は流れ出ているがゴロドはもはや動かなかった。

それでも用心しながらグレシオスは退^さがった。ゴロドの攻撃範囲の外まで来ると、そこからじっと観察した。

もはやゴロドからは何も感じられなかった。あのまがまが凶々しい、呪われた気配がない。

死んだのだ。やっど。

「……御領主様？」

おずおずとイドナが話しかけてきた。

「……終わったようだぞ」

グレシオスは静かに、呟くように告げた。

「感謝する。お前の矢がなければ、僕は死んでいた」

言いながら振り返った。イドナは泣いていた。弓を握りしめて、拳を振るわせるようにして泣いている。

グレシオスはイドナの肩を抱いてやった。細いがたくま逞しい肩をしている。

「よくやったぞ」

柔らかな銀髪を撫なでてやるとイドナは顔を歪め、声をあげて泣いた。

なんだか子供のようであるが、この娘には似つかわしい気もした。

ふと己の手が血まみれなのに気付いた。イドナの髪の毛を大分汚してしまった。

そのことが判る程度に辺りは明るくなってきていた。時が過ぎている。

「……皆を助けに行くぞ」

グレシオスが言うとイドナは意外そうな顔をした。その事を失念していたという風だった。

「まだジャグルが残っておろう。お前がこちらに来たとき戦いは始まっていたか？」

「いいえ」

イドナは首を振った。言われて思いだしたのか、その顔に緊張が蘇^{よみがえ}った。

「そうか」

となれば今頃、激しい戦いが始まっているかもしれない。

「御領主様！ 家が！」

はっとしたようにイドナが叫んだ。煙の出ている方を指差している。

「ジャグルどもだ」

「火を消さないと！」

「後でよい」

槍を拾おうとして腰をかがめると重い疲労が身体^{からだ}にかかってきた。ゆっくりと息を吐き、膝を手で支えた。

無理をしているのは自覚しているが、あと僅^{わず}かの間、保って欲しい。

もう一踏ん張りなのだ。

心の中心に意識を凝^こらしていく。まだ休むわけにはいかない。

背中を伸ばすのがきつかった。

グレシオスは歯を食い縛り、拾いあげた槍を杖のようについてどうにか身を起こした。

「さあ、ゆくぞ」

「……大丈夫ですか？」

イドナが心配そうに聞いてきた。

「大丈夫だ」

頷いて見せた。他に答えようはない。

戦わなくてはならぬ。

グレシオスは背筋を伸ばした。

とその時、遠くから地響きが聞こえてきた。段々と、いや急激に近附いてくる。

村の正門の方からだ。

多数の馬が駆ける音である。道の向こうに多くの

たいまつ
松明が並んで見えた。

あか
「燈りが――」

イドナが呟いた。

「ギルテの軍勢だ」

グレシオスが教えた。

すぐに騎兵の姿が見分けられるようになった。皆がフェトゥーラを身に着けている。薄紫の大気の中、色は判別できないが、それが青であることは判っている。

イドナが歓声をあげた。

いつの間にか雪はやんでいた。

第十六章 夜明け

雪を煙のように飛び散らせながら騎馬がやって来る。

破壊された門を跳び越え、数騎が村の中に入って来た。すぐにまた数騎が続いた。

村に入ると戦士達は分かれた。左右の道を進む者と、真^まっ直^すぐに広場へと向かう道を駆けて来る者がある。

グレシオスはその場に立って戦士達を待った。

戦士達は騎乗のままグレシオスの脇を抜けて駆けた。村人を助けるためである。

無論駆け抜ける際に槍^{かか}を掲げ、礼をしていった。

当然の行為である。

なにしろグレシオスは先の領主である。誰もがその顔を知っているのだ。

一騎がグレシオスの少し手前で足を止め、馬を降りてきた。その姿から騎士階級の者だと判った。動きには若さがあった。

^{おおとの}
「大殿様！」

騎士が呼びかけてきた。グレシオスの前まで来ると膝を着き、臣下の礼をとった。

「まずは御無事で何より！ ^{きゅうかつ}久闊でございます！」

「ファイオスカ」

タデアスの下の息子、ファイオスである。彼はグレシオスの娘、エーダの輿こし入れに付き従ってデルギリアを出ている。

今は遠くトラケス地方、ゼメレス公の領地にいるはずなのだが。

「戻ってきたのか」

「はっ」

「よく戻ってきた。無事で何よりだが、積もる話は後だな。まずはジャグルどもを掃討そうとうせねばならん」

「承知いたしております」

ファイオスは立ち上がった。その意志の強そうな青い瞳と目が合った途端、タデアスのことを思いだした。胸の奥に痛みのようなものが走った。

タデアスのことを告げようとしたがすでにファイオスは馬に向かって歩き出している。

結局、グレシオスが言い出せぬままにファイオスは馬に跨またがり、ジャグルの掃討に戻っていった。

騎馬が続々と村に入ってくる。

「父上！」

供回りの騎士達を連れて黒馬に跨がったヘクトリアスが現れた。

「父上！ 御無事でしたか！」

馬から飛び降りて駆け寄ってきた。供回りの騎士達もそれに倣ならい、皆がグレシオスの前で膝を着いて

礼をした。

「よく来てくれた。儂が考えていたよりも遥かに早く来てくれた。感謝するぞ」

グレシオスは落ちついた声を掛けた。

だがもう少し、もう少し早く来てくれれば。

タデアスもメグレイスも……。

言っても詮^{せん}無きことである。言うべきでもないことである。

だからグレシオスは言わなかった。

「あまり騎兵を入れるな。それよりも村から逃げ出すジャグルを確実に仕留^{しと}めよ」

「ご安心を。すでにそのように兵を動かしております」

「そうか。ならば良い……」

戦いは僅^{わず}かの内に終わった。

何しろ数が違う。ジャグルたちはセウエルス族の戦士達に追いつめられ、ほとんど抵抗することもできずに皆殺しにされたのだった。

戦勝の報告をグレシオスは広場で聞いた。

すでに神殿の周囲には陣所が形成されており、ヨルスの館と神官館との間では連絡が行き来していた。村内の火も消し止めるべく兵が向かっている。

グレシオスの館に避難していた村人たちには連絡だけを出し、引き続き館にとどまらせておいた。完

全に安全が確認されるまではそのままにしておくつもりである。

やるべき事は多かったがそれに倍する兵が集まっていた。この場だけでも騎士が二十八人、一般の兵士が五十八人、併せて八十六人の戦士がいるのだ。

しかもこれは先発隊であり、これに続いて後発の部隊が二百以上、更に替え馬の回収を受け持つ^{しんがり}殿軍の部隊が百以上来るといふ。兵力としては頼りになるが全部となると小さなこの村には入りきれぬ。

人数的には現状の先発隊だけでも後始末は付けられるが、あと百人ほど人手が欲しい。

それに先発部隊には騎士階級の者が多い。やるべき事は多くとも、火消しや怪我人の処置、屍体の埋葬など、身分的にも技術的にも騎士には任せられない仕事ばかりなのだ。

そこで騎士には後続部隊への伝令を托してほとんどをギルテに帰し、後発部隊の半分をこの村に入れて後始末にあたることにした。

メグレイスにはまだ息があった。

グレシオスは自らこの長神官を抱き起こし、手を握り、耳元に口を寄せて話しかけた。

「ゴロドは^{たお}斃した。ギルテより援兵が来た。村人は助かるぞ」

メグレイスは^{わず}僅かに^{うめ}呻くだけだった。口から吐い

た血で胸から腹から血まみれになり、顔は不^ぶ気^き味^みな朱色に染まっていた。

臓^{そう}腑^ふが潰^{つぶ}れた者に多く見られる、死の兆候である。

瞼^{まぶた}がびくびくと動いたが目を開けることもできないようだった。

グレシオスはもう一度、メグレイスの耳元ではっきりと言った。

「ゴロドは斃した。ギルテより援兵が来た。村人は助かるぞ」

言葉は返ってこなかった。だが理解はしたようである。メグレイスは僅かだが、手を握り返してきた。

そしてそのまま息を引き取った。

様子から死んだことを察したのだろう。傍にいた騎士や兵士が黙^{もく}禱^{とう}をした。

黙禱が済むと周囲にいた兵達が動き始めた。屍体を運ぶ指示を飛ばしている。

さすがに慣れている。日常の雑事を片付けるような何でもなさを感じられるが、だからといって兵達に味方の死を悲しむ気持ちがないわけではない。

それはグレシオスにはよく判っていた。

これが普段の戦いならばグレシオスもそうしただろう。実際、今まではそうしてきたのだ。

感傷に深入りしない。

それは戦士達にはごく当然の心の持ち様である。

しかし、この戦いではどうしてもグレシオスはそう思えなかった。

これは今までの戦いとは違う。人と人が争い、殺し合う戦いではないのだ。

この戦いで死んだのは本来はこのような死に方をする必要がなかった者達である。

辺境の小村に暮らし、戦争などとは無縁の生活を送るはずだった者達である。

戦う必要がなかったわけではない。生き残るためには戦う必要があった。

だがそれでも似つかわしくない。この村の者はこんな風に死んでよいはずがない。

メグレイスとてそうである。

あの戦い振りから察するに、おそらくは名のある戦士だったのだろう。

しかし彼がこの村で神に^{つか}仕える生活を選んだとき、武器を取って戦場を駆ける生活には別れを告げたはずだ。

そこには明確な断絶があるのだ。

メグレイスはこのように死ぬべき人間ではなかった。

その他の者達も同じだ。ダイオンと二人の息子、

デリオスやアルテアなど、誰もがこんな死に方をすべきではなかった。

そのことがグレシオスには堪^{こた}えた。重く、重く堪えた。

この者達を戦士と同じように吊^{とむら}って良いはずがないではないか。

グレシオスはメグレイスを地に横たえ、そっとその手を組ませてやった。

祈りを捧^{ささ}げ終わると待っていたように兵二人が盾の上にメグレイスを乗せた。広場の端へと運んでいく。

そこに他の村人の屍体も横たえてあるのだ。神殿が半壊しているための措置である。

メグレイスを見送っている所へファイオスが戻ってきた。不安げな目でグレシオスを見ている。

「……大殿様」

「人手が要^いるぞ」

ゴロドに破壊され、半壊した神殿の方を指差した。ファイオスが息を呑んだ。

「タデアスはあの下だ。勇敢に、戦ってくれた…
…」

問われる前に告げた。聞かれてから教えるなどという残酷な真似はしたくなかった。

やや間があってからファイオスは、

「……さようでございますか」

と小さく云った。

「親父殿も最後まで、大殿様のお役に立てて満足でありましょう」

落ち着きのある、強い眼差し^{まなざ}を向けてくる。

謝りたいという衝動がこみ上げてきたが、それだけはしてはならぬとグレシオスはこらえた。

「……お前の親父は勇敢だった。タデアスが居なければ儂は死んでいただろう」

「もったいない、お言葉です」

ファイオスは頭を下げた。グレシオスは胸の中で一言「すまぬ」と詫^わびた。

かなりの兵を動員して神殿の後片付けにあたった。その中にはファイオスだけでなく、タデアスの上の息子オステイスの姿もあった。

事情は弟から聞いているのだろう。

グレシオスと目が合うとオステイスは黙って頭を下げてきた。

上の方にある建材を退^とかす頃には朝日が昇りきった。

アクション
太陽神の恵みに感謝しながら作業を急いだ。

折り重なっている太い柱を退けるとタデアスの姿が見えた。

原形を留^{とど}めている。肉塊と化した姿でなかったの

は、せめてでもであった。

「親父殿っ！」

ファイオスが呻くように云った。

するとタデアスが動いた。皆、驚いた。

「……^{おのおの}各々方、すまんが早く掘り出してくださいますかのう。寒くて敵わん^{かな}」

薄く目を開いて、疲れた声を出した。

誰もが啞然とする中、驚きから最初に立ち直ったのはオスティスだった。

「父上、どこか御怪我はありませんか？」

「身体が動かさぬのでまだ判らぬよ……おう、大殿様。御無事でありましたか！」

グレシオスは答えなかった。

ただ驚きが喜びへと変化していくのをじっと味わっていた。

生きていると判った以上、作業は注意して行なう必要がある。

タデアスを潰さないようにしなければならないからだ。

結局、助け出せたのは昼の手前頃だった。タデアスは足首を捻挫^{ねんざ}した他は怪我と言えるようなものは負っておらず、全く奇跡としか言いようがなかった。

「剣の河の手前で追い返されてしまいました」

治療を受けながら苦笑いしつつタデアスは言った。頬と耳には軽い凍傷があった。

剣の河とは刀槍や盾などの武具がひしめき合って形成されているという河である。

この世とあの世との境目に流れ、生者と死者との世界を区切っているという。

「私の腕では、まだ勇者の館には呼んで頂けぬようです」

そんなことはないと思ったが、グレシオスは何も言わなかった。

「親父殿の腕では勇者の館は身の程を過ぎた願いだと思いがなあ。あそこは勇者がゆくものだろう？」

ファイオスが言った。助け出してからこっち、ずっとタデアスに付いている。

この親子は顔を合わせるたびに詰まらぬ言い争いをする癖があるが、仲が悪いわけではない。それがお互いの愛情を確かめる行為になっているのだ。

何だか滑稽話を人に聞かせる掛け合い芸人のようである。

「向こう名を持つほどの戦士でなければ駄目だろう。親父殿にはその向こう名がないではないか」

言ってから、何か面白いことを思いついたという風にファイオスは笑った。

「いや、本日めでたく向こう名ができたな。『下敷

きのタデアス』というのはどうだろう？」

ファイオスが面白おもしろげに言った。タデアスが虚きよを突かれたような表情をした。

「いかがです？ 大殿様も良い名だと思いませぬか？」

真面目な顔をして聞いてくる。それが面白くてグレシオスは吹き出してしまった。

「お前の冗談は面白くない」

タデアスは下唇を突き出し、不満げに言った。いじけた猿のような顔になった。

「いや、冗談ではありません。本気ですよ」

楽しそうにファイオスは笑っている。

グレシオスも笑っている。タデアスだけが仏頂面ぶつちょうづらをしている。

兵が温かい紅トラナ茶を持ってきた。広場の方が騒がしくなってきた。

村の周囲も含めて安全が確認されたので避難していた村人たちが降りてきたのだ。

彼等と話をし、救助物資を渡すのはヘクトリアスの仕事である。

外に出てみると幾人かの村人がこちらを見ていた。子供など手を振ってくるが、グレシオスは軽く手を挙げて応えるだけで村人の近くには行かなかった。

後は全てヘクトリアスに任せる。領主が乗り込んできた以上、全ては当然、領主の仕事だからだ。

グレシオスのすべきことはもう無いのだ。

「お前は下らぬ物言いばかり上達してきおった」

「いえいえ。口ではなくて弓が上手くなったんですよ。ギルテに戻ったら親父殿にも見せて差し上げよう」

「見たくないわい！」

タデアスの怒鳴る声が響いた。まったくもって元気である。

こうしてナウロス村の戦いは終わった。

エピローグ セウエルス

マイアスがなかなか上手く結べないので、タデアスが代わった。

やはり自分でなければ駄目だと。

そういう得意気な雰囲気である。そして得意になるだけあって一回で上手く結んだ。

「いかがですか？」

「うむ。具合がよい」

靴の具合を確かめてグレシオスは答えた。タデアスは満足そうに笑んだ。

もっとも得意なのは当たり前であるが。少年の日からタデアスがいつも担当してきた仕事なのだから。

今回にしてもマイアスが、

「上位の騎士であるあなたに、そのような仕事をさせるのは心苦しい」

などと言い出さなければ始めからタデアスがやったのである。

靴紐に関してはグレシオスは注文が多い。いつも膝下の裏で綺麗に結ばなくては気分が悪いのだ。自分でやるときは三度は締め直すことになる。

最初の頃はそれでタデアスにも苦勞をさせたが、一年もしない内にタデアスは骨をつかんでしまっ

た。

以来、一度で満足のゆくように結んでくれるのである。

マイアスはヨルスの孫である。

ものみやぐら かね たた
物見櫓で鉦を敲いていた子供である。

今では立派な若武者に成長し、ヘクトリアスの下で腕を磨いている。

あの決死だったナウロス村の攻防から七年が経っていた。

村長だったヨルスはすでに亡く、今は娘夫婦が村を取り仕切っている。

マイアスは本人の希望もあってギルテの戦士団に入隊した。推薦はグレシオスが務めた。

以来武技と学問とに励むこと一方ならず、若くして騎士の称号を獲得するに到った。

今回の旅に加えたのはマイアスが王都の兵団に参加するためである。

直接王の麾下きかに入るわけであるが、マイアスならばどこに出しても間違いはないだろう。

セウェルス族の名を辱めぬ戦士として尊敬されることであろう。

グレシオスは今、王都に向かう旅の途上である。

道はまだ遠い。王都ガレノスまでは半分と言ったところだろう。

何となく、これが最後の旅になるような気がした。

あの激しい戦いから七年。月日は確実にグレシオスの身体からだに老いをもたらした。

もはやあのようには戦うことはできない。

あの日に引けた弓も引けぬ。槍も刀も、あの頃のように扱えなくなった。

タデアスも老いた。

歩き方ももっさりとし、鬚ひげも髪も、眉までも完全に白くなり、心なしか背も少し縮んできた。

だがお互い、その事をなげ愧く思いはなかった。これは仕方のないことなのだ。

不死を楽しむのは天上の神々だけである。

全て地上にある定命じょうみょうのものは、生まれ、栄えるとき衰えるときを過ごし、死んでゆく――さながら季節の如くに。

そのことを敗北だとは思わない。今はもう、決して。

あの戦いのあと不思議な男は二度と現れることがなかった。

「昼頃でしたらうか。突然門の前に現れたのです」

ヘクトリアスはそう語った。

グレシオスが持たせた書状と貸した弓を門番に渡すと、男はヘクトリアスに会いもせずそのまま立

ち去ったという。

グレシオスは肩すかしを食らったと思った。てっきり男は館にとどまっていた、戦いが済んだ後、酒でも酌^くみ交わそうかと思っていたのだ。

その時にこそ男の真の名前を聞き出してやろうと思っていたのである。

だが男はグレシオスを待ってはくれなかった。

風のように立ち去ったのだ。

その後グレシオスは男の素^{すじょう}姓をつかむために色々調べたりもした。

好奇心よりも、むしろ恩義を感じていたからである。

あの男はグレシオスの愚かさを払い、勇気を吹き込んでくれた。

それがなければ戦い抜くことはできなかったろうし、最後に来た援軍にしても男が呼んでくれたのである。

何とか会って感謝を告げたい――。

だがどの一族、いずれの家に問い合わせても、そのような者はおらぬとのことだった。

あれほどの男である。無名というわけではないと思^{ずいぶん}い、随分といぶかしんだが、ひよっとすると西方ヴァルゲンの人間であるのかもしれぬ。

外国人ならば見つけ出せないということもあり得

る。

残念だが再び会いに来てくれることを希望しつつ、グレシオスは男の搜索を打ち切った。

「では行ってくる」

「本当にお一人でゆかれるのですか？」

やや心配げにタデアスが聞いてきた。

「はは、心配するな。これでもまだ足は達者だ。あの程度の岩場、登るのにどうということはない」

グレシオス達一行は中央高原ローゼリア地方にまで来ていた。

デルギリアと王都を結ぶ距離で言えば丁度半ばと言った位置に当たるだろう。

そして街道からは逸れ、ローゼリアの奥地へと入ってきていた。

目指すはローゼリアの中心、トリュオネ湖である。

遙かな昔、セウェルス族はこの土地より始まった。

聖賢リュベイオンの導きにより、黄金の瞳の姫と共に遠くイオルテスの涯、デルギリアにまで東遷したのだ。

今から千七百年程前の話になる。

以来セウェルス族は王国の東の涯を護り続けてきた。西のエンデュオス族と並び、王国最強の戦士と

して。

グレシオスは若い頃にも幾度かトリュオネ湖を訪れたことはある。

トリュオネ湖はセウェルス氏族の聖地である。あのヴェルデスもこの土地に生まれたのだ。

セウェルス族の英雄達の多くがこのローゼリアを故郷としている。

銀嶺^{ぎんれい}の髪、トリュオネ湖の瞳——それがセウェルス族の勇士や、乙女を讃^{たた}える形容としてよく使われる。

それは遠くデルギリアに遷^{うつ}った今となっても変わらない。

「ではくれぐれもお気を付けて……」

タデアスは頭を下げた。股肱^{ここう}の臣たるタデアスがついて行かぬということで、他の誰もついてこようとはしなかった。

グレシオスは一人で神殿を出た。一行が宿泊しているのはトリュオネ湖の近くにあるイスターリス神殿であった。

この近辺には他に村などない。一番近くの村であっても馬で一日はかかるのだ。

神官達は突然の訪問には驚いたものの心良くグレシオス一行を迎え入れてくれた。

何と言ってもセウェルス氏族の宗家である。それ

がイスターリスの聖地を訪れたというのだから神殿としても嬉しかったのだろう。

孫を紹介すると長神官は大層な喜びようであった。

日はまだ昇ってはいない。早朝である。

トリュオネ湖に着く頃には^{アクション}太陽神も天を駆けていることだろう。

ただしトリュオネ湖は山の上にあるため、用心のために杖を持った。途中の岩場で転んだりしてはつまらない。

いや、つまらないどころか大事になるかもしれぬ。

——やれやれ。

グレシオスは軽く溜息^{ためいき}を吐^ついて歩き出した。

空気は冷涼だった。御陰^{おかげ}で汗を掻かなくてすむが、疲れることには変わりがない。

岩場の坂道は思ったよりも難所だった。この前に来たのは随分と前である。その時に比べて己の衰えているのを見せ付けられる^{かっこう}恰好だった。

「やれやれ……」

グレシオスは呟いた。困ったものだ、という風に。

悲しいとは思わなかった。心の中は妙に明るく、むしろ再びトリュオネ湖を目にする期待に胸が膨ら^{ふく}

んでいた。

できるだけ無理をしないようにゆっくりと登った。

そのため山の中腹を過ぎた辺りで日が昇ってしまった。

「おお。追い越されてしまいましたな」

にちりん
日輪を見上げ、目を^{すが}眇めてグレシオスは呟いた。

そして再び、岩場を登り始めた。

足元を見ながら黙々と歩いた。

息が上がりそうになると少し休み、再び登るときにはなるだけ無理がかからぬように心がけた。

やがて山頂に着いた。

目の前にはトリュオネ湖が広がっていた。

貧しい森に囲まれた、山頂の湖である。

ただし閉ざされた湖ではなく、周りの山脈より流れ込む豊かな水に恵まれている。

湖面は冷たく、青く澄んでいる。

むら
斑のない青一色の湖面に周囲の木々や、雲が映りこんでいる。

さながら鏡のように空をゆく雲の流れや、鳥の姿をくっきりと映し出すのだ。

グレシオスは無言でその様を見つめた。

——美しい。

そう思った。

柔らかな、しかし冷たい風が湖面を渡って静かに
グレシオスに吹き寄せてきた。

「おじいさまー……」

遠くで、子供の呼ぶ声が聞こえた。

少年が岩場を駆け上がってくる。若い鹿の如く、
^{びんしょう}敏捷に、力強く。

「ステファノス」

孫の名前を呼んだ。

「^{ひと}非道いではありませんか。この私を置いていくな
んて」

近くに来ると、ステファノスは息をあげなら苦情
を言った。

「早かったのよな。無理に起こすこともないと思う
たのよ」

グレシオスは微笑んだ。ステファノスはこの先、
いくらでもここを訪れることができるのだから。

「^{なぜ}何故、トリュオネ湖にお寄りになったのです
か？」

ステファノスが聞いてきた。グレシオスは考え
た。

「何故かな……儂にも、よう判らぬよ」

「おじいさまにもお判りにならぬ事があるのです
か？」

意外なようにステファノスは言った。

「はは。判らぬことだらけよ。しかも年々、それが
増える。まったく生きるということは退屈はせぬも
のじゃて……」

グレシオスはトリュオネ湖を見ていた。なんと美
しく寂しい光景だろう。

父祖達がこの湖を愛し、神聖な場所と崇めたのが
つくづくと理解できる。

「あのお方のことも判らないのですね」

ステファノスが呟いた。

「あのお方？」

「はい。おじいさまがゴロドをお斃たおしになったと
き、館へと報せしらをお持ちになった騎士のことです」

ふいひらめ
不意に閃くものがあった。

あの男は、どこからやって来たのだ？

近くに逗留先とうりゅうなどなかったのだ。

当時はどこかに小屋なり洞窟なりがあるのだろう
と思っていたが、後になって調べてみたらなかつ
た。馬や、従者を待たせておけるような小屋も必要
だったろうに一切無い。

ましてやゾエ村はジャグルに襲われ破壊されてい
た。

襲撃があるまではゾエ村を利用していたとしよ

う。

だが最後に会ったときに連れていた見事な馬達は、どこに繋いでいたのだ？

何よりも不思議なことがある。

男はどうやってギルテに到着したのだ？

ヘクトリアスが駆け付けた時間から逆算して、男がギルテに到着したのは昼の手前でないとおかしい。事実ヘクトリアスも「昼頃に館に現れた」と言っていた。

とすれば、男は僅か数刻でナウロス村からギルテへと駆けたことになる。

あり得ない。

それは信じられぬことである。絶対と言っても良い。

再び閃くものがあった。

出発の前、男は神殿から現れた。

何をしていたのかという問に対し、
「何、神に祈りを捧げておったのよ」

男はそう答えた。何でもないように言ったが、妙な違和感を持ったことを憶えている。

そうだ。

輝くりオプを纏っていた。この上もなく立派な銀

の――。

グレシオスは反射的に腰の後ろに手をやった。槍投げ機をまさぐった。

「おじいさま……？」

手が震えてきた。少しもたついた。

槍投げ機を手にとると顔の前に持って行っていしょう意匠を確認した。

もちろん何が彫られているかは見る前から判っている。特に気に入りの品なのでヘクトリアスにもやらずに持っている程なのだから。

そこにはイスターリスの姿が浮彫りになっていた。

巨大な目を見開き、黒い舌があご頤にまで垂れている。驚愕と滑稽さと、何か突き抜けたような異常な、表情。

それは子供たちに対して見せたあの男の面相芸に似ている――いや、そのものであった。

あの男は目の前のトリュオネ湖のように青く澄んだ瞳をしていた。

老人ながら屈強な肉体を持ち、詩と物語に秀で、そして多くの呼名を持っていた。

そういう不思議な旅人が現れる、よく似た話をグレシオスは知っている。

知識豊かで詩と物語に通じ、そして決して、自分

の名を明かさなかった旅人が出てくる伝説である。

どこからともなく現れた彼はオルシロスと名告ったという。

彼は武芸競技で見事優勝を収め、王の娘を妻にした。二人の間に子供が産まれると、アリィアスと名附けた。

そして姿を消した。だがその子が少年へと成長した頃に再び姿を現した。

己が息子に刀槍戦斧とうそうせんぶを振るう術すべを教え、それから生と死の境を超える不思議な旅へと息子を連れ出した。

そして不死身の肉体と、鳥や獣の言葉を解する能力、詩と魔術の秘儀さずを授けた。

アリィアスはその後数々の偉業うを樹ち立てた。

アリィアスとは幼名である。長じて後は別の名前と呼ばれるようになった。

彼の名はヴェルデス。

セウェルス族の祖である。

「おお……」

震える声が漏れた。まさか、まさか、まさか…
…！

あの男は、いや、あのお方は……！

恐るべき道化師。

生と死を、ともに笑う。

知るがゆえに。慈しむがゆえに。

飛び越える者である。

吊り下げられた者である。

死と、魔術と、予言の神。

影が――落ちてきた。

グレシオスは頭上を見上げた。黒い鳥が見えた。

ワタリガラスである。

巨大なワタリガラスが飛んでいる。どこから現れたのだろう。

「おじいさま！　ワタリガラスが！」

ステファノスが歓声をあげた。ワタリガラスはセウェルス族の聖章。

そして、イスターリスの^{つか}遣い――。

「おお……」

言葉が出てこなかった。恐るべき神秘に、グレシオスは打ち震えていた。

己の到達した結論にグレシオスは^{めまい}眩暈がした。

そんなことはあるはずがないと思うだろう。

人に話せば誰もが笑うか、^{はなじろ}鼻白むに違いない。

だがあの戦いを^{くぐ}潜り抜けた者ならば判ってくれる。

そして同意するはずだ。

^{まぎ}紛れもなくあのお方は――！

震える息を吐いた。言葉にはすまい。人には語る

まい。

語るべきことではない。

あのお方は儂の愚かさを打ち砕いて下さった。

かつて嵐神^{ドヌス}が、息子の求めに応じて西の空に雷を投じたように、己が血の流れをお忘れになることはなかったのだ。

ジャグルやゴロドの襲撃を目前にしなが^{いま}ら、未だ戦う準備のできぬグレシオスに力を授け^{さず}に来てくれたのだ。

そうグレシオスは信じた。そう確信した。

それだけで十分だった。

「ドリアス山脈の方へ飛んでゆくようです」

ステファノスが指差して言った。

ワタリガラスは二人の頭上を廻り、それからトリュオネ湖の岸に沿って大きく旋廻^{せんかい}した。

最後に一声鳴くと、南の方、ドリアス山脈を目指して飛び去っていった。

グレシオスはその姿を見つめた。

いつまでも、長いこと見つめていた。

了

奥付

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などとは、一切関係ありません。

※この作品を、個人的に楽しむ範囲を越えて、無断で、複製、転載、配布、改変、販売等を行うことを禁じます。

=====

=====

■作品名：雪刃^{せつじん}

■著作者：琴乃つむぎ / WordsWeaver

■初版：2005-07-21

二版：2006-01-02

三版：2009-10-18

四版：2013-12-11

五版：2014-01-08

六版：2014-02-13

七版：2014-12-16

八版：2015-02-01

九版：2015-12-01

十版：2015-12-31

十一版：2016-03-02

■ 掲 載 サ イ ト : WordsWeaver

<http://wordsweaver.com/>

=====

=====